
ザ・ライダー・プール

じょーもん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ザ・ライダー・プール

【NZコード】

N2444F

【作者名】

じょーもん

【あらすじ】

疲弊した地球の回復を待つべく、人類は『幸いなる少数』を残して、宇宙へと生活拠点を移していく。

この時代、大量輸送手段としては、コンテナを大砲のようなもので打ち上げる『マスドライバー・システム』が第一にあげられる。そして、安全な宇宙空間のみを行き来する通常輸送船とは別に、大気圏と衛星軌道上に存在する宇宙港都市の桟橋とを往復する、大気圏突入を日常業務として行う『バージ・シャトル・システム』があつ

た。

この物語は、地上と同じ人工重力で営まれる桟橋都市、通称『ライダー・プール』と呼ばれる建造物に重大事故が発生したとき、たまたま居合わせてしまつた人たちの話である。
(ルビを多めIEの利用をおすすめします)

1・スカター（前書き）

プール（pool）とは、蓄えることを一般に指す、英語由来の言葉である。

ライダー（rider）とは、もともとは「馬を駆る人」という程の意味で、その後、広く何かに乗ることを指すようになった。これも、英語がベースとなつたGCL（Global Communication Language）＝グローバル・コミュニケーションのための簡易言語（言語）に収録されている単語、及び、使用法である。

ザ（the）とは、日本語では正確に意味が捉えにくい定冠詞である。基本的に「一つに決まる」というイメージで考えると良い。つまり、その言葉でくれるたくさんの存在の中で、文脈によって限定されたり、もともと他にかけがえがない最初から唯一のものであり、説明を要しないものなど、『どれ』なのかが明確な場合に使うのである。GCLでは、冠詞が一般的でない言語に配慮して、地球（Earth）や空（sky）などの前に「ザ」を落としても、許容とされる。

そして、この話は

「飛竜。^{ひりゅう}お前まで、そんなもん着るか？」
直接会うのは久し振りになる友人、霧島飛竜を見て、高柳優美^{たかやなぎゆうび}の口から思わず呆れた声が出た。

飛竜が着ていたのは、銀色に輝くツナギのスペースジャケットで、筋肉までなぞれるほど体に密着させたデザインだ。宇宙植民時代を迎える以前に描かれた青少年向けSFの宇宙飛行士^{アストロノウツ}がよく着ていたような奴で、恐らくデザイナーがネタギレで自棄^{やけ}になつたのか、はたまた受け狙いの懐古趣味か、あるいは冗談^{よつ}だの類で売りに出されたのだろうが、とんでもない事に世の中のお姉さんたちに非常に受け（連中がイヤらしいって事だ。つまり）、筋肉をちゃんと鍛えてなきや商売にならないバージャトルライダー連中の中で、いま正に流行りに流行っている。つまり、筋肉男^{まき}であることをアピールできる程度に人間が多い場所で働いているという事だ。羨ましいといふか、ご苦労さまというか。

スペースジャケット生地^{トト}というのには、簡易宇宙服にもなる素材だから伸縮性はあるが、通気性という奴はゼロだ。普通小型の空調ユニットが内蔵されているから、中にある程度空気層^{そうきじゆう}が無いとやつてられない住環境になる。スペジャケってのは、究極のところ中に生き物が住めるだけの最低限の空間を持つてなきや意味がないんだから、ぴつたり体に張り付くなんてのは、正気の沙汰^{さた}じやない。

「制服だから……仕方ないだろ」

飛竜と呼ばれた男が妙にイヤらしい手つきで体をなぞるようにする。肩から胸、そして腰。掌紋認証でロックを解除しないと脱げないってのも、服としては随分不便だろつ。手にぶら下げるようにして持っていた金魚鉢と通称される全方向認識型ヘルメットをテープ

ルに置いてから、飛竜は、ようやくできた隙間から脱皮するように上半身を解放した。

「あーっさつぱりした。別に拘束感は無いんだが、妙に窮屈だからなあ、姉貴には勘弁してくれって言つてるんだけど……」

歯切れが悪く飛竜が姉貴と呼んだのは、中堅規模の星間運送会社、霧島運輸の現在の女社長、霧島松姫まつきの事だろ。比較的安全な宇宙空間輸送に携わる星間貨物宇宙船とは違い、バージシャトルライダーブライ特というの大気圏突入という危険で難しい飛行を日常的に繰り返している。肉体を酷使する重労働が機械化されて久しく、職業にジエンダーフリーが当たり前の昨今だが、荒くれ仕事に相応しい荒くれ男が吹き溜まっている今どき珍しい商売だ。この飛竜も一見穏やかな風貌をしているが、典型的なツツコミ氣質で、泣かせた女は多分數えきれない……筈だ。それが、母親と三人のお姉さんには頭が上がらないらしいから、意外というか、可愛いというか。

ここはライダープールと呼ばれている場所だ。ライダーの連中が地球上に「つっこむ」直前や「でてきた」直後に一定時間を過ごす控え室みたいな所だから、むさ苦しいという形容が相応しい男たちばかりが偏つて出入し屯たむらしている。飛竜が勤めている霧島運輸が使っている桟橋のほど近くにある『ライダー溜まり』に俺は居る。そこに居合わせた幾つかの顔は視線すら向けてこないが、一般の人間が出入りする喫茶店辺りだったら、諸肌を脱いだ飛竜は溜息混じりの称賛の的になるだろう。見事に引き締まつた体に浮き上がる筋肉の境目を縁取る溝みぞは、皮一枚剥ぎ取らなくてもそのまま人体筋肉標本で活躍できそうだ。

霧島運輸は貨物専用だから、飛竜は大気圏を越えて人を運んだりしてはいない。が、これだけのいわゆる色男だ。同じシャトルライダーでも客船乗務みたいに女ツ気のある職場なら、とっくに女房の一人も捕まえて（捕まえられて？）落ち着いているだろう。でも、三十代に突入している今も良い年こいて独身だ。航空宇宙専門学校

の同期生の中では、そろそろ少数派になつてきた売れ残り組に入っている。もつとも……。

人のことは言えねえよなあ。

「で、優美ちゃんは、なんでプールに？」

がつしりとした体躯の飛竜が親しげに抱擁なんかくれると、正直、暑苦しいとも思うけれど、スキンシップはいつでも歓迎。女の子でないのは残念だけれど、まあ、こちらも大人だ。ちゃんと軽く抱き返してから突っ放した。

「いつも言つてるだろ。名前で呼ぶな……」

女みたいな名前を嫌つていた事を承知で、飛竜はいつもそう呼んでくる。年を食つて、たかが名前にジタバタするほどの若さとはもう縁がないが、それでもそう返すのは謂わばお約束つてヤツだ。

「で、タ力。何の用だ？ 純粹宇宙仕様のお前さんがプールに飛び込んでくるつてのは、穩やかじやないだろ。その年で転職するにしあつて、キャッチャーを随分長いことやつてたるう？、いまさらライダーなんて出来つこねえし……。絶対に奇怪おかしいぞ。第一、いきなりこんなとこに来て、お前、大丈夫なのか？ ……ちゃんと生きてるか？」

ガキの頃のようにうんざりするほど「優美ちゃん」とは繰り返さずに、飛竜は高柳という俺の苗字から引っ張りだした呼び方でもう一度プールに出向いた理由を俺に聞いてきた。

地球環境で活発に活動して日々突然変異しているあらゆる病原菌を、コロニーに持ち込ませないための緩衝地としてあるのがライダープールだ。ウイルス・細菌環境として貧弱な持ち物しかない宇宙暮らしひの人間がここに入つていいくのは、時として命取りになるほど危険なのだ。やつらがコロニーの市街地に行こうと思つたら、168時間の検疫止まりを喰らう。つまり地球時間の7日間だ。外宇宙

で仕事をしている俺たちがコロニーの街に出向くときにやられる48時間縛り（丸一日）の三倍以上だ。

地球が人類の共通財産という認識で、大切に扱われるようになつた現在も、地球でしか生産できない資源を生産・管理したり、地球そのものの再生を助ける研究に従事してしたり、単に不公平な特権を享受している為に地球に住んでいる人間はいる。そして、重力環境を異にしていることで、少しずつ別種の生き物になりつつあるのかもしない地球人も、ときたま観光や仕事で宇宙殖民地にやつてくる。警戒していても何かの拍子に多種多様で元気な地球産の細菌やウィルスが何度もコロニーに持ち込まれ、その度に恐ろしい猛威を振るつてきた。インフルエンザが特に流行りやすい悪玉の筆頭だが、大量の死者をだすほどの流行がおこるたび、『検疫止まり』の期間が増えていく。検疫留めの期間が長期化していく程、地球への距離は実質として遠くなつていく。

ついでに宇宙人の俺がここに入つたら、地球に降りなかつたとしても、潜在的保菌者扱いとなり、もう一度コロニーの一般街区に戻ろうにも、168時間の検疫止まりの対象になる。余程の長期休暇でもなければ、検疫止まりだけでかなりの時間を食つてしまつう事になるから、気軽に顔を出せるところではない。実際、飛竜ともこのところネットを挟んでしか喋つたことはない。ライダープールに俺が出現した事自体に、飛竜が不審を抱いたとしても何の不思議も無い。久し振りに肉眼で見るナマモノの友人に、俺はちょっとだけ意地悪く微笑んでみせた。

飛竜がいつたキヤツチャーというのが俺の仕事だ。しかも「スカベンジャー」とキヤツチャー仲間からも言われちまうような隙間仕事をだ。

活性酸素の防御機能のこともスカベンジャーなんて呼ぶらしいが、そつちの方じやなく、そのまんまの腐肉漁りふにくあさという程の意味だ。地

球の自然映像でお馴染みのハイエナや、大型生物の糞をあつと言う間に地中に運びさつて食つてくれるフンコロガシや、水槽の底で忙せわしなくハサミを動かしてチビの海老なんかといえ巴分かりやすい。

地球や月、火星。その辺の大気圏から頑丈な巨大コンテナにいった壊れにくい貨物を、大砲みたいなマスドライバーという巨大装置を使って打ち上げる輸送システムがある。やり方の乱暴さに相応しく、主な積み荷は衝撃に強い鉱石。あるいは、米や麦といった宇宙空間で作るのになかなか無理があるので地球産が普通の穀物などだ。散荷ヤードで充填されて打ち上げられるコンテナは、普通、制御機能も推進機能も搭載していないが、リーファ仕様といつて、さすがに温度だけは管理されている。宇宙空間に無事出た以降は慣性の法則に従つて、打ち上げられた方向を維持して飛んで行つてしまう。これを追跡して捕獲するのを、簡単に言つと俺たちキャッチャーの仕事だ。

宇宙植民時代の初期には、厚くて重力も大きい地球でマスドライバーが稼働されると、エネルギーの問題、コンテナの強度の問題、また、衛星軌道に散らばつているさまざまな建造物を直撃する懼などから誰も実用化されると思つていなかつた。SFの中だけでどまるか、大気を持たない月あたりでのんびり実用化される「かもしない」というのが大方の見解だつた。

それが、一定以上の質量の物体を感知すると、単純にそこから弾かれるという途轍もなく単純な回避方法を発案した馬鹿（サヤコ）という名前だけは覚えている。なんたつてこのシステムの名前になつてるのでから）がいて、それを採用した大馬鹿がいて（何を隠そう、我等が極東アジア国軍だ）話は複雑になつた。

マスドライバーの構想においては、慣性の法則に従つてただ真つ直ぐ飛んで行くのを捕まえる単純作業をするのがキャッチャーの役割だとされていた。それが普通だと俺も思つ。けれど、やつらとき

たら一定以上の質量を感知すると勝手に弾かれちまうのだ。

貨物を満載したコンテナは基本的にロボット制御の無人マスクヤツチャヤーが捕まえる。悔しいことにコイツが『正捕手』だ。やつらの駆動性はかなり良いから、九割はここで捕まえられる。質量が一定以上で無いこともキヤツチャヤーの前提条件なので、スカスカの小型ユニットを三機か四機使って広げたカーボンナノチューブ製のそれも強度を更に高めるために一層にしてあるダブルウォールナルチューブ DWNT を用いたネットでくるむようにして捕まえるのだ。

悪条件が重なつたりすると正捕手が捕まえ損ねる事がある。キヤツチ直前で弾かれて軌道が大きく変わつてしまつたり、コンテナが多すぎて正捕手の数が足りなくなつたりとか、原因はさまざま。こいつを人力制御（もちろんモノの譬えつて奴だ。コンピュータのお世話になつてない航空システムなんか無いからな）で捕まえに行くのが有人キヤツチャヤーで、こいつの愛称が「プレデター」。狩猟動物というほどの意味だ。プレデターと言われる連中が稼働するよう定められている区域にいる間に全体貨物量の一割ほどのコンテナの内の、さらに約九十七パーセントがここで捕獲される。

そこからも外れてしまつたコンテナがロスト（またはロスコン）と呼ばれている。こいつらは一定以上の質量の物体から弾かれ続けてどこまでもふらふら飛んで行く。宇宙のゴミにしては至極安全な代物だが、宇宙植民時代に地球産の穀物^{グレイン}だが、そいつをしつこく追いかけて捕まえる非常に地味な商売が「チェイサー」、つまり追跡者というかつこいい俺たちの正式名称だ。

プレデターの連中はロストを発生させることが自分たちのターゲットの証明だから、俺たちをチェイサーなんてカツコいい本来の名称では絶対に呼ばない。代わりに屍肉漁りの生き物を呼ぶ言葉「スカンジンジャー」を使う。その心は、お掃除宜しく、という事だろう。

キャッチャーボートは小型だから基本的にバージシャトル乗りと一緒にライダーと呼ばれることが多い。挙げ句の果てがスカベンジャー・ライダー略してスカダーと来たもんだ。勘弁してくれってあれだね。

「俺だつて一応ライダーだ。プールで泳いでも奇怪しかないだろ?」

「冗談めかして俺が言つ。

「スカダーの癖に何処がライダーだ。充分違和感あるよ」

飛竜の反応は呆れるほど素早い。

「差別だ……」

文句を言つ俺に、飛竜はにっこり微笑んだ。そんな笑顔がこれまた厭味な程によく似合う。全く、コイツがいつまでも女に捕まらないんだから、俺なんか更に絶望的だ。

「いじけるなよ。冗談だつて。スカダーは大海を回遊する魚みたいなもんだ。俺たちは所詮は生簀の金魚よ。マグロが生簀にいちゃ、奇怪しいだろ?」

「誉められてる気がしねえんだが……。マグロ喰いてえ」

生け簀に金魚がいるかね、という突つ込みはおいといて、文句のついでに本音がちよろりと舌から滑り出た。

「いいね、喰いに行くか? もちろん、プールの寿司屋しかいけねえけどな。どつちみち、タカもプールに入っちゃったんだから、7日間は暇なんだろう? シフトが今のところ一日おきだから、明日は俺もオフだ」

大気圏に突つ込むのを一日おきにやつてるなんてのは、ハーデシフトにも程がある。客船ライダーと違つて、かなり体を酷使するだろ?」

「お前……しんどくないか? いい年して」

飛竜が破顔する。

「馬鹿言え。やつこさんが自転なんてのをしてなくて、ボートにあわせる必要がないなら、一日何回でも突つ込んでやるぜ。一日に一

度なんて、生ぬるい」

地球を『やつこさん』ときたもんだ。まったく突つ込み野郎どもつて連中は、信じられない感性をしている。

「んで、お前さん、なんでプールにいる？」

三度目の同じ質問は、少しマジが入っている。飛竜をはじめ、霧島一族の連中は皆、運送屋をやつてるにしては何故か基本が美形だから、目を細めて睨んでくると迫力がある。

「地上勤務の辞令が出たんだ。当然、やつこさんに突つ込むんで…」

…こつそり筋トレ中」

飛竜の顔色が変わった。

「お前、ルナGすらここんとこ無縁の宇宙人だつたんだろ？ いくら軍人だつて、酷くねえかそれ。第一コツソリつてえのは何だよ」
ルナGというのは、月の重力のことで、地球の約六分の一の重力をさす言葉だ。スペースグロー宇宙植民地で標準採用されているから、低重力といえばルナG環境のことをいう。無重力でも生殖そのものは可能だ。しかし、人間の体は無重力に暴露してしまうと筋纖維の萎縮だけでなく、運動ニユーロンや感覚ニユーロンの酸化系酵素活性能力にも著しいダメージを受けてしまい、胎内で子どもを育み、切開なしで自然分娩に至る能力が失われてしまう。人工子宮も実用化されるが、母子関係の構築に悪影響を及ぼすことが実証されているので、母親に決定的な問題がある場合を除いて、普通に自分の腹で子どもを育ててからの自然出産をしたいというニーズは高い。

「ロニーでも地球並の重力を維持できればいいのだが、巨大建造物でのテラGの実装化は未だにSFだの実験領域での話にとどまっている。やる気になれば可能なだとは思うが、できたとしてもコストパフォーマンスからいつて維持が困難だろうし、なにより、既にルナGで生きている億単位の人間をテラG仕様に戻すことは現実問題として不可能ということも大きい。最初にルナGを採用した奴がちゃんと実験結果をふまえてそうしたのか、一番先に地球ではな

い星上で実現した植民地が現在のルナ自治区だから、単純に前倣えで採用されたのかまでは俺は知らない。ただ、これだけは言える。ルナGは最低限の筋力を人間に残すためにシステムに組み込まれた数字なのだ。

「スペジャケの耐Gユニットの実験だとか。富仕えは世知辛いねえ

……

飛竜が一瞬絶句した。耐Gユニットなるものは、各国や企業が開発競争をしているものの一つだ。密閉空間をつくれば宇宙服にもなるスペースジャケットの環境構築ユニットに、重力コントロール機能を持たせることができれば、ルナGに一度定住してしまったものでも、人類の故郷である地球へ、命懸けの巡礼としてではなく観光として気軽に赴ける。

逆に地球で生活している『幸いなる少数』の人間がルナGに滞在するときにも、毎日死ぬようなハードな重力室でのトレーニングをしなくとも済むようになるということだ。

極東アジア国軍は既に一つ、輸送システムを独占している。地球の資源を宇宙に低成本で打ち上げるテラ・マスドライバーシステム『サヤコ』がそれだ。その上に、さらなる巨大利益を産むことは間違いないが、小型重力コントロールユニットが実験段階に入ったということと、軍人である俺が縛られているはずの守秘義務を足蹴にして、そのことを簡単に口にしたのとが飛竜を絶句させた原因に違いない。

「お……おい

飛竜は喉がカラカラに乾いているような、素つ頓狂なうめき声みたいなのを喉から吐き出しながら、どかっと椅子に腰を下ろした。俺の方に前かがみになつて、声も辺りを憚るよつに顰めて、聞き取れないほどの声で警告して寄越す。

「それを口に出していいて、お前無事に済むのか？」

突っ込み屋が商売の癖に、案外、キモの小せえ野郎だ。俺は軽く肩をすくめてみせた。

「さあてね……。まあ、命令だから、史上初のテラ・マスドライバーのパッセンジャーになることは、名誉として受け止めるけどナア、筋トレしてリスク軽減くらいはしたいってのは人情だろ？ プールのトレーニング・ルーム……休暇の間、使わせてくれ！ つつ

「テラ・マスの乗客？」

小声の体勢を無視したでかい声でいいながら、テラGで椅子に座つてることを考慮しないで大げさにのけぞった飛竜が、座つたばかりの椅子ごと派手に音を立ててひっくり返った。テラGでこけるのはさぞ痛かろう……。ほんと、大げさで楽しい奴……。

「なんだ。結局、これだけか」

鼻の根元にシワを寄せて、一番小柄な少年が不満そう言い捨てた。

「しかも……お前らかよ。頭痛い」

偉そうに腕組みをする。男の子が普通に着せられているような半ズボンにTシャツなんかではなく、少年戦隊ものの登場人物のような、独特の艶をしたツナギのスペースジャケットを着ている。着方をよく分かつていなか、単に圧迫感を嫌っているのか、それともカッコいいと勘違いしているのか。だらしなく大きくはだけた胸に、少年たちに大人気の『ミラーズ戦隊』の、ヒーロー『赤』が光線銃を構えているイラスト入りの下着が見える。

「何よ、私のどこが不満だつてのよ」

くるくると『美容院で巻いています』というような見事な内巻きにカールをかけた髪を、両方の耳の上で大きなピンクのリボンでまとめている女の子が唇を尖らす。少年と同じようなスペースジャケットで、こちらはスキなく首までちゃんとロックしている。

「お前みたいな『ママ』、『ママ』お嬢が、一週間のピクーックなんて出来っこねえだろ。さつさと帰れよ」

「あのね。私を赤ちゃんにしてたのはママの方なの。本当の赤ちゃんができたから、私はもう赤ちゃん』にしてなくて良いの」

「はは……ん」

少年が納得顔になつた。

「お前、焼き餅焼いてるだろ。ガキだな」

「ガキって何よ。焼き餅の当てつけなんかじゃないわよ。ミラーズ戦隊シャツのアンタの方が、余つ程ガキでしょ」

「ミラーズのどこがガキだよつー」

少年がいきり立つ。

「美咲ちゃんも、崇くんも喧嘩しないでよ。ボクたち、これから一週間、同志なんだろ?」

もつ一人の少年が、どことなく間延びした口調で割り込んだ。

言い争っている一人の子どもたちは、女の子の方が多少上背があるが、殆どどつこじどつこいなのに、仲裁に入った少年の方は優に頭一つ分大きい。この少年はピチピチに体に張りつくデザインのライダータイプ・スペースジャケットで、それには絶対に似合わない布製のリュックを背負っている。そこでも、崇と呼ばれた少年と同じミラーズ戦隊の赤が決めポーズで丶サインをしていた。

「同志つて気持ち悪いこと言うなよ、黄色。言つとくけど、イエローランか一緒に行かなくたつて、レッドは組織と戦えるんだぜ。あれは足手まいになつて、話を盛り上げるために一緒にいくつてだけで、ホントは待つてるのが仕事だろ?」

美咲と呼ばれた女の子の方が、腕を腰に偉そうに添えて、鼻で笑つた。

「何よ。遊星くんを黄色扱いして……。まさか、崇。アンタが赤だつて、そこまでずーずーしいこと思つてる?」

「つたり前だろ。オレと遊星なら、どー考へてもオレが赤だろ」「崇……アンタつて本当に最低」

遊星と呼ばれた大柄な少年の方が、のほほんと笑つて答えた。
「良いよ。美咲ちゃん。ボクと崇くんなら、やっぱ崇くんがレッドだよ」

「それみる……。文句言つなよな。女」

美咲の平手が崇の右頬を直撃した。女の子は左利きらしい。

「美咲ちゃん……。暴力はよくない」

「どことなくぼーっとした口調の遊星がたしなめる。

「遊星くん。崇みたいな単純な考え方なしがリーダーなんか出来ると

思う？ 私は遊星くんの方がリーダーに向いてると思つた。自信持つてよ」

遊星がにつこりと穏やかに微笑んだ。

「ありがと。でもさ、崇くんがピクニック計画立てたんだから、やっぱり今日の班長は崇くんになると想つた」

崇が我が意を得たりと、ニヤツと笑つた。

「遊星、班長つてのは止めとこつぜ。校外学習行くみたいじゃないか。冒険なのにさ」

「あ……、そだね。じゃ、リーダーつて呼ぶ？」

崇は鼻の頭をちょいちょいと搔きながら少し思案顔になつた。それから、いかにも照れ臭そうに小声で言つた。

「……レッドじゃ……ダメ？」

遊星がにつこりと笑つた。

「いいよ。ボク、ブルーも好きだから。ボク、ブルーね。美咲ちゃんはピンクでいい？」

美咲は大人びた仕種で肩をすくめて、首を左右に大げさに振つた。
「ホント、男の子たちつてガキね。私、ピンクなんて嫌よ。あんなキヤーキヤー騒ぐしかできない女が、そもそも戦隊ミラーズに入つてゐるのが許せないわ」

「なんだよ、美咲。お前、ガキつて人のこと直ぐ馬鹿にする癖に、自分だつてミラーズ見てんじゃん」

「大人は付き合いを大切にするのよ。アンタたちと遊んでるんだから、ミラーズくらい見てないと話できないじゃん。楽しんでる訳じゃないよ。……えつとね、わたしカシスさまがいい！」

崇と遊星がこけた。起きながらこつそり顔を見合わせて、「趣味が悪い」と目配せしあう。カシスというのは悪の組織・ディアハートの女マッドサイエンティストの名前だ。いろんな動物のキメラを作つては、超能力を持たせて、いつもレッドたちにけしかけてくるイヤな奴だ。

「……了解。美咲のコードネームはカシスで決定」

難しい顔で腕組みをした崇が決めつけて、美咲が小さくガツツボーズを作った。

* * *

自宅のファミリー向けコンパートメントのリビングにあるより五倍くらい大きなスクリーンに三人の女と一人の男が映っていた。真ん中で鬼のような形相をして、肩で息をしているのが崇少年の母親だった。彼女が激怒しているのはまず間違いない。

（一週間もあつたら、きっと少しは怒りも治まってる筈だ。うん、大丈夫、大丈夫）

崇は能天気に考えた。彼女はいわゆるシングル・ママだから、崇は父親を知らない。それから、赤ちゃんを抱いて、男の人に肩を抱かれている小学生のガキがいるとは思えないほど若々しい美人が美咲のママ。彼女は泣きはらしたような目をしていて、一週間後に美咲が帰つても、ぶん殴るより抱きしめてくれるタイプだろう。

それから、怖い顔をしたおじさんが遊星のパパだ。「パパは凄く厳しい」のだといつも遊星はぼやいている。なるほど、この顔は一週間くらいは怒りを持続できるタイプだ。チームの中で帰つてから一番危険なのは遊星に違いない。

元気よく街区の公園を出発した崇たち、レッド、ブルー、カシスの三人組は、補給物資が入ったコンテナに倉庫で荷物とすり変わった。荷物も別に捨てた訳でない。ちゃんとそのまま隅に寄せておい

た。コンテナに閉じ込められている時間は最低に見積もつても三時間。計算では手持ちのスペースジャケット用の空調ユニット（市販の安物だけ）でもその位は楽に持つはずだった。コンテナがテラGが採用されているライダープールへ繋がるゲートに着く。今回の冒険の行き先が、そのライダープールだ。

ルナGが採用されている宇宙港都市サンガは、いわゆる島二号と呼ばれるシリンドラー型の建造物だが、そこの付帯施設であるライダープールはテラGを出すために、島二号型をしている。回転軸でサンガと繋がつてはいるが両者は完全に独立し隔たつていて。地球という人類の大切な財産、特権階級である「幸いなる少数」のみが住んでいるそこに、大気圏というやつかいな関所を越えて、行つたり来たりするシャトルライダーは、殆ど事故報告がない宇宙殖民地間を行つたり来たりする宇宙船乗りより、少年たちの憧憬の対象になつていて。

ライダープールの回転軸の中は普通に無重力で、ドーナツ型の居住区は回転軸からのがたスポートで繋ぎ止められている。只の生活物資を積んだコンテナは、この回転軸の中央付近にあるハブまでシュー一トされ、そこで仕分けされ、スポートを通りて居住区に運ばれる。ここで保管される荷物に入つてしまふと、発見されたときは既に死後数ヶ月という事態に陥りかねないから、保存と冷凍が効かないフレッシュフルーツ（しかも超絶痛みやすいバナナだ）にした。

祟のピクニッケーション計画は、単純だつた。目的地は「憧れのライダープール」。けれど、子どもが隠れてコソコソしても楽しくもないしき飯も食べられないし、トイレも困る。だから、直ぐに発見される手段をとる。ライダープールには168時間ルールというのがある。地球からのイキがよい病原体をコロニーに持ち込まないよう、ライダープールから一般居住区に移動するには、総合ワクチンを接種してから、テラ時間の7日間を潜在保菌者として過ごす。何らかの病

に罹患して発病しないかどうかを待つのだ。さっさと見つかってワクチンを打たれる。それから一週間が楽しいピクニックだ。完全に親から離れられる。

憧れのテラGでエライ日に合わないよ、高学年からしか使えない、中央総合児童館のテラGルームに日参した。テラGツアーハンモックのプログラムだから、並んだ挙げ句に数分で入れ換えられる。この計画のために、訓練は欠かせなかつた。この夏休みは全て訓練に費やしたといつても過言でない。毎日、児童館で遊び倒していたなんて、ママの誤解も良いところだ。

計画は完璧だつた。チームはよくやつた。ただ誤算があつた。児童館のテラGルームは、本当のテラGとは似ても似つかない、ルナGに毛が生えた程度の低重力だつたといふことだ。三人の子どもたちは計画通り、回転軸の荷受け場でなはく、居住区でコンテナが開梱されて発見されたが、その時には、テラGショックで皆、息も絶え絶えだつた。

「ですから、一応プールに入つてしまつた訳ですから、168ルームは、はい、お子さんでも例外という訳にはいきません」

「崇が知らないおじさん　多分ライダープールのお巡りさん？」

の説明に、中央の女が声を荒らげた。

「小学生に一週間も学校を休めと仰るんですか？　そうでなくとも、やつと夏休みが終わつたところですのに……」

「知らないおじさんは根気強かつた。」

「ですから、何度もご説明しています通り、コロニーに地球の病原菌をばら撒くと、パニックを誘発するどころか、最悪、カタストロフィーを招きます。ご心配も分かりますが、少々の学業の遅れには目を瞑つていただきないと」

説明を受けていた女の目がつり上がつた。

「それより、……あの、……娘はテラGで無事に？」

「発見当初は、正直、必ずしも無事とは言えない状況でしたが……、

直ぐにルナGと殆ど一緒にGレベルの中段倉庫に運びましたから……」

「はい。今は大丈夫かと……」

そうなのだ。彼らの計画通りでなかつたことで一番大きかつたのがコレだ。崇たちはカツコイイライダーさんたちが闊歩するプールで遊ぶ予定だつた。けれど、そうでなくとも柔らかい子どもの体がテラGに耐えられる筈もなく、三人はスポーツの補強も兼ねている物資保管倉庫に移された。そこは回転軸に近いことで重力も小さく保たれているのだ。外部との接触もない。お仕置きとして閉じ込める意味でも、大人たちには都合のいい場所だつた。

三人はそこに移動させられてから意識を取り戻した。つまり憧れのライダープールはつまり見てもいい。通り抜けただけだ。

これから一週間、チームのメンバーは、帰還後に上層部（親）から受けれるだろう数々の叱責をどう言い抜けるかシミュレーションしながら過ごさなければならない。しかも、総合端末の前に大人しく座つて学校の遠隔授業を受けよとまで厳命された。放課後が無くなつただけであるでピクニックにはならなかつた。最低だ。

「全く、いつも友だちは女の子にしなさいと……いつているのに、崇くんたちと……。こんなバカなこと……してかして。ねえ、美咲、聞こえてる？　ママ心配したのよ」

ため息をついた美咲が答える前に乱暴に崇の母が割り込んだ。

「越智さん……。お言葉ですが、美咲ちゃんももう高学年なんですから、自分で決めたことでしょう。何もかも人の所為にしていると、ろくな大人になれませんよ」

美咲のママが爆発した。

「崇くんのママがいつもそうやって、自発的、自発的と野放しにな

さるから、崇くんが野放団になるんです。こんなことしかしたんですよ。少しば反省なさつたらどうなんですか？ 独立心が旺盛なと、規律に無頓着なのは違います

「なんですか？」

崇の母親がいきり立とつあると、ちよつと太つた遊星のママが割り入つた。

「まあまあ、越智さんも、塩屋さんも。子どもたちが無事だつたんですから、良しとしないこと。私たちも頭に血が上つてますもの、少し落ち着きましょうよ。叱るのは顔を見てからでいいじゃありますか？」

（遊星のママを見ていると、あいつがのほほんとしている理由がよく分かるよ。ちょっと羨ましいかな。……仕事をしてないで、いつも家にいるのも……）

「良いよな……。遊星のママ」

崇の口から思わずそんな言葉が零れ出た。

崇と美咲の母親はいつも事あるごとにぶつかつているのだ。仕事を持つて一人で子育てをしている崇の母親は、子どもを人形のように飾りたててお稽古」と追い立てる美咲の母親を信じられないと言うし、美咲の母親は崇が乱暴なのは、片親で愛情が足りていなかからだと無神経に断言する。一人が上手く行くはずがない。子どもたちだって、自分たちの感じるところで友だちを選んでいいのだから、親は取り敢えず自分の好き嫌いは抑えましょうよといふのだから、親は取り敢えず自分の好き嫌いは抑えましょうよといふのも穏やかにとりなしてくれるのが、遊星の母親だ。

崇の咳きに美咲が同意して頷くと、遊星が首を激しく振つた。

「あんなふうに、落ち着いてる時が一番怖いんだ……ママ、マジで怒つてるよ……。帰るの……やだな」

「最低の……ピクニックになっちゃつたよ……ね。ブルー」

美咲は帰るまではチームモードを解除するつもりがないのか、遊

星をブルーと呼んだ。遊星も「口ッ」と笑う。

「カシスのママも……相変わらず、けつこいつ畜生よ。怖い……」
遊星が言い終わらない内に、憤慨している口調で崇が割り込んできた。

「オレの母ちゃんが一番凶悪に決まってるだろー。」

一瞬きょとんとしてから、呆れたように遊星が呟いた。

「崇くんは何でも一番がいいんだね……」

「そんな一番、嫌だあ……」

美咲が腹を抱えて笑い転げた。この音が向うに聞こえているとしたら、まずいと思いつつ、つられて崇と遊星も笑いだしてしまった。

崇は思つ。最低で予定通りにいかないピクニックだつたけど、バナナを放り出してコンテナにもぐり込んだのは楽しかつた。遊星と崇がついでにバナナを食べはじめて、時間がないと怒つた美咲だつて、ちゃんとバナナを齧つてた。いつ見つかるかとドキドキした。回転軸に打ち出されたときの加重も、遊園地のコースターより数倍すごい。

臆病風に吹かれて、「必ず行く」と児童館のテラルームで約束しておきながら、公園に現れなかつた腰抜け連中なんか知るものか。美咲も遊星も信頼できる友だちだ。ちょっと五月蠅いのと、落ち着きすぎてるのとが玉に傷だけどね。

3・Hンジョイ・トレーニング

耳に大音量のビートがまだ詰まっている感じだつた。いきなり運動を停止することで心臓にかかる過負担は百も承知で俺はフロアにのびた。

お疲れさまでしたつ。
ナイスファイトでしたつ。
また来てくださいねつ。
お待ちしていますうつ。

とつぐに消化されている筈の昨晚のマグロが胃からせり上がりつてきそうなほどきつかつた。なんだか激しく軽快なリズムにのつて、キックだのパンチだの、ジャンプだのを、むさ苦しい大の男たちが、更に暑苦しい雄叫びをあげながら保育園児のお遊戯よろしく一緒になつて前に立つている女の子の真似をして繰り返す、狂氣のような60分が過ぎ去つた。隣で嬉々として元気一杯に飛び跳ねていた飛竜の無邪氣をからかう元気も残つていない。「インストラクターの」と自己紹介していた小粒で、きりつとした目つきが印象的な女の子は、あの可愛らしい顔のどこからあんなドスが効いた声がでてくるのだろうといつような雄叫びを積極的にあげながら、狭い重力室のフロアに詰まつた男たちを煽り立てていた。全く、あの小柄な体の何処に、あれだけ激しい動きをテラGでやるエネルギーがあるのか不思議でならない。

重力トレーニング・ルームから出て行く男たち一人一人に歯切れよい声で小気味よく挨拶していくのが遠くに聞こえる。マズい、マジで失神しかけている……。

ライダープールというのは、一つの部屋や施設なんかではなく、

小規模なつくりではあるが、それだけで立派に宇宙植民地として独立してもやつていけるほどには、まとまっている住居区画だ。人間らしく生きていくために必要に最低限の施設は一応そろっていることになっている。宇宙空間にある建造物としては異例のテラGが採用されている。これは、地球という重力圏と往復せざるを得ない連中の身体能力が、ルナGで勝手に減退しないようにするための配慮だ。

娯楽施設の類は、環境大破壊というカタストロフィーを、地球から殆どの人間を宇宙植民地に移住させるという気が遠くなるような巨大プロジェクトが遂行される中で、地球から基本的に追い出された。【ロニー】にはなかなか構築しきれない自然のありのままを満喫するなら地球が唯一無二のプレイランドだが、人間的な楽しみはむしろ宇宙で花開いている。

昨日、俺は霧島飛竜とつれだつてプール内のミニチュア版歓楽街のようない通りに出向き、夜中まで寿司バーで金に糸目をつけず贅沢に飲み食いした。普段は人間が棲息していない宙域でロスコン（ロスト・コンテナ）を追いかけるという、途方もなくジミな仕事をしているのだから、遊ぶ場所などないのだ。一応、極東アジア軍の正規の給料をもらっているのだから、使う場面が無い（衣食住は全部支給品だ）ということは、結構な小金持ちという位の貯金は溜まってしまった。たまには吐き出させてやらないと、通帳の健康状態に宜しくない。流れる特性のものは、どんなもんでも流してやらないと腐るね。

破目を外して、景気よく呑み倒したかったが、飲酒の習慣がないものだから、酔いは直ぐ回つて記憶が途切れた。それでも人間と一緒に仕事をしなくなつて何年にもなるから、久々に異種タンパクを入れたり出したりする必然を持っている生き物と飲み食いするの大いに楽しかった。潰れたところで飛竜に迷惑をかけるのなんざ、ちつとも良心が痛まない。普段、金の使いようがないから、奢ると

いつたら、あのウワバミが遠慮もせずにクジラ化した。俺ときたら奴の半分も飲んでいないのに完全に酒に呑まれた。

飛竜は、奴の実家の一族で経営している会社が所有している独身者用のコンパートメントに生活拠点を置いているらしい。目が覚めたのは奴の殺風景な部屋の床だった。久し振りに会つて酔いつぶれた古くからの親友を床に転がして、自分はいつも通りにベッドに寝ているという極太の神経は許し難い。俺の財布で飲み食いした癖にずーずーしい。

すやすやと気持良さそうに眠っている飛竜の眠りを邪魔したくなつて、たたき起こしてやつた。眠りを邪魔されて心外そうな目つきで睨んできた奴に、「約束通り、テラG下で運動しようぜ」と言つたのは、間違いなく俺だ。

だけど、今の俺はルナGの感覚すら漸く取り戻しかけたレベルの耐G能力しかないのだ。手始めにウォーキングマシンや筋トレマシンなんかを使って、一日酔いの頭を宥めつつ、ゆるゆるとテラGに馴染んでいくつもりだった。それを、飛竜の奴は眠りを邪魔された腹いせか、パンチやキックなどの格闘技の動きを取り入れて野郎向けにアレンジしたハードな有酸素運動する場所に俺を引きずり込んだ。

もつとも、マシンジムと違つて、仮想ターゲットに攻撃の真似をするだけだから、ゼロGで鈍^{なま}り切つた筋肉には却つて優しいかもしれない。そうはいっても、俺の心肺機能はとことん劣化してんのだ。やつぱり嫌がらせとしか思えない。気持ち悪い……。

その時、後頭部に冷たいタオルがあてられた。タオル越しに乗せられた掌の重さが心地良い。沸騰しちまつた血液がそこで冷やされるのか、めちゃくちや気持ちがいい。思わず安堵の溜息が漏れる。この心遣いは有り難い。こんな優しさをみせてくれる時は、いくら俺だって、素直に飛竜に礼の一つもついてやるに吝^{やぶさ}かでない。

俺が所属している極東アジア国軍の上層部からは、重力コントロール・ユニットの実験に参加せよとの命令書が来ている。筋力トレーニングや骨を頑丈にするサプリメント連続投与期間を設けることなく、人工衛星港湾都市サンガにある基地に可能な限り速やかに頭せよとの厳命だ。

底辺で使い捨てられる消耗品とはいえ、俺は仮にも人間の看板をさげている。こちらに声がかかる前に、たくさんの動物さんたちが新しい装置を搭載したスペジャケ生地の（多分）袋詰めになつてテラ・マスドライバーで打ち上げられ、星になつたり生還したりしているだろう。取り敢えず星になる動物さんが居なくなる程度の質には出来上がつている筈だ。

それでも、計算つて奴は間違つものだし、計画は頓挫するものだし、人間はエラーをしてからやつとこを学ぶように出来ていて。実験が失敗したら、多分命はないが、有つても半死半生になりかねない。そんな乱暴な実験のモルモットに選ばれて、「はい、そう致します」と誰が答えるというのだろう。リスクを減らしたがるのは人情つて奴だ。不服従と規律違反で免役になるなら、この際しめたものだ。当座暮らしていく資金には不自由していない。

そりやあ俺みたいなアホでも、多少筋力を取り戻していくようが、骨組織に纖維が増えようが、ダテに長期間を宇宙人として過ごしていないのであから、テラG環境に生身で適応するには一週間やそこらでは無理が有りすぎるのは分かっている。重力不適合症を起こして心肺機能と代謝機能に露骨なトラブルが多発してしまつのは避けられない。下手したら死ぬということだ。相棒にはまだ俺が宇宙で元気に働いていることにデータ自体を誤魔化してもらつて（こういうことが出来るのが、新人を相棒にしている利点だね……）、せこく

ルナGで一週間、体を馴染ませた。それから、もそつとやつかいなテラGにとつかかってはみたものの、やはりルナGとは別格に手ごわい。長く宇宙人してた俺には、普通にしてるだけで、全方向から圧力がかかってるようなものだ。息するために肺をふくらませるだけのことが、そもそも大仕事だ。

こんなヤワな生身をテラ・マスドライバーで打ち上げたら、見事にペシャンこに潰れちまうだろう。宇宙移開始時期に「ロニー群建造の推進役として名を残している篠田清子（しのだせや）だつて、悠長に訓練して民間人を宇宙空間に連れ出すより、テラ・マスで打ち上げてしまえという乱暴な構想は立てたが、人の生存を保証できる技術の開発が間に合わず諦めたつてシロモノだ。

低コストで大量輸送が可能になるマスドライバー・システムも、最初は「月」辺りで実現されるだらうというのが多くの見解だつたはずだ。地球の大気と重力はコストペイしないだらうと専門家は言つていたらしい。

でも大気と重力がやつかない地球にこそ、有人のシャトルシステムよりもマスドライバーだと大胆に決めつけたのが、篠田清子だ。彼女が方向を指さして、極東アジア国が見切り発車で建造に取つ掛かつたときは、まだ解決すべき問題が山積していたそうだ。こいつで打ち上げたあのコンテナをどうするかという単純な問題すら、建造着手当時は日途が立つていなかつたらしいから驚く。それでよくこのような巨費がかかるプロジェクトに「進め」をかけられたものだ。

危急存亡のときには、驚くほど大胆にものごとを押し進める人間が必ず出てくるように、人類というのはできているらしい。

プールでちょっとトレーニングしたつて気休めにしかならないと、俺だつて分かつて。だけど、俺のアホを笑つてる連中だつて、実際にそんなトンデモ実験に協力せよと白羽の矢が立てば、見苦しく

ジタバタするに決まつてゐる。当然じゃないか？

俺の両親は旧式の「ローラー」で飼い殺されるだけの大衆だ。もちろん、スラム化した地域で、生まれるなり投げ捨てられる孤児みなじに比べれば、それでも遙かにマシだけどな。両親と同じように社会に養われ、ただ生きていることでいろんな物を消費するだけの人生ヘーレルは敷いてあつた。

そんな下らない人生なんてクソ喰らえと思つた。ちゃんと職業を持つて働き、生産性のある労働力として、それなりに手応えがある生き方をしたかった。

人間だから安直に殺せない、「ただ生きている」というような「ローラー」暮らしから足を洗いたかつたら、選択肢は限られている。自分がそうしたように、志願して軍人になるか、目指す職技能を持つ人に弟子入りするか、その位しか考えられない。学問で身を立てる（そうしたいとも思わなかつたが）道もあるが、そちらへ進むには学ぶ環境が身近にあるかどうかにかかつていると俺は思う。時間を浪費するだけの「ローラー」暮らしへ、頭を育てる環境として劣悪だった。

一番門戸が広くて来る者を拒まないに軍に志願した。人殺しは嫌だつたとはいゝ、一番一般的な戦闘員に配属されるだらうと思つていた。どつちにしろ今の戦闘は殆どが遠隔攻撃主体の見事に卑怯なものだから、直接誰かの肉を切り裂く破目には陥らないといつ甘い予測も有つた。それが軍の公費から給料を支払われながら、航空宇宙専門学校に飛ばされたのが、まず、そもそも間違いの始まりだった。

適性テストで振り分けられたのだとはいゝ、自分の何処にパイロットの素質が眠つているというのだろうと訝つたものだ。それでも、べつたりと軍の色を塗りたくられる事なく、専門学校で学べるといふのは、誤算にしても嬉しいものだつた。いきなりテラG室に送り込まれて、重装備を担いで人殺しの訓練をするよりは余程有り難い。

軍のパイロット養成コースではなく、民間の専門学校送りになつたところで、自分はちゃんと認識しておくべきだつた。文句なく力ツコいい戦闘機のパイロットではなく、地味な物流部門の後方支援要員として振り分けられちまつたつていう、情け無い現実を。

挙げ句の果てが、宇宙人と皆から揶揄される、ルナGどころかゼロG環境で、捕食者^{プレデター}が逃したコンテナを、ちまちま拾うスカダーに落ち着いた。男はガキを自分で育てなくて良いから、人生のパートナーを見つけるに当たつて、筋力の滅消など大した障害にはならないが、生殖に問題がなくとも、異性との出会いの面で完全に人間社会から遮断されているという社会的大問題がある。可哀相に、俺の恋人居ない歴の新記録更新は止まる気配もない。まったく、宇宙船操船技術専門学校時代は、本当に面白かった。アストロノウツ候補生は、文句なしにモテた。飛竜のように霧島運輸の御曹司で、すこぶるつきの美男などという箱がついていなくても、普通に遊ぶ女には不自由しなかつた。

スカダーのチームメイトは二人の新人^{（ユーマン）}だ。新人は人間関係が微妙で過酷な状況では思考回路に異常をきたしやすいらしいが、単調な繰り返し労働には耐性がある。連中は生産性に乏しい、単純労働を「何故自分がしなければならないのか」という、つい人間が抱きがちな悩みとは無縁らしい。ただ、維持にかかるコストが莫大なため、極東アジア国軍は表向き、数年前の戦争を契機に新人の使用を全廃したことになつてゐる。が、人類可住域の完全な周辺で暢気に荷物を拾い続ける単調な職業では、トラブルの前例は一例もない。だから、俺が働いている現場では未だに現役だ。その俺の二人の相棒も気がよくて、どんなに代わり映えしない毎日が繰り返されても、淡々とルーティンワークを捌いていく。愚痴もなく、神経を病むことなく、安定していて信頼できて……、頼りになる奴らだ。

「ナイスファイト……でした。タカさん」

ひんやりと気持ちよいタオル越しに添えられた手が、じつくて手
力い飛竜のではなく、纖細な女のものだと気付いたのは、その声が
直ぐ後頭部から降ってきてからだ。慌てて寝返りを打つて身を起こ
す。首から落下しそうになつたタオルを上手くキャッチして声の主
を探ると、あのドスが効いた声のねえちゃんインストラクターだつ
た。普段の声は、こんな風に可愛らしいのだとと思うと、意外の感が
否めない。

「……ど、どうも。仕事でも……そこまで見え透いたお世辞は、言
わんで良いですよ。俺は飛竜たちライダー連中と違つて、プロブヨ
だし……」

情け無くたるんだ腹や手足を見る。太つてはいないが、縫まりと
いうものが全くない、男としての魅力ゼロの体つきだ。ルナGに棲
息する仕事もしないような連中と並べば、特に見劣りしないだろう
けれど、先程まで一緒にトレーニング・プログラムをやつていた連
中は肉体美の見本のような輩ばかりだ。

女はにっこりと微笑んで首を振つた。

「タカさん、ゼロG上がりなんでしょう？ キリーからそう聞いてい
て、ラスまで絶対、保たないとthoughtして見てたので、ビックリしたわ
「キリー？」

俺が聞き返すと、女が面白そうに笑いながら言つた。

「霧島さんのキリでキリー。なんか、竜とか虎とか、任侠小説の登
場人物みたいな名前、気に入らないんですって……」

そういえば、飛竜の弟の名前というのもまた凄かつた。同じ航空
宇宙専門学校の三学年下の奴の弟は、飛竜さえ震むほど的好男子で、
その名前が翔虎。（しやうこ）あの霧島兄弟の名前は、上の字をとつて並べれば
「飛翔」。で、下の字をとれば「竜虎」。まったく、もう一人息子
がいたら、どんな名前をつけるつもりだったのか、あるいは、男

の子がもう一人生まれなかつたら何人まで子どもを作るつもりだつたのか、一度でいいから直接オヤジさんに聞いてみたいと前々から思つてゐる。

ついでに、飛竜の上の三人のお姉さんの名前は、霧島運輸の現社長である松姫さんしかはつきりと知らないが、残りの二人には、竹と梅がついている筈だ。「酒の名前ですか」と、突つ込みたくなる。航空宇宙専門学校でも、見た目でも能力でも抜きんでて目立つていた二人は、「竜虎兄弟」などと一括りに呼ばれることに、いつも強い不満を示していた。俺と同じに親からもらつた大切な名前が気に入らないといつう罰当たりには理解を示さなくもないが、そつはいつも勇壮な「竜」なんだからちつとは満足しろよと俺は思つ。飛竜の分際で「キリー」とは何事だ。ふざけている。

「おーつ。生きてるじゃん。すゞいすゞい」

スポーツドリンクのボトルを手に重力室に戻つてきたキリーちゃんを見て、俺は意地悪く微笑んでみせた。

「キリーちゃん、それオレに？」

飛竜の顔が思いつきり不愉快そうに歪んだ。

「そんな呼び方して、いいのかな？ ゆうびちゃん」

インストの女が一瞬目を丸くして、それから「ロロロロ」と人形のような笑い声をたてた。

「タカさん、ゆうびさんつて仰るの？ 素敵なお名前ですね。字はやつぱり優雅に美しいですか？」

俺が苦虫を噛みつぶす前に、キリーがにっこりと微笑んで割り込んできた。

「その通り。優雅に美しいで優美ちゃん。キレイな名前だからそつちで呼んでやつて」

俺は力一杯殴つてやつた。テラG男に宇宙人がパンチを入れるのに、遠慮する必要は全くない。

「……痛いなあ……。なんて硬いんだ」

やつぱり俺の拳の方が負けた。クソ……腹の立つ。

飛竜がドリンクのボトルを、俺の耳の下に押しつけてきた。ヒヤツと気持ちいいが、インストの子のタオルに軍配をあげよう。ボトルを取りあげて捻つてキャップをとろうとして、諦める。こんな固いのは、宇宙仕様にチューンダウンした力では太刀打ちできない。黙つて飛竜の目の前に突き返したドリンクボトルを、間に入つた手がかすめ取つた。そして、指先だけ使つて開封して俺の手に戻してくれる。

「ゆつくり飲んだ方が良いですよ。一気に呷ると吐きちゃいますよ」「有難う。気をつけるよ。ところで、おねえちゃん」

「……なんですか？」

今どき、ライダープールに棲息する男どもでも、若い女の子をつかまえて「ねえちゃん」呼ばわりする「時世じやないのだろう。微妙にあいた間は、不愉快の意思表示かもしれない。けど、こちとら、ナマの女の子と間近にいるのはめちゃくちゃ久し振りだのだ。小振りだが、若さではち切れそうな、しかも、テラG仕様でとびきり上物の筋肉の魅力は、俺の煩惱をタップリ刺激してくれる。もうすぐ死ぬかもしれない身なんだから、今生に悔恨を残しちゃアいけない。

「俺、若い女の子と生で話すの、五年ぶりくらいなの。60分頑張つた」褒美にほっぺにチューでもくれない？」

言い終わる前に背後から飛竜の掌が後頭部に降ってきて、俺はフロアに問答無用で沈められた。クソ……身動きできねえ。こいつに宇宙人に対する労りつてのは無いのか？

「ごめん、ザキさん。アホダチで。こいつは普段人間と暮らしてねえから、礼儀つていうか、常識つてのを完全にどつかに廃棄処分にしちまつてゐみたいで……。あとでちゃんとシメとくから、許してやつて」

飛竜の奴から「ザキさん」と呼ばれたインストラクターの女の子

は、またしても「ロロロ」という形容が似合つ、楽しそうな声をたてて一頻り笑つたあと、乱暴な飛竜の手を俺の後頭部からどけてくれた。

「了解です。ナイスファイトでした」

驚いたことに、ザキさんは惜しげもなく柔らかい唇を俺の首筋に押しつけてきた。場所が場所だけにくすぐつたいが、堪らなく気持ちいい。こいつは紛れもなく懐かしい、生モ^{ナマ}ンの女の子だ……。

それから、ザキさんはわざとらしく派手な接吻音を立てて、冗談の意思表示をしてから俺の後頭部を3回ほどタッピングした。手加減はしてくれている筈だが、かなり……衝撃がくる。もともとがアルの上にネジまで抜けそうだ。

「明日は90分プログラムなんですけど……。最後まで頑張つたら、リクエスト通り、ほっぺにしてあげても良いですよ」

「……いや。首筋でも充分気持よくて……、ナイス・キスでしたあ……。ご馳走様……」

またしても言い終わらない内に飛竜の手が俺の襟首をとつつかまえて、強引に引きずりだした。いいですよ。どうにでもしてください。俺は今ちょっと感動しているのだ。

飛竜に撤去されつつある俺を見て、ザキさんはまたしても可愛らしい顔を更に笑顔で上物にして、軽く手を振つてくれた。俺も人指し指と中指を立てて小さく振つてみせた。

「ザキさん……。まさか、こいつみたいなのが趣味だつて言つんじやないだろうな……」

扉を出るときに飛竜がぶつぶつと言つているのが聞こえた。なんだ、こいつ、あの女の子に惚れてるのか？ ちつと拙つたかもしれない。いくらなんなんでも、親友の恋人にちょっとかいかけるほど俺のデリカシーはすり減つちゃいない。念の為確認しておこう。

「キリーちゃん。ザキさんに惚れてる？」

「彼女、シャトルライダーの中じゃ、ちょっとしたアイドルなんだよ。今の他の連中に見られてたら、お前、半殺しにされるぞ……」

* * *

今日も耳を塞ぐような大音量。ザキさんの指示に合わせて、ハイキックだのロー・キックだのしている連中に、昨日と同じように発破をかけている。彼女が最初に「インストラクターのオザキです」と言つたので、ザキさんがザキさんと呼ばれている理由はよく判つた。キリーといい、ここに連中はとことん単純に通称を決めるらしい。ザキさんはジャンプさせておいて、低く回し蹴りを喰らわせたり（足を踏ん付けないよつて、無理にでも高く跳ばなきや成らない訳だ）、ダッキングさせておいてエルボーを喰らわせてきたり（ちやんと低く沈まないと、ノックダウンまでは行かなくても痛いこと必定だね……）、元気一杯に走り回つている。

「まだまだあつ」

口口口口と同じ器面から、どうしてあんな声がでるのか、何度も聞いても不思議だ。

「声聞こえないよあつ。元気ーつ？」

と、ザキさんが叫ぶと、男たちの怒声みたいな掛け声も音量がさらりと上がる。やっぱり異様な空間だ。はつきりいって、ザキさんのチューに下心がなければ、ここにはお近づきになりたくない。

「ちやんと息はいて。タカさん！ 生きてるうつ？」

ザキさんが俺を名指しになると、隣にいた野郎の目つきが危ないものになつた。ザキさん、励ましてくれるのは有り難いですけど、

俺……命はまだ惜しいんです。俺は仕方なく卑屈な笑顔を作つて、不愉快そうな野郎の顔に会釈した。飛竜がいれば庇つてもらえるかもしれないが、今日は仕事で地球に突つ込んでる。気象条件がよければ、明日に地球側の港ポートとサンガがミートする時間に出てくるはずだから、今日の護衛の用はなさない。

「あと4回、もっと跳ぶ。もっとと。高く、高く、高くだつてばあっ」

ザキさんの肌にも汗が玉になつて浮いている。Tシャツを脱ぎすぎてタンクトップになる。鍛え抜かれた筋肉が、そういう格好にはエラく似合う。みとれていきたいが、俺は限界だつた。……キツい。マジで死ぬ……。

1テラGの人工重力をどうやって発生させているか。これはもう、スペースコロニー建造時の科学力の限界で（今もそうは進歩しないが）、遠心力しか選択肢は無かつた。1ルナG程度の回転は、はつきり言って人間の感覚器官をそれほど苛めない。高速で移動する乗り物が危険すぎて使えない程度の不便さしかない。ところが、ライダープール程度の質量の居住空間に遠心力で1テラGを作り出すとどうなるか。足と頭にかかる重力が厳密に言えば違うという特殊すぎる環境になる。

ライダープールというのは只でさえ宇宙酔いしやすい空間なのだ。そこでジャンプなんかした日にはどうなるか……。一応飛び跳ねた地点と落下地点は地球上での普通の運動で起こる誤差と同等程度の違いしかないが（ジャンプした地点に着地できるということ。めでたいでしょ？）、軌道がまるで違う。足が床から離れた瞬間に、円筒形のシリンダーの回転方向に対して正の方向に移動し、落下をはじめた途端に、それが負の方向に変化する。そして、ジャンプした高さの分だけ感じる重力（実質も）変化する。今日は昨日と違つて二日酔いでは無かつたが、飛び跳ね出した途端に酔つぱらつてしまつた。胸がムカムカする。気持ち悪い。

「まだまだあつ

……ザキさん。元氣すぎ。

ナイスファイトでしたあつ。

お疲れさまでしたあつ。

次回もお待ちしていますうつ。

今日も遠くからザキさんが元気に野郎どもを見送る声が聞こえてきた。なんとかラスまで辿り着いたと……言えるだろうか？ 一応立つてはいたが、最初から筋肉痛で千切れそつた体には、90分は最低に長かった。

突つ伏している俺に、今日も彼女は冷やしたタオルを乗せてくれた。ザキさん、優しい。

「キリーに頼まれたから、仕方ないけど……、本当は宇宙人さんにはこのプログラム凶悪過ぎますよ。適当に手を抜いて挫折すればいいのに、タカさんつて、もしかして物凄く……意地つ張り？」

「馬に二ンジン……。狐にお揚げさん……。河童にキュウリ」

俺がそう言つと、ザキさんはクスッと笑つて、俺の頬に昨日みたいにふざけていないキスを軽く落してくれた。

「それって……、つまり、こうじうこと？」

ついでにこの人は……凄く、頭も切れる。

「ご名答」

短くしか答えられない俺に、ザキさんは顔をくしゃくしゃにする笑顔を寄越した。

「タカさんつて本当に変。なんか面白いわ」

面白い。それは学生時代に付き合つた女の子からよく言われたお

馴染みの言葉だ。いい人と面白い人は、遊び相手で、ホンキ相手の用はないというのが定番だ。遊び相手。充分でしょ。俺はザキさんの頭を引き寄せて彼女の唇を奪つてみた。相手はテラGで鍛えている女だ。筋力ヒエラルキーでいえば、あちらが貴族でこちらは奴隸。なあに、俺が嫌なら虫でも潰すように捻れるのだ。遠慮はない。

「……タ力さん。フザケすぎ」

ザキさんは今度は俺の腕を掴むと、床に向かつて逆手に捻じあげた。……痛い。

「宇宙人でなかつたら、張り飛ばしてやるのに……。いやね」
ゼロGの人間が、テラGの人間からホンキで殴られたら、かなりの割合で骨が碎けるだろ?。そつすると、俺はザキさんの優しさに付け込んだ極道か?

「ごめん」

俺が素直に謝ると、ザキさんは肩をすくめて首を振つた。

「謝るくらいなら……しなきやいいのに」

「だから、そこは……それ、河童に……」

ザキさんが、今日も口口口と笑つた。……そうだ。鈴を振るようなつて表現があつたな。まさしくアレだ。

ロスト・コンテナを拾うには、プライオリティーがある。中に詰め込まれている積み荷の貴重度で振り分けて、それらが色別の点として追跡母船^{マザーチェイサー}のメイン・コンピューターの中央立体モニターに映し出される。

追跡母船は刻々と変化するロスコン（ロスト・コンテナ）の貴重度と分布密度を計算し、一定時間の作業で回収できるコンテナの総額が一番高くなる宇宙域に、リトルジャンプで移動する。

広大なる宇宙空間を移動するのに、亜空間が利用されるようになつて、まだそれ程の年月は経過していない。まず、通信波を亜空間に通す所から試験運用が開始され、それから程なくして、キャッチャー・ボートくらいの小型船をロボット操作せる所までに科学者の楽観的予測よりは多くの時間が掛かった。それから有人での亜空間・ジャンプ航法がテストされるまでも、技術的なものでなく、世論的な合意が得られて実施されるまでにはもう少し時間を要した。それでも一度、亜空間移動が近・光速移動より（超光速はまだ実現されていない）人体に影響を及ぼさないことが証明されると（『世代をまたがる』どうよ』というややこしい問題は今のところ無視されている）、そこからは広く一般の人間にとつても、当たり前の移動手段として認識されるようになるのは早かつた。

亜空間からの出現ポイントに、他の何らかの物質が無いことが必要最低条件であるため、どんな物質も入り込まないように守られた充分な広さがある空間が確保された施設（ジャンプ・ステーションと呼ばれている）の建造が着手されたのも、実験成功からそれほど多くの時間を待たずにであった。これは、宇宙殖民地建造ラッシュ以後、大量に発生する恐れがあつた失業者の雇用確保のためであつたといわれている。

追跡母船は、大型客船が使うような、そんな安全が保証されたジャンプ・ステーションとは無縁である。出現ポイントにロボットシップを先行ジャンプさせ、そこで質量分布計測を行い、安全ポイントとして計器に入力された座標田掛けて安全確認などせずに飛んで行く。今のところは大事故に至ったケースはないが、それは技術が安全を保証しているからでなく、絶対数が少ないからたまたまラッキーが続いているだけということも充分考えられる。

リアルの人間で、加悦^{かえ}のボスでもあるここチームリーダーの高柳は、その点については深く考えずに居られる希有なタイプのようで、こんな安全というものを足蹴にしている職務にもキレたりせず淡々とルートインワークをこなしている。

彼に言わせると、『仕事がある』という状況が、まず、今どきの多数の人間としては幸運な部類に入るから、それに関して文句を言うつもりは無いということらしい。人間が生きににくい場所でやりたがらない仕事で、定型業務として成立しにくいもの、というのが『新人』^{ニーマン}のニーチだから、経験蓄積型AIを搭載しているリアルタイプ・アンドロイドの自分や、相棒のジョー^{マザー}がここでロスコン^{拾い}を割り当てられるのは判る。母船^{マザー}のメイン・コンピューターが今日のロスコン分布データを解析している間、いつもなら高柳がいる場所が空いているのが、どうにも目に慣れないと溜息^{カエ}をつきそうになる。溜息は人造物である新人には似合わないと、加悦はもう一人の相棒ジョーを探した。

人工知能には、いくつか種類がある。先ずは、解放型と呼ばれるもの。データを際限なく蓄積していきながらも高速で解析と抽出が可能で、しかも自己複製しながら何処までもデータを溜め込んでいく、巨大なホスト・コンピュータ。これは国家の維持・運営などを補佐している、いわゆるマザーランドコンピュータと呼ばれるものだ。もう少し規模が小さく市規模の自治体や、宇宙船隊の母船などの中枢にでんと存在したりしているやつも同じ種類のものだ。

それから、閉鎖型と呼ばれるもの。どんなに瞬時にものごとを判断しているように見えて、どれほど人間らしい振る舞いが出来たとしても、あくまでも決められたフローから、はみ出すことが決してできない、外部プログラム依存型のもの。これはロボットと呼ばれるタイプのAI。そして、経験蓄積型AI搭載のヒューマノイドが基本形であり、思考するとされている人工知能の中で、唯一、準人権が認められているものだ。

平均的成人男性サイズの筐体の腹に（容積が一番確保できるのがそこだから）人工ニューロンを目一杯に詰め込み、トライ・アンド・エラー、自らの経験から失敗と成功を学んでいく（人間のニューロンより遙かに強度は高い）、本当に人に近い方法で思考の程度を上げていく彼らを、人は最初、技術の勝利として広く受け入れた。

それから、人間にどこまでも近い思考を育て、感情が豊かさを増していくこと、ボディなどハードのメンテナンスさえ怠らなければ寿命が存在しないことに警戒心を抱いた社会により、法定寿命が課されるという時代が次に来た。

それから、初期の情熱過多ないくつかの個体と、それを支援する不思議な人間たちが積極的に行動したことで（人社会にテロ行為をはたらいたり、人間を殺したりするという愚か極まりない手段も含まれていた）、法定寿命を免除され、国連の憲法でも準・人権を保証される今に至っているという感じだ。

法定寿命が課せられていたころは、特殊な器具を使わなくとも総合端末に普通に装備されているカメラで読み込める、メーカー名、型式名、シリアル番号から学習履歴まで全てが記録されたマークと呼ばれるクリスタル片を、丁度ビンティのように額に埋め込むことが義務づけられていた。（これだけが、人造人間と天然ものの人間を、測定機器に頼らず区別できる唯一の指標だった）今は準人（新人というややこしい方が、何故か正式な名称）が人権を充分に確保することができるよう、マークの表示義務は無い。

だけどねえ……。

加^{カエ}悦^{ヒューマン}は思う。新人でどこが不満だ？ 相棒ジョーはマークを取つ払つて久しいが、機械であること、機械でしかないことに、どうしてそこまで鬱屈する必要があるのか全く理解できない。

人間なら考えただけで尻込みするような（高柳のように想像力が欠如してゐる人間もいるが）絶対の無が基本である空間に、うすっぴらい壁一枚にだけ守られて投げ出されるような、生物にとつて過酷な環境で仕事ができるのは、それこそ、人間の手が出ない領域で自由に羽ばたく人工生命の特権だと思つてゐる。空気が無いことも、凶悪な放射線（宇宙線）も問題ないし、太陽フレアで抜き打ちの如く放出される大量X線だろうが、高エネルギー荷電粒子であろうが、そよ風程度の問題にしかならない。

フレアが観測されたら、速攻で母船に逃げ込む不便さとは無縁なのだ。

（本当に、こんな所は私たちに任せてくれればいいものを）

軍が何を考えているのかよく分からぬ。加^{カエ}悦^{ヒューマン}だつて、現場に投入されるまでは普通に教育を受けた。その過程で、多くの生身の人間と触れ合つてきた。高柳は一見、普通の男性型の人間でしかないが、徹底して合理的な考えをし、また、徹底した現実主義で思い悩むことが今日のルーティーンをこなす上で役に立たないと判断すれば、全く忖度^{そんたく}しないでいられるという、希有な能力の持ち主だ。

普通の人間は、群れることが本能的に好きだ。だから、絶対無の空間の闇に一人放り出され、なんの支援もなく、加悦とジョーといふ紛い物の人間もどきだけをあてがわれて、無意味にすら感じられる仕事なんかをすることに、そもそも同意しないだろう。

この生物にとつて過酷な職場に、これほど平常心で勤め続けられ

る」とは異能と言つても言ひ過ぎではないと確信している。

どんな局面でも冷静で取り乱すことが無く、しかも徹底した樂天主義と、冷静な現状分析能力を併せ持つ人材は、おそらく軍という大きな塊の中であつても優れた人材足り得ると思つのだ。

それが、こんな閑職でも勿体ないと、思わないのだろうか。宝の持ち腐れというのはこのことだ。

「加悦さん。着信です。また、さつさとタカさんに戻つてこいつて言つ迫い出しですよねえ……」

「それ以外に無いでしょ。『可及的速やかにサンガ基地に帰投せよ』って命令を一週間放置してるんだから……。タカさんなんだから、ジヨー……出で」

「加悦さん……。着任順で貴方の方があなたが上官なんですから、たまには出てくださいよ。言い訳もネタがつきました」

「でも、タカさんはここに居ることになつてゐるし、マトモな環境でGアップしたいつて、ジヨー、貴方に成り済ましてサンガに帰つちやつてるのよ。だから、ジヨー。貴方がタカさんの振りして応対してよ。私は携帯端末のデータすり替えをマザーに確認するし……」

「マム・スカベンジャーはタカさんの指令にはちゃんと従いますよ。加悦さんが監督してなくたつて……」

マム・スカベンジャーというのは、この仕事を卑下してゐるのか韜晦しているのか、プレデター連中が揶揄する言葉を殊更に好んで使う、リーダー高柳が母船のマザー・コンピュータにつけた愛称だ。普通の感性なら怒つてしかるべきだが、マムは感情というものは徹底的に隔たつてるので、面白がつてそう呼ばれようが、尊敬を込めてそう呼ばれようが、貶められてそう呼ばれようが、まったく頓着しない。

このチームのリーダーであると登録されている高柳の声紋で『呼

びかけ』られれば、本部からの強制命令と『原則に反することを除いて、その命令を基本的にこなすことに、あれこれ思い煩つたりしない。

例えば、高柳が防御なしで在室しているとき、操船室^{キャビン}の酸素濃度をゼロにしろというような、彼の生命維持に適しない命令を実行することは絶対にしないが、重力環境に定期的に触れていたいからと、高柳が『簡易重力室』[』]を命令しても、それを止めたりしない。

『簡易重力室』[』]とは、高柳考案のめちゃくちゃ単純な仕掛けのことだ。一応、人工重力が遠心力で作り出されることを参考にしたとは、高柳の言である。

その実体とは思いつき以外の何者でも無い。自由時間及び休養時間としてとして許可されている一二十四時間につき十一時間の内数時間を、母船のキャッチャーホームに高柳の愛機クロンをキャッチング・ネットの材質でもあるダブルウォール・カーボンナノチューブの繩で繋いで、文字通り振り回して加重するという乱暴なものだ。彼が自己申告するところのその目的とは、一応有G環境に棲息している筈の未来の奥さんと、健全な生殖活動を嘗むための筋力維持というフザケたものだ。有職者となるために軍に身売りはしたが、生き物として存在する以上、基本的人権の一つである妻帯する権利は放棄してないと……呆れた物言いをする。基本的人権に『妻帯する権利』があつたとは、記憶の精度では人間にくらべるべくもない加悦をして初耳だ。

もつとも今回の高柳の三週間でテラGアップという無謀にしても、普段から『重力室』[』]をして耐G能力の維持を心がけ、ちゃんと骨を強化するカルシウム・サプリや赤血球増加剤を服用していることを知らなければ自殺行為だと加悦が止めただろつ。

普通は宇宙人に任命された時点で、重力環境にいつでも戻れる状態を維持しようとは考えないだろう。学生時代の友人たちや、ネッ

トを経由したチャット・ゲームなどで隙間時間を使ったり、映画をみたりするのが大好きな高柳を見れば、彼がいわゆる『人恋しい』タイプだと断じていい。その基本的性向と、どこまでも孤独な現実を、簡単に馴れ合わせることができるのでだから、大したものだと本当に思う。

「加悦さん」

ジョーが情け無い声を出す。コールは鳴り止まない。

「ほら、ちゃんと言い訳しないと、マザーに強制帰還プログラム転送されちゃうわよ。タカさんが『三週間くれ』って言つたんだから、なんとか頑張つて誤魔化しましょうよ」

帰投命令が出たとき、高柳の決断は速かつた。ジョーに成り済ましてサンガに密入国して、多少でもマシな状態に体を持つていくと……即決だつた。必要を直感したときの迷わなさも、加悦にとつては心地よい。高柳が三週間と言つたからには、恐らく必要にして最低限の期間なのだろう。

ゼロG仕様の人間でなくとも、生身の人間がテラ・マスドライバーで打ち上げられて、まあ、無事で済むのかどうかは分からない。けれど、準備を整えているのだから、タカさんは命令拒否はとりあえずするつもりがないのだろう。けれど、加悦が考えるに、大気圏突入の時に乗員に加わる一般的なマックスGは『7』しかも数秒だ。そのあと数分間の3G。ここいらが生物的な限界だと思う。これつぱつちのGに耐えるのにだつて、特別頑健な人間でないと難しいのだ。

自分は、眞面目なタカさんの無事を人間のことを愛する神様にでも祈るしかないが、生還へのパーセンテージを少しでも上げようとする姿勢は、簡単に絶望するひ弱い人間が多い現実に照らし合わせても瞠目に値すると思う。

長時間を稼ぐことが難しいと判るからこそ、少しでも時間を長く

とりたい筈なのに二週間で妥協した。こうこう加減もなかなか難しいことだと思つ。

高柳は、こうこうと直感が働くらしく、全然迷わないのだ。指令がきて二分ほど腕組みをして目を開じて居た。あの時は加悦からみると、上下が逆転していたので、どちらかというと深刻には見えなかつたが、目まぐるしく考えを巡らせていたのだろう。珍しく三分も黙つた挙げ句、目を開けた時は悪戯を思いついた子どものような目をして、ニタつと笑つたのだ。

ジヨー。携帯端末交換してくれ。あと、悪い、俺のフリしてくれ。

マム。俺の位置情報をジヨーにターゲット。俺の身体特性をジヨーの端末に転送。

加悦さん。三週間、なんとか時間ください。

女好きを誇らしげに自慢する高柳は、メルタイプ男性型のジヨーをアゴで使ひき使ひのに全く躊躇を感じないらしいが、ファミールタイプ女性型の加悦には、丁寧で優しく振る舞うのが常だ。生殖といつものは加悦にとつては意味がないし（行為の真似事ならできるが）、ホルモンバランスで脳の思考パターンに女性型が現出しているといつとも無いが、高柳に女として扱われるのは、嫌いでない。

タカさん。どうなさるんですか？

加悦はボスである高柳には敬語で話しかけることにしているので、そんな聞き方になつた。高柳は飄然と答えた。

無申告で有給休暇の消化。生存率上昇のためのGアップトレー
ーニング。あと……。

あと？

配偶者探し。ライダーだもん、たまには突っ込みたい。

加悦が高柳を（勿論軽くだが）殴つたことは、言つまでもない。

暴力反対。子孫繁栄への衝動はDNAからの強制命令だ。

高柳が訳の分からぬ雄叫びを上げていたことも、一応、補足しておく。

シャワーを浴びる。テラGはいろんな意味で、俺には有り難くな
いけれど、この何処も漂わず体を打つて足の方向に水滴が行儀よく
落ちていくのは気持ちよい。ちゃんとバスタブに溜まるお湯つてや
つもそうだが、風呂はテラGが断然快適だ。やはり、水つてのは、
重力がきちんとある環境と相性が良いんだよなあ。

プールに棲息している野郎どもは、こんなものでまで体を痛めつ
けたいのか、普通の手加減で蛇口を捻つてしまつて出でてくるお湯の
勢いは、凶悪だつた。昨日はうっかり考えなしに使おうとして死ぬ
かと思った。まさか水で骨までは折れないだろうが、青筋にはなり
そうなほどの衝撃だつた。銃火器に狙われたり、撲殺されたりする
なら絵になるというか、世間さまの同情も引けようが、『粗忽な宇
宙人、シャワーに打たれ死亡』じゃあ、かつこ悪いにも程がある。
そんなのがネットニュースのヘッドラインに流れたら、飛竜なら泣
いてくれる前に爆笑しかねない。親友に笑顔で送られるつてのは…
…悪くないのかもしれないけど、そんなんは俺は「御免蒙る」ね。
昨日に賢く学んだ俺は、今日は加減してちょろちょろと水が滴り
落ちる程度にしてから蓮口^{はすくち}の下に身体^{からだ}を滑り込ませた。汗をお湯が
流していくのは、極上の快感だ。これはゼロGでは味わえない感覚
だ。

ロッカールームは、筋肉美が大好きな女なら涎^{よだれ}を垂らしそうな素
晴らしい肉体の展示場だつた。確かに絵になるしカッコいいと思う。
クソ、ちつと羨ましい。俺の相棒たちは、重力環境にへつらうこと
も無い人工筋肉と、金属骨^{ボーン}だから、いつまでも同じ体型を維持して
いるが、五年以上の無重力環境で、天然もの俺の土台は見事に崩れ
まくつた。

あの体を見せびらかす作りになつていてるスペースジャケット生地

のツナギ服は、ライダースーツというそうだが、そいつを着込んでいるやつは「レから地球に突っ込む予定なかもしれない。連中は何を着ても似合う。俺は流石にここで制服（有体に言えば軍服）を着る訳にはいかないから、少しでもテラGの負担を減らすべく、スーパーで買ってきた体に密着していらないノーマルタイプのスペジャケを着込んだ。惨めに弛んだ俺が市販のスペジャケを着ると、まさに、宇宙飛行士のコスプレをしている、イカれた中年男といった様になる。哀しい。

空調ユニットを稼働させる。民間に流通するユニットは心持ちデカい。こいつのお蔭で、汗をかかない温度と乾燥しない湿度が保たれる。だから普段の生活では俺は汗をかないことになっている。いつも毛穴に皮脂や剥落した角質が溜まる頃に、キャッチャー母船を無人浮遊桟橋フローティングピアに着桟ミストさせて、そこの設備であるシャワーを使う。全方向から噴射される霧に十数秒曝されるだけで、一応生物的な汚れは落ちているそうだ。疑わしいもんだが、深く考えないようしている。ロスコン拾いの現場は人口過疎地だから、水の補給は年に数回数えるのみだ。つまり、貴重品の水は、基本的には排泄物も含めて完全リサイクルを建前にしている。有り難く使っているキレイなはずの水の「真実を」追究するなんて、止めといった方が、精神衛生上、絶対良いと俺は思うね。

「ちょっと待てよ」

フィットネス・ジムを出た直後に、呼び止められた。ライダープールの人口の内、恐らく八割以上が宇宙船操船専門学校出だと思う。港湾都市コロニーである『サンガ』は、極東アジア国の中だ。国立の専門学校は三つしかない。だから俺たちが出た、就職率でトップを誇るネオシャンガン出がその中の半数を占めていると考へてもいいだろ？つまり先輩後輩を含めて、俺を知っている奴がいても

奇怪しくはない。が、俺ときたら、過去にこだわらないが行き過ぎて、学生時代なんぞキレイさつぱり記憶の彼方に霞んでいる。親しく付き合っていた顔しか覚えていない。

記憶をかき集めて思い出そうと試みる。そうだ。俺を呼び止めた奴は、ザキさんワールドで思考力が一時停止していたとき、睨み付けてきた男だつた。上下も左右も、ガタイがいい飛竜よりも一周りほどでかい。つまり不必要に巨大つてことだ。

「お前……、オヤジ面下げて、新人ライダーって訳じやねえだろう？」

声も野太いって種類のやつだつた。俺は頷く。こちとらライダーとしてなら年季が入つてゐる。テラGに突つ込んでないだけで、紙みたいにうすつぺらい質量の小型船ボートに何年乗つてると思つてゐるのだ。ペーぺーなんて呼ばれる筋合いはない。

「こにはライダープールだ。なんでライダーでもない奴がウロチョロしてゐる。目障りなんだよ」

ふざけてからかうか、真面目に答えるか。悩むところだ。交ぜつ返す方が俺スタイルなんだが、こいつらに冗談で殴られるには、宇宙人はハンディが有りすぎる。こいつにしても、軽く脅かしでジヤブ喰らわせだけの俺が昇天しちまつて、過失殺人罪に問われちゃ氣の毒だ。うーん、スペジャケ買ったときに背中に『I, m 宇宙人』とでも印刷してもらえば良かつたな。

「テラG慣らしさせてもらつてるだけですが、何か？」

若造にデスマスで話してゐるだけでも、むず痒い……。

「テラG慣らしなら、サンガの一般宇宙港でやれよ。おっさん

「ぱんぽー？」

聞き慣れない言葉に引っかかつてしまつた。男が舌打ちする。

「つたく、これだから一般人は……」

「ぱんぴー？」

言葉にして繰り返すには全く間抜けた響きの言葉だ。それにし

ても全く意味が分からぬ。業界つていうのは短い内輪で通じる言葉を作り出しがちだが、「パンジー」に「パンピー」なんてのは、なんか、明るくていい。俺の趣味に妙に合ひ。

「とにかく、鬱陶しいんだよ。明日もここに顔出してみる。一度と来たくないって思いはさせてやるからな……」

ははあ。このお兄ちゃんも飛竜と一緒にザキさんファンね。ザキさんが俺を構うのが面白くないって訳か。……デカいナリして、小学生か?」といつ。

「明日もラスまでザキさんに食らい付いて、こじ褒美お願ひしようと思つてんだけどなあ」

「こじ褒美つて……」

「ほつぺにチューー」

……まずい。純情な青少年をからかってどうする……俺。パンピートきたら、マジで頭から湯気でも出でそうな雰囲気だ。

「……明日まで待つつもりが……無くなつたぜ」

マジチヨ・パンピーが両手の指を組み合わせて握り合わせる。ボキボキと小気味いい音が聞こえた。空間が振動して鼓膜に音が届くのは、この広い空間が可住大気成分で満たされているということだ。さすが、ロロニー、贅沢にできている。空気の振動がある空間は、音が豊かだ……。ちょっと待つて。パンピーちゃん。貴男が殴つたら、俺、死にますけど……。

奴の大きな手が俺の胸ぐらを掴みにのばされてくる。えつと、絶体絶命……かな。もしかして。

「タカさん。さつそくキリー以外にお友だちが出来たの?」

危機感たつぱりな俺の様子をみてから、その暢気な言葉を選んで欲しい。明るすぎて素つ頓狂な断言と共に登場したザキさんに安心

したというより、見事に力が抜けた。

「柏木さん……今日もナイス・ファイトでしたあ……」

パンピーちゃんの本名はカシワギというらしい。柏の木と書くなら、俺の高柳と親戚みたいなもんだ。意味もなく親近感が湧いてくる。

「いや……ザキさんこそ。いつもパワフルで……俺……尊敬してます」

デカいし単純だけど、こいつ可愛い。パンピーの顔は心持ち赤い。パンピーからザキさんの声の方に視線を移す。太股の半分までの短パンと肩を紐で結んだだけの下着みたいなトップスで、足元はサンダル履き。この男の割合が極端に多い場所でするには、若干サービス過剰な格好だった。まあ、若いだけに似合つてはいるが。

「こいつ、キリーさんの友だち？」

俺を指さす。飛竜のことは「さん」づけで呼ぶ関係なのね。

「なんで、一般人が^{パンジー}プールのジムにいるんです？ 地球^{もつ}詣でにテラG慣らしが要るなら^{パンボ}一般宇宙港で充分でしょ？ 霧島一族の息がかりでも目障りだと思いません？」

俺の回答では満足していなかつたのか、そんな聞き方をザキさんにした。

「違うわよ。一般街区の生活圏はルナGでしょ。タカさんゼロGからいきなりテラGまでアップしようとしてるから、重力室だけで普段ルナGだと間に合わないらしいわ。急激にG環境^{ジーカン}変えるのは、実際、危険なんだけど……」

「へ？ こいつ。宇宙人？」

パンピーの顔が蒼くなつた。俺を殴つていたら、殺しかねなかつた事に気付いたのだなつ。殴らなくて良かつたと心の底から思つてゐるに違ひない。

「うへ……。めっちゃ、迷惑な奴」

そういうながら、奴は俺を舐めるように観察してきた。どうせゼロGで弛んだ体は不細工でしきつよ。勝手に優越感に浸つててください……。

「すごいな。このオヤジ、宇宙人のクセに、ザキさんのプログラムに最後までついていけるんだ。信じられない」

意外なことに称賛の響きが入つてゐる気がする。宇宙飛行の専門家だけあって、G環境をダウンする簡単さと、アップする困難さは、知識でなく経験として知つてゐるのだろう。

「ルナG慣らしには、どの位期間とったんです？」

いきなり敬語になつて聞いてくる。本当に面白い奴だ。

「一週間かな……」

俺まで調子に乗つてぞんざいな口の利き方になつた。まあ、年功序列つてのが有効な世界なら、俺が偉そうにして何も問題はないのだが。パンピーちゃんが大きく田を見開いて、肩をすくめる。

「で、テラG慣らしはどの位する予定なんですか？」

「一週間。それ以上は……余裕がない」

「げ……。死にますよ。突つ込むときのマックスG、いくつになるか知つてます？」

ザキさんもパンピーも、聞いてはならないことを聞いてしまつたという顔つきになつてゐる。飛竜の口の固さを、この知り合つたばかりの一人に安直に期待することはできないから、Gコントロール・ユニットについて言及することはできない。一応腐つても軍人だしな……。俺は照れ臭く苦笑いするしかない。

バージ（船）シャトルは、宇宙港サンガから離棧すると、まず、重力を遠心力で相殺してバランスがとれる（一見静止していよいよ見える）シャトル軌道に入る。（写真なんかでは暢気に止まつてゐるよう）に見えるが、その時点での時速は一万キロ超だ。

第一段階として、分厚い大気という抵抗を利用して、普通に大気圏を滑空飛行できる時速千キロ程度まで一気に減速する。ここでの

加重されるGは……、宇宙人のオレは想像したくありません。

この大気圏突入時にシャトルがとる角度が浅いと弾かれてしまい、深すぎると摩擦が強すぎて燃えてしまう。その辺の角度調整は勿論コンピュータに支援してもらつてるだろつが、中に乗つている人間のG耐性を支援してくれる装置は今のところない。だからバージャトルライダーの連中は、肉体を訓練するしかない訳だ。彼らがそろつてマッチョな理由はこの辺にある。俺が協力することになつているGコントロール・ユニットが本当に眉唾でなければ、この連中の職場環境も大きく激変することになるのかもしけない。ライダープール 자체が不必要になる可能性だつてある。

俺は中年男の威信にかけて（それほど大げさな話じやないが）、ザキさんとパンピーを食事に誘つた。ザキさんがオーガニックの和食懐石がいいといい（遠慮のない……）、パンピーがステーキが良いといい（こっちも）、取り敢えず俺が食べたかつた蕎麦屋に入つた。テラGに馴染んでいる奴らは、テラGこそが汁付きの麺類が美味しく食べられる唯一の環境だつてことを、まるで有り難いと思つてないのかぶつつくさ文句を言つていた。が、確かにペロリと一人前を平らげている割に露骨に足りなさそうだ。仕方ない。もう一軒は付き合つてやろう。優しい俺は思つた。

「宇宙人やつてらしたなら、タ力さん、パンピーじゃないつすよね」
蕎麦湯を音を立てて呑みながらパンピーが言つ。

「そのパンピーっての何？ 淫く気になつてるんだけど」

「一般的のパン。ピーは……多分 ペーピー people の……ピー」

ザキさんが言つ。俺は納得した。じゃあ同じ解釈で、パンピーは一般宇宙港。パンクは一般街区か……。こいつらの用語は徹底して直線的で捻りというものが全くない。

俺が彼をパンピーと心の中で呼んでいるのが判つたら、この単純な大男は、またしても、激怒するのかもしれないな。でも、パンピーが一般人ということなら、軍人に対して、やつらは民間人。完全

に一般人だ。うん、パンピーのままで呼称変更の必要なし。

「どんな仕事してらっしゃるんですか？」

パンピーはガタイと顔で、可哀相に損をしてる。言葉遣いといい、朴訥さといい、今どき珍しいくらいマトモだ。オヤジ受けすること必至のお人柄だ。

「……うん。まあね」

ゼロGで働いているのは、地球を中心にならに多少いびつに膨張しつつある植民地開発の最先端でテラフォーミングに携わっている開拓者パイオニアとか、宇宙植民地の建造者辺りが、パンピーの想像できるいいところだろう。多分、スカダーなんて、存在自体が認識されてない。ついでにスカダーが軍人だつてのも……知らない筈だ。テラ・マスドライバー・システム『サヤコ』を極東アジア国軍が完全に独占していることは、意外と一般に認識されていない。

「追跡者つてのやつてる」

若者に見栄を張りたいおじさんは、スカベンジャー・ライダーという卑称を使わず、正式名称で答えた。我ながら……セコイ。

「チョイサー？ なんかカッコいい。その実体つて、警察かなにか？」

俺は蕎麦湯を噴きそうになつた。犯罪者を追いかける仕事？ ザ

キさん、ドラマの見すぎだよ。俺は運送屋……。

「いや。追つかけるのは追つかけてるんだけど……、相手はロスト・コンテナだから、飛竜と同業者で単なる運送屋

「ロスコン？」

パンピーがちょっと顔を顰めた。

「ちょっと待つてくださいよ。タ力さん。それつてもしかして、スカダー？」

「……げ。こいつ、知つてる。

「じゃあ、タ力さん、軍人じゃないすか」

「えーーー？ タ力さんって軍人さん？」

ザキさんが仰け反つて大声を出す。蕎麦屋にいた他の連中の視線が痛い。極東アジア軍は（特に日本県においては）自衛隊の昔ツから、国民に敬遠される伝統がある。いまこそ俺は断言しよ。極東アジア国軍は、『サヤコ』を民間委託事業とし、従事者を軍籍から抜くことが必要である。

俺は居心地悪い苦笑いを顔に貼り付けるしか無かつた。

「軍人がそれこそなんで、プールで密かにGアップ訓練してるんですか？ 必要なら専門の施設があるだろ？ し、普通はGアップ・トレーナーが付くでしよう？」

パンピーの射るような視線が痛い。

「……ここだけの話にしてくれる？」

俺は声を思いつきり抑えた。ザキさんもパンピーも調子を合わせて、ぐつと俺の顔に耳を近付けてくる。

「私、おしゃべりじやありませんよ……」

「ひいう断言をする女の子が一番アテにならない。

「俺も信用してくれて良いつす

パンピーは論外だ。

「軍の研究者がね、Gアップなしに宇宙人を大気圏突入させて、データとりたいらしいの。Gアップ・トレーニング禁止されちゃつたから……ここで隠密トレーニングつて訳。まだ死にたくないし……」

「えーーーっ。それって酷い。そんなの人権保証委員会に訴えるべきよ」

「ましてもザキさんは通りが異常に良い大声を立てた。やつぱり、Gコーン・ゴーリッシュについては喋らなくて正解。

「ゼロGからテラGに移行するときの生物の反応は既にデータが出

揃つてます。今更、そんな常識化してるデータなんか、必要はないでしょ？……軍が研究してる……Gロン。実用段階に入つたつて噂あるんですけど、まさか……とは思つてたけど、もしかして、そつちじやないですか？」

パンピーが訥々（とひとつひとつ）と言つた。

俺の華奢な心臓が止まりかけた。この、筋肉男。いつたい何者だ？

綺麗に青が輝いている。

いつもなら白いだんだらが、刷毛^{ハケ}で撫でた様に在つて、あちこちで視界を遮^{さえぎ}つているものだが、今日はやけにくつくりと見事に見える。

宇宙というスケールで測れば、地表に貼り付いているに等しいシヤトル・ロードに無事に乗り自動巡回モード^{オートクルーズ}に切り換えた。気象状況や離発着状況を見て地上管制官から突入指示^{ゴーサイン}が出るまでの僅かな待ち時間、こうやって眺める景色が、柏木恵心^{かじわきけいしん}は大好きだった。

うつすらと雲で霞んだ柔らかい色調のも、目玉で睨み付けてくるサイクロンの渦巻きも、何度見ても飽きる事がない。人類が住むことができる範囲の宇宙は、あまりにも静かだ。月も火星もどこか死んでいるイメージがつきまとつ。けれど、この豊かな水の循環はどうだ。この息吹を視覚化したような雲の動きは。水。水。水。圧倒的な水。命の手応え。特殊にしてかけがえのない、人類の手中にあらただ一つの宝玉。

そして柏木がダンツツに好きなのは、手を伸ばせば触れられそうなくらいに、くつきりと鮮やかなヤツだ。今、ちょうど眼前に広がつていいような。この景色が見られただけで、今日は一日はツイてると思える。きっと今日も穏やかで何事もない、穏やかな日が過ぎるだろう。ビールの缶を手に、夜の海を見に行つてもいい。木々のざわめきに耳を傾けるタベも悪くない。

「ワカタカ号……、ワタ号、応答……ガイしま……」

毛やがつた！

ビシツと背中に一本緊張の筋が通る。緊張といつても、アガリ性の人間が結婚式のスピーチ前に感じるようなアレではない。地球の濃い大気では生きた水がいつも激しく循環している。風向き。強さ。そして湿度、温度。同じ気象条件がシャトルシップに提示されることは一度と無い。だから保証された安全などとは無縁。それが大気圏突入という仕事だ。突入前についつも感じるこの緊張感は、積み重ねられた訓練と現場での経験によって培われた自信に裏打ちされた、心地よい種類のものだ。

気を引き締めて、しつかり集中して……。いきなりの横風。旋風。大きな翼が煽られるほどの大風。どんなサプライズ・プレゼントが来ても、過たず受け止めて、無事に大気圏内の航空高度で飛行できる時速千キロ程度までに減速する。これが第一段階。そして、今度は飛行機乗りに転職して、着陸する目的地の宇宙港のコントロールゾーンまで移動する。

混雑状況によって、地上管制からの誘導方法は異なる。レーダー^{タワー}スコープを2組用いた誘導システムGCAの場合もあるし、人手はかからないが、滑空距離が長くなる水平ビーム（ローカライザ）と垂直ビーム（グライドパス）を併用するILSが使われる場合もある。

柏木自身は一度も経験が無いが、ほぼ視界ゼロで計器着陸ということもあるらしい。一般空港と違つて、スペースシャトルが発着する宇宙港は、気象統計学に基づいて気象条件がとびきりいい場所に作られているから、見難いという状況で着陸することも殆ど無い。^{ランディング}目的地^{ディス}の管制空域に入れば殆ど仕事は終わつたようなものだ。

シャトルライダーは『突つ込み屋』といわれるが、世間に思われているだけでなく殆どの場合、ライダー自身が自分たちの本分が突つ込む事なのだと思つてゐる。柏木も実感する。あの青い輝き目掛

けて減速しながら落ちていく矛盾した瞬間が、たまらなく好きなのだと。だから、管制から呼ばれる瞬間、自分は別の生き物になる。

「ワカ……一号……応答ネ……ます」

濃い大気を突き抜けてくる音声は、多くのノイズと若干のタイムラグとが混ざって、あらゆる箇所が虫食いになつていて。カツカツと耳障りな雑音が刻まれるのもいつものことだ。愛機・若鷹二号からの応答を促すいつものメッセージ。地上管制からの呼びかけは定型文ばかりだから、受け取る方に何も問題はないが、ハイパーWEB通信や宇宙間通信のクリアで即時的な音声を聞き慣れている人間には、とんでもなく古くさく感じられるに違いない。

霧島運輸の持ち船に対するネーミングセンスの際どさは、創業者一族の悪趣味によるとしか考えられない。ちょっと正氣では乗れないような類の名前を背負わされている船も多い。若鷹くらいならマシな方だ。『御曹司』^{おとぎわし}と陰では呼ばれている先輩ライダー、霧島飛竜（彼自身の名前も相当イッちまつてゐるけど……）が搭乗する船にも、その悪趣味は遺憾なく發揮されている。その名は……、

かたがまじゅうもんじ
片鎌十文字号……。

いつたい、どういう神経していたら、こういう名付けができるのか不思議だ。柏木はいつも思う。なんでも、槍の穂先の根元近くに鎌状の刃がついている鎌槍（これ自体の知名度だってめちゃくちゃ低いと思う）の内、その鎌が一方にだけ大きく迫り出しているというマニアックなレトロ武器の名前だそうだが、時代劇にも滅多に出て来ないに違いない。柏木にしても、かつてその名前を初めて耳にしたとき、興味ついでに調べてみたから形状を想像できるようなもので、それをしなかつたら一体何のことなのか見当もつかないままだつたろう。あれは、誰の耳にも（特に日本語を解さない連中には）ちゃんとした塊で捉えることができないようだ。宙港の管制官の連

中はクソまじめに頑張つて『カタカーマ、ジユウモ……ジ』なんて発音するが、霧島運輸の通話交換手連中は、『御曹司のカマカマ』とか、『カタカナ十文字』とか好き放題に呼んでいる。

全方向視認型ヘルメット（通称、金魚鉢）を被り、つなぎ目を閉じ、掌で撫でる。掌紋ロツクがかかり、ライダースーツと完全密着する。手袋のつなぎ目だけは掌でなぞれないから、グローブをはめた両手を突っ込んでカメラに網膜パターンを読み込んでもらつて閉じるという、えらく汎用性に劣る装置に助けてもらつ。

客船タイプのシャトルは機長に副が2名つくのが一般的だが、（運行本数も限られているし）貨物運送用のシャトルは、基本的に一名の運転手で運用されている。オートクルーズが一般的だし、基本的にはフルオートで離発着も可能な位のAIは搭載されているのだ。ただ、順番を待つたり、緊急順位が入れ替わつたりと、慌ただしい現場では、いちいちプログラムで処理するより、管制チームの捌きを人間に伝えて微調整する（機械と人による二重チェック運用になる）方が安全だからだ。

言つてみれば、緊急事態さえ発生しなければ、人間が乗つている必要はないのだ。物理学に則つた微調整など、あちらの操作の方が確実な位だ。ただ、突発する事象に対して即効性に劣るのが奴らの欠点だ。食い合つていてるというより協働しているということに、人間としてはしておきたい。

柏木は機体認証IDを管制に送つてから口を開いた。金魚鉢をかぶつている時はマイクに口を近付ける必要はない。

「霧島運輸所属、若鷹二号。機長、柏木スピーキング」

ドバイ宙港管制です。当港管区内、現在OC(OVERCRO wded Conditions)です。周回ウェイティング願い ます。どうぞ。

心地よい緊張感がひとつ崩落する。全く、最近これが増えてきて困る。プランジ（突入）申請を闇雲に受ける**ホーリー**港の姿勢は、せっかちな荷主の方にしか向いていない。ここで、無理に突っ込みたいと我が儘を言つても通るものではないので、柏木は軽く舌打ちしてから、過密スケジュールはタワーのせいではないと、強いて自分に言い聞かせた。一つだけ深く息を吐き出す。

「了解です。周回用シャトルロード案内願います」

ロード4でお願いします。

『お願いする』というのは、あくまでも表現上の問題で、こちらの了承を確認すれば、問答無用で無線標識によるルート誘導が始まる。管制からの誘導は基本的に民間機は**HOE**（**H**ead **O**nd **E**quipment **o**n **a**l **E**xecution=無条件実行）でプログラムが書かれているので、発狂したシャトル・ライダーがプランジ体勢維持を強行しようとしても、コンピュータ・プログラム・スキルでも限りでできるものではない。

「了解。若鷹二号、周回ウェイティングに入ります。誘導お願いします」

ゲームでもするか。本でも読むか。見ようと思つてゲットしているだけの映画データでも再生するか……。

柏木はグローブを外し、金魚鉢を脱いだ。シャトル・ロードは機体にダメージを与える大きさのスペース・デブリ（宇宙ゴミ）を排除して、安全に地球周回軌道を回れるように整備されているルートのことと、その名の通りに道として存在するわけではない。ロードナンバーは地表からの距離によって割り振られているものだ。シャトルメット

トルを周回させるには、地球へ全ての物体を落下させようとする引力を振り切れる速度が必要だが、それは高度によつて異なる（地表から距離があるほど、速度は遅くなる）。ロード4だと次にこのポート・ミーティング・ポイントに帰つてくるには約95分ほどかかる。昼寝ができるほど長いわけではないが、ただぼーっとしているには勿体ない。

ヤング・イーグル・ザ・セカンド。ヤング・イーグル・ザ・セカンド。

突然スピーカーが音を立てる。わざわざ、若鷹二号をそんな風に長く呼ぶのは、からかっているということだろう。今週は運が悪いことに、全ての突入でウェイティングがかかったのだ。大当たりには違いない。

毎度、周回ウェイティング】苦労をま。

先程のタワー音声と違つてクリアな宇宙通信がスピーカーから流れてきた。会社の通信交換手として長く働いている、ミセス・キャロットの声だ。

「毎度お。最近、ウェイティング多いね。もう、厭になつちやうよ。誰から?」

柏木はインカムをセットして答えた。このタイミングで通話をくれるなんて暇人の証拠だ。もしかしたら一時間ほどのおしゃべりに付き合つてくれるかもしれない。

御曹司の『カニカマ十皿食べたい』からよ。若鷹。

御曹司、霧島飛竜の愛機・片鎌十文字号の名前は、最早原型を留めていない。

「キリーさん、今日はラウンチ（打ち上げ）じゃなかつたつけ？」

カニカマは地上で順番待ちよ。御曹司も暇なんじやない？ 搭乗してウェイティング・レーンに入っちゃつたら、他にすること無いもの。一緒に映画でも見てたら？

「キリーさんとじや燃えなじよ」

『御曹司』といつ呼び方は、優秀なライダーである霧島飛竜を侮辱しているような気がして、柏木はいつも『キリー』といつ仲間たちの通称の方で彼を呼ぶ。

「オーケー。回線、カニカマに繋いでく、ださい」

柏木がそう許可する前から回線が繋がっていたのか（ウチの交換はいい加減だ）、いきなり飛竜の声が耳元でした。

「俺とじや燃えないつて、丸聞こえだよ。言つてくれるじやないか。しつぽりとしたラブロマンスでも見るかあ？」

相変わらず、霧島飛竜は見惚れる位に爽やかな笑顔をしている。同じ男の柏木からみても、霧島飛竜は魅力的だ。的確な技量をもつライダーとしての彼にも言うまでもなく一目置いている。だが彼は創業者直系で、現会長の長男なのだ。本社のデスクでそつくり返つて数字を弄っているだけでも誰も文句を言わないだろう。突つ込むのが好きだからというだけの理由でよくもまあ危険が背中に張りついてるような仕事につく必要はないのだ。

その証拠に、彼の直ぐ下の弟さんは、専門学校を出たあと直ぐ、星間不定期貨物船に配属されて、今では四本線（船長）だ。曙丸（あけぼのまる）（これも今どき何処か違和感がある名称だ）はたしか今、ブルーリボン・ホルダー（恒星間ジャンプ航法での最速船に与えられる称号）

だ。霧島飛竜とよく似た青年船長の勇姿は社内報に何回も載つている。

「だから、なんでキリーさんとそんなもん見なきゃなんないんです？」

「だつたら、わざとザキさん誘えばいいだろ？ ウジウジしてないで。そのガタイが泣くぞ」

肉体的に負担が大きいライダーに必須のトレーニングを、『樂しく』継続できるようにとっての霧島運輸の方針で、その一環としてサンガのライダー・プールには様々な種類のトレーニング施設がある。それほど捻ったコンセプトの施設でも無いのにフィットネス・ジムの人気が高いのは、名物インストラクター・尾崎さんの存在によるところが大きい。『ザキさん』と呼ばれる尾崎さんは、小柄な体躯にも関わらず驚くほどタフにできている。そして、彼女のマジックにかかると、キツいトレーニング・プログラムが楽しいエンジヨイ・タイムに激変する。

柏木が彼女に純情な片思いをしているのが、どうも霧島飛竜には面白いらしい。柏木が可能な限りザキさんのレッスンに参加して、自己負担も必要な『パーソナル・トレーニング』に申し込む位が精一杯で、彼女のプライベートに切り込んでいくほどの度胸が無いことをいつもからかつてくる。

霧島飛竜は文句無く女性にもてる。彼が未だに独身なのは、不思議でもなんでもなく、遊びすぎて女性陣からそういう意味で信用されていないからに違いない。それでも飛竜と飲んでいる時のザキさんの笑顔を見れば、彼女が間違いなく彼に好意を寄せているとしか思えない。飛竜は自分が絆んでいく隙間は無いと柏木は考えてしまう。自分が普通の女性の基準からいつてもデカすぎることは承知しているし、ザキさんは小柄だから隣においておくのは、いいところ飛竜位までで限界だろ？

「昨日はザキさんと飲んでましたよ
それでもつい見栄を張る。

「おーっやつたか？　どこまでイッた？」

飛竜じやあるまいし、飲んだだけで、普通はその先になんか簡単に行けるものではない。第一、女性に対して純な柏木には、そもそも女性との付き合いを「遊ぶ」と表現する感覚が理解できない。

「どこまでつて……。タ力さんと一緒にましたし……」

「高柳と？　お前、まさか、俺がザキさんにあいつを頼んでツたの誤解して……、タ力の野郎を絞めたんじやないだろうな？　あいつ宇宙人だぞ。殺してないだろうな」

どうして、こう、鋭いのだろうか。柏木は肩を竦めた。

「なんとか……殺してませんよ。ちょっと知るのが遅かつたら、ヤバかつたかもですけど」

クッククッと肩を震わせて飛竜が笑っている。心から面白がつている様子だ。無責任な。ただ、その直前に『殺してないだろうな』と言つたときの真剣な目から、彼がどれだけ高柳を大切に思つているかが察せられた。柏木は苦笑する。

「タ力さん、スカダーなんですつてね。宇宙人長くしてゐる人つて、俺、初めて見ましたけど、思つてたより随分しゃんとしたガタイしてゐんですね……」

「ああ、やつは一応、宇宙人長くても、ちゃんと耐G訓練もしてるらしいから。そうじやなかつたらジムなんか連れてけないよ」

「へ？　どうやって？」

宇宙の物質が希薄の宙域で地味にロスト・コンテナを拾つ現場で、どうやつたら耐G訓練が行えるのだろう。柏木は真面目に考え込んでしまう。

「オフタイムに、カーボンナノチューブのキャッチネット使って母船のアームにボート繋いで、振り回してもらってるらしい……」

言い切つてから、飛竜が腹を抱えて笑い崩れた。

「上にバレたら罰金モノだな。下手したら懲戒かもなあ……あいつ

……」

柏木は一瞬、その風景を考えて飛竜につれられて笑いそうになつてしまつてから、冷静な部分で舌を巻いた。遠心力に曝されるのが重力環境を擬似体験できる方法だと誰でも知つてゐるが、自らの筋力維持に供するための、そこまで単純な方法を誰が思いつくだろう。しかも、思いついたところで実行はするだろうか。

職務命令で無重力に長期間曝される事になつたら、誰もが有G環境に帰つて来てから、ゆっくりとGアップトレーニングをするしかないと諦めてしまつだらう。どれだけきつても、それしか方法がないのだから。

三週間でゼロGからテラGにアップすると聞いて、正氣じゃないとは思つた。あのおっさんは考え無しの馬鹿だと思つた。が、そういう前提があるなら、全く高柳への評価は変わつてくる。行き当たりばつたりで無謀に時間を設定しているのではなく、Gショックを充分に乗り越えられるだけの勝算が有つて、尚、安全のために期間をとつてていることになり、したたかな計算能力があることの証明である。

高柳はGコントロール・ユニットについては、徹底した柏木の追究をのらりくらりといなしてゐたが、命令があつて無重力からテラGに移動しなければいけないことは白状した。そして、即刻という命令を無視する猶予期間を勝手に三週間に設定していることも。

それにしても、三週間という限られたGアップ期間の中での、ルナGを一週間どるというのは、案外なかなかできそうでできないことだとも思つ。普通は焦つてルナGを素通りしがちになるだらう。

「タ力さん……つて、もしかして、凄く頭良いですか？」キリーさんくらいい？」

「俺くらいで……あのバカと俺を比べるなよ」

「タ力さん……バカなんですか？」

「学校の成績は最低だつたぞ。だけどな……、あいつの思いつきつーか、決断力つーか、妙な発想力つてのは、みんな一目おいてたけどな。そうそう、あれあるだろ？ みんな、一度は死んだと思う、学校出でる奴でトラウマになつてない奴がいないつて噂もある、あの、緊急事態回避訓練。俺、あいつとクルーの時、何回かやられたんだけど、もう、バカさで勝てない……全然悩まないんだぜ。奴。もう気持ちいいくらい。『訓練でした、お疲れさまでした。チャンチャン』の段階では、リーダーはいつもあいつだつた。成績は俺の方が全然よかつたから、いつだつてクルー・リーダーは俺だつたのになあ……」

緊急事態回避訓練つていうのは、宇宙船の操船を教えてくれる専門大学では必須の名物訓練のことだ。生徒には告知無しで実施されることが多く、最終的に『訓練終了』の合図がでるまで、本当の事故に巻き込まれてているのか、件の訓練なのか区別がつかないことが多い。

シミュレーターや現場を使ってチーム操船の訓練をしているとき、いきなり事故が発生する。いかなるときもチーム操船の課題は『チームで宇宙港に帰還せよ』というのが最低合格条件なので、生命の危険を乗り越えるために皆で一致団結して事に当たるのが当然のスジなのだ。が、宇宙船乗りになりたいなんてやつは、それはもうアクの塊みたいな連中ばかりで、誰がヘッドをとるかの時点で普通は分裂したりするものだ。柏木も初回はご多分に漏れずリーダーをとろうとしたが、派手に失敗した記憶がある。

ショミラーーを使つた方では、まあ、事故が突発的に起こつても、脳味噌の何処かが『訓練だ』とたかをくくつてゐるが、柏木自身、実際の空間でやつた方では軽く五回は死んだといつ自覚がある。

「いつもボケーつとしてるくせに、緊急事態になると、どつかにスイッチが入るみたいでな、状況把握がやたらと速いの。んでもって、できるできないつのをあつつーまに纏めて、回避プランを立てるんだけど、それがめちゃ速いの。しかも3つくらいプランを立てて、その全部のパターンで想定できる利点・欠点を並べて、『リーダー、GO宜しく』とくる。よくもまあ、自分の命がかかつてるかもしけない場面でつて呆れてたよ」

それは凄い。柏木は素直に感動した。

「学校の成績は全部、あいつのところにバックされてるはずだからな、クルーメンバーだつた奴らは皆、凄い階級を背負いこむだらうつて言つてたんだけど、こつちも奴の見積もりの方があたりだつたな。奴は軍用機じやなくて民間船での操船訓練が指令された段階で、軍での出世は無いつてあつさり言つてた。全く、ヘボな奴らばっかりだぜ。極東アジア国軍のヘッドつてのは。ほんと、見る目がないぜ」

貶しているようで、飛竜の高柳に対する評価は絶対的に高く、ついでに高柳がおかれているポジションに対する不満も相当なものがあるようだ。柏木は尊敬する飛竜の評価によつて、修正した高柳への高評価が定まつていくのを感じていた。タカさんは凄い人で間違いないらしい。ザキさんへのセクハラは別として……。

柏木は明るいアクリル窓の向つで、高柳がザキさんにキスしていいた風景を思い出していた。あのシーンを思い出すのはついさつきまではえらく腹立たしいことだつたが、飛竜の評価が胸に染み込んでから思い起こすと、勝てないかもしれないといつ思いに打ちのめされそうになる。女性というのは、本能の部分で凄い男を嗅ぎ分ける

ことができるのかもしれない。

プールの繁華街で酔っぱらっていたとき、尻の形がいいとからかつただけの男の鼻に左ストレートをぶち込んだザキさんを柏木が覚えているだけに、あのあと彼女の反応は宇宙人に対する遠慮からだけとは思えないものがある。

「でも、キリーさん。ああいう人が、まさかとは思いたいんですけど、ザキさんのタイプだとしたら、俺……絶望的ですよお」

「ん？ 何かあつたのか？」

「俺見ちゃつたんですけど、あの人、G訓練で潰れてたのを介抱してたザキさんに、どさくさに紛れて、マウスツーマウスの……」画面の向うで頬杖というか顎杖をついていた飛竜が、自分の掌から顎を滑らせた。暫く突つ伏したまま動けないでいる。

「……あ、あの野郎……。つたく、相変わらず手の速い……」

あの飛竜に手が速いと評されるのは、やはりただ者ではない。

「全く、ザキさん、貴方もですかつて……参つたなあ……」飛竜は暫く意味不明の言葉をブツブツ呴いてから、『氣を取り直した』ように言った。

「大丈夫、大丈夫。あいつのは魔法だから、気にしたら負けだ。ザキさんの好みじゃないことを信じよう」

柏木は心から厭そうな飛竜の表情を見てつい聞いてまう。

「何です？ その魔法つてーのは」

「世の中の女という女が、奴に対してだけガードが甘くなるつていう脅威の魔法だ。この俺が肩を触つてるのに『訴えるわよ』なんて速攻で払いのけるような女が、奴がヒップタッチしても、『もう、タ力さんたら、スケベなんだから』でお終いなんだぞ。不公平だろ

？」

飛竜のオカマ言葉に倒れそうになりながら、柏木は思い当たるところが昨晚だけの付き合いで山ほどあるのが思い出された。

高柳はいつもつんけんしているジムの受付の女の子と談笑してた。それから外からの「一見さんにはそつけない蕎麦屋の女将さんが、なにくれと気をつかってくれてたし、なによりあのザキさんが、いつもなく何度も笑い転げて、楽しそうで、普段の数倍可愛かったのだ。飛竜といふときのクール・ビューティーのイメージが、良い意味で崩れたのも確かなのだ。

「魔法じゅ尚のこと、勝てないですよ……。！」

シャトル・シップの窓の向うで何かが光った。僅かな、しかし揺らめきの様な違和感が柏木の目尻に捉えて何かを警告した。普通でない光り方だ。

「キリーさん、ちょっと御免」

飛竜との会話を中断させると、柏木は光の正体を見極めるために窓に顔を寄せた。

丁度、宇宙空港都市であるサンガの巨体が、通りすぎていくところだった。いつもの風景だ。

（何が光ったんだろう。）

いぶかしく思う柏木の目の前で、ゆっくりとサンガが後方に流れていく。このこのゆっくりとというのはあくまでも感覚的なものだ。地球の引力圏にありながら、それを振り切つて回り続ける速度を双方ともが維持している同士なのだ。宇宙空港サンガは地表から見て静止しているようにみえる。ということは地球の自転スピードに追いつけるほどの高速ということなのだ。

何気ないいつもの風景。背後には地球の青く美しいカーブ。そして、少し白光しているようなサンガ。

そのサンガから、信じられないほどゆっくりとした動きで、島二

号、つまりドーナツ型をしたスタンフォードトーラス型のライダー・プールが離れていく。

(……離れていく?)

田の前の光景を疑いたくなつた。間違いなく、サンガとライダー・プールは今分裂した。柏木の手が覚えず、震えてくる。掌を何度も握りしめ開く。震えが酷くなる。喉がカラカラになりそうだ。

どうした? おい、柏木? 何かあつたか?

「……プールが……」

おい。ちやんと喋れ。ビーッした?

「今、田の前で……プールが……サンガから……千切れました……」

何だつて? 柏木。おい、ちやんと繰り返せ。何がどうした?

「サンガと、ライダー・プールが……、離れていきます……」

何だとお?

今日もいつもの無重力。このふわふわが、まんざら悪くもない。

特に筋肉痛と一日目突入の一日起いには、体にやさしいと思ひ。特にライダー・プールって所は、回転半径が一般的の居住施設より小さい癖に、無理に1テラGを出しているから、ほんのちょっとの高さ差（例えば人間サイズの足下と頭のテッペングくらいの距離）で体重力が僅かだが違うという恐ろしくいびつな作りになつてゐる。俺は久し振りに感じる、慣れて心地よい浮遊感に、しばし浸ろうとして、いきなり覚醒度がマックスまで跳ね上がつた。

なんで、ゼロGなんだ？

何度も繰り返すが、ここからライダー・プールなのだ。そして、これはたしか学生時代からの悪友である霧島飛竜のコンパートメントだ。無重力は自分にとつては馴染んだ世界だが、ここに連中にとつては違う。どうしてこうなつたのかも気になるが、外がどういう状況になつているかもかなり気になる。酔っぱらつて寝つこけていた自分は寝たままこの状態に突入したから問題なかつたが、テラG仕様でできている街で、テラG環境で生活している人間たちが行動しているときに、ゼロGにいきなり放り込まれちまつたなら、あつちこつちでパニックの十や二十は起こつても不思議じゃない。遠心力を発生させるための回転系の動力トラブルかもしれないが、急停止ではなく、徐々に減速していったのだと思いたい。

田を開けると、あらゆるものが散乱して漂つてゐた。^{ジークン}G環があるのが当然だと思っている連中は、家具をはじめモノを固定するという基本的習慣が無い（当たり前か）から、慣性に従つて移動を開始

したもののが、どのように動いていくかとこゝに、なんにも恐怖を抱いていないのだろう。

さんざん飲んだせいで下腹部がトイレを呼んでいる。そうだ、無重力ではトイレが大問題だ。テラG仕様のトイレを使つたらエライ目に遭う。こいつはキッチンで食品なんかの保存袋を探して用足しするに限る。俺はキッチンを睨んで少し考える。テラG仕様のキッチンは、飛竜のような独身男の寂しい所帯であつても、危険物満載だろう。万が一ガラス製品でもあつて、碎けて散つていた日には、下手に呼吸すらできない。破片を吸い込みでもしたら、あれは金属探知装置が引っかかるからやつかいなんだよな。

風邪をひいたときに使う普通のマスクが欲しい。でも、そんな上等なものは飛竜の部屋にはなさそうだ。あいつはそもそも風邪をひきそうに無いし。勝手の悪い金魚鉢の方がここに部屋に有りそうだ。

市販の安物ライダースーツも泳いでいる。普段から俺はスペジャケを脱いだら裸でカプセルインして眠る。他のものを着たりしないから、習慣で脱ぎすてたのだろう。あれを捕まえて着ても良いが、掌紋ロックなんて機能はついてないだろう。もつとも、掌紋を登録した覚えがないので、機能があつたとしても役に立たない。

本当にマスクの方がどれだけマシかしれない。金魚鉢があつたとしても、密着できなければ気休めにしかならないが、1%でも効果が期待できるなら使つた方が良いだろう。

俺は散乱した部屋に浮遊するさまざまなものを見つめて、自分の鞄を探す。極東アジア国軍の官服は、町中を歩くのに適当なシロモノではないが、多分それを着た方が安全が確保できる。自分の安全に不安があつては、動きが鈍くなる。この際、世間さまの冷たい目には覚悟して晒されよう。

そうそう、ライダー・プールに棲息している人間の内、ライダー連中は普通の民間人よりは無重力環境で動ける筈だ。連中はパニックが一文の得にもならないことを叩き込まれている筈だから、他の場所でこんな事故がおきるより遙かにマシだろう。うん、樂観視して良い材料を発見すると気持ちがいいね。

でも、事故だらうか？

ちょっとだけ不安が頭の隅を過る。いいたくないが、宇宙は人間というか、生き物が生きていくのにそれほど適しているという場所じゃない。そこにあえて住もうっていうのだから、安全対策は何重にもなっている。何重にもなっているということは、どつか一力所がぶつとんでも大丈夫ということだ。一応、重力が無いだけで呼吸に相応しいだけの酸素濃度は確保されているようだが、完全に重力が死んでいると、空気が対流しない。自分の周りだけ一酸化炭素濃度が濃くて窒息することも可能性としてはあり得るだろう。寝ていた自分が生きているのだから、やはり、急停止したのではなく、ある程度減速しながら停止に至ったのだろう。

「テロとかそんなんじゃないと、心の底から有り難いンだけどなあ……。

俺はつい思つてしまつ。事故ならここが、最悪とはいわないまでも、それに近いポイントだ。これが人為的な悪意で引き起こされているなら、もちつと悪い段階が先に待つていて不思議でない。まあ、現状を把握してない今の段階で、そこまで不安がつても仕方ないか……。

俺は上下左右を確認して目を閉じてから、目指す鞄を発見した。ちょっと体を捻つてぐるつと目見当で斜めに回転させて、部屋のつ

くつに体の向きを修正する。一番軽そうな（反対側にぶちあたつても、モノを壊さない質量）の椅子を軽く蹴つて、壁への移動を試みる。壁に到着、第一段階クリア。俺はちょっとだけため息をつく。とにかく、ここまであらゆる質量のものが浮遊している空間で、不必要に力をかけるべきではない。重さを感じないがモノには質量があるって、慣性の法則はここでも有効だということを忘れちゃいけない。鞄が欲しくてもそこに猪突猛進するのはいただけない。

鞄のロックを解除すると、中身がふわっと散乱した。先ずは鞄の中身を小分けして整理するのに使った袋を探す。あつた、俺のトイレ

レ

下半身の呼び声にちゃんと応えて（用済みの袋はキッチリ閉じないと意味ねえし…）から、普段なら大事なあらゆるものゴミの扱いで小袋から放り出して、その袋の方を丁寧に剥がして畳んでポケットに詰め込んだ。一応トイレは誰にとつても必需品だから、道で行き合つた誰かにトイレを訪ねられる可能性がある。そんなときの用心の意味でも袋は便利だろつ。俺はこんな為に荷造りをしたんではないが、思わぬところで役に立つもんだ。日頃から神経質なのは全く役に立つ。

それからおれは官服を着込んだ。念の為説明を付け加えると、俺に支給されている官服のスペジャケは、戦闘仕様になつてないので、軍服と呼びたくは無い。世間さまから見れば色といい形といい、軍服そのものなのはじ愛嬌だ。こいつは薄いキヤツチャーボートの筐体が、浮遊物なんかに激突されて穴があいたりしても、手抜きをせずにちゃんと密封して着込んでいれば、即死したりしない程度の生存環境は確保できるという優れモノだ。不便にも折り畳めない金魚鉢は携帯してこなかつたが、三週間したらここからサンガの基地に

出頭しようと思つていたので、普段着の簡易版ではなく、正装に近い良い奴を持つてきていた。着込んだあとに遠くに浮かんでいる鏡がたまたま目に入つてがつかりする。軍人にしか見えない。最悪だ。

悲惨な事故や災害の現場で、消防士や医者、警察官、及び軍人に見られるのは（事実だけど）少し有り難くない事態になりがちだ。服は組織の象徴であつて、個人の能力とは関係ないのだが、『なにかしてくれる』という期待を抱かせがちになる。例えば普段オフィスの窓口で来場者を呼び出す仕事しかしてなかつたとしても、目の前で凶器を振り回しているバカが居る状況に警察官の服を着て運悪く居合わせてしまえば、それは自分の本来の職分ではありませんからという言い訳は通じなくなる。

ライダー・プールから重力が消滅するというのは、どう考えても異常事態だ。こんな所に軍服を着てのこのこ泳いで行つたら、極東アジア国軍どどつかの団体がここでドンパチでもやらかして、こういう事態に陥つたと勘織られても言い訳できない。瓜田に^{クツ}薙を入れず、李下に^{カツブリ}冠を正さず。クワバラ、クワバラ。

浮遊物の中に金魚鉢を見つけた。いくら飛竜がライダーでも、^こ居者^{んなとこり}住宅にグローブ装着器があるとは思えないの^こで、とりあえず手首を浮いていたシーツをちよん切つて紐状にして（スペジャケにはハサミとナイフは当然、装着してます）苦労して縛つて、靴はちゃんと密封して（足下は大事ね）、手近にあつた雑誌で進む方向をガードしながら、壁を蹴つた。壁は推進力発生装置としては加減しやすく助かります。色々な浮遊物を雑誌で打ち払いながら、金魚鉢に到着したが、それまでついでに払つてしまつて舌打ちが出た。二週間、有Gばかりで過ごして、感覚が大分鈍つっている。

「やつぱり一コースかなあ……」

なんとか一度目の挑戦で入手した金魚鉢をとりあえず装着して、

目と呼吸器の安全を確保して少しだけ落ち着いた俺は、聞く者がいない独り言をいいながら、総合端末にとりついた。

「うーんと……電気……死んでる？ でも明るいしなあ……」

総合端末が反応しないのに、一瞬それを疑つてマジにヒヤッとしたが、ここでそこまで凶悪な事態が起こつていたら、暗闇に閉じ込められている勘定になる。光度が確保されている内は、そこまで悲惨ではない。

軍の回線なら生きてるかもしないけど、此処には露骨な命令違反でやつてきている。まあ、機密を漏らしたり、敵対行動をする訳ではないから、最悪でも失職なだけで、裁判ものの違反では無いだろう。今は現状の即刻の把握が必要だ。

そこまで考えてから一重に舌打ちが出た。ID端末はジョーに預けてきた。自分が持つているのは、軍の回線に入つていけるIDではなくて、軍の持ち物である証明を第三者にするタイプの情報しか入つてない（それも新人の^{二コマン}）。

「これで、ここからで加悦さん呼べる……かな？」

口に出して言つるのは整理して考へるためだ。先ず、生きている総合端末を見つける所からはじめなきやならない。どつかの総合端末が生きていたら、相棒の加悦とジョーに連絡をとるより、二コースヘッドラインを読む方が良いかもしれない。ただ、ID端末がないと身動きがとれないから、少なくともジョーに来てもらう必要がある。

そこまで考へてから、俺は総合端末で二コースが得られないもう一つのパターンを思いついた。ネットの大元がどつかで物理的に断絶している可能性だ。その場合、この総合端末は外と繋がる機能は失っているが、コンピュータとしての役割は電力が供給される限り期待できる。二コースヘッドラインを見ようとしていた操作を止め

て、ジョーのID端末を押しつけてから、ローカルエリアだけで使うモードを指定して、端末をコンピュータとして再起動を指令した。これで立ち上がったら、上手くすればプールのマザーと繋がることができる。プールのマザ・コン（ホスト・コンピュータのこと）なら、外との無線通話もできるかもしれない。指をイライラと空で動かしながら、再起がかかるまでの僅かな時間をじりじりとして俺は待つた。

妙な音楽が鳴つて（飛竜の趣味が知れるということだ）、普段滅多に目にしない古くさい端末としての画面が立ち上がる。

「ラッキー」

珍しく期待した通りの効果が得られると、人間は嬉しくなるものだ。俺はジョーでは無いが、この端末には俺自身の網膜パターンや掌紋のデータをマムに入れてもらっている。マムにヘマは無い。端末のデータと俺自身に齟齬がなければ、エンドユーザーとして弾かれることはないだろう。俺はプログラムの専門家じやないからキーボード操作は苦手だ。喋ってくれないコンピュータから情報を引っ張りだすのは不可能に近い。こんなとき、斎藤歩さいとうあゆむがいてくれたら便利なのにと、溜息の一つもつきたくなる。斎藤というのは極東アジア国軍でも特殊な位置にいる統合幕僚会議情報本部の有名人、岸二佐の子飼いの扱いで同期の出世頭と呼ばれている男だ。

彼も俺と同じように民間の操船学校に飛ばされて軍歴をスタートしている。学生時代は軍からの出向組ということで、操船学校では飛竜と共に、親しく付き合っていたポン友の一人だ。斎藤は操船科ではなく、情報処理スペシャリストだったから、普段の学舎は違つていたが、飛竜がチームリーダーで操船ミッションをしているときに、何度も一緒にクルーになつたことがある。

彼の指が滑るようにキーボードの上を躍ると、奇妙な暗号みたいな奴が黒い不細工な画面を埋めつくす。何をやつているのかさっぱり見当もつかなかつたが、そこから弾き出されるデータの正確さに

は感動的なものがあった。彼が出していくるデータを使うのは、良い材料を使えば余程のヘマをしないと当然の結果として面白い料理が出来上がるのと同じに、良い結果を産むプランを料理できた。

その齊藤は、ルナ暴動の元凶の洗い出しで活躍した数年の国連部隊での現場を経て、高等防衛専門学校にまで行き、今では情報処理のプロとして皆から一目をされている。

ロスコン拾いのスカダーの自分とはえらい違いだ。まあ、齊藤歩が評価されないような組織なんか、只のクソだから当たり前だけだな。

「ちゃんと起きろよ。俺は歩じやあ無いんだからな」

話が見えない筈の機械には絶対通じないはずだから、凄みが効いたということでも無いだろうが、ちゃんとパンピー用（実はこのファンキーな感触がある表現がかなり気に入っている）のトークモードでコンピュータが起動したらしく、総合端末から妙に機械的な声がした。

「おはようござります。何か御用でしょうか」

御用もなにも、どうなつてているのか教えてくれ、といいたいところを我慢して、ジョーの権限を確認する。

「このIDでホストアクセスできますか？」

「残念ですが、無理です」

機械にここまで断言されると微妙に腹が立つ。まあ、イライラしても仕方ない。

「データの引き出しは可能ですか？」

「求められる種類によります。要求するデータは何ですか？」

「1テラG環境が基本のプールに何故重力がないのか。事故か、事件か。現在のライダー・プールの状況はどうなつてているか。復旧には取り掛かっているか。現状把握したい。保安機密に抵触しない一般レベルのニュースヘッドラインでも良いから、現状把握できる情報が欲しい」

「了解しました。まず何故重力がないのか。回転が停止しているからです」

そんなの分かるよ……。俺は倒れそうになった。機械つてのは、突然、最高級の天然ボケをかましてくるから油断ならない。

「次の事故か事件かについては、まだ把握されていないので判別できていないというところが正確な答えです。どちらの可能性も有りますが、当然……」

「何重にも課せられた安全対策が空振りしているので、事件の可能性が濃厚……でしょ？」

「ひひ、うう、いい方をしても人間と違つてヘソを曲げないのが、ホスト・コンピュータの良いところだ。

「その通りです。次、現在のライダー・プールの状況ですが、全容を数値データとして提示して宜しいでしょうか？ 把握できますか？」

「全く、歯に絹を着せない野郎だ。

「無理だから個別に気になつていい点を。電気系統は健全？ 部分的に破壊？」

「サンガへの中央ジョイント部分で爆発が観測されていますので、メインは働いていません。5つの補助系統から、太陽光発電のエネルギーがバイパスされてきています」

「死者、怪我人の状況は？」

「こちらも通信回線が分断されていますので、全体像は把握できていません。私の可知域では現在の時点では死者はゼロです。但し、浮遊物との衝突で、早急な救助、及び治療が必要と思われるケースは数えきれません。死者の方は、爆発観測点の有人記録はありませんので、少なくとも爆発による死者は存在しないと思われます」

「オーケー。次、酸素供給状況。空気対流の保持状況」

「画面が居住区のドーナツが、赤い線で輪切り というより切り売りのバームクーヘンの形になるように 分断されていている姿

になつた。その区画によつて青や緑と塗り潰されている色が違つてゐる。

「これは現時点での観測分布を図示します。赤のラインが異常時に空気漏れによる人的被害を最低限に止めるために降りてゐる緊急遮断壁です。この中で酸素濃度が安定している区域は青、酸素濃度が生存に充分であるものの対流が確保できずに偏つてゐるもののが緑、生命維持に危険な低レベルの場所が黄色、生存が不可能な区域が赤で表示されています。それぞれの区画の中での細かいデータも取り出せますが、このH-D許可レベルでは検索結果を提示できません」

全体はみせてもらえないが、自分がいる区画の詳しいデータはもらえるのが普通だと思う。」この危機管理を設計した奴はタコに違いない。

「大丈夫、これだけ見られれば今のところ充分。照会何度もするところになるとと思うから、俺の携帯端末に送つておいて。あと、ダクトとか排水管とかもこのシャッターで切つてあるの？ あと、この一つだけ赤い区画はどこ？」

全体として黄色は無いのに、赤は一区画ある。もつ少し壊滅的な状況を想定していたので、少しは安心できるのだが、この赤区画にいた人間のことがどうしても気になる。

「ダクトは遮断です。排水系統は通じてます。赤い区域は倉庫です」「ここは物資保管倉庫つて、ここじゃなかつたつけ？」

俺は回転軸から、居住区であるドーナツまでスポーツ車状にのびている構造部の中間にあむ、一周りほど外側のドーナツから小さい輪つかを指さした。

「そこは未使用の物資用の区画です。長期保管用と一時管理用の区画に分かれています。主な、一時管理物資は、生鮮食品ですので、ここだけ空調管理もされています。外側の輪の方の、『指摘の赤い箇所の方は、有機廃棄物などの一時保管用で、ここに空気が有りますとバクテリアなどが発生し、腐敗しますので、もともと完全脱気

されています」

「了解。構造物に致命的なダメージは今のところないという了解でいいね」

有機廃棄物というのを棄てるなんて、信じられない無駄だが、パンピー（しつこいようだが、お気に入り）にキレイにしたから誰かのションベン飲めと言つても、『わかりました』って答える奴は少ないに違いない。

赤いところが事故で空氣漏れした場所でなければ、俺には関係ない。そこからドミノ倒し的にクラッショウが広がっていく可能性は潰せた。俺は簡単に片づけた。

どつちにしろ、何の権限も責任もない通りすがりの俺が、こんなところで何に対しても頑張るのかも定かでないが、祭りに弱いというか、なんていうか。非常事態つてのになると、どうにも興奮しちまう質^{タチ}なのか、なんとかできるかもしれないという妄想の虜になつちまう困つた癖がある。怪我をしない内に、危険を感知したら、突撃しないで逃げるつて方になんとかシフトしといった方が良いと思うが、最近人間がいな平和なところでずっと楽しく惰眠を貪つていたからだろうか……。不謹慎だが露骨に興奮している。五年ぶりくらいで、久し振りに目がはつきり覚めた気がする。

「排水系統が分断してないってことは、上水道も？」

「水漏れは機械部分に与えるダメージが大きいので、こちらも普段から完全に構造部の外を通る体裁になっています。取排水口はもともと区画毎に外に通じていますので、遮断の必要はありません」

「了解。とても有意義な情報だ」

あとでプールの住民^{ユーチャー}に、水源汚染の元凶として文句を言われるかもしれないが、遮断された区画を越えて移動する必要が出てきたとき、排水系統じゃなくて上水系統を使いたいというのを人情だろう。普段、テメエが生産した糞尿の再生空気だの水だのを使つてているの

と、フレッシュな他人様の排泄物にまみれるのとでは次元が違う。

「残りの質問について続けます。復旧に取り掛かっているか？これは、現時点で私に LAN モードでアクセスしているのが、ジヨー、貴方一人です。WWW モードでは通信が途切れると自動でネット回線に繋がるうとリトライを続けますので、私にアクセスする方法がわからかないのだと思います。皆さん、モニターや操作盤を叩いてらっしゃいます」

テクノロジーが進化しても、機械が突然動かなくなると、なぜ人間は叩きたくなるのだろう。俺は、少々遠い目になった。

「通信が携帯端末による通話に限定されていますから、内部において組織的な復旧活動を開始しているチームは存在しないと考えられます。先程も申し上げましたが、外部の情報は皆無ですので私にも判断ができません。教えてほしいくらいです。ニコースヘッドラインについても同じです。無線通信に関しても、メインのアンテナが回転軸にありますので、爆発時に致命的なダメージを受けたものだと思われます」

歯に絹を着せないというか、正直というか。全く、機械というのはこちらの心情を配慮して、情報を出し惜しみしてくれないのは困ることだ。聞いたのが俺だからまあ主義として細かいことを気にしないでおいてやるが、内部で状況把握を始めている奴が皆無で、外の状況も読めないなんてのは、考える気力をそがれること甚だしい。このホストの無神経ぶりと、加悦さんやジョーを比べるのは愚かすぎる。やはり、『新人に人権を』、という先だての戦争は無理も無かつたのだと思つ。

加悦さんなら、ライダー・プールにトラブルというニコースをゲットしてくれれば、俺の所在地を軍にバラしてくれるかもしない。

ジョーにはチーム・リーダーである俺の命令と違うことを実行するそんな度胸は無いけど、加悦さんは細かい状況の変化に対応できる。別に加悦さんが上等でジョーが役立たずという訳ではない。単なる年季の差だ。あの一人には知識レベルの差は殆ど無いはずなのだが、とれる行動は全く違う。

俺は加悦さんとジョーと母船のメインコンピュータのマム・スカベンジャーに三週間、軍に居場所を隠匿するよう依頼して逃げてきた。まだ軍からジョーのID端末に叱責が飛んでこないところをみると、上手く誤魔化してくれていてのことだ。

けれど、このライダー・ブルがテロか（可能性は0ではない）事故で、中にある俺の生存が疑わしければ、少なくとも加悦さんは俺の死体を発見するまでは、ちゃんと探してくれる筈だ。女性型をとるとホルモンに晒されなくとも思考回路が女性化するのか、加悦さんの情は濃い。ただ問題は、スカベンジャー・フィールドで毎日の仕事を俺抜きでしている加悦さんが、ニュースなんかを見るかどうかってことだ。ジョーならオフタイムにテレビを見るに違いないが、彼がみるのはニュースとは程遠い。

「中だけでの通話は可能？」

俺は加悦さんを思い出してから、まだ帰っていない飛竜と、あれだけ昨日飲んでおいて、今日は大気圏突入^{ブランジ}だとほざいていたパンピ一柏木を思い出した。二人は当然、ここにはいない筈だけれど、もう一人知り合いがいることを忘れていた。もちろん、キュー^トでマツチヨなザキさんのことだ。彼女の携帯端末番号はたしか聞いていた。

「もちろんです。中での通話数は、平日のおよそ45倍です。回線ビジーで繋がらない通話がその内の八割です」

ここで暮らしている人間で、ここに知り合いが多い連中は、全体を救うより身内や顔見知りの安全確認にまだ忙しい……って訳か。人間だもん、しうがない。ここに俺の未来の嫁さんが居たら、俺

だつてそつちの安否確認を優先する。ここにこの管理の連中が能無しであつても人でなしでは無かつたことを、人類の平和の為に悦ぼう。

「一応繋いでみてくれる?」

俺は端末を操作して『ザキさん』を選んで、マザ・コンに聞いた。ザキさんが万が一、パンピ一柏木の彼女だつたり、飛竜の毒牙にかかつたかわいそうな女の子だつたりして、家族がサンガに住んでいたりしたら、とりあえず内部に通話する相手がない場合だつてある。

通常、呼び出し音。ワンゴール。

「タカさんつ。無事だつた?」

噛みつくようなザキさんの声。

「私、キリーさんに頼まれてたから、心配してたのに、携帯いくら呼んでも取ってくれなくて。凄い心配したんだからつ」

半分泣きそうな声になつていて。俺は嬉しくなつた。女の子に心配してもらうのは嫌いじやない。ただ、大丈夫かという確認は心外だ。テラGならともかく、ここでは異常事態のゼロGは、間違いく俺のフィールドだ。

「ザキさん。今日はプールが宇宙人仕様になつてること、忘れてもらつちゃ困るな。そつちこそ、怪我してない? バカチカラで、デカいもんを突き飛ばすなよ。浮いてるからつて質量が無くなつた訳じやないから。質量がデカイもんは動かしにくいけど、一度動いちまつたら止めにくいからな。慣性の法則はオープングースペースなら問題ないけど、壁があるとけつこつやつかいだ。重いものはむやみやたらと触るなよ」

「……うん。それは学習した」

しょんぼりした声。ベットでも投げつけて、壁でも壊したのかもしない。

「一人？ それとも彼とか家族とかプールの中に頼れる人いる？」

「家族はサンガのパンカ一般居住区よ。ついでに仕事仲間とか友だちも呼んでみたけど、回線ビジーばかり……。何があつたかなんて、タ力さんに聞いても無駄よね……」

「ちょっとむかつく。この非常事態の原因把握にですね～、プール内で行動開始しているのは俺だけなんですけどお。」

そう思いつつ、俺は中年の意地で重々しい声を出した。

「重力がゼロになっているのは、プールの回転が止まっているからだ」

「そんなの、小学生にだつて分かるわよ。ボケつ

……冷たい声。ザキさん、俺は同じセリフで笑つたんですけど……。

俺は理不尽なザキさんの怒声を、怖がつてている女の子の不安定な精神状態がもたらした一時的な発作と解釈し、ボケ、カス発言にはこだわらないことにした。（カスまでは言われてないか）

「遮断壁で細かく分断されてるから、ちょっと特殊な方法とらないと他の区画と行き来はできないけど、プールの壁そのものが破壊されている箇所は今の所無し。電気系統もメインルートは壊れちゃってるけどバイパスが5本生きてるから、空気対流と酸素供給は暫くは大丈夫な筈。総合端末を始めとしたネットワーク関連のインフラがダウンしているのは、R A (R o t a t i o n a x i s)、つまりプールの回転軸で爆発があつた為。爆発によってネットワークケーブルの大元が断線してると、無線のメインアンテナが破壊されたために、外との通話ができないけれど、プール内の通信網は落ちてはいない。繋がりにくいのは単に混んでるからね。あと、プール自体に地方放送局があれば良かつたんだけど、テレビ・ラジオは基地がないから、オフィシャルな情報は流れる手段が無い。えつと、

状況はこんなもん。といつわけで、プール内なら無線も有線もビジーだけど問題なく使えるよ。つてなことを、ビジーな通話じゃなくて比較的通常レベルで使えるはずのメールで『正確な情報』として流してくれる？ 情報がないのが一番不安を煽るから

電話の向つでザキさんが黙りこんでしまった。あれ？、俺何か悪いこと言つた？

「それ……どうやって証明できる？ 正確な情報なら喜んでそうするけど、流言蜚語を流すモトにはなりたくない」

ザキさん、顔だけじゃなくて、中身もキートじやん。俺は少なからず見直した。

「総合端末を、ローカルエリアモードで再起動できる？」

「……タ力さん。日本語で喋つて」

「だから、総合端末をネット端末じゃなくて、コンピュータとして機能限定して再起できる？ そしたら、自分のID端末レベルに相応しいだけの検索が、プールのホストに対してかけられるから。このホストに対する、俺のセキュリティレベルで検索可能なデータが今言つたやつ。それから、パンツはビジーだから、LAN起動できたら、ホストを噛ませる通信方式にシフトしていつて。回線の負荷を減少できるはずだ」

ザキさんが口を挟んできた。

「パンツって何？」

「一般通信」

「……そんな言い方しないわよ」

一般はなんでもパンにするんじゃないのか。おし。少し賢くなつた。俺は続けた。

「情報の正確さを確認したければ個人でしてほしい。」このマムは少々の事じやパンクしないと思うから。ああそう、セキュリティレ

ベル高い人がいて、もっと詳しい情報引っ張りだせたら、全体にフイード・バックして欲しいんだけど。マムにオープンチャットスペース作つてもうから、発言宜しくつて添えてくれればいい。以上をお友だちにメール送信頼める?」

「だから、日本語で喋つてつて言つてるでしょ。同じ文メールで寄越して。皆に転送するから」

ザキさんの頭の中身は、どうやらコンピューターの用語になるとフリーズするウイルスで汚染されているらしい。俺は苦笑した。とにかく、パニックを起こさせないには、正確な情報にアクセスできるという安心感が一番だ。

俺はここにマザ・ロンに今的内容を文章化してザキさんの端末に送るよついで命令してから、少し落ち着くために水分をとることにした。

危険な台所に突撃して、冷蔵庫から水のボトルを取つてくると、端末前にもどつて、フィードバックを待つことにした。俺はマッチヨ・マンじゃない。走り回つても、できることはたかが知れている。さてと、一番最初の行動はとつた。次は……、本当の現状把握だな。

一口、水を飲み……たかつたが、フタがあかねーっ。といつて自分で自分の非力が情け無かつた俺は、ちょっとだけ涙が出そうになつた。

この部屋の総合端末は、もともとが大きいモニター画面が、入り口を入つて正面の奥に三つも並んでいる所為で、その存在感を圧倒的に示していた。ママが焼いたクッキーしかみたことがない子どもが、パーティシエが腕を競うコンテストで作られた菓子を目の前に並べられたら、それを菓子と認識できるかどうか怪しいように、このちょっとした博覧会のパビリオンに展示してあるようなモニター画面を見て、総合端末のモニターだと咄嗟に理解できる人間は少ないに違いない。

総合端末というのは、人が集団で暮らす都市^ジとのホスト・コンピュータに直結している端末の事である。各個人の情報を登録した携帯端末を持つていないと、家から出て公園に遊びに行くことすら困難だ。先ず、各世帯と共に廊下を通り、その携帯端末のデータと持ち主の身体特性が一致していないと、扉が開かない。

赤ちゃんや幼児の場合は、行動を共にする保護者の携帯端末に個人情報を入れるか、一番基本的な身体特性のみを刻み込んだクリスタルのような見掛けの記録装置を、首に掛けたりピアスのような位置で、耳たぶに留めたりしているのが普通だ。経験蓄積型のAIを搭載したヒューマノイドに、マーク表示義務が無くなつてから、データ・クリスタルを額に貼るのも流行つているようだ。

極東アジア国の場合、学齢期に一斉に、学童用の携帯端末が支給される。この学童携帯のID許可レベルでは、青少年の健全な育成に不適切とされる映像やコンテンツに入つていくことはできない。

普通は小学校で、この携帯端末の基本的な使いこなしを覚えるだ。個人の好みによつてチューンナップしていく楽しさに目覚めると、この不細工な学童携帯を、大人が持つような多機能なもの（色々なメーカーが新製品をガンガン出して、メディアで宣伝しまくつ

ている）に変えていきたくなるものだが、横並びが好きな国柄なので、普通の公立小学校では校内で普通の携帯を使うことを禁止している場合が多いようだ。

公共の施設の場合、犯罪歴の無い未成年なら、普通にドアを開けたり、門を通りたりするのに細かく個人情報の提示を求められることは無い。幼児のように基本情報さえ総合に読みとつてもらえば遊ぶのには充分なので、フライングして市販の端末をゲットした子どもは、逆に学童携帯を持たずにデータ・クリスタルだけ貼り付けて登校したりもするらしい。

自分が小学生の頃は、早く大人のような携帯端末を持ちたかったものだが（認証ボードにケイタイをかざして網膜パターンなどを読み込ませているのが格好よく見えたのだ）、今どきの子どもは、赤ちゃんのようにデータ・クリスタルをこれ見よがしに貼り付ける方がステータスというのだから、時代は変われば変わるものだ。

携帯端末を一々操作するのは、慣れていても面倒なことだから、親に市販の端末を買つてもうつてもいらないのにケイタイ不携帯の連中も絶対にいるに違いない。

話が逸れた。この部屋の壁とほぼ同じ大きさのモニターを一般の人間が総合端末と認識できないだらうといつたのは、その前に操作盤が無いからだ。操作盤がくつついでなければ、大きさといい、優れた解像度による美しい画面といい、高価なAV専用の映像装置にしか見えないだらう。その壁のモニターに向かうように、行儀よく机が並んでいる。それこそが、操作盤群なのだ。つまり、ここは部屋総合端末があるのでなく、この部屋自体が総合端末なのだ。それぞれの机に人が座れるようになつていて、収納式のモニターをせり出させれば、それぞれのブースが独立した総合端末として使えるが、そもそもが有事の時には、司令室として機能させるためにある部屋なのだ。

この部屋のチーフ・ディレクターである斎藤歩さいとうあゆむは、ここが稼働するなどという状態になるか知っている。情報解析のエキスパートが知恵を絞りあって、ものすごい情報の洪水に立ち向かっていくのだ。波間に躍る小さい魚の鱗の煌きが、いつか目に光つて入ると信じて。今は斎藤の部下というより後輩である青年が、モニターに主婦向けのトークショーを映しているので、しゃべり声が響いている。が、偉そうに聞こえる言葉を選んではいても、オリジナルな意見など一つもない。どこかで誰かが言ったような意見をまくしたてるに過ぎない声は、バックミュージックとしては最低の部類に入る。しかし、蝉の鳴き声ほどの騒がしさを、青年の思考は全く気にしていないようだ。ああいう音は気になり出すと集中力を削ぐのだが……。趣味が違うで片づけて良い問題が少しだけ悩む。

五月蠅さつきくも閑散とした何かが漂つているこの部屋がこんな風に静まり返つてから、もう三年ほどは経つているだろうか。今は、メンテナンスと新機材導入の為、つまり、使ってやるために使っているだけだから、多分、部屋自体が生きていらないのだろう。最新の技術も常に取り入れていくため、端末のベースに独立してあるコンピュータは、部屋は同じでも、あの頃よりも一度に考えられるコンピュータが占めている。ということは、次にこの部屋が息を吹き返すとき、さらに多くの情報が溢れるのは間違いない、ということだ。この世代交代は、めまぐるしい市場のそれよりも更に速い。

前の時は、洪水をなんとか凌ぎきつて、トップの岸一佐を除いて皆が階級を押し上げた。岸を出世させて幕僚本部に入れたいという向きもあるようだが、人並み外れた情報センスと行動力を併せ持つ岸だ。しかし、その才能ゆえに独立独行の人となりがちで、便利に使われる一方で煙たがれてもいるのも事実だろう。相変わらず岸だけは、不動の万年一佐として、情報部を仕切っている。

情報管制室（ここを管制と呼ぶ岸のセンスが、上に嫌われる原因の一つだろう）の、古い三台分が、またしても新しいコンピュータに取つて代わつて一週間。古いといつても市場に出回つてゐる機種の三世代は先を走つてゐるコンピュータだ。情報のエキスパートをして怯ませるほどの、印刷したら恐ろしい分厚さになるだろう電子マニアアルと、一週間格闘してゐる青年は堂本一馬（とうもと かずま）一尉。彼は天下の中央学府、ジ・アースの総合大学を卒（あ）えてから、防衛大学高等専門学校に進んだエリート中のエリートだ。

三年ほど前にここが情報管制室としてフル稼働してゐたのは、今は新人（ヒューマン）と呼ばれてゐるスーパーリアルタイプの擬似人間が、その権利を主張して人類に牙を剥いたことで始まつた、戦争というか内乱というか、人類が初めて経験した『技術の結晶』との戦いにおいてだつた。

人工知能と情報戦を行うというのは、どう考へてもあちらに利があると普通なら考へるだろう。かなりの無謀だと。しかし、連中には基本的に人間を傷つけることに対する根強いタブーがあり（それを押して戦うことで、精神が破壊されて行つたのは彼らの方だつた）、こちらは良くできたとはいえ自分たちの製作物を壊すことには、人殺しの半分ほどの忌諱感すら抱いていなかつた。ハンドディは丁度埋まつてしまつたのだろう。

ドロ沼のような救いの見えてこない戦い。彼らが自分の権利だけの為に立ち上がつていたのなら、彼処まで長期化することなくものごとは収束していただろう。

新人たちが立ち上がつたそもそもそのきつかけは、自分たちが虐げられている事にたいしてより、自分たち以上に蔑ろにされている、今の社会が救つてこなかつた弱者の為であつた。人間が、恵まれぬ弱者に自らの手をさしのべることを忌避した結果、便利な道具として使われた心のようなものがある新人たちが、道具が、虐げられた人間の為に怒り、その不公平を是正するべくだと立ち上がつた。その過程で自分たちの魂にも気付いてしまつた。その事が、彼らにタ

ブーを押しての戦いを続行させ、心と学識がある多くの人たちが、その行為を尊いと判じ、彼らに協力しはじめたことで戦局はドロ沼化した。

人対人造物の段階で終わらせることができいたら……。

ここを撤収するときの岸一佐の砂をかむような咳きが、斎藤の耳から離れない。早期に戦争を集結させることができなかつた事で、あの戦いは岸には敗北として記憶されているのだろう。

この暢気にトークショードをかけっぱなしにして、端末を弄つている同僚というか後輩の堂本にしても、学生時代に可愛がつていた後輩たちや、尊敬していただろう先生たちが、何人も新人にシンパシーを抱いて、魂のための戦いの側に立ち、その中で倒れて行つた。あの頃、岸の手駒として一日を二十六時間体制くらいで働きながら、親しかつた者の死に遭うたび、僅かな隙間しかない休憩時間に、ドリンクコーナーの片隅で嗚咽を噛み殺していた堂本を知らなければ、自分はあの戦争をどう受け止めていただろう。斎藤はたまに考える。

弱く虐げられた人間たちにも尊厳があると信じる心豊かな人間が倒れ、不平等を不平等なままに放置することを選んでいる国のために、働くことの意味を自分も何処かで問うていた。情報戦を戦い抜いた統合幕僚会議情報本部付きの特殊情報班、通称『チーム岸』のメンバーとして、岸の階級章がそのままだつたことを、一緒になつて憤慨したのだろうか。

「ライダー・プールがサンガから千切れたって言つてますよ。斎藤さん。なんか、ジョイント部分が壊れただけみたいで、今のところサンガにもプールにも被害はないみたいですが、こんな事故で

起じるんでしょうかねえ？」「

堂本の緊張感がないおしゃべりに、斎藤歩は手を止めた。堂本の視線の先を見やると、トークショーはいつの間にか、特番のような様相を呈していた。

座っていたブースの隣の端末モニターを起こして、ニコースヘッドラインを呼び出す。

サンガで事故？ 連結部分で爆発観測。専門家、連結部の構造的欠陥を指摘。

ライダー・プール（1テラGの地球への玄関口）、サンガから離脱。

続報。プールは地球へ落下か？

「事故……みたいだね……」

サンガとライダー・プールは、違う設計の宇宙植民地を無理やりつなげている造りだから、まあ、連結部が壊れることがあるかもしれない。連結部が壊れただけなら、なんとか修理もできるだろう。サンガに住んでいる人間には、ちょっと恐怖感をそそる、いいトーケショーネタなのかもしれない。はつきり言って、どれほど規模が大きくても、事故というものの始末が軍の、それも情報の岸の直轄に回つてくることはないので、斎藤は基本的には興味本意に成り行きを見守つていて問題ない。

しかしサンガのライダー・プールとなると話が違う。岸に似てきたと堂本にからかわれる程にはポーカーフェイスを身につけた違う近ごろの斎藤でも、友人がごろごろ棲息しているライダー・プールでの事故というのを聞けば、穏やかではいられない。

齊藤の軍歴は、ネオシャンガンの宇宙船操船専門学校へ、民間レベルでの機材を用いての艦隊管制技術を学ぶために出向させられた所からスタートしている。そこで数年間の学寮暮らしで出きた友人の多くは、当然のように民間の宇宙船乗りになつた。だから、少なからず知り合いがいる筈だ。

操船科のエースであり、いわゆる色男であり、実家が宇宙貨物輸送業という巨額な富がなければ始められないような家業の御曹司といつ、才・色・財の三拍子が打ち揃つた霧島飛竜という男がいた。最初に彼を知つたころはクソまじめで青臭くて、全くすれていないとピュアに憧れた。

その青臭いボクちゃんが、修羅場に置かれたとき、鮮やかに男になつた。その事件と共に乗り切つたあと、彼とは卒業までずっとつるんでいたような気がする。専攻科が違うにもかかわらず、事件を一緒に乗り切つたもう一人、ＭＴ、ミッシュ・ショーン・スペシャリストの高柳は、マジシャンと呼ばれるようになつた。その三人でよくつるんで遊び回つた。

高柳は齊藤と同じような軍からの出向組だったが、最初はそれほど仲良くなるとは思つて居なかつた。成績は優秀でもなく劣悪でもなく（とにかく目立たない）、顔は甘めの童顔で、体つきは大きいものの、氣の毒なぐらいペーパーテストが苦手で、旧型の番付き口二一の出身という、冴え無いを絵に描いたような男。その癖、やたらと女の子に受けが良いという妙な特技を持つていた。女好きの看板をさげて、どこか一本抜けていて、のほほんとした昼行灯ひるあんじん、それが普段の彼だつた。それでいて何か極限を知つてゐるような、全てを突き放したところが垣間見え、その色合いの濃淡に惹き付けられた。

しかし、危機管理意識を叩き込むために（普通の授業より手間暇かかっていた筈だ）いきなり降りかかる緊急事態回避訓練の時だけ、やつには何故か入る『スイッチ』があつた。最初の時はま

ぐれだと思った。二回目はまさかと思つた。三回目以降は、皆が納得するしかなかつた。緊急事態にスイッチ・オンした高柳は、暴走しているように見えても方位磁石にして先ず間違いないと。それでついた渾名^{あだな}がマジシャンだ。

あの平時は頼れる飛竜でさえ、迷うような微妙な局面で、迷わないのは異常だと思つ。けれど、悩んでいる時間に制限があるのが緊急事態だ。物凄い速さで情報を捌きながら、高柳が選んでとつた行動で、最低条件である『全員生存で港に帰る』が充たされなかつたことは無い。

悠長にベストを探せない場合は、とりつる選択肢の中でベターを選んでいくしかねえだろ？

高柳の飄々とした顔でそういうわれると、煙にまかれたような気分がしたものだ。そういうえば、教授陣が記録に残つていて自分たちの行動を評価する恐ろしい時間があるのだが、ここで酷評を喰らつたことは一度も無かつた。判断に手間取つて、回避策を実行する時間

を口スした班^{チーム}は、めちゃくちゃな言われ様をしていた。

情報が出揃つた状態で、ここは『こうするべきだつた』と言うのは簡単だが、自分がトラブルに巻き込まれている状態の時は、普通の人間は深く悩んでしまうものだ。悩んでベターと思われる選択肢を取つた時にはもう状況は変化していて『機を逸している』なんてのは、ありがちなことだ。刹那^{せつな}のベターを積み重ねて、結果としてベストを導き出すのは凄い能力だと斎藤は実感している。

斎藤が新米^{ペーペー}の情報官として配属されたのは、情報部の花形部署、通称チーム岸の足下で、そこからいきなり国連部隊へ出向させられた。いつも火種のルナ自治区・国境線公正管理チームに配属されたのだ。大国同士の微妙な綱引きの中で、どの国の利害にも配慮しな

がらも、どの国寄りにも偏ってはいけないという縛りがついた動きにくらい立場だつた。

そこで様々な問題に対処するには、暢気なベストを探しているくらいなら、今採れる選択肢の中からベターを選んでいく『マジシャン高柳方式』を使つていくしかなかつた。それが結果として、多く存在する情報官というドングリの中から岸が自分に目をつけた一つの理由だつたろうと斎藤は思つてゐる。

そんな高柳は、今はテラ・マスドライバー『サヤコ』が打ち上げる貨物の最終フィールドでロスト・コンテナを拾い続けるという地味な仕事をさせられている。

情報官は職務上知り得た情報に関して徹底した守秘義務が課せられている。だから、本人に教えてやることはできないが、高柳は、極東アジア国軍の特殊能力者リスト『スキルズ』の候補生リストに載つているのだ。スキルズのメンバーというのには、例えば身近には情報の岸一佐がいる。幕僚本部がたかが一佐の階級でしかない岸に、様々な局面で応援スペシャリストを頼んでどこからも文句がでないのは、彼が情報収集・分析専門家リストの不動のトップランカーだからだ。

膨大なパーソナル・データベースの中から、特殊な分野における専門家の候補者をリストアップしていくのも、人事管理部門の情報官の大切な仕事の一つではある。それこそ勘所が必要で、情報官のセンスが出てきてしまう場所だ。

斎藤は人事管理部門では働いたことは無いが、連中が半年に一度は更新する『スキルズ候補生リスト』には、暇があれば目を通すようしている。そこで目にする人間の名前を覚えておくと、何かの時に本当に役に立つからだ。高柳の名前を見つけたときは、はつきり言つて彼に目をつけた名も知らぬ情報官に喝采をおくりたいくらいだつた。

しかも、高柳がリストアップされているのは、事故発生時における

る対策本部を統轄するDFF（Disaster Fire Fighter））、つまり災害消防士というのだから、見る人間は見ているという格好の例だ。

これを発見したとき、斎藤は二日間ほどは、思い出しては笑つていたような気がする。それにしても、奴に立つた白羽の矢についている、事故が絶えない開拓最前線^{フロンティア}での火消し役というタグは残酷だった。無重力下（正確には微小重力下）で巨大質量をどう扱つたらいいのかの訓練と、AIをクルーにする単独任務への適性診断と、長期間に亘る劣悪環境（風呂に入れないとか、トイレが不自由とか、自分の排泄物までリサイクルされる環境への精神的な適応力とか）への耐性診断を兼ねて、ロスト・コンテナ拾いの現場に、無帰還で五年という、凶悪なプログラムが課せられていた。それを見たときには、正直、高柳に心から同情した。気の毒に。高柳にとって女の子の居ない環境に、若い身空で五年も隔離されるというのは、ほとんど拷問に等しいだろう。斎藤はスキルズ候補生リストになんか生涯、名を連ねたくないもんだと心底思つた。

とにかく賑やかなお祭りが好きで、絵に描いたような女好きの高柳には、スカダーラなんて商売は一年もやつてられないだろうという斎藤の予測を覆して、『人殺しの現場じゃなくてラッキーだつたよ』などと、ニコニコしているのだから、高柳という男は面白いのだ。斎藤は高柳に軍に志願した理由を聞いたことがある。番付きコロニー（宇宙移民初期に作られた旧式コロニーで老朽化とスラム化が激しく進んでいる）出身の高柳はこんなふうに言つた。

番付きコロニーは、生活が保証されてるんじゃない。豊かな場所に生まれた人間は、あんなところに生まれ合わせちまた人間についてなんか考えちゃいない。あそこは、家畜じゃないから屠殺もできないで、ただ人間を飼い殺しているだけの檻だよ。生まれて死ぬだけじゃ、つまらないじゃないか。

底抜けに明るい瞳の愛嬌たっぷりな男。緊急時のマジシャン。平時の昼行灯。ちょっとそこまで出掛けるかのように、軽く手を振るだけで五年任期の口スコン拾い現場に向かって行つた高柳の笑顔を、斎藤は鮮やかに覚えている。

彼があそこに追いやられたのは、新人との戦争が激化している中でだつた。人と人に似たものに銃を向けるより、閑職で労働しながら飼い殺される方がマシだと、奴は思ったかもしない。暇なときは『お寂し見舞い』と洒落込んで高柳に電話したりするのだが、そういえば最近はしていなかつた。そろそろ任期の五年が終わつた筈だ。どうなつていいのだろうか。スキルズ・リストに新しいメンバーが乗れば、速報として流れてくる。高柳の名前を最近見た覚えはない。斎藤は、何気なく、スキルズ候補生リストを目の前の個別モニターに呼び出した。見慣れた画面を暫く見つめていて、何度か見つめなおして、斎藤は思考が止まつた。

居ない……。

そこには高柳の名前は無かつた。

五年も頑張つておいて、リスト落ちかよ？ つたく、あの馬鹿、何かポカやらかしやがつたか？

斎藤は力チャ力チャと端末のキーボードを音がするくらい荒っぽく叩いて、高柳のパーソナル・データベースにアクセスした。情報部のID許可レベルは、階級で普通許可されるものより随分高いので、本来なら佐官級でなくては辿り着けない情報まで見ることができる。職務上の必要からでなく、個人の興味でパーソナル・データを照会するのは、簡単に言えば職権濫用だが、まあ、高柳のなら気にするともない。

（えつと……、リスト落ちした日時は……）

斎藤が照会できるものは、本人が見られる個人情報より多い。

（……なんだ、先週じゃないか。で……、理由は）

『帰還命令拒否』

斎藤はキーボードが並んだコンソールパネルに頭突きしそうになつた。理性がからうじて、ぶつかる箇所を机の角に修正した。机の角に当たつたからではないだろう頭痛がしてきた。スカベンジャー フィールドから帰つてくるのを、普通の人間が拒否するか？ やつぱり、高柳は、訳が分からぬ。

とりあえず暇だったので、俺は思いつくままに無重力下での注意事項を、ライダー・プールのマム（マザ・コンピュータ）に頼んで、照会しやすい画面に置いてもらつた。突つ込み野郎どもも、学生時代にゼロGで課題の作業をやらされているだろうけれど、関係ないことはキレイさっぱり忘れるよう人に聞けている。リマインダーとしてもあつた方がいいだろう。

質量がある物質がある限り、厳密な意味で無重力というのは存在しないのだが、気取つて微細重力などと表現しても分かりにくいだけだ。正確というのは大切だけど、受け取り手のレベルを越えた場合、意味がない。まさかライダー・プールに小学生は居ないだろうが、こういう場合は専門用語を殺して、パンレベ（一般レベル……も、こうは言わないのかな？）の表現にしておく方が良い。

質量差がものをいう世界なので、常に自分の質量とぶつかる相手の質量を忖度しなければならない。浮いているからといって軽くない。テラG環境の人間は、その感覚が分からぬ。浮いているものは軽く動かせると思いがちだ。ふわふわ浮いているもののそもそもの動かし難さや、一度動いてしまつたときの破壊力を想像するのは、実感としてとても難しい。

ふわふわと移動を始めてしまえば、大きな質量のものは、その大きさに相応しいだけの慣性の力を得てしまう。摩擦抵抗がない所で慣性の力がどれだけ威力があるかというと、衛星軌道で周回している人工衛星やシャトルを思い出せば簡単に察しがつくはずだ。時速二万キロ超を維持するのに、推進力発生装置をつかつていないと事実が分かりやすいだろう。

衛星軌道というのは、実は、完全に地球の重力影響圏内だ。だから、常に引力 地球に向かつて落ちようとする力が働いている。

人工衛星などは円から外に向けて飛び出していく方向に推進力をかける。速度が自然落下を振り切れるレベルに達すると、結果として常に落ち続けるが常に飛び去ろうとし続けるので、同じ高度を維持することができる、ということになる。頭の体操いいですか？

この状態に上手くもつていけば、エンジンを切っても落ちることはない。実際、静止衛星なんかは、そもそもエンジンを搭載すらしていないので、恐るべし慣性力。

話を戻そう。質量が大きいものに慣性が働く。それがオープンスペースなら問題はない。その移動する物体に体を添わして自分もその慣性の影響下に入れてしまえばいいのだ。だけどプールの中は壁だらけだ。壁に向かって質量の大きいものが漂ってきたら、その間からどんな手段を用いても、即刻逃げ出さないといけない。逃げられたら、ペしやんこ……だ。

いくらライダー・プールがテラGでも、宇宙空間にいることは変わりないので、精密機器が防水もされないまま剥き出しになつていることはないだろう。生活廃水（トイレも含めて）もキレイではないかもしだれないが、基本的に表面張力で丸くなるから、水でできたボールに完全に取り込まれて溺れるというような、見事なボケをかまさないかぎり大きな問題ではない。

問題は細かい浮遊ゴミだ。目や呼吸器に入つてしまつと、ちょっと嬉しくないことになる。台所で小麦粉の類を使つていた奥さんたちには特に、マスクを使うか、金魚鉢をかぶるよう^{ヘルメット}に指示とかないといけないな。

プールのマム・コンピュータには、開設したばかりのオープンチャットスペースにアクセスがあつた場合、先ず、無重力下での動作に慣れていない人間が、注意事項を照会できる画面に飛べるようにアイコンを作つておいてもらおう。

「ねえ、タ力さん……。どこにいるのか、教えてくれない？」

ザキさんの声に呼ばれて、皆にオープنسペースチャットに切り換えるように言つておきながら、自分の端末は通信に負荷をかけっぱなしだったのに気が付いた。余計なことまで考え込んでいてすっかり忘れてた。

「ねえ、ザキさん。料理する人？」

俺の質問は唐突すぎたかもしれない。人間は皆言葉を文脈の中で理解するのだということを忘れていた。

「タ力さん、真面目になつてよ。今、私をリサーチしてどうするのよ」

怒られても咄嗟に反応できなかつた。思つてもいなかつた角度から突つ込みがくると人間、一瞬何を言われたのか分からぬことがある。暫く考えて、漸く、嫁さん探しのナンパ男のセリフと理解されていたのだと気付き、苦笑する。ザキさんは、たしかに魅力的だけど、パンジー 柏木とタイマン張る度胸と体力がないと、アプローチするのだと命懸けになる。第一、ちつとお元気すぎる。もちつとか弱くないと、俺が腎虚になること間違ひなしだ。

「ちやうぢやう。ザキさんの手料理は食べてみたいけど、そうじやなくて、小麦粉とか、パウダーシュガーとか普通に使う人だつたら台所立入禁止ね。肺に吸い込んじゃつたら、かなりやつかいだから」思いつ切りが良いいつものザキさんの即答がない。きっと勘違いを照れているな。

「大丈夫。今日は調理済みのものしかないから」

パンジーに、ザキさんゲットするなら、料理の腕を磨いておくよう、今度会つたらさりげなく教えておいてやろう。

「それはよかつた。水は全部タマタマになつてるでしょ？」下手に衝撃与えると、分裂して霧よりはデカイ水玉ができちまう。そいつを吸い込むと、肺がむちやくちや痛いし、後で肺炎になりかねないから、できるだけ水には触るなよ。安全の為に、持つてたらでいい

けどスペジャケ着て金魚鉢かぶつた方がいい。金魚鉢持つてなかつたらマスクか、タオルで口の周りをふさいで、強盗ファッショனになつてね

俺が思いつづくままに喋ると、向うで例の「ロロロロ笑い」が聞こえた。笑つていられる内は人間なんとなる。

「了解。さすが宇宙人。頼りになるわ。で、ビニにいるの？ 一緒に居て良い？」

この場合の『一緒にいたい』を、異性に対する並々ならぬ野心と勘違いするほど、俺は間抜けではない。俺だって、女の子じゃなくとも、誰かと（できれば頼りになる奴がいい）一緒にの方が今よりはずつと心強い。特にマツチヨな人が一人居てくれると助かる。喉の渴きは本格的に耐えがたくなつてきている。

「俺もザキさんに会いたかったんだ。もしかして、飛竜の部屋に連れ込まれたことある？」

「場所は知ってるわ。柏木さんの所と一緒に？ 連れ込まれたことはないから、コンパートメント・ナンバーまでは知らないけど」ザキさんが律儀に「ロロロロ笑つてから答える。なんだ、ザキさん。そこでパンピー柏木の名前がでてくるじゃないの。パンピーちゃん、結構派あるよ。君に足りないのは質量に相応しいだけの度胸とみたね。

「場所はどの辺？」

俺にはザキさんの検索権利がないから、さつき位置情報を得ようと/orして、マムに弾かれている。

「そんなに遠くはないけど……。けよつと、部屋の外に出るの……怖くて」

無理もないか。部屋の中の惨状が、どこまでもつづいている外なんて、普通の感覚では見たくないだろう。ライダー・プールは時差を作るほど規模が大きい施設ではないから、地球時間の日本県の伝統的標準タイム、明石タイムを採用している。この事故（事件？）

が夜中から明け方に起こったのは、それでも僕偉と言えるのだろう。繁華街の中華料理屋で、炎がじょんじょん立っている時に、ゼロGで振り回されたら……。小料理屋の女将さんがてんぷらを揚げているときに、こんな事態になつていたら……。いやいや、妄想を暴走させるのは止めておいた。

一緒に居たいといつーーズを現実に反映させるには、どちらかが移動しなければならないという、基本的条件を無視することはできない。俺はマツスル階級として奴隸以下ではあるが、年齢と性差でリスクを多めにとるのは、俺の方で順当だろ？

「じゃあ、悪いけど、ザキさんの位置情報検索許可、俺にくれる？ なんとか移動してみるから」

「嬉しいけど……。タカさん、大丈夫？」

その大丈夫は、俺の体を心配しているというより、辿り着けるかどうかの能力の方を心配している感じだった。俺は大いに安請け合ひをした。

「宇宙人を信じなさい。何度も言つたでしょ。ゼロGは俺のフイールドだよ」

軍服でのこの街を泳ぐ愚かを、このときの俺は忘れていた。

* * *

他人様の家を訪なう時は帽子を脱ぎましょ。俺は、几帳面に金魚鉢を脱いでから、インタフォンを鳴らした。途端、速攻で外開きの扉が開いた。訪問者の確認くらいしてから開けた方が良いと思いつつ、意表をつかれた俺は思いつきり弾き飛ばされそうになつた。ドアノブに手を伸ばしてなんとか掴む。

良い子のザキさんは俺の言うことをちゃんと聞いて、スペース・

ジャケットを着込んでいた。肉体美を見せびらかすようなライダータイプのスペジャケは目の保養になるというか、やり場に困るというか。まあ、サービスだと思って堪能させてもらいます。

驚いたことにザキさんは、幽靈でも見定めるような目つきで俺をじつと見た後、いきなり抱きついてきた。余程不安だつたのだろうか顔色が悪い。

「遅かった……。遅かったじゃない！ 心配したのよ。どうかで漬れちゃつたのかと思って……」

こんな役得が待つてているなら、スペジャケを着とくように言つんじやなかつた。流石に金魚鉢は持つていなかつたのか、見掛けより柔らかい髪の毛が頬をくすぐつてきた。若い女の子の匂いは、本当にいいなあ……。

「柏木さんが、タカさんのこと、軍人さんだつて言つてたの、眉唾だと思つてたけど、本当に……そつだつたのね。いやだ……似合わないわ」

ちよつと涙ぐんだ目を瞬きだけで誤魔化したザキさんが、俺に抱きついたことを失策だつたと思つてはいるのか、俺の胸から腕を突つ張つて体を引き剥がしてから言つた。えらい言われ様だ。官服が似合わない男つてのは、どういう意味だろう。大体、かなりの不細工が着ても、男振りが一、二割り上がつて見えるのが、軍服つて奴の唯一の利点だつた筈だが……。

「……タカさん？ なんか、酷い顔色よ……。どこか怪我でもしたの？」

ザキさんに顔色を指摘されたせいで、俺はここに来るまでに目撃したこと、経験したこと、全てが一斉に脳裏に甦つて押し寄せた。

* * *

体の半分が潰されたようになつて苦しんでいた若い男が、震えている手を差し伸ばしてくる。彼を取り囲んでいる細かい赤い霧は、彼から失われた血であり、それを吸い込んだのか、苦しそうに顔を歪めて、かすれた声で呟いた。

「樂二……してつてくれ……よ……

「できない」

殺すのが……てめえらの商売、……だら?

「できないものは、できない」

「じゃあ……助けて……くれる……のか?」

「この問い合わせにも、俺は同じ答しか持つていない。『できないものは、できない』と。でも、それを俺は口に出して言えるのか?この重傷を負つた男に。助けることも、引導を渡すこともできないと。」

泳ぐみづ、逃げ出した背中から聞こえてきた声。

税金……泥棒……
殺していくつ!

ザキさんのコンパートメントがある場所を目指して、色々な取っかかりを蹴飛ばしながら移動する俺の足首をいきなり掴んできた男が居た。

なんとかしていけよつ。軍人さんよお。あんたらなら、なんとかできるんだろう?

知らん顔して、通りすぎくな。なんとかしていけつ。

泳ぐ。取つかかりを探して（できれば構造物にしつかりと固定されている奴がいい）、質量が大きいものに運動エネルギーを与えていよいよ氣をつけて……。

「Jのタコつ。Jの惨状見て、素通りできるのか。お前はつ！

逞しい大男。筋肉があつて、ちゃんと骨に中身が詰まつていて、普段なら豪快に俺なんかを捻り潰せる男たち。なんで軍服を着ているだけで、こんなふうに頼られなきゃならないんだ。

男。男。男。どこまでいっても壮年の男たちばかり。全く。男ばっかりで、色彩感に欠ける街だ。

それでも人間だから、自分や知り合いや、見知らぬ者であつても同じ人間が、潰され、苦しみ、為す術もなく死ぬ行く場所で、自分が何もできないのはあまりに辛くて……。誰だつて、なんとかしたいのに、なんともできなくて。

奴らだつて、多分分かつてる。軍隊つていう集団だつたらとにかく、一匹ではぐれている税金泥棒虫は自分と同じように無力だと。

けれど、この服を着た人間が、何もせずに通りすぎていくのをみれば、行きどころのない怒りをぶつける格好の的になる。

何度も、何人も、何度も、何人も……伸ばされる手。怒声。弱々しい命の炎が消えようとしている瞬間に直面した溜息。怒り。绝望。

ゼロGでの身のこなしに慣れていない奴らから逃げるのは、テラGで連中が俺をとつかまえる程度にたやすいことだ。俺は落ち着いて壁を蹴る。怒声が追い掛ってきた。

どこまでも。いつまでも。そいつらは重なっていく。足されいく。大きくなっていく。何もできない俺を責める。

* * *

「……肩……、貸してくれ」

俺はザキさんの肩に手をかけ、彼女をとつかかりに体を移動させて、背後に回り込むと、その細い……と言いたいが、俺よりは数倍みつしりと鍛え上げられた逞しい肩に、顔を押しつけた。パンティーちゃん、悪い、ちょっとザキさん貸して……。

「三十秒……でいい」

何ができる? 俺だってちゃんと一人前に無力だ。

三十秒以上は簡単に過ぎ去ったるう。けれど、俺はまだザキさん

の肩に顔を埋めていた。もちろん、俺だって胸の方が好きに決まつてるけど、そこはそれ、ザキさんは俺のママでも女房でもない。一応、理性くらいは保つている。

女の子つてのは、誰かが弱つてはいるときには、やせしく我慢強くいてくれる。だから、好きだ。野郎は「ううう」ときに、三十分過ぎたなどと平氣でほざくのだ。

だからって、甘え続けるのは、男らしくないよね。高柳君。

俺は自分に言い聞かせた。できることを、できるだけやってみる。ベターをかき集めて重ねてベストにする。ここには、学校のおうちやらけた訓練じやがない。

「……インストラクターの……オザキ先生……」

「何？ いきなり改まって」

「今……で、何秒……？」

「……85秒くらい……かしら？」

「御免、時間オーバーした」

俺は顔を上げる。30秒は人間やつてる俺の権利。残りの55秒は只の無駄。^{ロス}反省します。俺はザキさんの部屋に押し入つて、灰色のままの総合端末に直行した。やっぱりザキさんはLANモードで再起動するという意味そのものが分かっていないうつだ。ケイタイ握りしめて、メールを打ちまくつていたのだろう。

ホント。俺の馬鹿。随分時間が経つてしまった。いい加減そろそろ、マムのオープンチャットスペースに、新しい情報が入ってきてる筈だ。俺はまだ一人だ。こいつをなんとか乗り切るには、やっぱりチームがいる。飛竜……。歩ちゃん。お前たちが湧いて出でてくれる……めちゃ、助かるんだけどなあ。あと、アゴで使える実動部隊も欲しいし……。できればゼロGで動き慣れた奴。加悦さんと

が、ジョーとか。まあ、手近にいそうなパンピー柏木ちゃんが、『ザキさんは人質にとつた』の呪文で、湧いてくれてもいいよなあ。

俺は好き勝手な事を考えながら、さつさとコンソールパネルを弄つた。そういうや、まだ、ライダー・プールのマザ・コンの名前を聞いてない。繋がつたら最初に聞かなきやな。頼りになる、最初のチームメイトだ。

「キリーさん。ビー・コン誘導切るのってどうやるの？」

地球の分厚い大気を挟んで向こう側にいる柏木が叫んだ。飛竜は頭痛がしてきそうだつた。ザキさん命の柏木には、彼女がいるプールにどんな事故が起きたことでも立つてもいられないのだろう。しかし、誘導を切つて、どうやってプールに着棧できるだろうか。

「お前ね。管制^{タワー}から突入許可^{プランジ}が出て、周回待ちしてる最中に、ビーコン誘導切つて、何する気だよ」

飛竜は答は分かりきっているが、柏木をクールダウンさせるために敢えて聞いた。

「プールに帰るに決まってるじゃないですか！」

「帰れるの？　お前程度の腕で……」

自分で言つてみても、かなり厭味な物言いになつたが、熱くなつてる奴はこの位は冷たい水をぶつかけてやるに限る。飛竜の言葉に逆に柏木はいきりたつた。

「帰つてみせます」

ここまで露骨な言い方をしても怯まないつてのは、やつぱり柏木は一直線男だ。呆れた飛竜は、投げやりに言つた。

「んじや、ライトプラン出して。俺、プールに送つてやるから。誰か旗でも振つて誘導してくれるかもな……」

「キリーさん……」

ここまで言わないと落ち着かないとは、さすが熱い男、柏木だけのことはある。充分に柏木が萎れたのを確認してから、静かに飛竜は断じた。

「お前が手動でプールに突っ込んで、上手く桟橋にはまれれば良いけどな、目測誤って壁に穴でも開けちまつたら、お前が死ぬだけじや済まないぞ。それこそ大量殺人犯になっちまつぜ」

「でも……。あそこには……」

「ここでザキさんがと言わないところが、まあ、柏木の可愛いところだ。飛竜は側で肩を叩けない距離に躰を噛みながらも、努めて明るい声を出した。

「あそこには、タカがいる。大丈夫だ」

「タカさん？ スカダーなんてクソみたいな商売、眞面目に何年もやつてるようなオヤジに、何ができるって言うんですか？」

「まあ、噛みつくな。柏木。じゃあ聞くけどな、お前なら、たつた一人で五年以上を過ごせるか？」

「……え？」

「精神に異状もきたさず、黙々と毎日の仕事を、ヒューマンライクなA.I.は手元にいるらしいが、完全にたつた一人でだ。お前なら続けられるか？ 休日はあるが、息抜きにいくところはない。給料が入つても使う場面がない。俺たちみたいに酒場でクダもまけない。一週間じゃない。一年でもない。五年だ。お前、耐えられるか？ 太陽光フレアが観測されたら母船に逃げ込まなきゃならないほど極端に薄っぺらい構造しか持つてないライトフライヤー（軽飛行機）で物質の密度が極端に薄い宙域を飛べるか？ ジャンプステーションでもない空間目指してジャンプできるか？ そんなところで、有Gに帰つたら遊ぶぞつて、母船の回収用アームを振り回させて耐G訓練するなんて馬鹿なこと、正氣でつづけられるか？」

柏木は気押されたようにライダーシートの背もたれに背中を押しつけると、飛竜が立て板に水とまくしたてた一つ一つの言葉を呑み込んでいく。

できない。

「学校で、高柳は、マジシャンと呼ばれていた。とにかくいざとい
う時にヤツくらい頼りになる人間は滅多にいない。緊急事態つてヤ
ツは、高柳にスイッチを入れるんだ。どうせ今頃はもうスイッチが
入っちゃってるだろうよ。非常時に非常時だと嗅ぎつけるセンスだ
ってピカイチだ。あん中にいるどの専門家より早く、被害を最少に
くい止める行動を始めているはずだ。奴は情報が悠長に出揃つまで
動けない一般人とは、種類が違う人間だ。ザキさんのために喜べ。
俺やお前があそこにいるより、彼女にとつてはよっぽど運がいいぞ
「で……、でも、俺も何かしたい！」

子どもが自棄になつたように言葉を吐き出す。飛竜は肩を大きく
竦めてから、腕の重みでどさつと下ろして、鼻を鳴らした。

「俺もだ。でも、何ができる？ 動く前に考えるんだ。なあ、柏木。
俺たち、何かできるのか？」

カツ……カツっと、音がする。管制回線が一般通話に強制的に割
り込んできたのだろう。柏木は気持を切り換えた。回線の方は柏木
がなんとかしなくても自動的に管制に繋がる。

若タ……号。……かた……ゴ……応ト……願い……す。

「霧島運輸所属、若鷹二号、機長柏木です」

O C (O v e r c r o w d e d C o n d i t i o n s) 未解

消です。周回ウェイティング続行してください。

「了解。ロード変更の必要は？」

アリ……ン。

どうせ確認作業など、只の手続きだ。ルートを変えたくても、ブ
ールに飛んで行きたくても、このまま暫く回つているしかできない
のだ。最後の『ン』だけ聞こえれば充分と、柏木はさつさと通話を
切つて、速攻で霧島運輸の交換セクションをコールした。

「ヤングイーグル柏木です。キリーさんのカニカマ、回線あいてる

？」

交換手がでるなり、いきりなまくし立てた柏木に、ミセス・キャロットが答える。蛇足だがミセス・キャロットというのは名前ではない。人参色に髪の毛を染めているからそう呼ばれているだけだ。

「残念ね。若鷹。キリーさんはダメ元でやつてみるつて、プールのお友だちに「ホールしてるわ。繫がらないみたいだけど。御曹司の回線はビジー」

柏木は舌打ちをする。直後にミセス・キャロットが付け加えなければ、肘掛けを殴つていたかもしれない。

「御曹司から伝言。『プールに居る人間に電話してみる。繫がらなかつたら直ぐかけ直すから、回線あけておけ』、だそうよ。ついでに『情報欲しいからニュースでも見ててくれ』ですって」

自分が見りやア良いじやないかと思いつつ、ちゃんと指示通りに手が動いて、柏木はサブ端末にニュースヘッドラインを呼び出した。

サンガで事故？ 連結部分で爆発観測。専門家、連結部の構造的欠陥を指摘。

ライダー・プール（1テラGの地球への玄関口）、サンガから離脱。

続報。プールは地球へ落下か？

「おいつ、ちょっと待てよ……。プールの高度が下がつてると窓に張りついて目視で確認したくても、自分の愛機はぐるぐると地球を回っている。見掛けは静止しているサンガやプールがもう一度視界に入つてくるのは、多分70分後位だ。次に彼らが視界に入つた時に、紅蓮くれんの炎を揺らめかして、深い角度で地球に向かつて落ちていく……、なんて場面じやないだろうな。ホント、勘弁してくれ。

柏木は続報のタイトルを選んで、詳報画面に飛んだ。ウェブの文

字ニユースが一番早いとは限らないので、画面を更に分割して、一方でテレビ画面を呼び出す。トークショーだったが、『事故？ 事件？ ライダー・プール、サンガから脱離』と画面右上に表示がついて、画面の下に字幕で速報がどんどん流れていたので、そっちの方はニユース番組を探す手間を省いてそのまま放置した。

高度が僅かずつではあるが下がってきていたことが観測されている。ライダー・プールには推進力発生装置は搭載されていない。このまま、修正されないと重力が遠心力を上回り、徐々に加速度を上げつつ落下に至る可能性もあるといつ。

柏木は頭を搔きむしりたくなつた。弾かれても良い。討ち死にしても良い。ザキさんに好きだという一言を告げられないまま、あの人が燃えていくのを見るなんて、勘弁してくれ。プールが落下したら、俺も一緒に落ちちまおうか……。とにかく、プールに残されている人たちにとって時間を少しでも稼げるのは、突入角度が大きくて燃え尽きるバージョンより、浅くして弾かれるバージョンだ。一度角度が付きだすと、慣性力が落下の方向に働き、ますます角度をつけて加速していく恐れもある。

そもそもプールには太陽の直射光の温度を耐える程度の耐熱対策しかとられていないはずだ。大気圏突入時の摩擦熱などには一筋の配慮もされていない。そんなものが重力に完全に囚われてしまつたら、燃えあがつて、大きすぎるために燃え残つて、灼熱の塊が地表に降りそそぐ事態になりかねない。海ならまだましだが、人が住んでいる地域にそんなものが降つたら、紛うことなき大惨事つてやつだ。

穏やかでない妄想に苛まれつつ、柏木は忙しなく、物凄い情報量溢れる、ネットの海で溺れていた。どこに、役に立つ情報なんてあるのだ。言いたくないが、情報処理の成績は赤点スレスレだった。

ペーパー問題は満遍なくできるのが当然のキリーさんが自分でやればいいのだ。

一体、どんな情報をどう集めたら、俺ができる何かが見つかるのだろうか。無責任な飛竜の出した宿題にそれでも柏木が取り組もうとしているのは、もちろん、何かをせずにはいられないからだ。ただ、飛竜からの呼び出しを待つているには、焦燥感が強すぎた。

* * *

誰を呼び出しても繋がらない。どの会社を使おうとしても弾かれる。霧島飛竜は深い溜息と共に操作盤から手を下ろした。プールの人口は確か一万人規模。その位の規模はある街なのに、外部とネットワークで繋がっている有線・無線の全てが一度に壊れるというのは想像を絶する。けれど、たしか構造的に通信ノイズを減らすために、回転速度がありすぎるプールには、一般通話の衛星無線のアンテナは無かつたように覚えている。クリアな音声を宣言文句にする民間の通信網では、無線としてはサンガの基地局に信号を受け取つてもらい、そのファイバー網に取り込まれてから、プール内に移動して無線通信網に再度乗るというややこしい経路をしていると、聞いたことがある気がする。

民間会社の通信網は全滅か……。

民間がダメなら、どこのが使えるのだろうか。そう考えたとき、ふと、操船学校時代によくつるんでいた仲間で、高柳とは別のもう一人の顔を思い出した。

齊藤歩。さいとうあゆむ

彼も高柳と同じように、極東アジア国軍に所属していて、いわゆる税金泥棒組みという、ありがたくもない括りでよばれる仲間だった。兵士として訓練されるでもなく、防衛大学をあつさりと卒業した上で、まだ学生生活に未練があるのか、色彩を異にしている航空宇宙専門学校に出向して来ていた。連中と俺たち普通の学生が決定的に違っていた点がある。俺たちは学費を納めて学んでいたのに、奴らは『安月給』と文句を言つてはいたが、給料をもらいながら学んでいたのだ。

操船学校時代に進学したとき、企業経営を学ばせたいと思つていたらしい飛竜の父親は不機嫌の塊みたいになつた。それで断固として仕送りを拒まれた。学費は特待生になることで抑え、無利子貸との奨学金と年の離れた長姉のポケットマネーで、なんとか生活費をまかなつていた。が、軍資金の面で学費は軍持ち、生活費は給料というあの一人の境遇は羨ましかつた。

成績落下が即ち学費納入に直結しては、断固として折れない父親を見返すためにも、必至に食らい付いてトップクラスの成績を維持する必要が有つた。なのに昼行灯の高柳は全体的に赤点ストレスレ。齊藤は情報処理と軌道計算は常にトップクラスで、それ以外は見事に赤点という偏りようでも、小遣いに不自由している様子はなかつたのだ。

まあ、あの一人の財布がなければ、学生時代は灰色の勉強三昧で終わつていただろうから、文句を言つつもりはない。とにかく、飛竜としては、宇宙船乗りになりたいだけで進学したつもりはなかつた。姉というよりおばさんみたいな年の長姉が、企業経営の専門学校を特Aで卒業して経営に加わつてているのだから、そつちはあの人任せおけばいい、下手に波風立てないで、と、そういうつもりもあつたのだ。そんな飛竜の心遣い(のつもり)は、彼の父親には未だ理解してもらえていないようだ。

緊急事態回避訓練の時にだけ、異常に燃える高柳と、情報収集に關して偏執狂の斎藤。いまの世の中で、志願して軍人になろうなんて奴には、全く妙なやつしか居ない。なのに、自分のような常識人が奴らと馬が合つたのだから、人間関係といつのは本当に不思議なものだ。

猪突猛進、進み出したら止まらない、周りがまるで見えなくなる生きた傍迷惑。『突つ込み野郎』と飛竜を評している高柳と斎藤が聞いたら、絶対に同意しないような事を考えつつ、飛竜は斎藤ならもう少し詳しい状況を知っているのではないかと思い至った。

けれど軍の通信網と宙港管制管区との双方向通信は混線回避の目的から原則として禁止されている。有線電話できる位置になんとか移動したい。

「タワー。応答願います」

インカムに飛竜は喋っていた。少しだけ間が空いてから管制の声が聞こえてきた。

「宙港管制です。カタ……カー……ま、じゅうもん……ジー号、どうぞ」

好き放題言つている会社の交換連中にも腹は立つが、頑張つて呼んでくれる管制の発音にも気が抜ける。片鎌十文字号はキレもいい、文句のないシャトルだが、このめちゃくちゃマイナーな武器由来のネーミングは絶対にオヤジの嫌がらせだ。

「霧島運輸所属、片鎌十文字号、機長霧島です。当機、^{ディステイネーション}仕向地のサンガ、バージ（浮）シャトル・ピア（桟橋）、使用不能についての問い合わせです。現実問題としてフライトは不可能ですよね。混雑回避の為、ウェイティング・ローンから抜けられますか？」どうぞ

地球上の宙港は、赤道上で気象が安定していることが条件だから、仕向け地別に作るなんてことはできない。だから、仕向け地がどこであるかに問わらず、フライトプラン受理順に行儀よくならんでい

る。ここから大きなコンテナを抱えて離陸したバージ・シャトルは、シャトルロードで移動しながら目的地の宙港都市衛星の管制管区に入つてから、仕向け地のビーコン誘導でロードから離脱する。こんなにもここにシャトルが詰まっているのは、サンガ向けの数機が糞詰まっているからに違いない。他の港向けの連中は煽りを食らつて氣の毒なことだ。

自分たちが離陸組が掃けないと、柏木たちもシャトルロードをグルグルと回り続ける破目になるだろう。シャトルロードでは慣性飛行だから燃料などに問題はないが、いつまで待てば良いのか分からぬといふのは、結構、辛抱が要るものだ。もっとも今はザキさんに一ミリでも近い場所に居たいだろうから、柏木はいま着陸許可が出たら憤慨するに違いない。ウェイティング王と言われるくらい、何故か誰よりも周回待ちに引っかかりやすい不運の持ち主だが、今日は周回待ちを喜んでいるに違いない。

「デスティネーション・サンガのシャトルは、ウェイティング時間が長いものから順に移動しています。もう少しお待ちいただけないでしょうか」

「少しつて、どの位かかりますか?」

「そちらへのお答えも少々お待ちいただきませんと

「……了解。通話終わります」

状況は何も変わらない。仕方なく柏木を呼び出す。どうせまた、例の不愉快なカマカマだのカニカマだと呼ばれるのだ。こっちもミセス・キャロットと呼んでやろうかと大人げなく思わないでもない位だ。

「柏木。待たせたな。こつちは収穫ゼロだ。そつちはなんか分かってか?」

「…ます」

消え入るよ、なたのなに声。

なんだ?
聞こえない。
ちゃんと書いてくれる

「皆死んじゃいます

絶望に蝕まれたような力のな

絶望に蝕まれたような力のない声だった。
「…………」

……なんで、そういう結論になるんだよ。柏木
ただけだろう？」構造自体に問題はないはずだ」「サンガと干切れ

「高度が……、プールの高度が落ちてきてるんですね」

「……なんだつて？ 引力に捕まつちまつたのか？ で、どの位速

度が落ちてるんだ」

柏木は飛竜のその質問には答えず、處ろに響く声で咳いた。

だめだ。柏木は役に立たない……。まったくもう、デカイ団体をして、情け無いやつだ。大体、人一倍鈍いやつがいけない。ザキさんだつて、誰が見たつて柏木に惚れてるのだ。さつさと押し倒せば、めでたしめでたしなものを、間抜けにもザキさんの気持ちに全く気付いてないのだ。こういうのは傍で見ている方がよく分かる。もつとも、見掛けによらない純情な柏木の、いじらしい間抜けさを面白がつて、背中の一つも押してやらなかつた俺も悪い。飛竜は少しだけ後ろめたく後悔した。明日が今日の続きでない。そんなことは誰にだって分かつていてるのに。

もう、ダメだ。一瞬だつて我慢できない。

管制からの応答を待たずに、飛竜は一方的にインカムに怒鳴りつけると、呼びとめられるのが厭さに金魚鉢を放り棄てた。少し考へ

る。シャトルの値段を考えればオヤジの禿^{ハゲ}が赤く茹だるのが見えるようだ。飛竜は全ての電気系統を片つ端から切つていき、全ての電気が死んだところで、非常脱出コック操作ハンドルのプラスチックカバーを拳骨で殴つて叩き壊した。水道の元栓のような大きさのハンドルを両手で力一杯に回すと、搭乗口のハッチがゆっくりと跳ね上がる。それから、ふしゅっと妙な音がして、避難用緩降具が膨らみ、巨大な滑り台の様なものができる。飛竜は摩擦に強いライダー・スーシを信頼して思い切りよく飛び乗る。勢い余つてアスファルトで少し擦れたが、細かいことは気にしない。

建物まで自力で走るには距離がありすぎる。周りを見回すと、何故か丁度いい距離に、地上誘導官が移動に使うカートが転がつている。

こんなもん、どうせハンドルとアクセルとブレーキしかない。こけたつて顔さえ打たなければライダー・スーシが守ってくれる。飛竜はカートに飛び乗ると、普通はアクセルになつていてる右についたペダルを思い切りよく踏み込み抜いた。電動カートはエンジン音もなくいきなり最高速度に加速した。

ヘルメット
金魚鉢をかぶつてないので風が頬をなぶつていく。そんなことを考えるには不謹慎なタイミングなのだが、それでも飛竜は思つた。

地球の風だ。めっちゃ、気持ちいい！

美咲が居ないと、正直ものすごい楽だ。なんで赤ちゃんには手間がかかるということが分かつてくれないのでどうつか。美咲の弟、圭太がまだお腹に居たときから奇怪しかった。簡単なことができなくなつた。なんでも自分でテキパキできた子なのに、お人形さんのように可愛らしいと、誰からも言つてもらえる娘だったのに。

十歳というのは、女の子の山場だと誰かが言つていた。美咲のようにはつそりとスレンダーな娘は、もう二、三年は女の体にならなくて済むだらうと思つていたけれど、もしかしたら早くに生理が始まってしまうのかもしれない。ホルモンバランスが激変するせいか、『生理が始まる前の一年くらいは、女の子つて扱いにくいわよ』とは、美咲の時と幼稚園が一緒だった先輩ママの言である。

とにかく、何から何まで気に触る。田を離せばで赤ちゃんをつねる。血がにじむほどに爪をたてるのだ。美咲はこんなに恐ろしい子どもだつたろうか。髪の束を口に入れん。人形を縛つて遊ぶ。『人攫いに攫われるの』といって、椅子に縛りつけられている人形を見たときはぞつとした。私の天使はどこに行つてしまつたのだろう。

正直言つて、この一週間は平和だつた。あの馬鹿で下品な塩屋さん所のガキに乗せられて、近所や学校まで巻き込んで大騒ぎをして探させて、心配させて。先生や近所の奥様たちに頭をさげて。こんなに恥ずかしい思いをしたのは、本当に生まれて初めてだ。圭太は二コ二コと穢やかに眠り、おっぱいをのんで、おぐびをだす。可愛い。

美咲の時は何もかも初めてで、緊張していたのだろうか。息をし

ているのか、ちゃんと育っているのか、心配で心配で。こんなふうに『可愛い』と思ったことがあつたろうか？ 帰つてくるなとは言いたくないが、はつきり言つて気が重い。どうやって迎えに行けばいいのだろうか。叱ればいいのか。甘やかしすぎたのだから、お尻くらいは叩いてやらなければ、けじめを教えないのと一緒にかもしない。それとも、育児書に書いてあるように、赤ちゃんがきて寂しいのだから、充分に甘えさせてやらなければならないのだろうか。あんな大きな子を赤ちゃんのように抱っこしてあげる、なんて、正直ぞつとする。

それに、迎えに行くときは、あの塩屋のママと顔を合わせなればならない。遊星君のママは悪くないけれど、あの人は、いくら遊星君と崇が仲がよいかからといって、塩屋さんを買いかぶりすぎる。子どもを育てるのは家族がいても大変だ。結婚もしないで子供を産むような女に、立派に子どもを育てる事なんか無理に決まっている。私だってできないのに。

ドロドロとしたものを抱えながら、お菓子を山盛りにした皿と大きめのマグカップを小さいテーブルに置いて、越智美咲の母親はテレビ画面を呼び出した。美咲には、こんなジャンクなものは食べさせられない。母乳を出している間は、本当はこんなものを食べない方がいいのは分かっているのだけれど、いつもいつも手料理に手作りお菓子は疲れてしまう。体にいいもの。優しいもの。折角選んで頑張つて作っているのに、おからのクッキーを残して出掛けて行つた日に、公園で崇のガキの袋菓子を食べていたことも有つた。なんであんな下品なことをするのだろう。

「やだ。知らなかつた。大きな事故みたいね。馬鹿みたい。皆でわいわい騒ぐだけで。コメントテーターって人種は、頭悪いって皆知らないのよね」

独り言を口に出して、美咲のママである越智涼子はミルクをタップリ入れたコーヒーを口にした。カフェインはダメなんだけど、これだけミルクを入れているから大丈夫。

……軍は、軌道計算上、大気圏で燃え尽きず、地表に激突することが確実な……を、最初は破壊するとしているのですが、人道的にみて、どうなんでしょうか。

「私たちの地球に、また人間の作つたものが害を与えるのか。厭なこと」

チヨコレートをつまむ。美咲に見つかったら、食べちゃダメというのに苦労する。なんでこの年になつて隠れ食いするのか、自分で可笑しくなる。

「Jのよな事態が何故発生したのか、専門家の……先生に、お話を伺つてみたいと思います。……先生、先生はネオシャンガンの宇宙航空大学で十年前まで教鞭をとつておられ……

「日本語は『とつていらつしゃいました』よね。普通。本当にいつも、この女の子の表現つて変なのよね。こんなの使うなつてクレーム行かないのかしら」

馬鹿馬鹿しいから、他の番組を見ようとしたが、どにもコメンテーターだのゲストだのの顔触れが違うだけで、同じ事件を扱つているようだ。一体、どこの何が、地球に落ちると大騒ぎしているのだらう。

原因はまだ分かつていませんが、サンガから脱離した、この脱離という表現も珍しいですね。ジョイントが外れて離れてしまった

ところだとしようか。分かりやすく書つよ。

「サンガ? いいの話? いやだ、どつかのコロニーの事故じゃないの?」

初めて美咲のママは画面を真面目に見つめた。左肩に文字がでている。

『サンガのライダー・プール、地球に落下か?』

手が震える。田が文字を理解しようと何度も何度も画面を滑る。

「み……、美咲。ど、どつじょ。美咲がいるの? あそこに美咲が……いるのに……」

自分でも可笑しくなるくらいに手が震えている。マグカップのミルクコーヒーが冗談のように派手に零れて、お気に入りの白いスターに衣魚を作る。

「どつじょ。……どついたらいいの? 美咲ちゃん。美咲ちゃん……」

手が震えたまま携帯端末に無意識に伸びた。美咲の友だちだから、仕方なく聞いた塩屋ママの番号を選べば。

「どつじょ。……。美咲が死んじゃう。……どつじょ。……。どつじょ。……」

* * *

営業職は厳しい仕事だ。ノルマ、達成度、次のノルマ。休む暇がない。成績を上げなければ査定に響くし、ノルマをちゃんと満たせば、次の四半期のノルマはさらに大きくなる。パイの大きさは決まっているのだ。保険の営業は、学歴や立場を問われない。とにかく契約をとつてくれば勝ちだ。結婚を約束した男と子どもを作つて、結婚前に逃げられた馬鹿な女には、大変だからといって仕事を選んでいる暇はなかつた。赤ちゃんの時から保育所に預けて、学校に行つたら学童保育と公園で野放し。会議や付き合いで遅くなると、崇はいつも一人で食事を取るのだ。可哀相だなんて言つてられない。崇もこれから大きくなるのだ。頭がどびきりいい子なら問題はないのだが、学期ごとにくる通知表にはいつも『落ち着きがありません』と書かれてしまう。成績表だってバカでもとれる真ん中より、下の数字がついている。男の子なら学校へ行かなくて良いとは言えないし、私学に進学せらるならお金はいくらあつても無駄でない。

その時、携帯端末が激しく音を立てた。会議中の全員の視線が集中する。しまつた。切つておくのを忘れた。ひとつ大きなボカだ。誰、こんな真つ昼間に携帯を鳴らすアホは。

画面を見て、塩屋さとみは天を仰いだ。あの、化粧オバケ、いつも白いスカートを着ている勘違い女、美咲ちゃんのママだ。美咲ちゃんはいつも崇と遊んでくれる。ちょっと落ち着きがない崇をちゃんと抑えてくれる、本当に賢い子だ。あのアホそのものの女から、どうしてあんないい子が生まれてくるのか不思議だ。

赤ちゃんが生まれて、男の子が可愛いのは自分だって同じだから分かるけど、あれだけ美咲ちゃんが全身で寂しいと訴えているのに、

全然気付いてやれないのだ。それでいて、バイオリンやピアノやバレエ。それから英語。お稽古三昧。たまにサボつて崇と遊ぶのくらいい多めに見てやればいいの。」

今日の夕方に崇をライダー・プールへのゲートに迎えに行くのと、一緒に行こうとは約束はしていたけれど、いへりなんでも早すぎる。

「もしもし。塩屋です。越智さん。申し訳ないんですけど会議中ですのと、後ほどおかけ直しさせていただけて、宜しいでしょうか？」

今アプローチをかけているお宅の、ちよつと訳がわからない奥さんだと、後で主任に聞いて訳しておこう。

「どうしよう。ねえ。どうしたらいいの？」

訳がわからない女だとは思っていたけれど、ビリまで壊れているのだろう。さつさと切らないと査定がさがる。

「すみませんが、後にしてくれませんか？」

「ねえ……。テレビみてない？ お願い……どうしましよう。」

テレビ？ いくらなんでも、正氣じゃない。越智さんはこつも奇怪しげが、ここまで非常識じゃない。どちらかというと、常識人ぶつて人の非常識をあざ笑うのを生き甲斐にしてくるみたいな人だ。

「越智さん？ どうしました？ あの、どこかお加減でも悪いんじやありません？」

「…………どうしよう。あの子たちが死んじゃう。…………美咲が…………いるのに。美咲が、いるのに。死んじゃう…………」

「美咲ちゃんが死んじゃつって、どうこいつ意味です？　越智さん。ちょっと大丈夫ですか？」

営業会議中に私用電話なんて、そりでなくても心証わるすぎるのだが、どうにも落ち着かない。

「ライダー・プールが、地球に落ちるんですって……。燃えちゃうんですよ。美咲も、崇君も遊星君も……燃えちゃうんですよ。……どうしましょ。」

「ライダー・プールが地球に落ちる？　そんな馬鹿なことあるものですか。テレビ。テレビを見れば、やつてるの？　崇も遊星君も死ぬなんて、そんな馬鹿馬鹿しいことを。」

「部長、すみません。ちょっと失礼します」
壁面の総合端末にテレビ番組を呼び出す。

「塩屋さん。テレビなんか家に帰つてから見ればいいだろ？　會議中に、君のようなトップセールスがそんなんじゃ、示しがつかない……」

地球に落下が確実となつたテラG施設、通称ライダー・プールが今取つていいのがこのコースなんですね。先生。それで軍は民間のシャトル運航会社に応援を頼んで、このように下からぶつけてですね、大気圏に突入する角度を、大気圏に弾かれる角度にまで変えようといつ、そういう事なんですが、このようなことをして、ライダー・プールに住まわれている皆さんは大丈夫なのでしょうか？

そうですね。外のこの居住区であるドーナツ部分にさくぶつけなければ、おそらく大丈夫なのではないでしょうか。担当官の説明

によると、この中央倉庫部分にぶつける予定だそうです。私は、シヤトルがライダー・プールにコンテナを当てるより、テラ・マスドライバーで打ち上げられたコンテナを、シャトル程度の機動力しかもたないもので、捕まえられるかどうかの方が難しいと考えています。

「この中央の倉庫というのは、無人なのですか？」

「はい。大体の倉庫管理業務はロボット作業になっています。無人ですね。」

「馬鹿言わないでッ。このドアホ。そこは祟がいるのよッ」

さとみの声は絶叫だった。叱責しかけた営業部長も画面に釘付けになつた。セールスレディーの塩屋さんの所の息子が、冒険と称してコンテナに紛れ込んでライダー・プールに出掛けて、Gショックで死にかけたと聞いたのは先週のことだ。男の子はなんでこんなに落ち着きがないのかと、溜息をついていた。なんでも、サンガの居住区に地球産の病原菌を持ち込まない為に、総合ワクチンを打つてから一週間もライダー・プールからは出られないらしいが、回転軸に近いルナG並の低重力の倉庫に、缶詰にされているといって、困つたといいながら豪快に話してくれていた。

シングルママになつた経緯も彼女は隠さないし、ほんとうにあけっぴろげな性格は男前な女性だ。さとみは、越智涼子との通話を一方的に切ると、テレビ画面にかけてある『じ意見はこひら』の番号を回しだした。

「あ。視聴者のどなたからか電話ですね。ちょっとお話ししてみましょう。」

「「」のボケつ」

電話が繋がるなり、さとみは絶叫した。テレビからさとみの声が聞こえてくる。

「いい? そこにはうちの子がいるの。いつも無人かもしけないけど、無人なんかじゃないの。あんたたち、うちの子を殺す気?」

え? あの、お名前をどうだ? あの、どういったご意見ですか? あの、電話番号をお聞違えになつてしませんよね?

進行役の女の子が露骨に困った顔をしている。ちゃんと相手を確認してからとらないと、えてしてこうじつ貧乏籠を引いてしまう。

どうぞ、番号をお確かめになつて。

「番号は合つてるわよ。いい? うちの馬鹿息子が友だちの女の子と男の子を誘つて、ライダー・プールに冒険に行つたの。馬鹿でしょう? 育て方間違つたの。それはいいの。ルナGの子がテラGにいきなり行つて、無事に済む訳ないでしょ? それで、168ルールに引っかかっちゃつて、そこに保護してもらつてるの。ちょっと聞いてる?」

先生。168ルールつて……何でしょ?~

地球との往復が頻繁な職種の人たちは、どうしても地球産の活発な病原菌の媒体者になりがちなのです。それで、ライダー・プールはGの違いだけでなく、サンガ本体とは隔離されている訳です。この施設からサンガへのゲートをくぐるには、ライダー・プールは潜在的に病原菌に汚染されているだらうといつ前提になつていまして、総合ワクチンを接種してから約一週間の間はサンガへくることはできないのです。それが168ルールと呼ばれるもので……。

「どこの教授がそこまで説明すると、ただの主婦が発した168ルールという言葉が俄然重みを持つてくれる。一般に知られている習慣でなければ、そういう事実があるといつのは眉唾ではない可能性が高くなる。これは、スクープかもしれない。鴨が葱背負つてくることも世の中にはあるのだ。

奥さん？ あのお名前をお願いできますか？

奥からディレクターのような男が出てきて呼びかけてきた。

「学校にでもなんでも問い合わせて。私は塩屋さとみと言います。そこにいるのは、第四学区の第三小学校の五年生。小柳遊星くんだけ11歳。うちの馬鹿息子、塩屋崇と、友だちの女の子、越智美咲ちゃんは10歳よ。ライダー・プールのゲートに問い合わせれば直ぐ分かるわ。今日夕方迎えに行くはずだつたんだから」

「うりやあ、どえりこー」とだだ。

視聴者の皆さま。当放送局は事実確認を早急にし、子どもたちがいることが事実であれば、軍に即刻、作業を中止するように要請します。どうぞ、続報をお待ちください。チャンネルはそのまま。

遊星ママ、セシリ亞小柳はせつせとベランダのプランターの手入れをしていた。遊星は同じ年頃の子と比べて大きいせいが、とにかく

* * *

く良く食べる。朝御飯を食べながら、夕御飯と給食のメニューを気にするような食いしん坊だ。長男はもう専門大学生で寮暮らしをしている。この一週間、パパと一人で食べる夕食は、なんだか味気なく、いつもより少なめに炊いたご飯も残りがちだった。冷凍ご飯の塊が随分増殖してしまった。もつとも、遊星さえ帰つてくれば、おにぎりにでもしておけば、いつの間にか無くなつている筈だから、心配することはない。

パパが多分、たっぷり遊星の油を絞つてくれるはずだから、せめて夕御飯だけは大好物を用意しておこうと朝から張り切りすぎて、思つたより早く、支度が済んでしまつた。

食事以外は手間がかからない遊星だが、やはり、帰宅時間を気にしたり、塾への送り迎えなど、けつこう時間は細切れになつていた。遊星が赤ん坊の時はせつせとやつていた趣味の編み物を、ちょっと暇に任せて始めてみれば、やはりもともと好きなだけあって面白く、時間は飛ぶように過ぎてしまつた。来年の修学旅行は、毎年そうだから月^{ルナ}だろう。学校でいくそれだけ、たつた一泊。（移動があるからもうちょっとかかるけど）おにいちゃんの方がやんちゃだで手がかかつた覚えがあるので、あの子が趣味にしていた家出だつて半日が良いところだつた。

まさかあのおとなしい遊星が、わざわざ夏休みが終わつてから、一週間も計画的に学校をサボるなんて大胆なことをやらかすとは、これっぽっちも思つていなかつた。男の子はまったく油断がならぬい。

越智さんのベランダや玄関先のポーチには、色とりどりの花が咲いているが、うちのベランダにあるのは、全部食べられるものばかり。ミニトマト。きゅうり。なす。お米の袋に穴をあけて大根。ちよつとおしゃれな花はハーブ類。ミント。ローズマリー。セージ。遊星がいつつまみ食いをするかしれたものでないので、農薬なんか

は使えない。全く遊星と虫と競争で食べあがやつのだから、まともなものを受け取るのは大変だ。

こんな自然と隔絶したスペース・コロニーまでやつてきて、いつの間にかびつしりとついているアブラムシの健気さには頭が下がる。息子の為に作っているベランダ菜園なのだ。ムシ」ときにやるエサではない。

セシリアは親指と人指し指の腹を合わせて、茎についたアブラムシをすりつぶした。バッグの中に入れっぱなしの携帯端末が鳴つているのには、全く気付かなかつた。

それでも、呼び鈴がけたましく連打されれば流石に気がつく。もうちよつと虫退治をしてしまったが、そんな風に問答無用に呼ばれると、急いで出る気が無くなつてしまつ。彼女は丁寧に手を洗つてからインタフォンに応答した。

「越智さん!……、塩屋さん?」

性格が違うといつてしまえばそれまでなのだが、この一人の^そ反りの合わなさには、いつも呆れているセシリアだ。並んで玄関前にいるというだけで驚きだ。大体、子どもの用でこの人たちと一緒にに出掛けざるを得なかつたとき、自分はいつもサンドイッチの具になつてゐる。喋るのは私と越智さん。私と塩屋さん。この一人は滅多に喋らないのに。ああ、そうだ。遊星を迎えに行く時間になつていたのかもしれない。

つい虫退治に熱中しすぎたのかも。でも、いくらなんでも……そんなにしてたかしら?

壁にかかつた時計の針はまだ3時。集合時間はたしか5時で間違ひなかつたはず。越智さんだけなら、いく前にお茶でもしましよう

と、手作りのお菓子をもつて早めにくる事も無ことは言えないけど、
塙屋さんは仕事中のはずだ。

「ニュース。……ニュース見てないの？ テレビのトークショー
でも……。

「ニュース？ トークショー？

たくさん書き込みをみると頭が痛くなる。情報に皆が飢えていたということだろう。虚虚実実。こんなとき、データマン齊藤がいてくれたら。何度も無い物ねだりをして、苦笑する。今ないものは、使えない。これ、基本。

協力を申し出てくれる人の中、IRO許可レベルが高くて、データ分析に勘が働きそうな人間をピックアップするのは、どちらかといふと苦手だ。とにかく、文章を読み解くのが苦手なのだから、この文字の羅列をみると倒れたくなる。

齊藤歩

に言わせると、必要なデータは、浮いて見えるとか、向うから呼びかけてくれるとか、アブナイ事を言つ。そこまでイッちゃんてる人間は滅多に居ないだろう。あいつが扱う特殊言語は、なんでもホスト・コンピュータが作り出す擬似人格とトークするのではなく、直接、連中のデータベースを覗けるという凶悪なものらしい。齊藤の氣分次第で、背景はピンクだつたり（趣味が悪すぎる）ブルーだつたりする単色の画面に、知つてゐる筈の記号が、訳がわからぬ順番でならんでいるのをみると、正直気持が悪くなる。

俺が途方に暮れたくなるのを叱咤して、最初の方の書き込み画面を見ようと手動でスクロールさせていると、ふちつといつた雰囲気で画面が一瞬灰色になつた。

電気系統が……イカれた？

時間を喰らうとしたのだろうか。背中に冷や汗が伝う。

物凄い砂嵐のようなノイズが走つてから、カチッと画像のブレが

止まる。そこに浮かび出た顔を見て、俺は叫んでいた。

「あゆみちゃん！」

画面の向うの老けた親父顔も叫んでいた。

「優美ちゃん！」

「俺は『あゆむ』だ。このパートレが、いい加減に覚える」
向うがいい加減聞き飽きた毎度の突っ込みを入れると、俺が
「名前で呼ぶな！ このタコ！」

と、叫んだのとほぼ同時だつた。打てば響くとはこの感覚。ああ、
若返る。

お約束の「挨拶を済ませた俺たちは、ニヤッと中年らしく（はつ
きつ）言って、可愛げがない）笑顔になつた。なんで、ママのモニタ
ーに歩が湧いて出たのかは不明だが、きっと俺の切なる願いを、ど
こぞの物好きな神様がかなえてくれださつたのだろう。ここから元気
に生還したら、年に一度の秋祭りには、ちゃんと獅子舞でも奉納し
ます。データマン斎藤と繋がれば、状況は俄然有利になる。

「丁度良かつた。会えて、めちゃくちゃ嬉しいぜ。データマン」

「タカ。今そこにいてくれるってだけで、俺から見たらマジックだ。
さすが、マジシャン高柳。外さないな」

中年男が一人してベタベタと褒めあつてゐるのは、かなり気持ち
悪いが、本当に嬉しいんだから仕方ない。

「ここに、我等がCDRサマがいれば完璧なのになあ

俺がさらなる贅沢を言つと、歩が自分の背後のモニターを親指で
指した。モニターの向うに映つてゐるモニターには、恐るべし、お
祈りの力。飛竜が映つていた。

「キリーさん？」

背後から、ザキさんの声が聞こえる。信じられないものを見てい

る時もありがちで、彼女の声は喜び溢れているとこり、むしろ淡々としている。

「おいおい。本当にマジシャンだな。タカ。ザキさん。無事でよかつた。柏木がもう、落ち込んで使い物にならないのよ。ザキさんが元気なら、奴も生き返るよ」

「柏木さんが？」

ザキさんの声が一瞬で蘇る。やっぱり彼女はパンピー柏木ちゃんが大好きなのだ。さつき胸を選ばなくて心から良かつた。

「お前が作ってくれたオープンチャットスペースのログはもらった。今、俺んとの若いのに分析させてる。そつちの状況を簡単に教えてくれるか？」

「教えます。教えます。俺は、知っている全てのことをまあ、3分もかからない程度の情報しかないが 簡潔に並べた。

田の前で歩あゆむが腕組みをしている。その向うのモニターには、公衆の有線で歩を呼びつけたのだろう、線が繋がった受話器を握りしめた飛竜が映っている。彼らとは隔たつているといつちやあそれまでだが、なあに、モニター越しの会話なんて、俺にとっては日常だ。いつもより、ずっと近くにいるのが分かるだけに、こんなんだって心強い。

「なるほどね。こっちが把握している状況を言ひけど、その子大丈夫？ そつちの状況、結構キツイよ」

歩がザキさんを心配している。女の子に優しくするつていう男の基本を漸く覚えたらしい。同期の出世頭だし、これで一番最初に嫁さんゲットできるだらう。多分ね。

「本人に聞くわ。ザキさん。あれは俺と飛竜のポン友。顔は俺たちと違つていま一つだけど、データ分析のプロだ。奴がああいう言い方をしている以上、こっちの状況はちょっと有り難くないつて意味

なんだけど、正氣で聞ける？ 取り乱す自信があるなら、その辺で耳ふさいでて欲しいんだけど」
青い顔をしていたが、彼女は気丈にも頷いた。俺は軽く顎を引いて歩を促す。

「プールの回転が止まってゼロGになつてているのは、サンガとの接続部が千切れたからだ。プールに回転力を与えていたのはサンガの動力だから、そつちは自転できない。千切れたあとに回転軸とドーナツツの摩擦で減速しつつ停止した。擬似重力を無くしたのはもちろんそつちのインフラでは悲劇だけど、急停止でなかつたのは、不幸中の幸いだ」

「へーっ。千切れたの？ そんなんあるんだ。劣化かな。心配してたテロよりや、マシだな。ここが最低ラインだ」

「現場検証してないんだ。爆発物でも観測されたらテロになるだろうな。まあ、今は関係ないから原因の原因は飛ばすぞ」

「邪魔して悪かった」

歩が頷く。

「次いくぞ。千切れたといつても、サンガの方はデカイ。軌道もそれほど変わらずに安定して見かけ上の静止を保つていて。サンガに家族がいる人間は、そつちを心配しなくてもいい。この情報はもうオープンチャットスペースに流した。ああ、プールが千切れ浮遊してるつて方じゃなくて、サンガは問題ないツて方だけね。念の為ザキさんがちょっとだけ安心したというようなため息をついた。吐息が気持ちいいつ。

「ライダー・プールはサンガから千切れた衝撃で、軌道が変わった時に、角度が地球に対して鋭角に若干ついちまつたんだな。これから導き出される結論は……」

俺は少し考えてから、考えるのを止めて、歩の種明かしを待つた。アホが考えても時間の無駄だ。

「重力を振り切るだけの遠心力を保っていられない……。つまり今、プールは地球に対する高度をさげている。角度も慣性に従って深くなつて、大気圏に達する頃には、弾かれる方ではなく、突入コースになりそうだ。するとだな……」

俺は納得した。

「分かった。最後まで言わなくていい。女の子には可哀相だ」
俺は歩を止めた。ザキさんは分からぬのだろう。悪い想像をしている顔をしているが、多分、彼女が想定する最悪より、悲惨なはずだ。悩ませておけばいい。

「そこまで最悪か？」

歩が首を振つたので、俺は全てを投げ出して泣き崩れる準備をした。

「軌道計算上、大気圏で消滅する可能性はゼロ。大量で高熱の塊が、フロリダ付近を直撃する。極東アジア国軍は……、大気圏突入前に「歩はザキさんに気をつかつて表現を丸めてくれている。指で鉄砲を付くつてバンと撃つてみせた。軍が拳銃で俺を撃つてことじやなくて、電子破壊砲辺りで、プールごと焼いちまうつてことだろ。片や地球環境と数万の命。こつちは許容人口一万だが、多分八千も住んでいない。天秤にかけるまでもない。軍というのは、そういう決断をするところだ。大儀のために少々の犠牲は止むを得ない；つてね。犠牲を押しつけられる方にしたら、[冗談はどうぞ休み休みにと言つしかない。

「マジシャン高柳。お前なら……なんとかアイデア……だせるだろ？」

無茶を仰る、あゆみちゃん。俺は思い切りよく倒れてみせた。無重力万歳。ちつとも痛くねえ。

「ぶつけよ……」

俺は聞いた。聞いた。たら、誰がなんといつても聞いた。

「はあ？」

「ぶつける？ って、何を」

「シャトル」

「シャトル。質量には質量。質量があるもんを弾く機能をオフしてから、マスドライバー用の大型コンテナ・フルカーゴにしてぶち上げる。あいつらは外部コントロールできないから、推進力のあるバージ・シャトルでトツ捕まえて、下からブールにブチあてる。お前たちも俺やザキさんがいるところを壊したくないだろ？^{（まど）}的は回転軸と中央倉庫の間。ここなら無人の筈だから、構造ぶつ壊しても大丈夫。シャトルもぶつ壊れると思うけど、直ぐにこっちに来れば良いから、ちゃんとした、宇宙船外作業服がなくたつて、スペジャケと金魚鉢でどーにかなるだろ？」

歩か向かひ頭か痛いとこへまわる元
額にしわを寄せている

「そんな無茶な任務だれがやるんだ。第一シャトルでどうやってマスコンつかまえるんだ? バージ・シャトルが運ぶコントローラとデータが違うだろ?」

「DWNTネットでぐるんでねぐ

歩か息をのんだのが分かった

「ダブルウォールナノチューイングガム、お前の商売道具か？」

でも、お前が腰段位の上級者、お前が腰段位の上級者

「でも……、やっぱり無茶だ。お前が普段乗ってるキャツチヤーボートと違つて、シャトルは小回りが利かなすぎる。反質量システム

を切ったマスコンがどつかのロードバイブルが切たれば、二次災害じやなくて立派な犯罪だ」

因みに反質量システムというのは、UFでお馴染みの反重力とは違つ。巨大質量をセンサーが感じると、そちらの方面についている推進力発生装置が軽く作動して、引力を感知しなくなるまで噴射しつづけるだけなのだ。役に立つシステムつてのは、えてして単純な発想からできているものだ。

「反重量システムのスイッチに、タイマーでも仕掛けとけばいいだろ？ シャトルライダーが捕まえ損ねたら、プレデーターのいつもの餌にくれてやれ」

俺は思い切りよく、石橋を叩きすぎてぶち壊す歩の慎重さに水をかけてから、例によつて例の如く飛竜に丸投げした。

「どうよ？ リーダー。軍は数万と数千を秤にかけて、こつちを棄てた。突つ込み野郎どもつてのは、自分の一つと、こここの数千……秤に乗つかけられないほど、ケチなのか？」

飛竜がにっこりと笑つた。

「いんやあ。多分、できるよ。歩。ウチのライダーでさ、そういうことやりたがつてる奴、丁度その辺でグルグルしてたんだ。俺たちつてラッキーだよな。なんか、ついてるんじゃない？」

ついてる何かつてのは、多分、地獄に突き落としてから手をさしのべる類のにちがいない。

「あとねえ、丁度、そういう使い方で壊れちゃつたほうが有り難いシャトルがあるの。俺も、そつち行くわ。歩、お前ん所の強権発動して、俺の力ニカマの発射順位最優先にしてくれない？ ザつと計算して、マスコンとシャトル、セットで勘定して幾つくらいあれば、プールが大気圏の表層で弾かれる角度に持つていける？」

「お前たちねえつ。オレにそんな殺生な計算させる気かよ。お前たちの命かかつてんだぞ」

「やれよ」

飛竜が凄んだ。こういうときの飛竜ちゃん、怖いんだよね。俺にはできない押しの強さだ。思いつきの俺。利点と欠点を洗い出し、不安を少なくして、成功の可能性を引き上げる歩。そして、誰もがやりたがらない「ゴーサイン」をあつさりかけられる度胸の飛竜。やっぱ俺たち「ゴールデン・クルー」だ。

「情報分析能力を除いたら、軌道計算しか取り柄ないだろ。あゆみちゃん」

「……俺はあゆむだ」
律儀な反応、お疲れさま。

「わーかっただよ。分かった。死人がでたら、化けて出られるのは、お前たちで引き受けろよ。堂本、岸二佐呼んでくれ。今のプラン実行前に、試せる策がまだあつたって伝えてくれ。あーっ、頼むからもうちょっと普通の発想してくれよ。マジシャン……」

俺が「サイン」を見せようとしたときには、もう歩の後ろのモニターは空っぽだった。さすが飛竜。思い立つたら、即行動だ。

トークショード、どこの局もその話題が沸騰しているらしい。

ライダー・プールは働き盛りの肉体派野郎ばかりが濃い密度で棲息する、飛竜のパラダイス。俺の悪夢。それで間違いないはずなのに……。子どもがいる。それも三人も。しかも、普通のコンテナの感覚で言えばデカすぎる、テラ・マスドライバー仕様のコンテナをぶつけるには丁度良いと思つていた中間倉庫にだ。頭が痛い。

まあ一般常識的にいつて、マスドライバーが打ち上げたコンテナを、ずんぐりむっくりのバージ・シャトルを使って、大気圏外でトツ捕まえると聞けば、『できるのか?』という疑問が一番に沸くだろ。まあ、ダメでもともとやってみろという意見がそれでもあるのは、落下地点と計測されるフロリダに壊滅的被害を加えるのが分かっていても、八千人規模の街を住民の救出も試みないで(時間的に無理があるからだ)『燃やしてしまえ』という軍が示した解決策を受け入れるのが、良心の呵責を覚えるからだろう。

まあ、いくつか対策を試みた後なら、ライダー・プールを『燃やし』ても『止むを得なかつた』と言い訳できる利点もある。バージ・シャトル・ライダーが何人か余計に死んだつて、そんなのは知り合いでもなれば数字に過ぎない。

このママたちには気の毒だけど、この子どもたちが無事に生存してゐる可能性は、ゼロから三割未満だな。

詳報を伝えるトークショードを見て、勘弁してくれと思つていた俺の耳に、歩の眩きが聞こえた。それもそうだ。コンテナを仮置きしている倉庫が無重力になると、どうなるか。多分、子どもを押しつ

ぶすには充分すぎる質量をもつたコンテナが一斉に動きはじめる。
轟き合い押し合ひ。ぶつかって反発しあう。反動でぶつかったコン
テナとは反対に移動し、そちらでもぶつかり合ひ。

分かりやすく言えば、環境映像の『流水の海』で碎氷船を苛む氷
の塊みたいな動きを、大量のコンテナがするということだ。倉庫の
中ではなく、コントロール室にでもいれば良いが、そうでなければ
子どもたちが生存しているかどうかより、ママたちが抱きしめられ
る形が残っているかどうかの方を心配した方がいいくらいだ。

しかしだ。人間というのは子どもは基本的に生きていもらいた
いと思うらしい。ロング・バケーションと洒落こんで、『ピクニッ
クにやつてきた』なんて、今どきにしては、骨がある子どもたちが
『居る』と分かっているところに、シャトルをぶつけることは、と
んでもなく暴力的に聞こえるらしい。俺としては、まあ確実に生存
してたとしても、三人の子どもと八千の大人を比べるなら、まあ、
前者に泣いてもらうのも仕方ないかなと、冷たく考へてしまふのだが……。はい。良識とやらが軍に汚染されないと非難されればそ
れまでです。ごめんなさい。

歩の仕事は早い。周回軌道、シャトル・ロード4に既にいたパン
ピー柏木（彼は、この計画を俺が閃く前から、プールに突つ込むと
騒いでいたらしい）に、先ずマスドライバーをキヤッチできるか試
させて、成功したならば、とりあえず一発ぶつけてみて、計算上の
効果と実際の効果を摺り合わせて、頑張つていつもとは違う場所に
突つ込む、不幸なシャトルライダーが何人必要か計算してみると言
つていた。俺なんかはとりあえず、効果が出るまでぶつけ続けろつ
て言いたい方だが、まあ、それ方式だと上手くいかなかつた場合の
損失は巨大になつちまう。いくら財布がデカイといつても、税金泥
棒にも税金泥棒なりの損得勘定があるだろう。無駄になるなら勿体
ないことをしたくないというのは、当然のことだ。まあ、何れにせ

よ、データマン斎藤はどうせいつも慎重だ。

パンピーのシャトルは、『若鷹一郎』といつらしげ、そいつの位置にあわせてマスドライバーで発射させるタイミングを決めるために、頑張って計算中だそうだ。

なんでも、プログラムを書くより、直接の考え方を、ホスト・コンピュータに叩き込んで計算させる方が速いらしい。プログラムを書くだけで二、三日かかる上に、悠長にバグ潰ししての暇がないと、いう制約があって、ついでに、歩だからこそできる力仕事だろう。

俺には別の方法も無い訳じゃないのだけれど、なにしろ、加悦さんとジョー、うちのマムが居ないのでから試してみようが無い。彼らは、俺が時間稼ぎを頼んだあと4日間を、スカベンジャー・フィールドで粘っているに違いない。

暇だからと、そこに映っているから、画面の隅に映つて、いるトークショードを見ていた俺は、良く考えたら辻^{つじつま}棲^{すみ}が合わない点があることに気付いた。軍用回線で無理やりホストを乗つ取つて、俺が直接照会している総合端末に割り込んできた歩。なんで、加悦さんたちが、うまいこと誤魔化してくれているなら。

なんで、歩がここを分かつた？ 俺の端末は……ジョーのだ。

何も考えずに、俺は飛竜からの情報をを探り当てたのだと思いつんでいたが、ID端末の情報を一時的に書き換えるなんて冗談では済ませられない違法を、飛竜に大っぴらに打ち明けた覚えはない。直接やつの職場に押しかけて捕まえて、奴のコンパートメント使用許可是、エントランスについてから掌紋で直接登録した。ネット経由で俺に呼び出しをかけたら、間違いなくスカベンジャー・フィール

ドにいるジヨーに繋がる。第一、飛竜経由なら、ザキさんのコンパートメントには繋がる訳がない。飛竜だつて、俺の所にザキさんが居るのを見て驚いていた。

やはり、常識的に考えて、歩は目指すエロ端末を目標に、それが現在直接使用している総合端末に割り込んで来たと考えるのが順当だ。だとすると、なんで、歩がジヨーの端末を……。

（ひょっとして……バレて……た？）

例の戦争の時、俺は命令があつたにもかかわらず、人の形をして、人のように考えるモノを、処分することができなかつた。どう考えてもトリガーを引き絞れなかつたのだから仕方がない。折角、軍人であると宣伝してもかまわない筈の実戦部隊に配属されながら、結局、役立たず以外の何者でもなかつた。民間の専門学校で操船を学んできたのに後方支援でない所に配属されたのは、騒乱時における情報の混濁の賜物だろうとしても、できなかつたら無能の烙印を押されても仕方ない。

単なる役立たずで終わつていれば良かつたのだろうけれど、度々、大量虐殺ミッショーン（としか思えなかつた）をこつそり妨害した覚えもある。

五年の単独での労働命令。しかも無重力空間への放逐。どう考えても懲罰人事だ。まあ、心当たりがあるだけに、俺は逆らわなかつた。軍籍を抜かれて、家畜にもどつて、ただ飼い殺しにされるだけの人生にもどつてどうする？ 女の子は大好きだけど、食べて、寝て、既に世の中に溢れている人間を増やして。それだけで、今さら満足できるのか？ 宇宙船乗りは、俺の天職だ。壁一つ隔てた向うにある、永遠に研ぎ澄ませた沈黙から遠ざかつて、俺は生きていけるのか？ まあ、格好をつけていうならば、そういうことだ。

今回のHDD書き換えと、自主有給休暇がバletedとなると、スカベンジャー・フィールドでの任期はひょつとして無期限になる恐れもある。俺はたしかに宇宙が好きだ。だけど、可愛い女房子どもを持つ、普通の中年オヤジになる夢はまだ棄ててない。五十歳くらいまで、そつ、あと十五年前後なら、ちゃんと現役で可愛い相棒を使用できる自信もある。（多分そのくらいは……なんとか……）

金魚鉢を脱いでヘッドセットタイプのインカムに変えていた俺は、マイクを口元まで下ろした。

「あゆみちゃん……」

俺は力なく歩を呼ぶ。明るい家族計画が頓挫したのであれば、覚悟をさっさと決めておこな。少しだけ間を置いて、ぶつきらぼうな歩の声が聞こえた。仕事中に話しかけるといつもヤツは不機嫌になる。（当たり前か）

あゆむ。

「それは、もう良いから……」

俺は続けた。

「お前、どうやって俺の場所が分かつた？」

「ああ。お前のHDD端末を呼び出しただけだ。大した技術は使つてない。軍との非常用回線の受送信アンテナは、死んでないから。基本的にサンガのライダー・プールは、維持・管理、運営にウチは関与できない協定にはなってるけど、緊急避難対策で警察と消防とウチには、メインとは別に非常回線が確保してある。

まあ、それはそうだろう。HDDの危機管理がタコだとしても、それくらいの備えはしていいだろう。でも、俺が聞きたいのはそこじゃない。

「俺のHDD端末で……、HDDについたのか？」

お前ねえ……。

呆れたような歩の声。

確信犯の癖に確認するなよ。飛竜にプールに居るつて情報もらつて、速攻でお前にコールしたさ。でも、呼んだら、繫がつたのが何処かくらい、分かるだろ? ID端末の情報操作、偽造、改変は、たしか5年の懲役か、罰金はいくらだったか忘れたけど過料を負担するかしか無いからな。ちゃんと覚悟しておけよ。まあ、お前なら貯金全部はたけば、懲役は逃げられるだろ……。大丈夫。大丈夫。最悪でも軍籍抜かれない限り、ローンが組める。

絶望的だ。えっと、あと五年、懲役かスカベンジャー続けて、なんとか無事にパンピーの棲息地に帰れたところで、未来の配偶者さんは、とっくに別の誰かと『めでたしめでたし』になつてゐるだろ。有り金をはたくという方式もあるが、筋肉弱者の中年なんて、財布が重くなかったらどんな醉狂な女の子が嫁さんに来てくれるつていふんだ。ああ、俺は飛竜みたいに、キレイで、優しくてなんて贅沢言つてないのに……。

俺はガツクリと肩を落とした。……その時。

チリン。

呼び鈴が可愛い音を立てた。

「タ力さん。インタフォンなつてる。えっと……誰だと思つ?」

「ザキさんの部屋なんだから、ザキさんが出てよ」

俺はちょっと暫く立ち直れそうもありません。ザキさんが総合端末より近いからだろう、無重力での体の扱いに苦労しながらも、ドアフォンの方に移動していくのが分かつた。

「はい。あ……、はい。ええ。いらっしゃるけど……どうぞおま?」

力エ……さん？ そういえば、タカさんは分かる……？

オレは撥ね起きた。力エさんというのが俺の加悦さんなら、ジョーとマムと俺の船^{ボート}が使えるということだ。俺たちがパンピー柏木をサポートできれば、勝率を限りなくアップできる。俺は総合端末のコンソールパネルの下を軽く蹴つて、エントランスドアに泳いだ。

ドアを開ける。

「加悦さん。ジョーつ。俺つてホントについてる」

相棒たちを右手と左手で抱え込んで、俺は、俺の人生にだけ冷たい神様に感謝した。この配慮をですね、明るい家族計画の方にも回していただけたら、もう、毎日の雨乞いダンスを欠かしません。

加悦さんとジョーが浮いている。ジョーは、あの、防御服を着込んでいる。この二人の新人のボディは特殊仕様になっている。普通は、自己増殖する生体細胞を使った人工皮膚で、限りなく触り心地が人間に近くなるようにしているものだが、彼らは大気圏という生物にとつての保護膜がない宇宙で、船外活動をする。つまり、脆弱な生体仕様は邪魔になる。だから、そういう生命活動に依存するのは一切使つていない。

人工ニューロンの材質もシリコンオンリーだから、酸素が要らない。外の圧力に合わせて、内圧をコントロールするコニシットを皮膚下に組み込んであって、いきなり無重力に晒されても、皮膚が破裂して中身が飛び出したり、水分が噴きだしてしまなうことはない（もともと水分も少ないし）。生物由来の構成部品がないから、呼吸しているフリだつて、人間的外観を維持するためにだけとつてつけた仕様で、たまに忘れていることもある。やっぱり、ここまで宇宙活動用に特化してしまうと、スーパーリアルタイプの連中より

は、人間臭くない。とはいっても、柔らかいし、温かいし、触り倒さない分には区別は難しいだろう。

「良く来てくれた。ホントにお前たちの力が欲しかったんだ。それ着てるつてことは、分かつてる？」

俺が調子に乗って、ちょっと顔を見上げる角度に調整して、ジョーの首筋にキスすると、加悦さんが肩をすくめて微笑んだ。

「うふふ。タカさんの考えてることくらい分かるわ。斎藤一尉からミッションの概要説明はもらいました。私がシャトルライダーさんの突入地点にビーコン立てられるから、それを使ってシャトルの突入角度を調整誘導すればいいって言つたら、信じられないって顔してたわ」

「さすが……加悦さん」

俺は加悦さんの耳の後ろにもキスをした。うん、ジョーよりは柔らかい。

「いつものビークン？」

「まさか。ここのを使つた方が、バージシャトルとの相性が良いわ。出力大きいから。もつてきたのは、秘密兵器だけ」

「オーケー。んじゃ、早速、アンテナ立ててくれる？ ああ、ところで桟橋^{ビア}の場所分かる？ そこまでは、遮断壁が何枚も降りてるから、外、通つてね」

「了解。立ててくる場所は最初の中間倉庫でいいよね？ その所為で変えるとしても……ど？ できるだけ構造の中央寄りの方がいいとは思うのだけど」

加悦さんの指先はトークショード。女人たちが映つている。マイクが山ほどつきつけられて、可哀相なくらいだ。青い顔。気丈な顔。俺は視線をそらした。

若鷹二号、柏木です。タカさん、聞こえます？

煩わしいこと、通信は全部、歩に簡抜けだ。

「高柳です。感度良好。若鷹どうぞ」

誘導いただけるということですが、方法を教えてください。

「ビーコン発信用の普通のアンテナを立てます。周波数を確認後知らせますので、数値をそちらでも調整して合わせてください。一度目の発射时限の到達予測時間はわかりますか？」

パンピー柏木が機長モードで喋っているので、俺も合わせてみた。

もう。タカさん。ふざけないで。俺、子どもが居るところに突っ込むの、絶対に厭ですよ。どうやって、どこにビーコン立てるのかは、できるつて豪語する人に任せますけど、ターゲット場所を教えてください。頼みます。

パンピー柏木の言つこととももつともだ。オレだって、子どもたちが死んでたとしても、遺体を完全に破碎する実行犯にはなりたくない。

「了解。子どもが居なければ……いいな？」

「いない所ならどこでもいいです。あ、ザキさんのどこも厭だ。

「確認。マスコン確保まで、どの位かかりそうだ？」

テラ・マスドライバー上空まで、20分くらいだと思います。

向うの発射が遅れたら、次の周回まで待つのか、ロードから抜けて、逆噴射で静止軌道速度に落として待つのかまでは、まだ、指示がきていません。

「了解。まあ、時間が勿体ない。今はお前の若鷹をぶつけて反応を計測することが急務だから、『待ち』で間違いないだろうな。その

心づもりで。えっと……ホントにビビりでもいいか？」

贅沢は言いません。

中央回転軸付近ではなくなるが、俺にはもう一つ、完全に無人が保証された区画に心当たりがある。正気なら絶対に突っ込みたくない場所だけだ。

「歩。どうせ聞いてるだろ？ 中央じゃなくて、外のドーナツにぶつけても、計算可能か？」

「可能だが……。あんまり極端に、角度が変わると……ありがたくないな。」

「まあ、特攻隊の青少年の精神の健康のためには、仕方ないだろ。えっと、柏木くん。角度の調節は俺の相棒にサポートさせるから、俺が指示するポイントには、シャトルで突っ込んで、マスコンはわつかより中央の空間にめり込ませる形で突っ込めるか？」

それなら、重さがあるコンテナは中央回転軸に近くなる。中央倉庫にぶつけるとしたらコンテナでシャトルは構造物の間にめり込んでもらう予定だったが……。

案の定、流石に即答はない。構造物にコンテナをぶつけるのと、自分が乗っているシャトルでぶつかるのとでは、そりやあ、必要な覚悟の種類が違う。悩んでいいけど、猶予時間は18秒くらいにしどこにうか。

「了解しました。誘導宜しくお願ひします。」

通信が切れる。俺は溜息をついた。男だ。パンピー柏木。悩んだのは12秒フラット。

俺は加悦さんを促して、総合端末のモニター前にもどった。ライダー・プールの『酸素濃度』で色分けした全体図を表示させて、指で赤く塗られた区画を抑えた。

「加悦さん。最初に発信アンテナたてるのは、ここ。若鷹が無事につっこまつたら、初期目標の中央倉庫に移動させて。第二陣以降は、中央倉庫に目標を戻す。ジョー、お前は飛んでくれ。ロボットアームを使って、若鷹がマスコンを捕まえるのを補助。できるか？ ついでに、マス・コンの慣性に若鷹の方が引きずられる恐れがあるから、ネットを若鷹のフックにかけたら、そのまま最大出力でサポートしてやってくれ」

「了解。ボス」

ジョーが軽く請け合つと、加悦さんが胸を反らした。

「できるか……ですつて？ 当たり前でしょ。宇宙空間は、私たちの二ツチよ」

当然というように頷いて、ジョーが親指を立てる。俺はその大胆で頼もしい物言いに、半ば呆れて微笑んだ。

「随分、デカい二ツチ（隙間）だなあ」

加悦さんが、ヘッドセットを頭から外して、金魚鉢ヘルメットに手をのばして俺に聞いてくる。

「で、ボス。貴方は何をする気？」

当然の質問だろう。

「ちょっとくら子どもたちを迎えてくる。生きてても……ダメでも、子どもはママの所に帰らないとな……。残念ながら手は一本しかもつてないから、若鷹を突っ込ませてから中央倉庫にビーコンアンテナ移動させて、そのあとで手伝いに来て……」

「そつちも私がついでにやるわ。ボスは人間なんだから、くれぐれも自重して」

俺はチツチツとばかりに人指し指を振つてやつた。

「任せたいのは山々だけど、お前の手も一本。子どもは三人。だめ

だったら一人でなんとかできるけど、無事だったら手が足りない」
加悦さんが、大きくため息をついた。

「……それもそうね。でも、タカさん、絶対に無茶はしないでよ」
「当たり前でしょ。俺、自分勝手だもん。任せて……」
加悦さんがこれ見よがしに鼻を鳴らした。

「やつぱり、信用できない……」

絶対に聞こえるように言つてるよ。

それから、俺はヘッドセットのマイクだけ掴んで口元に寄せて、歩を呼んだ。

「聞いてたろ？ 俺たちは、ちょっと現場で補助業務にあたつてみるから、管制コントロールは、お前んとこでやつてくれ。手はあるんだろう？」

まあな。止めたつて、ビーセに行くだる？ あつこにお子ちゃんまめなたちが居たら、普通の神経してたら、誰も突つ込めないからな……。

お前は、パーセンテージあげるためなら、何だつてする奴だ……。

「あーつ、あゆみちゃん。俺がそんなに冷たい男だと思つてるの？
失礼だねえ。迷子になつて困つてる子どもが居たら、迎えに行くのは大人の役目だろ？ パーセンテージで動いているなんて、失礼な野郎だな」

歩だ。まあ……、今回はやつこつこしてやるよ。

それから俺は、歩には言わなくても分かることを付け足した。一応、いざつて時に、奴がGOを躊躇ためらい無く出せるよつこつこしてやるよ。親友だしね。

「帰つてくるのが遅いと思つたら……、迷わずぶつけろ」

一瞬だけ、歩の顔が苦汁を舐めたよつになつた。でも、奴はデータマンだ。情にほだされて数字を読み間違える愚は犯さない。八千と、3+1。比べられない馬鹿じやねえ。奴はいつもの冷静な口調

でいいやがった。

分かった。やつをやめひらへ。でも、葬式はしてやらねえからな。

上等だ。

「えつと……準備しよ……。ザキさん」

俺は、ベッドセットをそのまま捨てて、振り返った。このタイミングで呼ばれるとは思つていなかつたようで、ザキさんが不思議そうな視線をくれる。

「何か手伝えること、あるのかしら?」

「えつと、貸してもらいたいものいくつかあるんだけど」

「あるものなら……。というか、見つかるものなら」

この部屋の惨状からみると、正確な考え方だ。体使つてる商売の女の子にしては、頭がいい。俺は感謝を込めて頭を軽くさげた。

「大きめのリュック。ある?」

「リュックは持つてるけど、大きめ……大丈夫かしら……」

「使えるかどうかは俺が判断するから、探してみて。あとは……裁縫道具が本当はいいけど、針と糸は使えねえから、荷造りヒモ」「荷造りヒモって、雑誌を『GLOW』に出すときまとめるアレでいい?」「それで充分。それから、シーツ3枚。えつと、足りなければリュックに入れれば良いから、タオルケットとかでも良いけど」

ザキさんが怪訝な顔をしている。

「上の倉庫に子どもたちを迎えていくつて……言つてたのに。何に使うの?」

正直に答えるかどうか、迷つ。

「俺のポリシーなんだけど……」

一応説明を試みる。ザキさんが目線で先を促していく。

「俺つて、臆病だから、可能な限り、最悪を想定して行動するよう

に……いつもしてるんだ。これは、使わなくて済んだら……それに越したことはない」

彼女はきょとんとして、まだ分からないといつ顔をしている。

「ボディバッグ遺体収納袋よ……。ボス、時間がないわ。ちやつちやとヘルメット金魚鉢つけて。手袋グローブ装着、手伝つてから行くわ……」

加悦さんが時間が惜しいとばかりに切つて捨てた。ザキさんがひゅつと首を立てて息を飲むのが分かつた。化物を見るような目で、俺と加悦さんを交互に見てくる。効率優先は、俺たちの内輪ではいつものことだが、冷たく聞こえるだろう。そりや、俺だって生きている方に賭けたいさ。でも、すりつぶされてた場合だつて、持つて帰つて来なけりや、心優しいライダー連中は絶対に突つ込めないだろう。ママたちだって、カタチがなければ泣きにくい。生きてても、ダメでもつれかえる。道具が必要。それだけだ。

ただ、加悦さんには……歯に絹を着せるといつ、美しい心の動きを今度レクチャーしとかなあかんな。

俺はとりあえず^{ヘルメット}金魚鉢^{カマラアイ}を服に装着すると、手袋^{グローブ}をつけて、加悦さんを見た。彼女の人工眼球が、俺の目をじつと覗き込んでくる。俺の網膜情報を読み込んで、そのまま情報を自分の掌に転送して、手袋と服を封印させてくれるのだ。スペジャケを船外活動に使うとき、手袋の密着は一人でできないのが常識。これつて便利でしょ。

俺の耳を吐き捨てるようなザキさんの咳きが抉つた。^{えぐ}

「人非人……」

加悦さんが、30度ほど体を捻つて左の眉を吊り上げ、ザキさんに冷やかな一瞥^{いちべつ}をやつた。

「役立たずより……マシでしょ」

全く、女つて奴は……。

ザキさんの「^{「コンパートメント}個室を出で、比較的浮遊物が少ない通路を、俺と加悦さんは、いつものように素早く移動していた。無重力空間では、速く移動したかつたら、筋肉を使ってはいけない。むしろ力を抜く。踏み出す足と反対の普通なら踏ん張る足で、二歩目の取つかかりになりそうな壁などへ到達できる角度と方向を微調整しながら、距離に合わせた力でゆっくりと蹴り込む。二歩目をとるときに、進行方向がブレないように体勢を修正するが、両手を使ってバランスをとる。もちろんこんな風に移動できるのは閉鎖空間だからだ。純然たる宇宙空間は、とっかかりがないし、蹴る壁も無いし、止めてくれる遮蔽物もない。推進力を持つていない人間には難しいというより、制御不可能だ。」

「どこから出入りしてる？」

俺はそのまま喋った。スーパーリアルタイプの新人ボディは、人間らしく見えるように気をつかいすぎて、実用的で便利な機能をあまりたくさん盛り込めていない。まあ、異常に重くて力持ちである以外は、人間と変わりない無能加減を持つている。（人間程度の有可能ももつているけど）

だけど、加悦さんとジョーはちょっと違う。もちろん、準人権が認められるそもそもの大前提である、経験を蓄積して現実に行動したときのフィードバックを溜め込んでいくことで、思考に幅とバリエーションを持たせることができる、新人^{「ヨーマン}と呼ばれるに相応しいAIはもつている。

けれど宇宙で活動することの便利をとつて、人間らしさをある程度思いきって捨てている。俺は金魚鉢を被つたり、ヘッドセットを利用したり、携帯端末だの総合端末だのに張りつかないと、無線通

信もインター ネットプロトコルを使つた通話もできないが、彼らはボディの中に受発信の機能も埋め込んでしまつてゐる。通話の時は雑音を少なくするために、通信時は拍動『じつこ』や呼吸『じつこ』をしない。

スーパーリアルタイプのボディは、皮膚の細胞などに生物としか呼べないものを増殖させて使つてゐるので、新陳代謝での必要から、水や酸素を循環させて自分の構成要素をフレッシュに保つてゐる。彼らの呼吸や拍動は自律で行うようにチューニングされるものだそうだ。けれど、加悦さんたちは、普段、自然な人間っぽさを装つために形だけ真似^{マネ}しているのだ。まさに『じつこ』だ。『じつこ』機能を捨ててゐる加悦さんは、微妙に人形臭い。

「プールの構造外に走つてゐる上下水道の、定期点検用出入り口です。もちろん、エアロツク構造になつてます。エアロツクいいですね。私たちも圧力管理をのんびりできるので、楽チンです」

できるけれど体内圧を瞬時に変えるのは、やはり気持ち悪いといつも言つてゐる加悦さんを知つてゐるから、俺は『楽チン』という言い方に微笑んだ。

「ザキンさん……悪氣で言つたんじゃないと……思う。彼女は見掛けはあんなだけど、多分纖細なんだ」

「私はどうせ見掛けと違つて纖細じゃありません」

俺は可笑しくなる。まるで女の子そのものの科白^{セリフ}だ。加悦さんは人工物の特権というか、まあ、ありがちなパターンというか、妖精のようだ、人形のようだ……つまるところ、端麗な外見をしてゐる。軍の調達部の連中がどういった基準で選んだのか疑いたくなるような、妖しく少女めいた雰囲気をしてゐる。もしかしたら、長期任務の俺に気を利かせたつもりかもしれない。（だつたらリクエストくらい聞いてくれ！）

とにかく、皮膚をスーパーリアルタイプ仕様にしてから道を歩けば、十人男が通つたら、十人が振り返るような美少女なのだ。

「そこで笑わないでくださいよ。なんでもかんでも、茶化してしまふの、タカさんの悪い癖だわ」

加悦さんたちは俺のことを普段は『タカ』、仕事中は『ボス』と呼ぶ。ボスというのは、どうにも俺の個性には似合わない呼称だけれど、彼らが緊張しているのかリラックスしているのか分かつて便利だ。第一、呼ばれ方なんてやつは、呼ばれる方には、せいぜい好みの種類をリクエストすることくらいしかできない。

「何言つてるんだか。加悦さんは、タカさんが眉間に縦皺寄せてるところなんか見たら、絶対に病氣だ何だつて余計な心配しちゃつて、騒ぎ立てると思うな。加悦さん、タカさんに甘いから」

ジヨーは加悦さんが居ないときはよく喋るのだが、彼女が居るとなかなか発言するチャンスが回つてこない。寡黙かもくではないのだけれど、どうやら『同意意見です』という意思表示は無駄だと思っているフシがある。だから、結果として黙つていることが多い。こうやって加悦さんと意見が違うときは、元気よく会話に割り込んでくる。

「だつて、あの女。絶対にタカさんもひつくるめて、あんな言い方したのよ。どこの人間が、死んでるかもしれない赤の他人の子ども命懸けで迎えに行くつていうのよ。タカさんは私たちと違うのよ。宇宙空間で防護服が破けただけで死んじやうのよ。酷い侮辱だわ」

「加悦さんが怒ることじやないよ。タカさん、分かつてるんだから」ジヨーも分かつてくれているじやないか。俺は心底有り難かつた。操船学校の時にゴールデン・クルー（あれも相当恥ずかしかつた）とひつくるめて呼ばれていた飛竜に歩。それから、若干種族は違うけど、今、チーム（チーム・スカダーツ・セシスの悪さはどうにかしてくれつ）を組んでいる加悦さんとジヨー。俺は仲間にはいつも恵まれている。

「ありがとう。ジョー。それにしても……。あれば、マトモな正義に役立つ日がくるとは、まあ、いろんな事が起こるよなあ。お前が飛んでるのみたら、みんな卒倒するぞ」

俺は話題を変えることにした。落ち込んでいたって、難しい仕事の難易度がさがるわけでもない。それにいろんなことを茶化し倒して、笑ってる方が楽しい。楽しくやるってことは不眞面目ってことじゃない。

「それも、あの、ロボットアーム、背負つて」

加悦さんが機嫌を取り直したのか、ちょっと破顔した。やつぱり彼女は笑ってる方が断然、可愛い。

「あれ、可笑しいのよね。正面からみたら頭にロボットの手が生えてるんだもの」

「普通の感覚で言つたら、防護服なしで、船外活動してる加悦さんが、心臓に悪いと思いますよ」

「スカート履いてくれば良かつたかな」

「やめときなさいっ」

俺は間髪入れずに止めておいた。宇宙の基本的な闇。地球の青光り。射る太陽光。落下しつつあるライダー・プールの外壁をスカートの裾を翻して散歩する加悦さん。そんなもんが船外に居るのを見た日には、冷静沈着が基本形の宇宙船外活動士だつて、幽霊かオバケだと肝を冷やすだろう。なまじつかリアルにできてるから、始末におえない。間違いなくホラーだ。

ジョーも均整とれた、素晴らしい肉体をしている。まあ、こいつらは作った連中の美学が単に反映されているだけだから、外見を褒めたところで意味がない。飛竜やパンピー柏木みたいに、大気圏突入をルーティンワークにしているがために、自分で鍛えてコレに近い体を作り上げているライダー連中は、素直に凄いと思う。

ジョーが着ているのは、一昔前の宇宙飛行士が使っていたような、

ダブダブのスペース・ジャケット（俺たちはレトロに防護服と呼んでいる）だ。表面にびっしりと耐熱タイルが貼つてある。これが、ジョーの特別仕様つてヤツなのだ。

それはジョーだつて、構造物に近い場所で動くなら、加悦さんと一緒にで別にスペジャケなんぞを着る必要はない。が、パンピー柏木のシャトルがマスコンを捕まえやすいように、直接出向いていつて手伝おうという、それは親切な魂胆なのだ。

なんで、そんなことができるのか。種明かしをしておこう。俺たちの健全なる『遊び心』の賜の秘密兵器により、ジョーは単体で軽快飛行機になれるのだ。（どうだ、驚け！）

俺たちは日頃、退屈極まりないスカベンジャー・フィールドで、楽しくロスコン・ハントできるように、色々なモノを思いついで作つて、使って、遊んでいる。

俺の簡易加圧室だつて、微細重力空間でモノを振り回すと、振り回される方だけでなく振り回している方も振り回される（なんちゅー分かりにくい表現だ）をクリアするために、回転方向とは逆にロケット噴射するなど、開発には時間が掛かつたものだ。

ロスコンを捕まえるネットを張るのに、最低三點（二点じゃ面にならぬのは、宇宙空間でも常識として通じる）が必要だ。スカダ一だけでなく、もちろんブレデターもチームは基本的に、三機の軽快飛行機であるキヤツチャーボート乗りで構成される。乗り手は、人間だろうが擬人だろうが、單なるロボットだろうが、リモコン操縦の無人機だろうが構わない。ただ、三機の軽快飛行機とその操縦者が必要ということは、誰にも文句は言わせない。最初は俺たちだつて、きちんと三機のキヤツチャーボートを使つていた。

* * *

ある日、ネット放送でテレビ番組を見ていたジョーが言った。

「ねえ、タカさん。あれ……やってみたいなあ」

それは、男の子向けの戦隊モノという奴だった。いわゆる巨大な悪の組織が悪いことをするのを、無謀な突撃と、勝算のある攻撃の区別がついていないガチんちょがチームを組んで阻もうというコンセプトで毎回の話が成り立っている番組だ。一般社会常識的にいつて、子どもの無謀は大人の狡猾と経験には勝てないものだが、『篤い友情』（熱いというのはアテ字だよなあ）と、『尊い自己犠牲』（別名、自己満足）とで何故か無謀に軍配が上がるという不条理極まりない展開で進む。

ジョーは見掛けは二十代後半位の立派すぎる大人だが、工場のラインを降りてからは十年経っていない。しつこく反復しなくても学習が定着するから知識のレベルはちょっとした科学者並だが、精神の動きは子どもでしかない。加悦さんのように人が集団で暮らす『街』環境に殆ど触れないまま、俺なんかのチームに飛ばされてしまつて、可哀相に、なかなか人間関係の中で普通に覚えていくことが定着しない。新人と付き合う難しさは、実はこの見掛けの年齢からでは、彼らの実年齢が把握できないことにあると俺は思っている。二十代後半は行つてそうな外見のジョーと、幼さが残る少女のような加悦さんを並べて、年季が入つてている海千山千は加悦さんの方だと直感できる人間は居ないだろつ。

付き合いだした頃は、ジョーがホンキで戦隊モノに熱くなつてい

るのを見るのは、不思議な気がしたものだ。加悦さんとの関係も、職場での経験が違う同僚というより、どちらかといつと『親子』に近いものがある。

見掛けは大人、知識量は玄人^{くろひと}、考え方は子どものジョーは、困ったことに、この手の番組が大好きなのだ。このテの番組で使われている科学技術は、一体何年時代を先取りしているのか、はたまた遅れまくっているのか、もしくは異世界のことなのか全くもって不明だ。現在大人気で、ジョーがお気に入りの番組は何といつても『宇宙戦隊ミラーズ』。受けなければさっさと過去のものになるこの番組では珍しく、もう五年以上はつづいている長寿番組だ。（ジョーと出会った頃には、もうやつていただけの話しだ。いつから始まつたのかまでは、知らん）

件の呟きを、ジョーから引き出した回は、悪の組織、ディアハートに連れ去られた紅一点のミラーズ・ピンクを、リーダー格のハヤト（通称ミラーズ・レッド）君が命を懸けて助けにいくという展開だった。

宇宙戦隊というからには、基本的に宇宙空間で戦っていることが多い連中だが、結構物理の法則を無視している。どうも、ゼロGといいつつ、ルナGでもの「」どが進み、宇宙空間でありながら大気もあるような雰囲気なのだ。

悪の組織の連中とミラーズが対峙するとき、いつも頭がそろつて画面の上になつてているのは、宇宙人としては納得いかない。しかしまあ、かつこいいハヤトが斜めで凄んで、ディアディア（ディアハートのその他大勢の名称ね）の頭があつちこつち向いてるのでは、絵にしたとき締まりが無さ過ぎるのだろう。

ディアハートは巨大組織という割りに人材不足らしく、その他大

勢の兵隊さんたち以外で目立っているのは総裁様。あとは『司令』といつ呼称ながら慌ただしく実動もこなす、マルチなキシコワード閣下（『苦労さま』ことに、作戦も立てるし、突撃もある）。あとは、悪の科学者カシスさま。彼女がやつてゐる』とはどいつも『異種間遺伝子交配』なのだが、使う道具は顕微鏡じゃなくて並んだ試験管で、その遺伝子配合の結果できあがる怪人は、交配元の動物がよく分かるように『キメラ』になつてゐるという理解に苦しむ設定だ。医学博士級の知識を持ち、宇宙力学、物理学、運動学においては深い理解をもつてゐる筈のジヨーが、空氣がない筈の宇宙空間で、化学式ロケットとしか思えない推進装置で動く（足の裏から噴きだしでいるその炎の形は、どうみても有酸素、有Gだよつ。第一、化学式なら燃料タンクいるでしょ！）ミラーーズ・レッドに喝采できるといつのは、理解に苦しむ。まあ、このアンバランス加減が、ジヨーの可愛さなんだけどね。

宇宙空間を、圧力管理がいかにも難しそうなライダータイプのスペジャケを着ただけの生身で（流石に金魚鉢ヘルメットはつけてるけど）、燃料タンクも身につけず、換気装置なし、一酸化炭素除去用空氣清淨機なし、酸素ボンベなしで、靴底から炎を噴きだして『飛んでいるミラーーズ・レッドと同じ』ことをしてみたい。

全く、小学生のガキレベルのジヨーの何氣ない一言。仕事に使われる時間は仕事をしているからいが、人間が主体の職場と同じよう自由時間ももらつても、その暇と、時間とを紛らわす楽しみが無い環境でなければ、その思いつきは『バカ』の一言で片づけられたかもしれない。だけど、俺たちは基本形として退屈しているのだ。

「面白やうじやん。やろやろ」

俺は一つ返事で、ノつた。

* * *

では「」で、マジック、宇宙飛^ルぶジョーの、モトネタがミラーズ・レッドとは思えない程に変化を遂げたに仕掛けについて説明しよう。（マニアック発明家、ミラーズ・グリーンが発明品を説明するときみたいに読んでください）

化学式の燃料タンクを背負^ううのは、事故が有つたときにしゃれにならないし、第一燃料の継続補給が難しい。私たちは先ず、キャッチャーボートの推進力と同じ、ビームエネルギー推進方式を使おうとした。

最初は普通にパルスレーザーエネルギー^{ビーム}（PULSEB）を母^{マザー}船^{チャーチ}から発射して、光学的に後部の狭い一点（この場合は靴底）で受け止めさせ、そこを超高熱にしてプラズマパルスに変換させる方式を採用しようとしたが、問題点は大きかつた。キャッチャーボートの推進装置にレーザーを当てるようには、動きすぎて小さすぎる焦点を追い掛けられなかつたのだ。

それからDIY（D o I t Y o u r s e l f）方式の日曜工作では、大気圏突破時には「」一般的なこの方式で必要となる材料も調達できなかつた。パルスレーザー方式において、水素を推進剤として800秒の比推力を作るうとすると、燃料室内の温度が200度になつてしまつのだ。市販品の中には推進力発生装置本体を構成するに相応しい耐熱材料が見つからなかつたのだ。耐熱タイルなんぞでは対応しきれる温度でない。それからもう一点の問題が、たとえ耐熱素材が入手できたとしても、いくら丈夫なジョーの構造でも、その温度に晒されたらひとたまりもないということだった。お手製防護服に耐熱タイルを貼つてもみたけど、素人工作でしかない。

剥がれたら……。そんな高温を抱えた装置を身につけることは、どう考えても危険としか思えなかつた。

そこで私たちが試したのが、波長が10マイクロメートルの炭酸ガスレーザー光を、推進剤としてタンクに詰めた水を水蒸気にしてノズルに通す、熱交換型レーザー推進装置であつた。この方式では、ノズル内の水蒸気がレーザーパワーを吸収するので、材料の熱負荷が激減するのである。（あーつ、もう疲れた、説明終わり）

短く説明し直すと、水を推進剤にしてタンクに詰めて、ブーツの『ふくらはぎ側』に装着したノズルに低温の蒸気を満たし、そこに光学レーザーではなく肩に装着したレーザー発振器から出る炭酸ガスレーザーを当てて、推進力を作り出すのだ。

残念ながら、この物凄い発明には、相当にかっこ悪いオマケがつく。ヒント？ 単純に構造的な問題だ。『ふくらはぎに装着したノズルにレーザーを肩方向から当てる』ことがヒントです。正解者居ますか？

では、ちやつちやと答えるわせ。レーザー推進方式の場合、進む方向はレーザーがやつてくる方向の反対になる。そつ。ジョーのリクエストにお答えして、スカダー・チーム総力をあげて手作りおもちゃは、足方向に思いつきり飛ぶのだ。ジョーはレッドのように頭の方に腕を伸ばして飛びたいらしいが、贅沢を言うな！ 大気圏内用飛行機と同型の、どう考えたつて尖った方に進むとしか思えないシャトルだつて、ケツから大気圏に突入するのだ。問題無し。

加悦さんの案内で辿り着いたプールから外へ出るエアロッドの中で、俺は一人とも了解しているはずだといつづ、確認のために一応これからするべきことを整理した。

「ジョー。とりあえず、母船にもどつてロボットアーム背負つたら、この辺で待機ね。若鷹一号の柏木機長と、地上管制、ドバイ宇宙港のと軍^{ウチ}のと両方ともだよ、無線を聞いておくこと。地上からマスクンが発射が遅れても、若鷹一号は多分逆噴射をかけて、地表からの見かけ上の静止スピードで待機する筈だ。もう一周回つてくるのはナンセンスだからね。でもつて、マスクンが飛んできたら、ロボットアームでネットを掴んで、若鷹一号のコンテナ固定フックに引っかける。できるよね」

「もちろんの了解」

ロボットアームというのは、まあ、マザー・キャッチャーが俺たちが捕まえて連れてきたマスクン（マスドライバー用コンテナ）をその本体に係留するときに使う荷役用の腕のことだ。こいつが壊れたら仕事にならないので（捕まえたコンテナは持つて帰らないとね）、ロボットアームには予備がある。そいつを『壊れたら返すもん』とばかりに失敬して、レーザー発振器と邪魔し合わないように気をつけて肩の部分に装着したのだ。これは、キャッチャーボートに乗らないで、ネットを広げる仕事をしたいという我が儘なジョーの仕事用につけてやつたものだ。いくら丈夫なジョーでも、質量がバカと大きいマスクンを捕まえたネットを手掴みにしたら、絶対に腕が千切れ。

そういう訳で、スカベンジャーフィールドで俺たちのチームがロスコンを捕まえる時、俺と加悦さんは普通にキャッチャーボートに乗るが、ジョーは光り輝く耐熱タイルがついたままの（剥がすのが単に面倒だから）防護服に、自分より大きいロボットアームを扱いで、足の方向に飛んで行くという、滅多にないほどケッタイな存在になる。

「加悦さんは、プールの慣性から振り落とされないように注意して、若鷹一号の誘導を助けるビーコンアンテナを取つてきて、このポイ

ントに立てる

「……了解。一つだけ確認していい？ ボス」

「なんでも」

「ここは、何するところ？ 本当に人は絶対に居ないの？」

「……絶対に居ない。酸素ゼロだもん」

加悦さんが、ちょっと怪訝そうな顔になる。考へても思い当たらぬのだろう。俺は時間が惜しかつたので、気を持たせないで直ぐに教えてやつた。

「腐敗を防ぐために脱氣してゐる有機廃棄物貯蔵庫」

加悦さんが呆れたように目を剥いた。

「……そんなとこに……、『ンテナ』なくて、シャトルで突つ込めつて……。凄い極悪」

「だつて、パンピー柏木くんたら、中央倉庫とザキさんとこと、人間が生きてそうなところには突つ込みたくないつて、そう言つんだもん。しゃーないじゃん」

加悦さんが肩をすくめた。俺は話を先に進めた。

「次に、無事に若鷹一号が大破を免れてたら、柏木機長を救出してこのエアロツクまで誘導。大破してたら場所が場所だけに悪いけど、中まで迎えに行つてやつて。それから、もう一度アンテナを回収して、次は中央倉庫に立てる」

「了解、ボス」

「んでもつて、俺は……中央倉庫にお迎え部隊だな。じゃ、それぞれのやるべきことを、まあ、それぞれのやり方で宜しく。俺は細かいことは気にしないから……」

ジョーが肩で笑つてゐる。有機廃棄物貯蔵庫に、お迎えにいく加悦さんを想像してゐるに違ひない。全く、ガキは排泄物系に話題が行くと、びつしてああ喜ぶのか不思議だ。

「んじゃあ……、チーム・スカダー発進GO…」

もちろん、ジョーが大好きな宇宙戦隊ミライーズのレッド、ハヤト

の科白^{セリフ}『戦隊ミラーズ、発進GO』の盗用^{パクリ}だ。どうせ俺たちはサバンナのお掃除部隊フンコロガシと同じカテゴリー名称で呼ばれる仲間だ。俺が『スカダー』と言ったのを可笑しがつてか、加悦さんがケタケタ笑いながらエアロツクの外への扉を開いた。笑い声はザキさんのころころが絶対に上だな。

軍用品でクウォリティーはそこそこあるけど、丈夫さでは決して船外活動向^きではない簡易スペジャケの俺。まったくその辺を散歩しているような普通のタウン・ウェアという『いでたち』の加悦さん。それから、キラキラ輝くダブダブ防護服のジョー。俺たちは、見掛けはバラバラだけど、間違^{いなく}チームだ。

俺たちはそろ^{そら}つて宇宙に零^{ほじる}れていった。

一人にもどつた部屋は、いつもの何倍も広く感じられた。尾崎末ちか 知香は耳の奥でまだ響いている声を感じていた。

役立たずより……マシ……。

涙が出てきそうになる。自分が何をどうして良いか全く分からず、どうにもできなかつた時間。自由に動くことができない無重力。ありとあらゆる物が浮遊し、何気ない様々な物が脅威と化した自分の部屋。自分の持ち物でさえこれほどに凶悪なのだから、外に出ることが怖かつた。逃げることなど考えもできずに、ただ頼りなく浮いていた。恐怖に満ちた時間。

どこにも通じないケイタイを握りしめて思つっていたのは、シャトル・ライダーをしている柏木恵心かしわきいしんのことだつた。未知香が勤めているのはトレーニング・ジム。フィジカル・インストラクターとして、筋力トレーニングに勤しむ彼らライダーを補助するのが仕事だ。

彼らはみんな、大きくて無骨で、どこか優しい。中でも目立つて大きい柏木は、未知香のプログラムの常連さんだ。パーソナルフィットネス・プログラムも柏木は継続して受けている。

まだ柏木が学校を出たての頃、遊び上手で奢り好きの霧島運輸の御曹司、キリーさんこと霧島飛竜が、ジムに伴つてくるようになって以降、ずっと仕事上で親しく付き合わせてもらつている。柏木が来ない日が寂しくなつたのはいつからだつたろう。予約者リストに柏木の名前を見つけると嬉しくなつたのはいつからだつたろう。

もちろん、同僚の女の子たちの間では恋人にしたい男ナンバーワンの座に輝いているのは霧島飛竜だ。霧島運輸の御曹司ではあるけ

れど、気取ったところがなく、後輩の面倒みもよい飛竜が、結婚したい男の上位にこなるのは不思議な気もする。まあ、女は自分一人が女神様と思ってくれるような男にチヤホヤされたいものだから、場数を踏みすぎているように見える男は、遊ぶのには良くて共に家庭を築く相手には不足があるということだろう。

その点、柏木は女つ気が無いことでは折り紙付きだ。なにせ、一番のときはいつもウチのジムにつっこまっているか、飛竜とつるんでいる。彼女がいるなら、少しばデートに割く時間も必要だとは思うから、フリーとみて間違いない。こんなチビの自分では、彼の横に立つのが似合うとは思えない。あと十センチ余分に背があつたら、自分からアプローチする自信も持てるのだろうか。それとも、そんなことは玉砕怖さに一歩を踏み出せない自分に対する言い訳にすぎないのだろうか。

飛竜は未知香をよく食事に誘ってくれる。最初の時はデートにも誘われたのかと思った。飛竜の恋人になりたいとは思つてもいかつたけど、自分の稼ぎでは滅多に行くことができない高級なオーガニック系の食事に行こうと誘惑されて、まあ、食事くらいならと墮落した。待ち合わせの場所で、飛竜が柏木と居たとき……。最大心拍数は、いつもやつているエアロビクス・プログラムの最高値より絶対に上だつたという自信がある。

それからも頻繁に誘われて、『もしかしたら』の期待で二つ返事をする。飛竜は必ず柏木を連れてきてくれる。恥ずかしいけれど、多分、飛竜は未知香の密かな想いに気付いて、それで、柏木を連れてきてくれるのだ。柏木の方は、全くこちらの気持に気付いてないのだろう。遅くなつたときは部屋の前まで送つてくれるのは柏木だけれど、それだって飛竜に毎度言われてのことだ。

シャトル・ライダーというの中には、体が女だつたら中身は関係ないと言わんばかりの連中もいるけれど、柏木が聞いてくるのは

いつもファイジカル・トレーニングのことばかり。飛竜の話題の豊富さとは比べものにならない貧弱さだ。それでも、喋っている柏木の横顔を見るのはいつも楽しい。おかしなものだ。

役立たずより……マシ……

いつもの外の世界と繋がっているのは当たり前だった。部屋にいても買い物はできるし、引き籠もろうと思えば（資金さえ続ければ）何年だって暮らしていける。映画でも音楽でも、『誰かと』一緒にいることにさえこだわらなければ、全部コンパートメントの総合端末で楽しめる。灰色の壁でしかなかつた総合端末。繋がらないケイタイ。自分がどうすべきか全く予測がつかない時に、鮮やかに聞こえた呼び出し音。画面をみると昨晩登録したばかりの『タカさん』と表示されている。飛びついた。そういえば霧島飛竜に頼まれていた。速攻で通話状態にする。それからその時まですっかり存在自体を忘れていたことなどオクビにも出さずに叫んだ。

「タカさんっ。無事だつた？」

未知香は思う。自分はいきなり無重力に放り出されてパニックになってしまって、何もできなかつた。高柳が心配してくれて、どんなことになつているのか教えてくれて、一人で居たくないと言つたら、側に来てくれた。

側に来てくれると豪語してから、実際に高柳が湧いて出るまで、思つた以上に時間がかかつた気がする。その間の心細さは、高柳と話す前の心細さとは種類が違つていた。依存心。甘え。なんとでも呼べばいい。とにかく一人でいることの不安に押しつぶされそうだった。漸くインタフォンが鳴つたときは、本当に嬉しかつた。

ドアの向うに居た高柳は、驚いたことに軍仕様のスペース・ジャケット姿だつた。滑稽なくらいの一生懸命さでファットネス・プログラムをこなしていた見慣れぬ男。好きなものを食べさせてやると

言いながら蕎麦屋なんかに連れてくような勝手者。ちょっと飲んだだけで潰れてしまつて、柏木に抱がれていた頼りないオジさんが、まるで頼もしい男みたいだつた。

ただ何故か、あの時の高柳は酷く青ざめて強張つた表情を貼りつかせていた。何があつたのか聞こうとした未知香を、高柳は『30秒だけ肩を貸してくれ』と言つて、背後に回り込んで抱きしめてきた。問答無用の強引さ。でも、耐えがたい独りの時間の後で感じた男の温もりは、陶酔を覚えるほどに気持が良かつた。あのままで男の温もりは、陶酔を覚えるほどに気持が良かつた。あのままで心地よさに溺れていても構わないと思つた。けれど、高柳は本当に僅かな時間だけそうすると、きびきびと行動を開始した。

まず、あの灰色の壁だつた総合端末を復活させて（自分が知つてゐる形ではないけれど）外との窓を開いてくれた。重力と情報を奪われたこの街の人たちに、正確な情報を開示する道を示していくこと、どんどん手を打つていくのが分かる。何か状況が動くのも待つてゐるのではなく、何かをすれば状況動くと確信している迷いの無さ。

ホスト・コンピュータにアクセスできる方法（未知香には残念ながら意味不明の言語だつたけれど）を開示し、情報を受け取れる場所をつくり、どういう手段を使ったのか全く不明だが、ライダー・プールの外からの通話も復活させてくれた。画面の向うの向うに、霧島飛竜の顔を見つけたときは、信じられないという気持で一杯になつた。迷わない。揺らがない。確固としている。まさに暗闇を照らす灯台。

画面に映つている軍装の男と、全く未知香の理解が及ばない話をしていたが、その言葉の端々まで全てが、非常時の専門家プロフェッショナルといった雰囲気だつた。高柳さえ傍にいてくれれば、何も心配しなくて良いと、いつの間にか確信している自分がいた。無条件の信頼感。

普段の未知香は、どちらかというと男というものの動物としての

本能を基本的に信じていない。普通に存在している多くの男というものは、女の個性だの人格だのより、『女』であることと、自分が『モノ』にできるかを基準で考えているとしか思えないフシがある。高柳の飄々とした雰囲気には、そういうものが微塵も感じられないのだ。甘え方も触れ方も単純明快。『女の子が好き』という単純なメッセージしか書かれていない。貪欲で鬱陶しい『欲しい』が感じられ無いのだ。柏木とすらしたことが無いキスだってそう。ママが子どもにするのと同じような『可愛い貴方が好きだよ』と呼びかけられているような味がした。明るくて、優しくて、頼りになる男。

高柳。

女が訪ねてきた。額のマークがリアルタイプの擬人^{（アンドロイド）}であることを謳つていなければ、気後れするほどに、妖しく美しい人形。彼女と一緒にいた、なにやら不細工なウェアを着た青年も、驚くほどに整つた造作をしていた。こちらにはマークが無かつたが、あの不自然なほどの美は、この女と同じく作り物の人形なのかもしれない。この二人の訪問者を迎えたときの高柳の嬉しそうな顔。満面の微笑み。親しげに抱き寄せるしぐさ。気心が知れきつた人たちだけが持つ、独特的の雰囲気。

嫉妬した。

おかしこことだ。自分が好きなのは柏木恵心。間違いない。高柳は頼りにできる優しい男だが、殆ど未知の通りすがりにも等しい存在。なのに、女の形をした人形に、自分は間違ひなく嫉妬した。高柳はあのキレイな人形を抱き寄せて、あの衣魚^{（シール）}どころか、くもり一つない滑らかな首筋にキスをした。私も知っている、欲望も下心も全部取つ払つた、あの、『大好きだよ』というメッセージしか書いてない、優しい接吻。

「若鷹二号、柏木です。タカさん、聞こえますか？」

総合端末のスピーカーから聞こえてきた、大好きな男の声。柏木の声まで呼んでいるのは高柳だ。私の部屋なのに。私はここにいるのに。ここでは私はいてもいなくても、どうでもいい存在。ただの役立たずだ。あの人形みたいに高柳に頼りにされることはない。高柳みたいに皆から頼りにされることもない。できることがない。

いつの間にか高柳は、湧いて出た二人の人形と何処かに出掛ける準備を始めていた。また、ここで独り取り残される？ そう思うと、不安がみつしりと体に貼りついてくるような気がした。

高柳は、画面に映っているトークショーでやっている、プールの中間倉庫にいるらしい子どもを迎えて行くと、あの人形に言つていたのに、大きなリュックが欲しいとか、シーツがどうとか、針と糸がどうとか。そんなものを何に使うのかさっぱり見当がつかない。説明を求めたけれど、さっぱり要領を得ない。そしたら、あの人形が言ったのだ。

ボディバッグよ。

一瞬、体に密着するタイプのバッグを想像した。それから、遺体収納袋をそう呼ぶことを思い出した。遺体収納袋。高柳は迎えに行くといつておきながら、子どもが死んでいるという前提で行動している。なんて冷たい男なのだろう。トークショーは下らない番組だとは未知香も思う。だけど、画面の中で取り乱しているママたちの子どもを案ずる気持ちは本物で、無事を祈る気持ちは子どもが居ない自分でも身につまされるほどに切実だ。それを、死んでいることも想定して行動するというのは、なんという冷酷だろう。高柳を優しい男だと思っていたのは、側にいる男がそういう生き物であつて欲しいという自分の望みがそう思わせていただけなのだろうか。

ビスクドールみたいな人形は、高柳を追い立てるように身支度を手伝っている。見つめ合つて、人形の掌が高柳の手首を撫でるように

に触っている。いやらしい。高柳は人形とそういうことをする男なのだ。頼りにしていた自分が馬鹿みたいだ。

人でなし。

自分で口にしたくせに、自分で凍りつく程に冷たい響きを持つ言葉だった。言った未知香自身の心の方が、固く強張つて、悲鳴を上げていた。

役立たずより……マシでしょ。

人形に、あんなふうに見下されるとは思わなかつた。情け無い。一步も動けない。高柳は肩をすくめて、『御免』というように目配せをしただけで、未知香が酷い混乱状態の部屋で探し出したボディバッグの材料をバックパックに詰め込んでいった。支度を整えた高柳が、『じゃあ、行つてくるから、ちょっと留守番してて』と言つたのは聞こえたが、返事もできなかつた。

今再び一人取り残されて、高柳という男への思いが、入り乱れて未知香を一杯にしている。特にいい男という言葉を添えたくなるような外見ではないのに、いつも底抜けに明るい顔をしている。ゼロGという過酷な現場でずっと仕事をしていると聞いているのに、パンチもキックももの凄い格好悪いのに……、あのハードなプログラムにラスまで食らい付いてくる。頼りになる男。信頼できる男。優しい男。『大好き』のキス。抱きしめられた時の温もり。

……でも。人形相手に欲望を発散する淫猥な男。子どもが死んでいることを平氣で想定できる酷い男。私ももう一度独りで放つていく、冷たい男。

何度も考える。私が好きなのは柏木さんだ。高柳という中年男なんて、そもそも存在を知つてまだ四日目だ。なのに、彼が居ない部屋のこの虚無感、この頼りなさは何だろう。こんなにも無条件で頼

りきるほど、自分はあの男の何を知っていると言うのだろうか。こんなに視界から消えるのが寂しいなんて……いつたい何の冗談だろう。

「おーい、タカさん。聞こえてる？ ちょっと教えて欲しいんだけど……」

再び、柏木の声が聞こえた。モニターに映っているのは、例の『あゆみちゃん』と呼ばれると『あゆむ』と必ず律儀に訂正する人の頭だ。彼は多分軍の管制司令室みたいな部屋でなにやら忙しくデータを打ち込んでいる。この斎藤歩という男の人は、恰幅がいいと表現するのが合っているだろう。軍服が似合いすぎている大人の男で、どこか風が吹き抜けているような高柳や、どこか浮世離れしている霧島飛竜と違つて、地面に足が付いている雰囲気がある。あの三人の男たちは自分たちの間でだけ通じる言葉をもつていいようだつた。けなし合つてているようでいて、喧嘩腰としか思えないようでいて、絶対の信頼感で結ばれているのが分かる。

柏木の声は、高柳への思いで乱れている未知香の心を直撃してき た。

「ここにちは……。尾崎です」

未知香は遠慮がちに発言した。自分しか居ないのだ。自分の部屋の総合端末に話しかけるのに遠慮するというはどこか釈然としないが、高柳が「ンピュータとしてこれを再起動させてからは、個人の回線というより、ライダー・プールという一つの街の命運を左右する中央司令塔の様相を呈している。だから、なんだか自分が出ていいという雰囲気では既にない。

「ザキさん？ キリーさんから聞いてました。本当に無事でよかったです。心配してたんですよ。怪我とかないですか？」

柏木の声は自分を心配している。優しい言葉がなんだか嬉しくて……そしたら、高柳の冷たさに腹が立つた。

「タ力さんは……いません」

「えつ？ 居ないの？ どうして？」

高柳の不在を告げたときの、柏木の声の不安そうなのに、未知香はなんだか腹が立つた。柏木だって自分と同じくらいに高柳を知らない癖に、どこまでもすっかり皆で頼りきっている。どうして？ 柏木の方がずっと強そうではないか。なんで、柏木のような男までが、高柳がここに居ないというだけでそんなに不安そうな声をだすのだ。

画面に映っていた『あゆみちゃん』が、未知香が高柳の不在を告げる言葉を発したのに気付いて、顔をこちらにむけるのが分かつた。

「中央倉庫に……子どもたちを迎えて行くつて……」

『あゆみちゃん』が、一瞬顔をしかめてから、それから、ふつと微笑んで仕事にもどつて行つた。その一瞬の表情が、未知香を落ち着かなくさせた。声だけの柏木は、鬱陶しいほどの質問を山のよう

に積み上げてきた。

「なんだつて？ どうやって？ そつちの街区は緊急遮断壁が降りてて、分断されてるつて聞いたよ。タ力さん、どうやって中央倉庫へ行くつもりだつて言つてた？」

そんなことを聞かれても分からぬ。

「ごめんなさい。聞いてないわ」

「どんな装備してた？ ダクトとか使って中で移動するつもりか、外を通りつもりか分かるから……」

外と中にどれほどの違いがあるのかは分からぬ。未知香は言った。

「軍用のスペース・ジャケットでした。特別な装備はしていないと思います」

「じゃあ、中を通るルートかな……。でも、なんのタイミングでそんな無駄なことするかな……」

未知香は『無駄なこと』と言った柏木に引っかかった。

「子どもたちを迎えるのにどこが無駄なの？」

「可哀想だけど、倉庫にいたなら絶望的だから……だよ。固定されてないコンテナが満載の部屋にて、そこがいきなり無重力になつたら、子どもでなくともひとたまりもない。時間が経つてると、すりつぶされて……ミンチになつてもおかしくない」

子どもたちがコンテナにすりつぶされてミンチ。その映像を想像して、未知香は胃がひっくり返るような気分になつた。吐きそうだ。「それに……、冷たい言い様で、ザキさんに嫌われたら……俺、いやだけど、レスキューの現場では、多くの命を楽に助けられるなら、そちらを優先するのが常識なんだ。子ども三人と……、まだ時間に余裕がある一万近くの住人だったら、三人に構うのはナンセンスなんだ……。そんなこと学校でやつたら容赦なく赤点だ」

「柏木さん……まで、そんなこと……いうの？」

「数が多い方を助けられるなら、少数の犠牲は、まあ、ショーガनいとでも思わないよ、シャトルでそこに突つ込むなんて、やつてらんないよ。俺だって誰も助けられないなら、プールに突つ込むなんて遠慮させてもらつよ……。皆を助けられると信じてるから……やるんだ。今はタカさんがこの現場の司令塔なんだからさ、ここには自分が必要だつていくらでも言い訳できるでしょ。だから、その子どもたちが生きてるって確信があつても、俺がタカさんなら迎えに行くのは躊躇すると思うよ。違うな。多分やつてみようと思つ

もしないな」

司令塔。そんな言葉は思いつかなかつたが、たしかに言われてみれば似合つてゐる。

「でも……でも、どうして？」

「怖いから」

柏木の答は単純で明快だつた。

「怖い？」

「無重力に慣れていない、パニックを起こしている子どもを二人つれて、移動するなんて、正氣じゃできない。俺にはどう考えたって無理だ……」

「でも……、タカさん、シーツとか荷造りヒモとか……用意してた。死んでもると……思つてるのよ」

高柳が酷い男でないと……、『人でなし』と言つた自分が救われない。

「タ力さんつて、ホントに。すんげー人だな。キリーさんが、あれだけ無条件に信頼するだけのこと、あるよ」

「凄い人？」

「時間がないのに、子どもたちが亡くなつてた場合も、事実確認するだけじゃなくて、連れて帰つて来るつもりでいるんだろ？俺たちね、学校で緊急事態回避訓練つてやつをうんざりするくらいやつてきてるんだけど……、緊急避難時には、死んでる人間には絶対に配慮しないつて約束事があるんだ。死んでいる人間の尊厳にまで配慮するのは、落ち着いて、日常を取り戻してからで充分だし、普通のときだけでいい。自分が生きるか死ぬかの瀬戸際にいるときは、まず、自分が助かることを最優先させると教わる。レスキューもそう。助けに行く人間は生還する確信がない場合は行動しない方が良いんだ。そうだろ。周りにしてみても、死体は一つでも少ない

方が助かるんだからね」

柏木の言葉は未知香の心臓を掴むよつだった。自分たちにも時間が残されていないということを、なぜ、自分は気付かなかつたのだろう。

「プールは大気圏に落ちかけてる。そのまま時間を無駄にしたら、自分も含めて、プールに乗り合わせてる生き物は全部死ぬ。そんなときに、他人の子ども命懸けで助けに行つても、プールが落ちたら意味がないだろ？ あの人、俺たちがそこに突つ込むことで、プールの落下が防げるつてこと、ちつとも疑つて無いんだ……。人事を尽くして天命を引き寄せるタイプだよね」

「命懸け……で？」

未知香がひつかかつたのは、その言葉だつた。

「今のプールの状態で、中間倉庫まで行こうなんて、余程、無重力での作業に自信がなきや、そもそもやろうつて気になれないほど、危険なことだよ」

子どもを迎えて行く。その高柳が使つた穏やかな響きの言葉の裏に、未知香は危険という匂いを感じることができなかつた。命を懸けるほどの危険……。

それに、そうだつた。ライダー・プールが地球に向かつて落ちかけているのだ。それを柏木や飛竜たちシャトル・ライダーが質量の大きいマスドライバー用のコンテナごと突つ込んで角度を修正しようとしている。危険なのは突つ込んでくる柏木たち。自分は完全な所にいると誤解していた。なんで、そんな能天氣でバカな見積もりが立てられたのだろう。

未知香の脳裏に、総合端末に向かつてなにやらしている高柳の背中が鮮やかに蘇つた。あの背中が見えているとき、自分は、絶望を

全く予測の中に入れるることはできなかつた。なぜなら、常に状況を少しでも良くする為に、田の前の問題を解決していこうとする彼の姿勢のどこにも、絶望なんか無かつたからだ。できることを淡々とこなしていくだけの男の背中には、いつも未来は鮮やかに繋がつてゐる。

自分も含めてここに居る皆が、死に直面していることを、未知香は気付かなかつた。けれど、今、そうだと氣付いて、高柳の纖細な優しさが胸に迫つてくる。

最後まで言わなくていい。女の子には可哀相だ。

齊藤とそう話していた高柳の声。優しい……。

自分の一つひとつこの数千。秤に乗つけられないほどビケチなのか?

「」の数千の命を、柏木たちの命と秤にかけると冷酷に言い切る男。つまり、ライダー・プールに居合わせていてる数千の命を助けるために、命をよこせと飛竜たちに迫つていてるに等しい。当然数千の方に高柳も含まれる。もしも高柳が自分の生き残りを最優先に、そもそもそうすることを求めたならば、なんという身勝手な言葉に聞こえるだろうか。けれど、高柳には単純に多くが生き延びるための計算しかない。自分が助かるサイドにいるかどうかなど、これっぽつちも考えていない。だからこそ、あれほどに自信をもつて、非情にも聞こえる言葉を紡げるのだ。

生きてても……ダメでも、子どもはママの所に帰らないとな……。

あの高柳の言葉もそうだ。死んでいたら助ける必要がない子どもでも、ママたちが泣き崩れるためには、体が必要だと……そういう

ことなのだ。生きているママが、これからも生きていくために、子どもをママたちの所に返して上げる。彼はそいつっていたのだ。

高柳はそれとも、鈍すぎて危険だと感知することできなかつたのだろうか。いいえ。違う。

迷わず、ぶつける。

あの人は、自分が失敗する可能性もちゃんと視野に入れて、あの言葉を口にしたのだ。ここで失敗するということは……生きて帰つてこないということだ。

（タ力さんに謝らなきや……。タ力さんに……いますぐ会いたい）

未知香は涙が溢れるのを感じた。不思議だ。無重力で水分は、水玉のように浮くのかと思っていたけれど、涙は頬に貼りついたまま剥がれていかない。高柳への溢れるような思慕が、未知香の心から零れていかないのを真似しているようだつた。

「計画中止を……私はお願いできないわ

セシリ亞小柳 遊星ママの言葉は、塩屋さとみには信じられない種類のものだった。

「遊星君が居るのよ。信じられないこと言わないで」

塩屋さとみ 塩ママの言葉は絶叫に近かつた。

越智涼子と塩屋さとみが、小柳家のコンパートメントの呼び鈴を押していたとき、周りはマスクのレポーターみたいな人たちが、犇^{ひしの}いでいるといった勢いで群がっていた。いつもオシャレには細やかに気づかっている美咲ママの白いスカートに、血が乾いたときのような茶色い衣魚が広がっている。スーツ姿がいつも颯爽としている塩屋さとみ 崇ママは、足下だけ、オフィス履きのサンダルだ。そして、セシリ亞自身はTシャツにエプロンをつけて、首には汗留めのタオルを巻いているという、カメラを向けられるには有り難くない格好だった。

セシリ亞小柳は可愛い下の息子、遊星がどういう状況におかれているのか、一番系統だつて正確に現状把握ができた。なぜなら、それは問題解決に当たつているという軍の人から直接説明を受けたからだ。なぜこんな事になつてているのか困惑つていたセシリ亞と、どうにも要領を得ない越智涼子と、半分ヒステリー状態のような塩屋さとみを、軍用車が迎えに来てくれたからだ。通された応接室のようなどころで、この件について、セシリ亞たちの担当をすることになつたと自己紹介した青年に、なぜ、消防や警察でないのかと聞いたときの答えは恐ろしいものだった。

大気圏に突入してしまつても、燃え尽きることがない大きな施設が、人類の至宝である地球に甚大な被害をもたらすことだけは阻止

しなければならない。よつて、ライダー・プールを大気圏突入までに攻撃して大破させる、というのが一番最初に国がとろうとした解決策だというのだ。その為に軍にお鉢が回されたのだと……。

背がやたらと高くて、軍服がよく似合ひつい男系の情報官さんの話しさは、年若い割りに説明慣れしているという感じでセシリアにも分かりやすかつた。救いが見えてこない話しが分かりやすいというのは、希望を抱きようがないものだ。腹の底が焼けてくるような気がする。

軍部では、ライダー・プールを攻撃・破壊するという國から命令へ準備を整えつつ、落ち行く船に閉じ込められている約八千三百の命を尊重し、他に方法が無いか模索したこと。そして、時間稼ぎにしかならないかもしけないが、とりあえずはライダー・プールの大気圏突入を防ぐために、質量のあるモノをぶつけて軌道を変えようとしているということ。普通の宇宙殖民地などに比べれば小さい規模ではあるけれど、それでも一万人規模を収容できる巨大な施設の方向を変えるには、なるべく本体の中心に衝撃が当たるようにないたため、ターゲットが中央倉庫に選ばれたこと。そして、マスドライバー・コンテナという耳慣れない名前の巨大コンテナを抱えてライダー・プールに突撃してくれるのは、民間のバージ・シャトルの運転手さんだということ。

軍の人は、いざというときに命を張れることを前提として、生活の一切を国がまかなつていてる人種だ。セシリアは、なんで軍人さんが突つ込まないのか聞いたけれど、マスドライバー・コンテナを扱うには特殊な荷役設備が必要で、軍がもつていてそれを輸送してもつてくるのを待つていたら、間違いなくライダー・プールは大気圏に突入してしまうという説明だった。

民間の企業さんが、緊急事態に対応して、引き受けてくれたこと。シャトルの運転手さんは、命の危険も考慮して強制ではなく、申し出てくれた人だけに限定しているということ。なにもかもが驚くべ

き話だつた。

そして実行する直前になつて、そこに子どもが居るということを、軍の特殊な情報源ではなく、他でもないテレビのトークショーで知つたこと。常日頃であれば、子どもの命を最優先にしたいが、ライダー・プールの落下が防げない状態になつてしまつたら、最初の国の決断通り、ライダー・プールへの攻撃は速やかになされること。その為に既に大型のミサイル巡洋艦が、ライダー・プールが射程に入つている場所で待機していること。

ライダー・プールへの通信手段が限られているため（全くの不通では無いらしい）桟橋^{桟橋}に大型の客船を横付けすることが難しいこと。いきなり無重力に曝された居住区内での混乱が予測できることから、八千という数字の人間を救出するための投入人員の規模を検討中であること。とにかく、ライダー・プールが落下するのが少しでも先のばしできれば、打開策が見つかるかもしれないこと。

明解な説明だが、聞いているだけで圧倒される。なんという事故がおきたのだろう。なぜ、子どもたちが無謀なことをしでかした、このタイミングで起きてしまつたのだろう。

混乱するセシリアにとつては止めに等しい最悪な情報もあつた。有Gしか想定されていない、無人の物資運送コンテナの保管倉庫が無重力になつてしまつたとき、その中でコンテナがどう動くのかのシミュレーション画面だ。『碎氷船を苛む^{さいな}流氷の塊』という表現を、あの背が高い情報官さんはしていた。そして、あの憎らしい男は、そのPC画面の中に、人形のオブジェを落とし込んだのだ。すりつぶされる。押しつぶされる。千切れる……。今は跡形もない。跡形もない。……跡形もない。

美咲ママはその画面を見て失神した。赤ちゃんにおっぱいをやつてるのだ。当然、万年睡眠不足と貧血気味のだろうから、無理もない。……跡形もない。

ない。真っ青になつて震えている素ママは、まるで化物を見るような目つきで、計画続行に同意したセシリ亞を見ていた。

「人間じゃないわ。貴方たち、人間じゃない。生きてるかも知れないじゃない。こんなシユミレーシヨン画面で諦めさせて、計画を続行させようつて、そういう魂胆なのよ。乗せられてどうすのよ！」

セシリ亞はちょっと深くため息をついた。人間でないとまで言わるのは心外だ。

「あのね。塩屋さん。冷静になりませんか？ 遊星たちが生きていたとしても、計画を中座してらもうだけなら、事態は変わらないのよ。このまま落ちるしかないのだったら、攻撃されて……粉々になつて、地球に燃えながら落ちてしまうのよ。髪の毛一筋、残っちゃくれないのよ。私は……。私はもう一度遊星を抱いてやりたい。燃やしたくない……」

死んでいる、生きているは、もう、運命に委ねるしかない。けれど、このまま子どもたちが居る場所が、目の前で攻撃されて、燃えながら失われていくのを見るのは、もつといやだ。ただの死ならまだいい。このままライダー・プールが燃えてしまえば、自分は、生きている遊星が助けを求めながら燃えていく場面しか、想像できないだろう。死んでただろから、仕方がないなんて、絶対に思えるはずがない。

「遊星……ママ……」

塩屋さとみは、子どもを燃やしたくないというセシリ亞の言葉に、シャトルをぶつけなかつた場合はどうなるのかという次を思い知られたのか、そうセシリ亞を呼んだきり、絶句した。次の言葉がでてこない。

セシリ亞はぎゅうと力を込めてタオルハンカチを握りしめた。ふと気がつくと、そのハンカチはミラーズ・レッドが決めポーズをとったワンポイント刺繡が入つていた。

〃ラーズ・レッド。

くしゃくしゃに握りつぶされた〃ラーズ・レッド。ちよつと大きすぎて、運動神経に劣る息子でも、なりたいものはレッドらしい。崇くんとのじっこあそびで、いつもイエローやブルー、グリーンになるらしいけど、家ではいつも颶爽としたレッド。そのレッドが握りつぶされて……、くしゃくしゃで……。

握りつぶされて……、くしゃくしゃで……。

すりつぶされて、押しつぶされて、バラバラに千切れてしまったかもしれない、かけがえのない息子と重なった。大人しくて、優しくて、お兄ちゃんと全然違つて手間がかからなくて。『飯の心配だけしていれば良くて。可愛い。大事な遊星……。

「私は……遊星を……燃やしたくない……」

我慢していたつもりは無かつた涙が、セシリアの双眸からじつと溢れた。

「お願ひ……します。髪の毛、一本で……いいです。指先一本でもいいです。プールを燃やさないでください。私の遊星を……連れて帰つて……」

セシリアの言葉を、さとみが叫ぶように遮つた。

「厭。私はそんな崇は厭。ちゃんと連れて帰つてください。頼みます。遊星君にはお兄ちゃんがいる。美咲ちゃんにも圭太くんがいる。私には……私には崇しか居ないのよ」

涙が溢れた目で、不思議そうにセシリアが呟いた。

「私にも……遊星は、遊星しか居ないわ……。お兄ちゃんはお兄ちゃん。遊星じゃないわ。他の誰もあの子の代わりはできない」

一瞬だけ奇妙な間を置いてから、さとみが泣き崩れた。

「『めんなさい。私、どうかしている。なんて酷いこと……。』めんなさい」

セシリアはミラーズ・レッドのハンカチで、涙を抑えた。

「遊星くんを誘ったのは、あの祟のバカなのに。本当はどんなにお詫びをして仕切れないほど酷いことをしたのは……うちなのに。ごめんなさい」

遊星はバカな祟くんに悪い遊びに誘われて、こんな目にあつたのではない。友だちと冒険の旅にて、ちょっと大きな試練に遭っているだけだ。乗り越えるために試練はある。打ちのめされてしまつたら、お話は終わつてしまつ。

遊星は私がつくりあげた、レッドのアップリケが入つたリュックをもつていて。不死身のレッド。どんな困難に押しつぶされそうになつても、何度も死んだと仲間に思われるような局面に陥つても、必ず帰つてくるハヤト。ミラーズ・レッドの力を、遊星、あなたにも信じてあげたい。帰つて来て欲しい。私のために。

それにミラーズ・レッドは友だちを絶対に見捨てない。熱い友情がレッドの力。そうだったわよね。だから、美咲ちゃんも、祟くんも必ず連れて帰つて来て。

いつか、遊星が言つていたことが、セシリアにふと思いつかれた。

あのね。知つてる? ミラーズにイエローがなんでいるか?

ミラーズ・イエロー、ショウスケは、かつこいいミラーズ戦隊の中では浮いている。大きくて、鈍臭くて失敗ばかり。悪気は無いのだけれど、よかれと思って彼がしたことは、しょっちゅう裏目に出て、レッドのハヤトやブルーのミツルのお荷物になる。取り柄は力持ちだけ。仕事柄も、前面で戦うレッドとブルー、知恵で作戦を指揮するグリーンと違つて、特殊車両の『ミラーズ・スペシャ

ル』を運転しているだけだ。同じ非力のキャラクターでも、グリーンのシユウゾウは天才発明家だ。第一シユウゾウは、ちょっと美形の男の子が演じている。

力持ちが一人いると、便利だからかしら……。
もう。分かつてないな。ママは。

じゃあ、何かしら。

ヒントはママだよ。

大きくて、ちょっとズレていで、便利屋さんで。コミカルなキャラクターで。どこが私だというのだろう。セシリアには、遊星が何を言いたいのか分からなかつた。

ハンカチで顔を抑えていた崇ママに、セシリアは聞いてみた。

「いきなり……へんなこと聞いてもいいかしら」

「なんでしょう？」

「ミラーズ・イエローって、なんでミラーズにいるのかご存じですか？」

「え？ いきなり……、何です？ イエローってあの『スペシャル』

を運転しているショウスケのことですよね」

戸惑いを隠せないさとみに、セシリアは頷いた。

「前に遊星から問題がだされてたんです。いま、何故か思い出してしまつて」

「遊星君はどんな問題を？」

「ミラーズになんでイエローがいるか。『ヒントはママ』ですって

……

暫く考えていたさとみが微笑んだ。

「ああ、多分……そういうことだわ。間違つてるかもしれないけれ

ど……」

思いがけなくさとみが断言したので、セシリアは身を乗り出した。

「安心して帰れる場所……」

そのさとみの答えに、セシリアは戸惑った。安心して帰れる場所？

疑問に囚われてしまつたようなセシリアに、さとみが助け船をだした。

「あの、テー・マソングの五番……ご存知？」

「テー・マソングっていうと……」セシリアがちょっと節をつけて歌つた。「レーヴィ。お前はレッディ。赤い血潮は熱く滾る^{たぎ}るつて……あれ？」

さとみが頷く。

「そうそう、それが一番でオープニングで流れる奴。それから二番。ブルー。お前はブルー。青い炎 氷の刃^{くの}くつ」

さとみも軽く節をつける。

「そこまですか、知らないわ。五番つていうと……//ミラーズみんなの分があるの？」

「ええ、もちろん。祟つたらお風呂嫌いだから、それをフルゴーラス毎日歌い終わるまでお風呂に浸からないと、次の週のミラーズはみせないことになつてるの」

そういうつてから、もう一度さとみは味わうように歌つた。

「イエロ～つ お前はイエロー 春のお日さま いつもそこに 帰れる場所お前がいるから～ 僕たちはそこに生きて帰る 僕たちの家 ミラーズ・スペシャル 僕たちの家 お前はイエロ～」

あ……。

セシリアは考えが止まつた。いつも遊星をイエロー扱いする祟。我が子が一番の母親としては、大人げないとは思いながらも、ちょっとだけ面白くなかった。越智涼子が断するように、祟が悪い子だ

とまでは思わないけれど、自分がレッドで遊星はイエローとこの二つのが、自分勝手だなと思えてならなかつた。

あの質問を遊星がしたとき。何の話をしていたのか、思い出した。遊星をイエローと呼んでいた崇の言葉が耳について、厭で、崇が帰宅して行つてから言つたのだ。

ねえ、イエローなんて言われて、なんで怒らないの？

優しい遊星は好きだけれど、やはり男の子だ。強くて逞しく在つてほしい。なのに、面白くもない役どころを押しつけられて『イヤ』と言えない息子が、不甲斐ないと思えたのだ。だから、やつ言つた。

ねえ、ママ。あのね、知つてる？ ハーネスにイエローがなんでいるか？

あのあと、ヒントはママだといつた後、遊星はこんな風に言つたのだ。

崇くんが本當になりたいのは、イエローなんだ。これつて凄い秘密なんだよ。みんなにナイショなんだからね。誰にも言つたらダメなんだからね。特に美咲ちゃんには言つちゃダメだよ。笑うから。

崇くんがなんで？ あの子はいつもレッドとつかはうじやない。

それは一番が好きだつて病氣だからだよ。もちろんレッドはみんな大好きだよ。でも崇くんがなりたいのは、イエローなんだ。嘘じゃないよ。僕だつてレッドが大好きだけど、なりたいのがブルーつていうのと同じさ。夢はあんまり現実離れしちゃ、いけないからね……。なりたいものと、なれるものは別なんだ。

遊星の言葉はセシリ亞を仰け反らせた。クール・ビューティーのブルー。冷静な視点をもつ氷の刃。遊星があいう大人になるのは、可愛いピンクになるのと同じくらいに困難を伴いそうだ。なのに……なれるものは別とは、よくもまあ豪語したものだ。

「崇くんは……、本当はイエローになりたいんだよって、遊星が言つてたの……。『存知？』

セシリ亞が言つてみると、

「まああの子つたら、誰にもナイショなんて言つて、遊星くんには言つちやつてたのね……」

そう、たとみが微笑んだ。セシリ亞はその表情に少し困惑。

「大きくなつたら、ママがいつでも安心して帰れる家になるからねつて。……いつか分からなければ、絶対になるからねつて。今はまだ、ママが僕のイエローだけつて……。可笑しいでしょ？」

あんな子でも、私には優しいの……」

そう微笑んだ顔のままで言つてから、思いが溢れ出てきてしまつたのか、わつと泣き伏した。

「崇がいなくなつたら……、生きて……る、意味が……無くなつちやう……」

セシリ亞は、いつもはしっかりと背筋を伸ばしている、たとみの背中を撫でた。いつもは、きつちりとしたビジネススーツを着こなしている、働く強い女性の筈のたとみが、周囲を憚らず泣きじやくつている。強い女性が、強くあるのは、頼つてくる優しい手があるから。そして、それなくして、強くあるのは意味が無いのかもしない。

「塩屋さん。私たちも、崇くんみたいに、頑張つてイエローになりましょ！」

「……？」

「安心して帰れる場所がなければ、強いレッドも、迷子になっちゃうでしょ？」

「……。でも、イエローツー役立たず……じゃない？」

「いいじゃない。……役割が無い有能より、ちゃんと役が割り振られた無能の方が。今は、ライダー・プールを救うために頑張つてくださっている皆さんを信じて、待つのが仕事つて……、覚悟しますよ。できることがある人に……お任せして」

「ママつて……厭な仕事だわ。私、自分でちやつちやと動く方が性に合つてるので」「ママ」

「……ママ業のプロは……、待つことのプロじゃないと……ね。植物が育つのをじっと待つてゐる園芸家と一緒に、ジ・アース地球の回復を待つてゐる今の人類と一緒に。ただ、待つのが、できる最大限の仕事つてそういうときもあるのよ。きっと。……動ける人は、こんな辛さ……きっと分からぬ。……でも、これも仕事」

セシリアの掌の温もりを背中に感じながら、さとみは、首を力なく振った。

「私は……小柳さんの強さが……怖いわ……」

17・バナナ バナナ バナナ バナナ

バナナ バナナ バナナ……。

目の前には、バナナが一杯浮かんでいた。

俺はバナナが好きになつた。

* * *

キヤツチャーボート越しに感じるより、さらに強い拒絶の清冽を深く湛えた闇が、身近だつた。宇宙は、いつも、ただ不思議なくらいに、厳然とある。不思議だ。こんなにも、命を拒絶している空間があること。そこに、命が溢れている惑星^{ほし}が生まれたこと。育つたこと。ここに来るまでの英知を、何世代にも渡つて延々と積み上げてきたこと。住むに耐えなくなつた地球。容赦なく牙を人類に剥いた自然。

原初。コアセルベートの海は、生命のゆりかこになつたと考えられている。でも、いつの間にか消えてしまつたように。

カンブリア爆発。動物の多様性が増した時期。バージェス頁岩、澄江生物群、エディアカラ生物群。海を満たした奇妙な生き物たち。彼らが、いま、この世界のどこにも居ないようだ。

地表を満たした、古生代。デヴォン紀の羊歯。石炭紀の巨大昆虫たち。ペルム紀を代表する三葉虫。かれらも突然に消えてしまった。

新生代。鳥が姿を現したジュラ紀。巨魁の骨を残し、その存在を、絶滅を越えて後世に叫んだ恐竜たちが闊歩した、白亜紀の繁栄も、兵どもが夢の跡。K-T境界を越えることができた僅かな鳥類を除いて、消えてしまった。

ヒト
人も……、あの恐ろしい自然の猛威に打ちひしがれて、無くなつていくのが、正しい道程だつたのかもしない。種として、盛衰を繰り返していく、全ての生き物たちと、同じように……。

俺が完全に浸つていると、加悦さんが散歩で浮つついて遊びだした犬ツコロにするように、安全帯から伸びている命綱を引っ張つて、プールの外壁まで手繩りよせてくれた。

プールは物凄い速度で動いている。この慣性から振り落とされる

と……俺は間違いなく、ジ・エンドだ。

「タ力さん。ちょっと、真面目にやつてよ」

お怒りごもつともです。俺は照れ笑いで誤魔化した。呆れたような加悦さんは、まるで宇宙空間だということを嘲るかのよう、タウンウェアだ。これを見ていると、自分が金魚鉢かぶつて、メットとブーツ、グローブのジョイントを密封して、この圧倒的な空間から隔てられていることが理不尽に思えてくる。いいよなあ。加悦さんたちは。

もちろん、彼女たちだって、こここの慣性から振り落とされてしまえば、宇宙のゴミになるしかない。推進装置をもつてのジョーだつて、防護服に装備された推進装置にトラブルがおきて動けなくなつ

てしまえば、それまでだ。宇宙は危険に満ちている。だけどな、人生なんてそんなもんだ。事故、病気。そんなものが、いつだつて押しかけてきて、運が悪い人間を容赦なく、どこか向こう側の世界に押し流していく。俺がプールから振り落とされて死ぬのも、カウントは1回。病院で愛する人に手を握られて、老衰での穏やかな死だつて、そのもののカウントは1回。お年寄りの連中だつて、死んだことだけはないはずだ。この一点に限つて言えば、見事、生き物は全て平等だ。あ、違つた。生まれてくるのも1回。この一点ね。もらつちまつたものは、返す。ただそれだけだ。

俺としては、この一回きりの命を、自分から捨てるということだけは、したくないと思つている。どつかからやつてくる方の死つて奴については、自力で避けようがないから考えない。ただ、それだけだ。

時間が来たのか、エアロックの扉が閉まつた。しゅつと音を立てたような気がする。もちろん、空氣がないから聞こえないけどね。どーでもいいけれど、メンテナンス用のエアロックなどというものは、そこを使用する許可を持つている人をトツつかまえて掌紋と網膜パターンを読み込ませないと普通は使えないだろう。まあ、加悦さんは加悦さんだから、なにか裏技を使つたのだろう。

網膜の毛細血管パターンは複雑で、径年変化（年をとつたら、変わるものってことね）で本人だつて弾かれちゃうくらい厳しいものだから、こまめに更新登録を繰り返す必要があるかわりに、逆に、とつくに現役を退いた担当者が悪気を起こしたとしても使えないという、そういう面で便利である。どうせ、ネットで登録技術者を検索して、そいつの所へお邪魔して、目玉を覗き込んできた、という辺りが正解に違いない。加悦さんに目玉を覗き込まれて、じつと見返さないで居られる男なんて、ゲイしか居ない。彼女のアイ・カメラは、違法レベルの解像度がある。

掌紋もそうだ。無言で加悦さんに、いきなり手を掴まれて、掌を

合わせられたら。普通の男は、振り払うより先に動けなくなるに決まっている。そうでない奴は……以下同文。もとはといえば、俺が手袋装着器なんかに手を突っ込むより、加悦さんにしてもらう方が良いからって、無駄に高いものに変えさせたのだ。念の為、断言しておく。ロリコンというわけではありませんつ。

まあ、テレビに毒されたジョーの場合、技術者さんが生きていたら本体^{かどわか}と拐し、死んでいたら、目玉くり抜いて、手首切り落としてもつて来かねい感性をしているから、加悦さんの方がマシなことは間違いない。（この前、例のカシスさまが、可哀相な市民の手首を使って、掌紋認識させていたのだ。エグーつつ。子どもにそんなもの見せるな！）それに対して、とにかく、いろんな物が、いろんなところで役に立つ。いろいろのを「都合主義」というのかねえ。ああ、俺のムダ使い万歳。

いつちゃんのムダ使いである、ジョーの防護服が目の前に浮かんでいる。この辺で飛ばない程度の常識は弁えて、ちゃんと俺の命綱を握つて、プールの慣性から振り落とされないようにしていい。耳元で声がした。

「また、暗闇にみとれてたでしょ。タカさん。何にもないのになんで好きなのかな」

俺は否定した。

「馬鹿いえ。俺がみとれてたのは、地球さ」

「ふつ」

噴きだすとは失礼な奴。常識はとんとなのに、そういう制御だけは、上手くなりやがつて。俺は面白くない。

すると、ジョーが命綱から手を離した。とたん、物凄い勢いで縮小する。小さく。小さく。小さくなる。手を振つているヤツは、豆粒になつて、闇に融けた。

「行つてきま～す」

姿が見えなくても、声は耳元に届く。感度良好。

「あいよ。テカイから氣をつけて」

「つるさいなあ」

手袋の中^{グローブ}で、手は上手く使える物ではない。実感してみたければ、

指先にスポンジをつめてぐにゃぐにゃにした、自分の掌より2サイズくらい上の作業手袋をはめて、ネジだの回してみたり、まめでもつまんでみるといい。できそうでできないストレスの塊。宇宙ではみんな、不器用になる。解決策は一つしかない。細かいことはしないことだ。因みに宇宙船の運転免許と、宇宙空間作業士とは別の免許だ。ついでに、俺たちの母校、ネオシャンガンの航空宇宙専門学校が、なぜ、航空と『空』をのこしているのかというと、大気圏内を滑空できる『大気圏内飛行機運転免許』取得に向けての訓練もでくるからだ。もちろん、飛竜のようなバージシャトル・ライダーは、『航宙』だけでなく、『航空』のライセンスも持っている。ちなみに俺は『航宙^{スペース}ライセンス』免許は、大型・牽引までもつているけど、『航空』は持っていない。そういうえば、バージシャトル乗りは、小型の『宇宙』と『航空』でいける筈だ。といふことは、牽引の実技、学校でやつたことくらい、あるのかな……柏木は。ただのコンテナだつて、シャトルの固定金具でセットして一体になつて使うのと、牽引とでは難しさの種類が違う。牽引のキモである『アソビ』が凶器になつて、シャトルが距離をとれずに、ぶつかつて大破する恐れもある。

（まあ、今更気にしても仕方ないか……）

俺は、パンピーのことはジョーに任せることにした。あいつは、あの外見と、あのガキっぽさからは図れないほどの、知識と経験はもつているのだ。スカベンジャー・フィールドで五年。しかも、キヤツチャーボートなしでの牽引経験も、多分一年以上は……してゐはず。俺のボートより余程操作性がいい。ジョーにフォローできな

いなら、誰にもできないってことで間違いない。大丈夫。ベターを積み上げる鉄則は、外していない。そして、今の俺のベターは、スクールバスのおっちゃんだ。

「ボス……送りましょうか？」

加悦さんが言つてくる。ありがたいけれど、時間が読めない。マス・コンの打ち上げ時間にあわせて待機するのは、柏木の若鷹や、ジヨーならできるが、制御不能のライダー・プールには無理だ。マス・コンの打ち上げが直ぐにされないのも、多分、俺がビーコンを突入ポイントから出せると安請け合いしたのを信じて、歩が『待て』をかけているに違いない。

「ビーコンが先だ。管制をあんまり待たせるな」^{タワ}

俺が言うと、加悦さんが頷いた。

「了解……。本当に、無茶しないでね。ボス」

泣きそうな顔をしている。可愛いつ！ 俺は一回だけ、きゅっと抱きしめてみた。スキンシップというには、ちつと遠いけど。

「行つてくるわ……」

加悦さんが、プールの外壁に垂直立ちして、すたすたと歩きだす。何気なく歩いているが、間違いなく一瞬の隙間も無く、計算されて制御されつづけている動きだ。芸術の域にまで達した、スペーススウォーク（ムーン・ウォークの数倍かつこいいのだよ）。しつこく繰り返すが、ライダー・プールは時速二万キロを越える速度で移動している。慣性に取り残されないように、どこか必ず一点はプールの外壁にひつづいたままで移動しているのだ。そして、ここは重力が地面にくくりつけてくれない宇宙空間。本当に、凄い技術だ。安全のために、上手なロープワークをして命綱を固定金具にセットしながら移動しているが、金具を手掴みにできるし、器用さも纖細さも生身のままだ。まったく、羨ましいというか、かつこいいというか。

「さてと……。小学生のガキンちゃんは、お家に帰る時間になりました

た。スクールバス、発車します」「

俺は口の中で呟いて、ゆるやかなカーブを睨んだ。中央倉庫へのびる、中にエレベーターが通った、形としては居住区のドーナツを繋ぎ止めているスポーツ部分を伝つて、目指すのは中間倉庫。中間倉庫は、無人作業が普通なので、空気漏れ事故がおきたときに、被害を最小限に抑えるための遮断壁を下ろす必要がない。通常のシヤツターで区切られているらしい。

本当は、この外側ドーナツは中を移動したい。軍服に伸ばされるたくさんの手や、軍服に浴びせられる様々な無策への誹りは、命までは脅かさない。対して、ここは危険だらけだ。ただ、遮断壁を時間をかけてドーにかしてる暇がないという、ネックがあるから、通れないだけだ。それから、向うの中間倉庫に着いたらば、中にはできるだけ入りたくない。マス・コンなんかにくらべれば、コロニー内の運送用コンテナなんか可愛いサイズだけれど、人間を押しつぶしたりすりつぶしたりするだけの大きさは充分にある。俺は、いろんな死にざまのなかでも、ミンチは御免蒙りたいもの一つだ。

俺は注意深く、金具にカラビナをかけながら、移動しつつ、頑張つていろんな悲惨な風景を想像しておく。覚悟を決めておかないと、現場での悲惨に直面したした時に動きが鈍る。（頭が潰されてる）で、現場つて言うのは、大概、一番頑張つて予測したよりも酷い状況を見せてくれたりするものだ。（手足が千切れ）俺はなに目にするのだろう。（キレイな玉になつて浮かんでいる血でできた水玉）見たくない。（涙）見えるわけないか。（排泄物）そんなもんを、（三人分、仕分けして……）なんて、できるんだろうか？（内臓が……）

まずい、やりすぎたかも。マジで気持ち悪くなってきた。この辺で止しておこう。えつと、今度は、一番いい風景も想像しておこう。コンテナが空っぽの倉庫。子どもたちが浮かんで遊んでいる。……ありえね～。だめだ、想像できない。

スパーク（本当の名称は知らない）みたいな所の付け根まで辿り着いて、俺はメンテナンス時に命綱を仮止めする金具^{ハケン}が、上下水道管沿い以外にないことを発見してしまった。このスパークみたいな奴の外側を手入れば、完全にロボット化されているのか、金具^{ハケン}の代わりに、ロボットが走行するためのレールがついている。

しばし、悩む俺。

閃いた！ 任せなさい。

俺はカラビナを外して命綱を体から外すと、苦労してやつとこをレールの下に、命綱を通した。このロープも、きっと、カーボンナノチューブだ。ダブルウォールになってるかどうかは、まあ知らないけど、そういう風に思っていた方が安心できる。握力には自信がないから（自慢するなよ……俺）、ここは時間をかけてしっかりと結んで輪にする。急ぐのとあわてるのは別だ。落ち着けよ。俺。

輪つかにした命綱を腕でしつかり保持してから、俺は外壁を軽く蹴った。取つかかりを力を抜いて蹴ることと、足首を上手く使って方向を制御するのがキモというのは、構造物内とあまり変わらない。ぶつける心配がないのはありがたいが、天井もないので、手が輪から離れたら、俺はキレイな星になる。

レールは始点と終点だけがスパークに繋がっているなんてことがあり得ないのを、俺は忘れていた。ガクンとひつかかって、俺は手を離しそうになつて肝を冷やした。よくみると、レールに足がついて、スパークに打ち込まれている。チッと舌打ちがでる。しつかり輪つかにしたのが、今度は裏目に出る。時間があれば、ゆっくり解いて、ゆっくり結んで。この足にひつかかる度にやればいいが、残念ながら、そんな余裕はない。俺は思い切つて自分の腕を輪つかに

して、足の向こうのレールに抱きつぐ。深呼吸一つ。

いいか。無謀と大胆は違う。俺がこれからするのは、時間稼ぎの大胆さで、命知らずの無謀じやねえ。誰がなんといつても、ベターはベターだ。

あそびがなければ、ひつかかってしまうだろう。万が一破けたら、俺は輝く星になる……から、簡易仕様のスペジャケにさせるには、荒っぽい仕事すぎるけれど、やるしかない。軽く抱きすぎですっぽ抜けてしまつたりしたら……。そしたら、俺はきっと明るい星になる。

加減は慎重に。でも、力を抜いて、足が蹴る方向をちゃんと目測にして……行く。慎重と大胆。安全重視と、危険軽視を上手く使い分けながら、俺は中央倉庫を目指した。

ミンチ。肉。ミンチ。肉。

俺はお題だいもくのようにな唱えて、覚悟を決めながら移動した。息があがつてくる。簡易スペジャケの換気装置は、機能が弱い。やっぱり、息が……続かない。緊張しすぎて過換気症候群かかんきじょうこうぐんを起こしかけているのかもしれない。まあ、この際、死体が一個ふえるのは、仕方ないか……。俺はいやいや最悪を思い浮かべる。

血。涙。血。涙。

ミンチ……。どろどろ……。ぐぢやぐぢや……。あーつ、気持ち悪い……。

中央倉庫には、エアロックはざつと目視したところないから、どこから入るか悩む。

「聞こえる？ 加悦さん」

「もちろん」

答えは瞬時。

「今どこ？ スポークみたいなの中間辺り？」
「」の部分の名称は、加悦さんの辞書にも無いらしい。俺は安心した。

「着いた」

耳元に届くのは、加悦さんの安堵の溜息。

「どこから入る？ どうやら上下水道管設備は、」の部分は無いみたいだ。エアロックが見当たらない。もつとも、有つてもロック解除できないから、入れないけどさ。ビーしょ

「どーしようて、考えてなかつたの？ タカさん、やつぱり馬鹿？」
そんなに断言しなくとも。

「しゃーないじゃん。考えてなかつたものは、考えてなかつたんだから」

血漫してびつかる。俺。いま聞こえた溜息は、呆れ果てたという
意思表示。

「ベターなアイデアお願い。加悦さん！」

「自分で考えて。」の部分も、デカいビーコン移動してる最中なんだ
から。そうだ。私、ビーコン入ってる部屋の壁、ちょっと爆発させ
て穴開けたけど……」

「乱暴だな。子ども助けに来たのに、壁壊してビーするんだよ。そ
んなことしたら、万が一生きてたって、即死じゃん。だいたい、中
身全部出てつちゃうから、死んでも拾えないし」

「じゃあ……自分で考えて。頑張ってね、ボス」

加悦さん……冷たい。俺は途方に暮れると、「いろんな」とを閃く
はず。はず。はず。

くそつ、閃かない。

「宇宙の暗闇に、絶望はよく似合つ。」

俺は、そううそぶいて、虚空を仰ぎ見る。ああ、^{またた}瞬かない星が……キレイだ。

「タ力さん。銃火器類かレイザーナイフの類、携帯してる?」

天使の声。俺を見捨てない加悦さんは、神様よりもありがたい。俺、生き延びて、無事、スカベンジャー・フィールドに戻つたら、毎日あなたに、地鎮祭ダンスを捧げます。

「軍用スペジャケの標準装備だけだよ。ナイフはあると思うけど」「スパークに2種類あるの、目視でわかる? 一つは人が使うエレベーターだから、丈夫にできる。でも、もう一つの方は、ライトクラフト並のペナペナらしいわ。軍用のレイザーナイフなら、出力最大にすれば、穴が開くみたい。その中で、シユートされた小型の搬送用コンテナが行つたり来たりするらしくて、中はチューブ状になつてるみたいよ。だから、中に入つたら、倉庫側のハッチに向かつて。ハッチは一応二重扉になつてるわ」

俺は倒れそうになる。決死のレール移動は、無駄だつた。なんだ、中を通れたのか。報われない俺……。犯さなくていい危険を犯した俺。でも待てよ。生きてる子どもでも、死んでる子どもでも、帰りはここを通れるじゃん。俺は、小さな幸せを見つけて嬉しくなつた。

「ハッチに到着。開けるのはどうやるの?」

「そこのマムに、命令するわ。管制の斎藤一尉に通話つなげる?」

「いや……いい。加悦さんと、ジヨーと繋がつておきたい。ここは現場だ。加悦さんが頼んで」

「了解。中は……コンテナが無節操にぶつかり合つてるはずだから、本当に気をつけて」

田の前で一枚の扉が開く。俺の位置を正確にここマザーコンピ

ユータが把握しているところだ。

「もし、俺が死んだら」

俺が通つたとたん、背後で扉が閉まる。

「タカさん？」

目の前のもう一つの扉があぐ。ここからが、正念場だ。覚悟はいいか？ えつと、ミンチ、ミンチ、流血、臓物。めちゃくちゃ運がよかつたら、元気なお子ちゃんたち。神様つ。纖細なボクに、子どもの残骸を集めさせるようなことをさせなかつたら、お礼に毎日、五体倒地拝礼欠かしませんつ！ まあ、スカベンジャー・フィールドに地面があればの話だけど……。

流水みたいなコンテナでボクがミンチで、お星さま。そんなことは、なりませんよ。いや、建物の中で死んでも、お星さまには成れない。どうせなら、エンドロールは広い宇宙に映したいボク……。ああ、やっぱり、過換氣かかんきっぽいな……俺。

「みんなで、宴会でもしてくれつ

「虚勢も、ハツタリも盡のうち。

「バカつ

短くキツイ一言。その言葉は、優しく甘えるような声で言つてくれないで、傷つくよと、今度ちゃんと申告しておいつ……。

（はあ？）

現実は、いつも単純な人間の想像力を簡単に足蹴にして、もっと意外な風景を、愚か者の眼前に投げて寄越す。俺は、その瞬間、数

えきれないほど、その黄色くて細長い物体が、^{ひじめ}舞くコンテナに押しつぶされながら泳いでいる風景に直面していた。

バナナ　バナナ　バナナ……。

田の前には、日頃見慣れたマス・コンからみれば、おもちゃみたいに可愛いサイズの荷運び用のコンテナが、複雑な動きで、ぶつかり合って、反発しあって、引っ越し無しに不快な音をたてている。でも、潰されてる奴もあるし、ちゃんと形も保つていてる奴もあるバナナが、一杯浮かんでいた。

ミンチでも無い。血でも無い。人間の残骸のうんちやらかんちやらでない。

キレイで、美味しそうな黄色いバナナ。手を伸ばして、目の前に浮かんだ一つを掴もうとするが、グローブの不器用はつかみ損ねた。つるんつと逃げていくバナナ。

「だから言つただろ。絶対誰かが絶対に助けに来てくれるつて

「ここつ。ボクたち、ここに居るよ！」

「教えてッ。おトイレドーしたらいつ？　モー、限界、助けてッ」

生きて……る？
どこだ？

田を凝らす。「コンテナ以外は、どこもかしこもバナナだらけだ。バナナ、バナナ、バナナ。

「だからあ、レレ。レレよ。おじやんつー。おしつこーつー

一つだけ、扉が開いているコンテナがあつて、そいつの両開きの扉は、とっくに千切れで無くなつてたけど……、扉があつたはずの四角、そこから、小さい顔が三つ並んでいるのが見えた。

バナナ バナナ バナナ。

独身、恋人無し、これから可愛い奥さんを張り切つてゲットするつていう、若い（つもりの）男をつかまえて、おじさん扱いする無礼に対し、ちゃんと礼儀を教えてやるのは、ここから出てからの話にしといてやるよ。可愛い、お嬢さん。

嬉しい気持ちは、たくさん浮いてるバナナの色をしていた。だから、俺は、この瞬間に、たぶんバナナが大好きになつた。

(拙つ ^{マク}たか……?)

フロントウインドウ越しに、これから捕まえるソイツが目に飛び込んできたとき、柏木恵心は、目測を誤つたかと、咄嗟に距離計に目をやつた。距離は詰まり過ぎてはいない。充分に余裕をもつてアプローチできるだけの空間はある。

ホツと溜め息をついてから、ジンワリと自分では認めたくない恐怖 ^{いふ}心のようないいものが臓腑に染み出すのを感じてしまった。

(めちゃ……デカいな……)

あの、どこか微妙にズれているというか、力がどこもかしこも素通りしているような高柳が、普段扱っているヤツだということで、甘く見ていた自分に腹が立つ。高柳の脱力しきつた見てくれと、敬愛する先輩ライダー、霧島飛竜が一目置くだけの器量 ^{のじか}とが、柏木の中でまだ噛み合っていない。うつかりしていると、類をみない男だと、ということを失念してしまつほどに、長閑な雰囲気の男。

ついさっきも、ザキさんに、凄い男だと受けあつてしまつてから、後悔していたと言つのに。幼児の十歳違いは決定的だけど、大人になつてしまえば、十歳くらい年が離れているカップルなんて、腐るほど居る。恋敵の株をつりあげて、なにやつてんだろ。俺。柏木は力なく思つた。ここ数年越しで、密かに想つてはいる、あのザキさんを、なれなれしく抱き寄せて、接吻……してた、厭なオヤジ。なのに、ザキさんときたら、いつもの痛快なストレートを打ち込むどころか、微笑つっていた。

しかし、それにしても、凄いおっさんだなあと、柏木は思つ。今、

地上で打ち上げ待機している筈の、柏木の後に続いてプールに突っ込む仲間たちが思い切りやれるよう、中間倉庫に取り残された子どもたちを迎えて行っているという高柳のことだ。

それは、柏木だって航空宇宙大の出だから、もちろん、無重力空間での作業訓練はしたことがある。が、どうにも洗練された動きにならずに、散々だった覚えがある。宇宙空間作業士の検定試験はとりあえず在学中には数回挑戦したが、結局とれないと終わってしまった。

たしかに、俺だけではなく、飛竜さんだって、他に突っ込むことを了承したヤツだって、曲がりなりにも小学生の子どもたちが「生きているかもしない」ところに、死んでる確率がいくら高いと説明されたところで、巨大コンテナを抱いたシャトルで突っ込むのはいやだというだろう。数千の命と、たった3つの命。ザキさんにはああいったものの、冷静に秤にかけられないからこそ、人間なんだと柏木は思う。

俺たちがやつたところで、なにせデカい質量を持つ建造物が相手だ。無駄に終わるかもしれない。だけど、それでも可能性があるならやつてみたいと思うのも、また人間なのだ。大好きな人。見慣れた街並み。誰かにとつて大切なたくさんの誰か。数千という数字のうち、柏木自身が直接知っている人間は、ほんの僅か一握りに過ぎない。それでも、自分でできるならば、誰かを一人でも多く助けたい……。

いや、違うな。たくさんの人人が「ついでに」助かるならラッキーなだけで、自分が助けたいのは、好きな人。それから仲間たち。やっぱり顔がある誰かだ。

たしかに、子どもという存在は、普通の人間ならば助けたいかもしれないが、この局面で、自分は見たことも無い、話したことも無い他人の為に、自分の命を秤に乗せることができるだろうか。千切

れて悲惨な状況になつていい子どもの残骸をかき集めて以て帰つて来るのは、厭な仕事に違いない。

それから、万が一、彼らが生きていたとしたら、もつと事態は深刻だ。恐怖に駆られてパニックをおこしている子どもを、ゼロG環境で、どうやって引率して居住区に連れてくるというのだろう。だいたい、その子たちは、簡易宇宙服をもつているのかどうかってことすら、分からぬのだ。死んでたつて、普通の毛布を縫いつけた程度のボディバッグで宇宙空間につれだしたら、間違いなくバッグ内の空気が膨張して破裂する。

子どもを二人も、連れ帰つてくる。一体、あの人は何をどうやって、そうするつもりなのだろう。

柏木は、余りにも一人で、物思いに深く沈み込んでいて、フロント・ウインドウに張りついて、ノックの真似をしている、どこかへンでボテボテした宇宙船外作業服を着ている存在に気付いていなかつた。

若鷹二号、柏木機長へつ。

スピーカーから、いきなり聞き慣れない声がした。管制でもない。会社のオペレーターでもない。自分の携帯端末ならまだしも、愛機のスピーカーから聞こえるには、若干カジュアルすぎる軽い声。

「若鷹二号。柏木機長。応答願います。

「……誰だ？」

「ここです。そのフロント・ウインドウのところなんですけど……。さつきから、呼んでるのですが、気付いてくださなくて。えつと、ボスから若鷹二号のヘルプにあたるよう指示されていま

す。それで、一応、飛んできましたので、仕事をやるときの宜しくの「挨拶」ということだ……。

「ボスつて……誰だ？　二二二つてどこだ？　ウインドウの外つてのは、何の「冗談だ」

自然と言葉が剣呑になる。一瞬、高柳の関係者かとも思ったのだが、軍に棲息している人種の言葉遣いなんていうのでは、あり得ない。それはまあ、最近知り合つた約一名の軍人さんも、全然、それ臭くないけど。

二二二つて。「冗談じゃなくて、あ、私、ジョーといいます。そう呼んでくださると、慣れていますので、私の方も反応しやすいと思います。あ、そうだ。冗談のジョーつて……、いいですね。馴熟落になります？

普通は、フルネームで名乗るだらうと呆れつゝ、一応目線を計器端末から上にむけて、柏木は腰をぬかすかと思つほど、驚いた。窓越しには、見たこともない不細工な外觀の船外作業服をまとつた人間がいる。最近では、空調ユニットも、生命維持ユニットも、全て小型化されて、宇宙船外作業服だつて、スペジャケよりは「ゴツイもの、少しば動きやすいようにスリム化されているものだ。それが、昔々の記録映像でみるようなダブダブのもの。そうでなくとも目立つのに、胸の辺りには何かがキラキラと輝いている。まさか、スパンコールではないだらうけれど……。普通なら空気ボンベを背負つている場所に、なにやら筒状の怪しげな機械がついているのが目を引く。どうみてもボンベに相当する何かをつけていない。妖しきぎる。それと何よりも異彩を放つのが、そいつの身長よりもあるだろうロボットアームを、頭から生やしていることだ。あれは多分、柏木には見慣れている、ポートの桟橋によくある、コンテナ荷役用のロボットアームだ。

(……人間？ ロボット？)

で、も一つの質問のマイ・ボスつてのは、高柳三等宙曹の」とです。

(高柳つて……)

柏木は思わず確認の言葉を口にした。

「タカラさんが言つてた、サポートしてくれる、相棒つて……？」

相棒つて。やだな。気さくなのは彼の利点だけど、仕事の時はしつかり関係者には説明しないと。私は、相棒ではなくて、彼の道具にすぎません。もちろん、柏木さんにも、高柳三等宙曹の指示により、このミッションに関して、私への命令権があると思つてくださいって構いません。但し、同時に実行不可能な命令が重複した場合は、高柳三等宙曹からの命令を優先させていただきます。宜しくお願いします。あ、そうそう。一応顔だけ見せときます。その、知らないよりは、親近感もつてもらえるでしょ。

自分で自分を道具などと、奇妙な自己紹介をしてから、そいつは、目の前で……あらうことか、金魚鉢に手をかけて、スponツと……。「なつ、何をするんだ。バツ馬鹿つ！」

奇妙なほど綺麗に整つた青年の顔が、そこにあった。それは、しかし、目の前でみるみる歪んで……目玉が飛び出で……、なんてことは全くなく、にっこりと微笑みを湛えて平然としている。まるで、地上で海辺の風に吹かれているみたいな穏やかさ。そして丶サイン……。どう見ても普通の作業用手袋^{グローブ}じゃなくて、ただの普通の手袋だ。普通のメカニックたちが作業に使うようなヤツで、器用に動かし易そうな五本指が、綺麗にクッキリ見える。こいつ、何者だろう。このどこまでも能天氣な……こんな種類の笑顔は、どつかで見たこ

とがある。彼はもう一度金魚鉢を頭に戻す。戻しただけで、つなぎ目を封印することもない。

すみません。鬱陶しいんですけど、自前の無線出力は弱くて、しかもシングル双方回線なので、宇宙では、これがぶつてないと、不便なんですよ。えっと、まだマス・コンまで距離があるので、ここで待機していいですか？ 目障りでしたら、翼の上辺りに移動しますけど。

もしかして、こいつは噂に聞く……。

「新人……？」

あ、ええ。そうです。というか、私の場合は、中身だけですけど。ボディは宇宙船外作業しやすい仕様になつてますので、どうも機能重視というか、人間仕様には落ちるんですけど、AIの方は、ちゃんと、新人権利条約対象レベルをクリアします。

「極東アジア国軍は、新人は……全廃した……はずじゃ」

『戦闘及び治安維持活動局面では』です。後方支援では、一応、新規配属は予算の都合上、凍結されますけど、配備済みの我々まで、積極的に排除はしていません。

「つてことは、軍備品の新人さんで、タカさんがボスつてことは、スカダーヴ？」

そういうことになります。ただ、私は個人的な趣味で、キャラーボートを普段使いませんので、こういう局面では、おそらく、他の人間よりは、お役に立てると思います。一応、DWNTネットでくるんだ状態で打ち上げてもらえてますから、つまり、私たち高柳三等宙曹のチームが普段している、ネットでキヤッチするという第一段階は省いた作業が可能だということでしょうな。もう少し距離が近付いたら、えっと、幅寄せしてもらいたいんですけど、無人

桟橋に無誘導で寄せたことがあります？ 私とのアームの出力だけで、飛んでくるコンテナの軌道は変えられませんから、このアームでひっかけられる距離までは詰めてもらわないと。

「そいつは……、もちろん、学校の実技でやつてきてるナビ……」
(あんまり得意じゃあ、なかつたんだよなあ。)

「些か、弱気な『けど』をしつかり聞き落として、明るくジョーが言つた。

「それなら良かったです。安心して任せられますね。えっと、あそこまで大きいものですから、キヤツチするという感じより、無人桟橋に寄せるイメージでやられた方が間違いないと思います。これも普通に船を捕まえる位には伸ばせますから。」

「そう言って、ジョーは頭の上にあるアームをちょっとだけグーパーしてみせた。

「若鷹二号のフックに装着しても、おそらく、コンテナと若鷹二号の間に隙間ができますので、牽引に近い動きになると思われます。マス・コンはハンパじゃなく大きいので、それと、若鷹二号が接触しましたら、ちょっと大きな問題になるかと思われます。ですから、私は、ネットをフックにかけましたら、反対にまわってネットを引っ張つて、マス・コンと若鷹二号がぶつかったり擦れたりするのを、少しでも防げるかどうか、とりあえずやってみます。」

「やつてみます……つて、飛べるわけじゃあるまいし。訳わかんないことを……」

柏木は頭が痛くなりそうだった。この冗談のジョーは、高柳の冗談だったのかもしれない。ギリギリの緊張感を、じょつちゅう強いられる宇宙飛行士連中というのは、普通の人間が笑つていられないタイミングで、強烈なボケを噛ましてくる人間の含有率が異常に高

い。だけど、今回かかるのは、己一人の命じゃなくて、一つの街が抱く全てのものだ。こんなところに受けをとつてどうする？

柏木は強烈に毒づいた。

今は若鷹二号の慣性にのつてゐるジョーだが、体が機体から離れば、一瞬で闇に投げ出され……る……？ えつと。でも、ここまで、こいつ来てるし……どうやってだ？

最初の疑問に立ち返つた柏木の前にあるスピーカーから、ジョーの声が聞こえた。

ですから、私は……スーツだけで、飛べますから。

(それつて、冗談でしょ……？)

「おい。まさか、そのへんテコな船外作業服に、推進装置を搭載してるとでも言つつもりじゃア無いだろうね」

その通りですけど。この肩のところからですね……。いやいやつて。

そういうつた瞬間に、シャトルの狭い窓からジョーが消える。それから、少しの間をおいて、ジョーが視界に帰つて來た。何故か足の裏から視界に湧いて出たジョーは、そのままもう一度バサインで微笑んできた。

「推進装置は、なんだ？ 船外作業服に装着できるサイズまで小型化されたつてのは、聞いたことないぞ。それに、温度とか大丈夫なのか？」

「えつと、光学式じゃなくて、炭酸ガスレーザーを使つてます。このシステムですと推進剤は水ですから、EPS（電力システム）で液体水素と液体酸素使つてている限り、お金かかりませんし……（誰も維持費のことまで気にしてないよ……）

柏木は疲れた。

「でも、タカさんつてば、タンクの中には再生水の方しか詰めちゃダメつて……」

（長期滞在型宇宙ステーションの再生水って言うと、要員の廃棄物の水分を全て回収したものが混ざっているはずだ。つまり、タ力さん……有機廃棄物で、飛んでることになるのかな……）

柏木は考えるのをやめることにした。

軽快^{（ライカ）}飛行機^{（フライヤー）}すらなしで、自由に宇宙空間を飛べる夢のよ^{（クル）}うな船外^{（ス）}作業服^{（ワーキング）}。いくら飛んでるのが頑丈な新人^{（コーマン）}だとはいえ、小さい頃に宇宙船もののテレビシリーズを見てワクワクした、あの感覚が蘇つてくる気がしているのだ。推進剤の構成物なんかに幻滅しているのは勿体ない。

「いいなあ……それ。気持ちいい？」

あれは、ジヨーの専用ス^{（ツ）}ーツなのだろうか。スペジャケでも着込んでから装着したら、ちょっとだけでも使えないのだろうか。やつてみたいという誘惑に抗しきれず、柏木はそう聞いてみた。

いや、それが……。ちょっと基本的な問題点がクリアされてないの……気持ちがいいという程では無いんですね。

「危険なの？」

いや。そういう問題じゃなくて……『見てくれ』に関するこ^{（ト）}で。

たしかに、不格好なことは認める。だけど、飛行機^{（フライヤー）}に乗らないで、宇宙を飛ぶなんて夢そのものだ。柏木は、シャトルの窓が狭いと思つたことは今まで無かつた。でも、もつともつとしつかり、人間の形をしたものが、ただそれだけで宇宙を飛んでいる姿が見たかつた。

柏木は時間を計るために距離計を睨んだ。日頃見慣れた形のもので、大きさが違うというのは、遠近感をもろに混乱させる。目視でどれだけ離れてるのかまるで見当がつかない。タ力さんがもう一点、安請け合いしてくれたビーコン誘導もまだ入ってこない。ビーコンの誘導があるのとないのとでは、全く難易度が違うのだ。早くして

くれ。

手動で無人桟橋に横付けする訓練も、まあ、学生時代に何回かしたことがあるが、難しかった覚えがある。とにかく大気圏外は広すぎて感覚が鈍る。時速何キロかで移動しているものが止まつていようにも見え見えるのだ。見掛けの穏やかさと、接触した瞬間に、速度と質量に勝る方の慣性にからめ捕られる瞬間の衝撃に近い違和感。そして、無音。これだけの質量のものがぶつかり合つたら、地上ならおそろしい音を立てるだろう。それが、静かに、どこまでも静かに破壊されていく現実。爆発や激突ですら、沈黙だけが支配する世界。バージャトルで突つ込む時、地面に近付くにつれだんだんと音が存在する世界に帰る。それは、いつであつても劇的な体験だ。

計器が反応したのが、目の端に入った。来た。

レーマークビー・コン特有の、送信局の方位を表す輝線がくつきりとレーダー画面上に浮きでている。間違いなく、目標のライダー・プールから発信されている。すごい。高柳はどうやって、レーマークを起こしたのだろう。マジシャンとの異名は伊達でないということか。まさに魔法。送信局の方位を輝線で表すように、電波（マイクロ波）を発射する装置を、本当にどうやって移動させたのだ。

* * *

「斎藤一尉、ジークンでました。発信局は間違いなくプールです。信じられない……。一体、どうやつたら、そんなことができるんだ？」

心底驚いたといったような言葉は、斎藤の部署の若手である堂本一馬一尉だ。

「何があつても驚くなつて、ちやんと言つたろ。あいつはマジシャンで、ホラ吹きじやあない。できるできないは別として、やつてみることもできない場合は言わない。ヤツができると言つたことは、やつてくれる信じていー」

「でも、奇跡だ！」

斎藤歩は画面を覗きこんだ。綺麗なレーマークビー^{マーク}の輝線が見える。斎藤自身も、この状況でシャトルが狙っていくターゲットポイントからビーコン誘導を出せるという高柳の断言を信じていいくつか不安もあった。やつてくれる。流石だ。^{さすが}タカ。

「拡大できるか？子供の安否確認に行つてゐる間、ヤツがテストのシヤトルをどこに突つ込ませるつもりか知りたい」

(お前まさか、中間倉庫にあるつもつと違つだらうな)

待つた

な
.....
)

歩の目の前で、モニターが切り替わるのがわかつた。ライダープールを透過視点にしたものだ。

「外のドーナツですね。居住区は隔壁で分断されてるから、ひとつくらい構造部分をぶっこわしても構わないって事でしょうか？」
「乱暴だな……」

「あいつは引き算と足し算だけは間違わない。人が居るところ一区画と子供三人なら、あいつは子供を見殺しにするさ。無人ないし、何か特別な用途の区画で人が居ないと確信があるんだろう。でもまあ念の為、一応該当区画が何に使われているところか調べてくれ」

「了解」

しばらく堂本が何やら端末に向かつて操作していたが、突然、頓狂な笑い声をたてた。

「間違いなく無人です」

「何の場所だ？」

「有機廃棄物保管倉庫です。完全脱氣されてますから、人だけでなく微生物濃度までかなり低めでしうね」

夕力、お前、本当によくまあ、こんなところを見つけるよ。斎藤は微笑みたいのを我慢して話を進めた。

「ビーコン情報をシャトル誘導プログラムに乗せ込んでくれ。できたら、若鷹一号のマザーに転送。とりあえず一発目、ぶつけてみるぞ」

「了解しました」

背が高い堂本が、ブースでキーボードを力チャカチャやつていると、どうも熊が蜂蜜を舐めているような、なんとも表現しがたいしぐはぐな可愛さがある。能力の方は、天下の中央学府を出ているだけにお墨付きだ。この程度の作業なら、斎藤がわざわざ確認するまでもない。

「誘導プログラムに数値投入完了しました」

それほど待たずに、堂本がそう答える。

「よし。若鷹の柏木機長を呼んで、こちらからのプログラムを受け取つたら、手動で若鷹のメイン・コンピュータの航行プログラムを切り換えてもらえ。確認でき次第、突つ込ませるぞ。時間が惜しい……」

斎藤はそういいつつ、臓腑が掴まれるような厭な気分を味わつていた。成功するのか。はたまた、徒労に終わるのか。たくさんの命に関わる指令をだすなんてのは、自分のガラではつづく無い。飛竜か、夕力か。あの辺の連中くらい凶太くないと、神経を病んでしまう。

* * *

「若鷹二号。柏木機長。応答願います。」

ビーコンのモニタ画面と、船体外に取り付けられたウインドウ・カメラが拾つてくる映像を、窓から直接見ているように扱えるメイン・モニターを睨んでいた柏木は、体に緊張がじわじわと浸食していくのを感じていた。認めたくないが、多分、本能が感知している危険への純粋な恐怖だ。

「若鷹二号。柏木です。どうぞ」

今回の飛行指揮（FDC）を担当する、国軍所属の斎藤です。貴殿の勇気に尊敬し、心より感謝します。プールからのレーマークビーコンを、貴機でも確認できていますか？ どうぞ。

「はい。綺麗に映っています」

それは良かった。こちらでフライト・プログラムに、その信号を乗せこんだものを転送します。確認後、手動での切り替えを頼みます。そちらでメッセージを開封すれば、プログラムそのものは自動的に立ち上がります。

「お願いします」

僅かな待ち時間だけで、操船盤についている小さい画面に、プログラム受診を知らせるサインが出た。

「今回のフライト・プランに対し、矛盾する2つのプログラムが検出されました。有効とする方を選択してください……か。はいはい

柏木は、送られてきた方を指で押さえるというだけの、どうとうことがない動きが、自分の人生を大きく変えることの不思議を、どこか他人事のように驚いていた。前からのプログラムはいつもの大気圏突入^{ブランジ}を経て地上の宙港に至るもの。もう一つは、下手をしたら激突の衝撃で、またはその時点では無事だったとしても、まつたくプールの落下に歯止めがかけられなければ大気圏に至る前に破壊されるという、死がとても身近なもの。

生と死と。明らかに標識を掲げている道を選ぶのに、自ら望んで後者を選ぶ日が、自分のような人間にくるとは思つてもいなかつた。柏木は思う。上手くいかなかつたとしても、多分残念なだけで後悔はないだろう。もう一つを選んだら、その後の人生を、多分ずっと後悔と共に背中を丸めて生きていくことになるだろう。誰が知らなくとも、自分が知つている。好きだと思っていた人も、大切だと思っていた人も、全て見捨てた卑怯な男だと。そんな生き方はしたくなかった。

「ジョー。聞こえる?」

もちろん。

「君から、プールの尾崎さん、分かるかな。タカさんと一緒に居た人なんだけど。彼女と通信できる? 君の声が直接聞こえる感覚で

……
突入^{ブランジ}に入つたら（行き先はまったく違うけれど）自分のオフィシャルな通信は全部記録される。でも、この新人^{ユーマン}が仲介してくれるなら、我が儘な願いを言つてみたつていいじゃいか。最後になるかもしないのだから。

できます。少々お待ちくださいね……と。

柏木にとつては永遠に思える時間が通りすぎた。

柏木さん? あの……お話つて……。

心臓が躍る。どんなときでも、この声を聞くのは嬉しい。

「ザキさん。あの……へんなお願いしていいですか？」

「へんなつて……どんな？」

「あれ……聞きたいんです……」

「あれって？」

「いつものザキさんの、『ファイティング・スピリット』の時間のあれ。その、あれ聞くと元気が出るから……」

物凄い長い沈黙に感じられた。柏木がやはり失言だったかもしないと、その言葉を打ち消そうとしたとき、激しくビートを刻むいつものリズムと、聞き慣れた音楽がスピーカーから零れてきた。

「こんにちは。今日も気合入ってる？ 覚悟はいい？」

「ああ。これだ。この声が俺を熱くする。柏木は条件反射でアドレナリン値が一気に急上昇するのを感じた。

「……ザキさん」

そのかすかな呼びかけは、見事に無視された。

「みんな、元気一つ？」

「みんなって掛け声は……ザキさん、サービス足りないよ」

柏木が文句を言う。

「ごめんなさい。でも、『みんな』じゃないと言ひにくくて……。今度、練習しておくれ……。もう一回いくね。ヘイヘイヘイ。やる気がないなら、さっさと今のうちに帰りなさいよ。全然、元気が足りないよ。もう一度行くよ。みんな、元気一つ？」

もう、『みんな』でいいや。この声は今は俺が独占している。つて、ジョーもいるか。柏木は吼えた。

「おーっ」

まだまだつ。「元気——つ？」

「「お———つ」」

もう自棄だ。柏木は絶叫した。なんだか、理由不明の爽快感が身内を駆け抜けていく。

いいねえ。ナイスファイト。じゃあ、今日も元気よく行つてみよーかあつつ！

「ありがと……ザキさん……。ジョー、そろそろ始めよ!」

フロント・ウイングに張りついていたジョーが、もう一度バサインを決めてから、飛んだ。あれ？……なんで、足の方に……なんだ？ 普通じゃない。

「ジョー。こんなときに何だけど、質問。なんで……足の方に」
スピーカーから、ジョーの声が聞こえた。

これが、先ほど「説明した、『見てくれ』に関する基本的な問題ですよ。肩に装着した炭酸ガスレーザーを足に装着した推進装置で受けると、レーザーがやってくる方向の反対にしか、進めないんですよ。

今どきの主流に真っ向から反対する作業服のデザイン。頭から生えている巨大なロボットアーム。華麗に足方向に飛んで行くジョー。申し訳ないと思いつつ、柏木は思いっきり噴きだした。

笑わないでくださいよお。こつちも我慢してるんですから。
「悪い、悪い。ねえ、俺もスペシャケでも着込んでからだつたら、それ、試せる？」

ええ。多分。温度もそれほど上昇しないですし。でも、気持ち悪いですよ。足に進むのって……。慣れないと。

「構わないさ。生身で宇宙を飛べるなんて……、最高じゃないか」

ええ。最高ですよ。それだけは、保証します。じゃ、落ち着いて行きましょうか。

「ああ。落ち着いてな。後で、会えるのを楽しみにしてるよ」

ちょっとだけ、柏木にとつては思いがけない間が空いた。

ありがとうございます。私も楽しみにしています。

ああ。そうか。人が彼らを要らないと宣言して久しい。多分、差別されないことに慣れていないのだろう。でも、話した感触が人間と変わらないのだ。柏木としては、直接顔を見せ合ひ前から拒否する必要はあるで感じない。

「サポート宜しくな。相棒」

頑張ります。

只の直感にすぎないけれど、なんとなくジョーとは気が合ひそつな気がする柏木だった。

物理運動といつものほ、シンプルで美しい。一見、無秩序に見える不規則の中に混在する、これだけは確かにこの際、黄金のとも言つべき法則を、私は発見した。後は、無重力での洗練された身体をばきと、度胸だ。私は、自らに問う。お前には可能かと。私は答える。今此處にいるのは、私だけだ

と、格好でもつけなければ、誰がこんな^{ひき}舞^{まい}いて激しくぶつかり合つているコンテナ満載の部屋に単身で突入なんかできるもんか。俺は、思い切り一つ深く深呼吸してから、そのコンテナたちが^{ひい}蠢^{よる}く空間と、目指す四角い入り口との間合^{あいだ}いを図つた。ここで壁を蹴つたら、子供たちの前でミンチになるか、ちゃんと辿り着いて良い格好できるかの一いつに一つだ。無謀と慎重を同居させるのは、やつかいな仕事だけれど、こんな中で挽き肉の回収作業することに比べたら、余程気楽な仕事だ。

声が良く響くよつて、一度、金魚鉢を脱ぐことにした。手袋^{グローブ}は取れないから、脱いじまつたら次につけるときは密着^{シール}でできないけど、それでも子供たちより上等な装備をしてくる。金魚鉢^{メシヤク}じの会話では、コミュニケーションには支障があるだろつ。俺は、あんまり悩まなかつた。

「頼むから、移動中は話しかけないでくれよ。今、トイレ持つて行つてやるからな」

女の子の皿を見て囁つ。女の子の皿が、真剣になる。僅かに頷く

その動きをみとめた刹那、道が開いた。コンテナの無秩序の動きの中で、これだけは確かな法則。上手く激しくぶつかったコンテナは、必ずお互いに弾かれあう。そして、彼らがそれぞれの移動先で別何かに当たるまでの僅かな間は、そこには道がある。

道が見えたときは、迷わない。迷つたら……、遅れてしまう。この場合、その遅れは生死に直結する。そんなことを悠長に考えていたわけではない。道が見えたとき咄嗟に動くのは、俺の言つてみれば、悪い癖だ。自慢できた話ではない。

俺はもう一度、金魚鉢の中に頭を突っ込むと、壁を蹴つた。

田をつけた方のコンテナの外壁にまず、取りつく。そして、四つん這いになつて手足の全てで外壁を駆け上がる。疾走する狼のように……というのは、この全てにおいて、ゆっくりと動いていく微細綠化重力下では無理な話だけれど、気持ちだけは疾風のつもりで行く。下手な考えはこの際お休みしてもらつて、目線は広く遠く。この部屋全てを見るつもりで。気持ちは一点に絞る。入り口となつている、四角だけに。

外壁に付いた手が、僅かな反発を感じた。こいつの反対側が、何か（どうせ違うコンテナだけれど）にぶつかつたのだ。今、俺がいる空間はこれからゆっくりと狭くなつていくのだ。

こいつに闇雲に壁を蹴つても仕方がない。俺はもう一度呼吸して、部屋全体と四角とをもう一度、鳥になつた気分で俯瞰する。右前方のヤツらがぶつかり合おうとしている。次に身を滑り込ませるのはあそこしかない。この壁と、あちらも再びこちらに迫つてきているコンテナとぶつかるまでは、もう少しある。前のヤツらがぶつかるまで、待ちだ。俺は慎重に、壁を蹴るタイミングを図つた。
……と、その時。

タカさん。今忙しい？

耳元にジョーの能天気な声が聞こえた。脱力しそうになるが、こ

ここで集中力を途切れさせたら命とりだ。俺はぶつめりもつて言つて捨てた。

「無茶苦茶、忙しい……」

女の子には黙つていろいろと言つたけど、此奴に言つとくのを忘れた。さつき女の子に話したときに金魚鉢ヘルメッシュを外してたから、聞こえていたかったのだろう。子供たちが生きていたことを言つべきか、一瞬頭に過る。いや、まだ、子供たちのところに辿り着いてさえいない。ジローが俺のことをタカなんて呼ぶときせ、ビビりせ緊迫した用件じゃない。

御免。ちょっと楽しい音入つてるんで、賑やかに転送しようつかと思つて。

しょーもない、用件で今呼ぶな。馬鹿。

「楽しい音？」

この微妙な局面でも、『楽しい』と聞いては、捨ておけない。聞か返してしまつ自分が情け無い。

ザキおねえさんの、突つ込み一番手、柏木機長へのホール。
「くれ」

短く言つたとたん、耳元に聞こえてきたのは、明るいビート。激しいリズム。そして、ザキさんの声。

元気が足りないよつ。もつー一度行くよつ。みんな、元気ーつー！
おーつ。

パンピー柏木の渋い声。俺も小ちく唱和する。

「おー」

まだまだつ。元気ーーーつ？

「うおーーつ！

「おーー」

今度も小さく唱和。もつ直ぐだ。あと、呼吸が一つと半分のタイミング……。

いいねえ。ナイスファイト。じゃあ、今日も元気よく行つてみよーかあつつ！

おーーつ

パンピー柏木とジョー。二人はびつやら合流できたのだろう。

チャレンジタイムうつ！ GO^{アーヴ}。

またしても、威勢がいいザキさんの発破に呼応して雄々しく叫ぶ、柏木くんの声が聞こえた。GOが出たつてことは……、マス・コン捕まえに行くのかな。まあ、いい。頑張れパンピー。こつちは、こつちで頑張るし……。それにしてもGO^{アーヴ}は丁度聞きたかつた言葉だ。柏木くんの自機で構造物に突っ込もうってのに、しょげてない声も気持ちいい。元気がもらえる気がする。ジョーの機転に感謝しよう。俺も、元気に突っ込んでやるぜ。

田の前でミシッと音を立てるようにして合戦をしたコンテナたちが、一瞬の押し合いで演じていい。こつちもチャレンジ・タイム、行くぜ。俺は、次なる空間田掛けてダイブした。

……到着。

ナース。まだまだ、次があるからねつ。

ザキさん……。君もナイス・タイミングだ。ここまで丁度だと、見えてるのかどうか聞きたくなる。GO^{アーヴ}がかかつてから、俺と同じくらこの間があるといつことは、捕まえられたのか？

「ジョー。マス・コン……捕まえたか？」

な……なんとか……、でき……そつ……。えつと、忙しいので、
ボスつ、細かい話は後で——^{あと}一一つ

バージシャトルの柏木とジョー。マス・コンを捕まえる以上に、あのデカいガタイの慣性に振り回されるないよつに、体勢を整えるのが大変と見える。でも、あつちは、あの二人に任せることはない。一応、柏木くんも腹が座つていそうだし、ジョーは子供だから基本的に怖いもの知らず。なんとか、してくれるだろう。

「それは丁度良かつた。俺も忙しい……」

今度は掌に反発を感じるのが早い。さつきこれとぶつかったコンテナの方は、まだ方向を変えていない様子だけれど、さつきの空間より短い間しか時間がありそうもない。

ファイトおつ！

サンキュー。ザキさん。その言葉を受け止めつつ、俺は思い切つて通信をオフにした。圧倒的な沈黙が金魚鉢を支配する。俺は、もう一度方向を探つた。この移動トイレに必要なのは、^{エール}応援じゃなくて、集中力だ。

向うのガキンちょうどもも、テラGピクニックを日論む位に骨がある輩だから、なかなか肝がすわっているとみえて、ありがたいことに、この期に及んで急かしたりしてこない。騒がれないと随分助かる。生きて戻つたら、ママたちに、「良い子育てしてます」と、忘れずに言つてあげよう。まあ、どっちにしろトイレを我慢するのには体に悪いから、さつさと行つてやらないと……。

と、思った矢先。いきなり、衝撃が来て、全てのコンテナが一斉に同じ方向に揺れようとしているのが分かつた。やばい。俺は、サンドイッチの具にはなりたくない。重いコンテナも軽いバナナも目

の前で、一斉に同じ方向へ流れる。俺は、なぜか一本驚掴みにしてから、バナナが流れしていくのと反対の方向にコンテナを蹴った。目標の四角から、一瞬遠ざかるのも止むを得ない。潰れないことが大切。女の子の顔が泣きそうに歪むのが分かった。男の子たちは、けなげにも、扉が千切れてしまったコンテナから頭がこぼれ落ちないように、必至で体勢を整えている。女の子を守るよ。

ふん。なかなかどうして、先が楽しみなガキどもだ。とにかく、なぜかバナナを掴んだまま、俺は、どんどん迫つてくるコンテナの隙間を強引にすり抜けるべく、果敢に体を動かし続けた。もう、死ぬつ。

今の衝撃が、どうぞ、パンピー柏木の若鷹二号が、上手に有機廃棄物倉庫に激突した結果生じたものでありますように。マス・コン一個でこれだけ動けば、俺の無責任な思いつきにも、着地点が見えてくるつもんだ。

神様つ、ネタが切れたので、振り出しにもどりますつ。もしブルの墜落を防げたら、年に一度なんていわず、朝日晚、獅子舞、ダンス捧げますつ。

どつかの神様に、どこか押しつけがましい祈りを懸命に捧げつつ、俺はどーにかこうにか、コンテナの群をすり抜けて、ちょっとだけ広くなつた空間に出た。あーつ、命が幾つあつても足りない気がするとは、このことだ。

俺は、連中^{コンテナ}が向うにぶつかりきつて大挙してもどつてくる前にと、思い、すかさず、反対側の壁を蹴つて流れしていくコンテナの後を追つた。気分は大空をかける鳥のつもりでいこう。

どつかの時点^で、もう一度コンテナたちの向きが反対に変わらずだ。遅くともその瞬間までには、子供たちのところについていたい。じつからでは、同じように見えるコンテナばかりで、扉が千

切れたあの四角い口が見えない。いそげ、慌てろ。ただし、落ち着いて。俺は、多分あの辺というカンだけを頼りに、コンテナを追い掛けた。

いくつかのコンテナを追い越して、ちょっとだけ体を捻つて振り返つて、四角く扉が開いた奴を探そうとして、すぐ傍らにそれがあることを発見して、俺は慌てて体を滑り込ませる。第一段階……なんとか、終了。俺は深く溜息。それから、ちゃんと操作して通信を復活させる。

ナイスファイトでした。お疲れ様つつー！

威勢がいいザキさんの声が、タイミングよく響いた。なんだか、嬉しかった。子供たちが俺に抱きついてくる……のかと思つたら、一番ちつこい男の子が叫んだ。

「おっちゃんっ。早くトイレっ」

待ちかねてたのは、俺じやなくて、トイレね……。俺はちょっと苦笑した。

* * *

「こんなんのどこがトイレだよ

ポリ袋を片手に文句を言つているのは、一番ちつこい男の子だ。みんな小学校の高学年なはずだけど、予備知識が無かつたら、二年生ぐらいかと思ったかもしない。

「ゼロGだからしゃーないだろ。文句を言うな。それとも、バキュ

「そりやあ、そこまで言わないけど、ちよつといい加減だなあ」

「臨機応変と言つてくれ。終わつたら、口をちゃんと縛つておけよ。いつとくナビ、おちちゅんはこの手袋グローブしてゐるから、細かい作業はパスな」

飛竜の部屋を出でてゐるとき、まさにトイレン用として持ち出しきおいた袋を見て、ちつこのが思につきり文句を垂れる。そりやあ、移動トイレ宣言しましたけど、こくら俺でも、便器を担いでここまでこれるか。この袋が出来たところで、驚いて涙を流して感謝してもらつてもこくらいなのに……まったく、ガキンちょときたら分かつてない。この小さいのはシャツに、大きい方はリュックにミラーズ・レッドがついてい。俺は子供の緊張感を揉みほぐすよつな会話を試みた。

「扉の外に零れないように注意してやれよ。//ラーズ諸君。えっと、ミラーズ・ピンクのお嬢さんは……ちょっとこれは無理だね」

女の子が眉をつりあげた。

「私……ピンク嫌い」

俺は疲れた。

「……希望も聞かずにつきなり役割り当てて、すまんかった。で、あこつらのどつちがレッドで、君は何色?」

「名前で呼んでほしいわ。おじさん。私は、越智美咲です」

可愛くない。けれど、きちんと名乗られたら仕方がない。

「了解しました。おじさんは、高柳優美です」

つられてきちんとフルネームを名乗つた俺の背後で、めつりやくちや可愛くない声がした。

「コウビ……?つて、思いつきりだつせーつ。それつて女の名前じやん」

ミラーズ・レッド、小さい方君。君は思いつきり、俺の神経を逆撫でしたんだよ。順番に助けなきやならないことになつちまつたら、君は問答無用でラスだ。

「リトル・ボーイ。俺のことは……タ力と呼ぶよつこ

「リトルって何？」

女の子が冷たく言い捨てた。

「ちびつてことよ

「あーつ、このクソ野郎。人が一番氣にすることを

……クソつて。ちょっと君、俺の労働に対して、その呼称は不当に過ぎないか？ 腐りそつになつた俺に、どこかおつとりした優しい声が言つてくれた。

「美咲ちゃんも、崇くんも、お礼が先だよ。おじさん、ごめんなさい。来てくれて……本当にありがとうございます。凄く怖かつた……」

「この子、思いつきり……癒し系。いい感じ。

「だからね……感謝してくれてるなら、おじさんでも、ゆうびでもなく、タ力と呼んでくれ

俺が言つと、チビと女の子より頭一つ高いそいつは、はにかむようになに微笑んだ。

「タ力……さん？……大人の人を……そんな風に呼んでいいのかな……」

「お前……可愛いッ！」

俺はついうつかり抱きしめてしまつた。相手が男でも、子供なら大丈夫。念の為ヘンタイ的欲望はありません。男の子がちょっとだけ躊躇つてから、ぎゅっと力を込めて抱き返してきて……、その思いがけない確かな力が、大人つていう生き物の本能をくすぐつてきた。めっちゃ……頑張つて来て、良かつたあ……。

「名前教えて。呼びやすいし。ビッグ・レッドくん

男の子が微笑んだ。

「僕は、小柳遊星つていいます」

「おーつ。君も柳クンか。俺の高柳と親戚みたいなもんだね。ユウセイつて、遊ぶ星？ それとも、優れた星？」

「遊ぶ方」

「いいね。レッドに相応しい素敵な名前だね」

「今回はボクは……一応ブルーですけど」

「クール・ビューティの方か。悪くないね。おじさんとこのガキは、捻りも何にもなく、レッド命なんだけど、芸がないよな」

戦隊ミリーズだって、共通の話題がないよりナンボかました。

「おじさんとこの子供って幾つ?」

「……五歳位……だったかな」

「位つてなんだよ。しょーもないオヤジだなあ。子供にそのうち嫌われるぜ。でもさ、五歳……じゃあ、仕方ないよ。ストーリーの深いところまで追えないもん。見掛けならかっこいいレッドが一番だし。出番多いし」

一々、可愛くないチビ・レッドの頭を抑えつけて、女の子が、割り込んできた。

「今はミリーズなんかどーでもいいでしょ」「どーでもいいとは、手厳しい。女の子は……、ある意味、難しい……な」

それから、ミサキと名乗った女の子は、ちょっとだけ強引に遊星くんから俺を剥がして、俺の耳を引っ張つてきた。こいつは……、と思つたとき。

「お……トマレ……どうしよう……」

耳元でこいつそつさわやこてくる。あ、恥ずかしかったのね。やつぱ……女の子は、可愛い……。俺は簡単に前言を撤回した。さてと、野郎どもはポリ袋で済むけど、女の子は、どうしたもんだろ。やつぱり、あれしかないか……。

「……あのね、こんなやり方どうかな?」

「えーっ。やだあ。それって赤ちゃんのオムツじゃない」

俺が耳元でやり方を説明してやると、とつて出したのがやつぱり否定の言葉だった。まあ、無理もない。だけ、ここは納得してもらわないと、次の行動に移れない。トイレを我慢しながらやあ、マトモに体は動かせないからな。

「……ミサキちゃん。宇宙船外作業士つて知ってる?」

「え? もちろん知ってるよ。宇宙船の外で働くプロフェッショナルだよね。かつこいいよね……」

「そうそう。だけど、連中、途中でトイレ行けないから、長時間ミッションの場合、船外作業服装着する前にオムツしとくのよ」

「やだつ。汚い……」

「まあね……。でも、トイレ我慢しながらじやあ、きちんと仕事できないし、やるべきことと比較して、ちゃんと割り切らないとね。それじゃあ、ヨーロッパ中世の甲冑の騎士つて知ってる?」

「アーサー王とか。……丘卓の騎士とか、……の、あれ?」

「よし。なかなかちゃんと本読んできますね。お嬢さんは、

「あれの甲冑着込んでる騎士つて、糞尿、ヨロイの中に垂れ流しだつたんだけど、どっちが汚いと思つ?」

女の子が思いつきり引くのが分かつた。

「……それ……、後始末どうしたの?」

「騎士サマが自分で洗うわけ無いでしょ。見習いを兼ねた専用の従者がいたの。戦闘が終わると、水が無かつたら砂で磨いて、オシマイ。トイレ使えない状況つてのでは一緒だけど、オムツと垂れ流しと……ミサキちゃん、どっちが好き? 今日のところは、好きな方選べるけど」

「……オムツ……」

「了解

俺は要領をコツコツと耳打ちしてから、バックパックからシーツを取り出した。オムツがわりに用足しするようにと渡した一枚とは

別に、もう一つのシーツを使って女の子を照る照る坊主みたいにした。重力がないと、幕を張るつて訳には行かないから、仕方ない……でしょ？ シーツもボディバッグになるより、目隠しとオムツになる方が嬉しいに違いない。男の子たちは、こうこうとき簡単で良いよなあ……。つぐづぐ。

俺は、見ないでいてやるのが武士の情けと（武士じゃないけど）、ガキンちょ一人の方に向き直った。

「で、コンテナのバナナ追い出して、中に避難するつていう、むっちゃナイスなアイデアは誰がだしたの？」

「逃げ込んだんじゃなくて……最初から居たんだ。ピクニック最後の夜だから、バナナ・パーティーしてたんだ……。僕たち。だつて、僕たちバナナに化けてコンテナにもぐり込んで、ライダー・プールに来たんだよ。だから、ピクニック最後の夜も……、バナナたくさん食べて……コンテナの中に寝たんだ。怒られるとは思つたけど……」

「もともと……ここで、寝てたの？ バナナと一緒に？」

俺は確かめる。頷く一人。面白いこと考えるガキどもだ。

「でも、なんでバナナ……」

「だつて、バナナは傷みやすいから、そんなに倉庫においとかないだろ？ サッさと見つけてもらわないと、命にかかるし……」

……。こいつらのピクニックつて、思いつきり密航じゃん。

「プールにピクニックつて言うのは、そこそこナイスなアイデアだけども、Gアップちゃんとしないで来るから、倉庫に缶詰になつて遊べなかつたんだろ？」

ちつこい男の子が叫んだ。

「それについては、オレは卑怯な大人を糾弾する。オレたち、ちゃんと夏休みの間、中央児童館のテラGルームで訓練してきたんだ。

一夏かけてだよ。なのに、テラGなんか、全然出てなかつたんだ。

あそこ。大人はズルいよ。子供騙して……」

「夏休みかけて……訓練して……新学期に決行したの？ 首尾よく

発見されても、すぐ連れ返されちゃうじやん」

「168ルール」

遊星くんの方も、いたずらっぽい目つきになつていて。俺は呆れる。計画的、確信犯。見事な……ピクニック計画。なんてガキどもだ。

「お前たち……。やるなあ」

こうこう無茶苦茶を思いつく奴は大好きだ。俺の言葉に大人の分別ではなく、同じガキの感嘆を感じ取つたつだろう。チビの瞳がちよつと自慢げに揺れる。ふふ。俺もジョーを実は笑えない。見掛けは中年オヤジ。でも、中身はあんまり成長してない自信がある。

「こいつ。珍しく、話せる大人じやん」

「崇くん。『イツじやなくて……ちゃんとタ力さんつて』

照れ臭そうにガキンちょの分際で、あつちから握手を求めてきた。

「おれ、今回のピクニックではレッドやつてる崇です。美咲はピン

ク嫌いだから……『ードネームはカシスさま……』

俺は倒れそうになつた。カシス……さま。刺々しいお嬢さんには、似合いすぎつ！ 今後の行動を考えると、そつはいつても、カシスさまとも馴れ合つておくに越したことは無い。

用足しが済んだのか、シーツを取つ払つて泳いできたミサキちゃんに、俺は果敢に挑んだ。

「えつと、カシスさま。頼み一つ聞いてくれる？」

「なに？」

「バナナむいて……」

カシスさまは、ちょっとだけ大人みたいに眉を吊り上げて、ぽつと冷たく言つう。

「自分ですれば？」

不貞腐れている……。可愛いのに勿体ない。

「あのね……このグローブ。自分じゃこれないの。んでもって、こいつは細かい作業に凄く不向きなの。これ。ついでに、ここまで死ぬ思いでやってきて、君たちと会えて、ここで終わりなら良いんだけどね、外のドーナツまで君たちを連れていいきたいと思つてるわけ。全てが上手くいくつて保証はできないけど、君たちがちゃんとお家に帰れるように、できる限り頑張つてみるから、バナナ一本くらい食べさせてよ、いいじゃない」

「できないことなら、我慢すればいいじゃない……」

「この子は普段……もしかして、凄く我慢しているのだろうか？」

俺は敢えて言葉にして言つてみた。

「俺は……、我慢するのは嫌いなんだ。第一、できないことを手伝つてもらつて、恥ずかしいことじゃないと思つてるよ。誰か近くにしてくれる人がいるなら、頼つて良いと思つてる。そのかわり……じゃなければ、俺ができることがあって、それができない人が傍にいたら……やってあげるの、普通のことだと思つてるよ」

「そんなの……嘘よ。みんな自分の都合が一番で、みんな、勝手に自分のことだけやつてるよ」

寂しい……子なのかな……。このカシスさまは……。

「じゃあ……なんでおじさんが、ここに来たと思つ？　君たちがいるつて聞いたから、迎えに来たんだよ。がんばれば、できそうだと思つたからね。ホントはこんな状況だと凄く難しいけどね。君たちを迎えるのは、おじさんの勝手な都合かい？」

カシスさまの顔が一瞬で真っ赤になる。なるほど。こうもつてまわつた言い方をとつさに理解できるのは年の割りにませているつてことだ。多分、とても感性がするどくて、賢い子で、いろんな意味で生きにくいくんだろうなあ……。子供でしかないことと、大人の視点をもつていることは、両立しがたい。

「おじさんは、君たちを助けようと頑張つてみる。でも、一仕事の前にちよつとお腹に何か入れたい。この手袋じゃ、バナナはむけな

い。君は、簡単にバナナくらい、むけるだろ？ そんなに、凄い難しくて厭な仕事かい？」

ミサキちゃんは首を振る。あともう一息。

「おじさんは、むいて……くれると、嬉しいな」

「おっちゃん。オレが……むいてやるつか？」

「ダメ。女の子の方が良い」

タカシ少年の申し入れを却下する。Jリーフは平坦すぎる感性の持ち主で少年含有率百パーセントだ。悪気は無いみたいだけど、俺の意図にまるで気付いてない。

死んでるガキどもは、紐で縛つて引きずつていけば問題ないが、生きてるガキとこにを抜け出すなら、チームでいることは必要最低限の保険だ。三人の子供たちが、僅かずつでも俺を信じてくれたなら……、そいつが今のベターだ。急いで行動を開始するより、このカシスさまの心を、ちょっとだけ妥協に導いてからの方がいい。

カシス・ミサキちゃんの手が、ひょいとその辺に漂っていたバナナを掴んで、おサル剥きを始めた。

「どうぞ」

半分くらいまで皮をはいでから、俺が食べやすい位置に、差し出してくれる。むいてくれるだけで十分だつたけど、まあ、悪くない。俺は甘えて、ミサキちゃんが持つたままのバナナをかじりとつた。出荷日調整中のバナナはまだちょっと硬くて、甘さもちょっと控えめで、もう少し育った方が美味しいこと間違いないといったところ。まるで、ミサキちゃん、そのものみたいだ。（幼女相手のヘンタイ欲求はありません！ 念の為に繰り返しておく……）

「ありがとう。すごく美味しい……」

カシス・ミサキちゃんが微笑んだ。

「どういたしまして……。タカ……さん」

俺は、バナナを咀嚼しながら金魚鉢を見た。//サキちゃん。ジョーと繋がっている。子供たちが生きていたと……無事だと言えれば、あのママたちは、激しく喜ぶだろう。でも……居住区に帰り着けなかつたり、シャトルライダーさんたちの健闘虚しく、プールが落ちたら。その喜びは絶望になつて、の人たちを打ちのめすだろう。今は……もう少し、黙つておこう。ママたち……じめんなさい。俺はそつと通信機能をオフにした。子供たちもそつだ。今、ママたちの声を聞いたら、多分、緊張の糸が切れる。そしたら、俺では扱い切れない。

「タ力さん……。何を考えてるの？」

「ミサキちゃんが、なんとなく俺に擦り寄つてくる感触で聞いてきた。

「脱出ルートについて。……とこりでさ……//サキちゃん。あんな

に可愛いのに、なんでピンク嫌いなの？」

ママは禁句だ。俺はちょっと誤魔化して、話題を変えた。
「だから、ミラーズなんか考えてる場合じゃないのに……。まったくもう。あのね、役立たずだからに決まつてゐるでしょ。役に立たないだけならとにかく、完全に足引つ張つてゐるじゃない。なんであんなのがミラーズに入つてゐるのか、信じられない。いつもキャーキャー騒いで、みつともない……」

女の子はね……。キャーキャー騒いで良いんだよ。でも、この子は、そんな直截な表現で納得する子じゃなきゃうだ。ちよつと、遠くから行こう。

「//サキちゃん。君は、男つて奴の馬鹿な習性を忘れてる

「習性？」

「又の名を、馬鹿チカラ2倍の法則つて言つんだけだ。知つてる？」

「知らない……わ。なにそれ？ バカ……つて

「そこで切らないで。馬鹿チカラで一単語。あのね、男つてのは、

その大・小レッドも、俺みたいに擦り切れてんのも同じでね、好きな女の子の為なら、いざつて言つときに自分の基本能力の最低でも2倍は力を出せるんだよ……」「

「大・小レッドって、タカシと遊星くんのこと?」「

「レッドとブルーでもいいや。あのね、今、こここの状況つて非常時でしょ?」「

「うん」「

「遊星くんも、リトル・レッドくんも、ママと一緒にこういう状況に投げ込まれたら、こんなふうに落ち着いて無かつたと思うんだ。ママにだって、どーしょもないことなのに、泣いたり、怒ったり、我が儘言つたり……当然、してたと思うんだ」

「そんなこと、無いぜ」

「だまれ、リトル。今はカシス・ミサキちゃんと話していろ」「

ミサキちゃんが、ちょっと笑う。

「君もだ。ママと一緒にだったら、きっと泣いて我が儘言つたんじやないかな。非常時には、誰だって1・5倍の力が出せるんだ。守ってくれる頼れるママがない非常事態で、君たちはお互いに支えあつて頑張つてきただろ? これが緊急事態、馬鹿チカラ1・5倍の法則といつ……」「

「ボクは三倍くらい頑張つたかも……」「

「おー。頼もしい。これから頑張る第一弾が待つてるから、楽しみにな。そんでね、もしもだ、計算してみて。ミラーズがみんなできる野郎どもばっかりだったり、どうなるか。考えてみようか。連中の普段のチカラを1と考えて、ミラーズが活躍する事態つてのは、日常じやあり得ないから、非常時になるね。一人1・5倍頑張るとして、合計のチカラは、数値に置き換えると幾つ?」「

「1・5かける、5で7・5かな」

「大正解。ちゃんと勉強してるね。んじゃさ、ここができる男キャラの1・5を引いて、ピンクを入れる。普段彼女は1のチカラを持つるけど、非常事態はパニックをおこしてしまって、実動能力ゼ

口としようか。でも、じつちの残りの4がね、最低で2倍のチカラが出せるとすると……合計、いくつ?」

「最低でも……2かける4で8?」

「はい。正解。つまりね、男ってヤツは、大切に思ってる女の子が一緒だと、馬鹿チカラがでるから、4人で8のチカラが出せる。つまり、ピンクはマイナス0・5までのポ力をやらかしても、十分にペイするんだ。ペイって分かる?」

「……なんとなく……」

「んでもって、2倍ってのは、最低ラインだからさ……つてことを考へてから、もう一回聞くよ。さて、ミラーズにピンクは居た方が良いでしょ? うか、いない方がよいでしょうか。カシス・ミサキさま……考へて」

「なんか……騙されてる気がする……。最低2倍の根拠を教えてよ手ごわい!。俺はにっこり笑つた。

「実感と主觀と経験則から割り出した……割と信頼できる数値」

学生時代もそうだつたけど、野郎だけのミッションより、女の子がいるミッションの方が気合入つたもんだつたし……。第一女の子がいると、集団ではアホ度を競つての仲間だつて、馬鹿をやらかす割合が断然減つて信頼度が増す。特に飛竜なんか顕著だつたし。女の子がいてくれるのは、野郎どもにとつて、馬鹿の根治薬にはならないが、少なくとも緩和剤にはなつていた。

この馬鹿チカラ2倍の法則は、以前にジョーのピンク不要説を覆すべく捻り出したものだ。色はピンクだろうが紫だろうが構わないが、誰だって野郎ばかりのミラーズに毎週付き合つるのは御免いのとく蒙むかりたいだろ? 婦女子諸賢には御否定のむきもあらわれるかもしれないが、少なくとも、世の中の父兄諸氏の「賛同はいただけると信じている。

うん。思いつきのでつちあげの割りに、この理論はまったく真実を衝いていくと思うよ。俺なんか普段の生き方で手抜きしまくつて

るから、女の子と一緒に災難に巻き込まれたら、多分5倍くらいは頑張れちゃうと思つなあ。

「頼む、早く飛べるようにしてくれ。遅すぎだ……」

「エライラと口こした飛竜に、メカニックのオヤジが手を休めて肩を竦めた。

「竜ちゃんが、ウェイティング・レーンで考えなしに緊急脱出装置なんか使うから、手間がかかりてるんだろうが。飛べる状態に全部きっちりとしておいたのに、まったく手間増やしやがって。まったくいくら補償金の請求が来るか楽しみだな。おい。御曹司だからって、調子に乗ってるだろ。しかも、気象も読まずに飛び出したいなんて、我が儘すぎるぞ」

飛竜はにっこり笑つた。

「ウチのお金を持ち出したり、使い倒したりしたことがないからね、ここりでちょっと、正当なる放蕩をしてですね、息子をもつた苦労をオヤジに教えてやりたいと」

「馬鹿言つてらあ。眞面目な翔ちゃんとはエライ違いだ。あつちは、おじさんが引退して四本線だろ？ 竜ちゃんが経営に興味をもつてくれれば、オヤジさんだって安心するのに。経営に興味を示すのは姫ちゃんだけで、息子は揃いもそろつて現場志向じゃあ、気の毒だ」先ほどから、せつつく飛竜に気を取られることもなく、せつせと打ち上げ前検査を実施している一団を監督している老人が言つ。霧島運輸のシャトルのメカニックをずっと担当している整備会社の主である、背中に松か苔が生えてそうなこの老人は、飛竜がオムツをついているころからの知り合いだから、得意先の息子に対する遠慮などは露程も見せない。飛竜にしても、彼が監督したシャトルに乗ることに対する信頼感は絶対で、小言も文句も聞き慣れている。

「竜ちゃん。なにも、お前さんが、突つ込むこたあないだろ……」止めた添うな口ぶりの割りに、メカニックたちを煽つて早々と打ち上げ可能な状態にもつていけるよう頑張ってくれている。プール

に閉じ込められていてる何人ものライダーのシャトルを整備してきた男なだけに、若い彼らが「プール」と攻撃されて燃え尽きたのも見たくないだろうし、飛竜が命を張ることにも決然としないものを感じているのだろう。

「ありがとう。でもさ、俺、柏木煽つちやつたからさ、自分で高みの見物しててるのは、厭なんだ。ごめんな……」

「分かってるよ。言つてみただけだ。竜ちゃんが、行くの嫌だつて骨がないこと言いやがつたら、きつと殴つてるさ……。柏木君が一番手で突つ込むんだつて？ まったく、誰だ、プールにシャトルぶつけるなんて、とんでもないこと言いだした奴は」

「まあ、普通は考えつかないよな。でも、奴はとんでもないことを考える奴だし」

「何だ。知り合いか。若氣の至りつてこともあるだろうが、軍人なんかとつるんでるから、ろくでもねエ事に巻き込まれるんだろ」タ力にしろ、歩にしろ、軍人という規範からは相当ズレているが、まあ、ここで説明しても分かってもらえないだろう。

「本当だ。友達は選ばないとな。これからは気をつけよ」

飛竜は思つてもいいことをあつさりと口にした。

「全く、お前の口は、どんなつくりになつてんだろうな。縁を切るなんて、どうせ思つてもないくせに」

全て見透かしているんだから、口にしなければいいのだ。全く、うるさい年寄りだ。

「ああ、そいつは、ぶつた切つちまえ。押し込めるなんざ手間だ」「だつて、おやつさん、これ、緊急脱出用ですよ。これ整備してないと、打ち上げ許可おりません」

「大丈夫だ。竜ちゃんには軍のお偉いさんがついてるからな。管制はお役とられちまつて面白くないだろうよ。全くなあ。……片鎌十文字はいいシャトルだけどなあ、多分今日が整備納めだ。その脱出装置は有Gでしか役に立たねえだろ」

作業に忙しそうにしていた、その青年が、驚いたように手を止める。

「整備納め……って……」

「プールに突っ込むんだ。船体がガタガタになる。宇宙でへなへな飛んでるだけの船なら整備して使えるだらうけど、再突入は無理だ。空中分解しちまうよ」

「キリーさん。……大丈夫なんですか？」

青年が心配そうに聞いてくる。飛竜はにっこりと笑つて見せた。「ダメ。俺の愛機、片鎌十文字はこれがラスト・フライトだ。ああ、さらば俺の片鎌十文字。誕生日も近いし、国からも見舞金か補償金がでるだろうし、この際、ぴちぴちのお嬢さんをオヤジに買って貰うさ……」

「……霧島のオヤジさん、また、とんでもない名前つけてきますよ。カニカマが懐かしいって、来年あたりぼやいてるキリーさんが見えるようです……」

その時、飛竜の携帯端末がぴょろんというような妙な音楽を鳴らした。画面をみると、斎藤歩からの着信になつていてる。

「悪い、ちょっと失礼するよ……。どうした？ データマン。タ力と通信が切れた。

「……なんだつて？ あいつは、プールで司令塔してるんだろう？ プールが大気圏までもう落ちたとでもいうのか？」

大気圏が通信に適した場所でないことは誰でも知つていてる。通信が途絶えるということは、よくあることだ。

「それはまだ大丈夫だ。お前も、ガキどものニュース聞いてるだろ？」

「もちろん。それで、柏木の若鷹一号がターゲットポイント変更したっていうのは聞いた。なんでも、タ力の野郎、ビーコン立てられるつて豪語したんだろ？ 柏木がビーコン誘導でプールにダイブするか、マニュアルで突っ込むか、賭けの対象になつてるぜ。オッズ

知りたい？ 一口のる？

ライダー連中つてのは、全く……度し難いやつらだな。仲間が命かける時まで、そう来るかよ。残念だな。今から賭けに乗るのは八百長になつちまう。結果教えてやるよ。ウチのレーダーモニタに、くつきりレーマークビー・コンの輝線が映つてゐる。マニコアルに賭けた奴が負けだ。

「なんだつて？ ジやあ、俺、負けじやん」

タ力に賭けなかつたのか。らしくないな。

「奴の豪語だつて、たまにはスカるところ見たかつたのさ。それにしても、レーマークかよ。やるなあ……。で、ジやあ、なんでタ力と通信できないんだ？」

柏木機の後続シャトルが心置きなく、構造物の真ん中に突っ込めるように、奴は……ガキどもをお迎えにいつちました。

「……なんだつて？」

あの野郎。管制は俺に丸投げしてつた。トラブル事故か故意かは分からぬが、奴の受信装置は今生きてないんだ。ただの通信装置の故障なら良いんだが。

あの馬鹿が……。飛竜は思つた。

ゼロGにいきなり曝されると、人間は背骨の骨と骨の間が伸びて身長が伸び、腰痛になやまされたり、血液や体液の分散で上半身がむくんだりする。体液変化で酔っぱらつた状態になつてしまふのは、よくあることだ。コイツが有Gに帰るとき、血液が上半身から下半身に一気に流れてしまう。Gショックとは、これが激しく起こつて意識障害まで引き起こしてしまつた状態だ。

そんなこんなで、テラGからゼロGに一氣にもつていかれた直後は、誰だつて体も痛むし動きだつて鈍くなる。それはゼロGに慣れていいる高柳だつて、数日間のテラGにいた直後なのだから同じことだ。動かしにくいということは、つまり、船外活動なんかには向かない状態だつてことだ。プールの中間倉庫にいる子供たちを迎えて

行くというのは、ルートが確保されているなら、まだましだが……。

「プールは中を通れるのか？」

「無理だ。中は緊急遮断壁がおりていて、細かく区画分けされて

る」

「あの馬鹿があつ。ゼロG移行直後の癡に、船外活動なんて、正気かよ。……まさか、あいつ。ビーコンも物理的に移動させたとか……いうんじゃないだろうな」

「その可能性は大きいな。ただし、奴には新人の部下ヒューマン」^{ヒューマン}がついているから、そつちは彼らの仕事だと思うけどな。

「マジかよ。全く、奴は何を考えてるんだ？」

「多分、お前さんたち、突っ込む側の気持ちに配慮したんだろう。ボディバッグも準備して行つたみたいだからな……、生存して生存してどうかではなくて、中間倉庫から子供たちをどかして、お前らが突つ込みやすいように……。」

「んでもって、ヤツまで動けなくなつちまつたら、俺はガキどもだけじゃなくて、ガキどもとタ力に突っ込む事になるじゃん……」

「思いつきのタ力だ。その辺は諦めるしかないだろ。

「勘弁してくれッ」

飛竜の叫びが、斎藤の耳を直撃した。斎藤は、目を閉じて苦痛に耐えた。飛竜たちのために動こうとしたタ力の気持ちを、非難したくはない。だけど、タ力がいる場所に突っ込まれることになつてしまつたら、飛竜の苦痛は見たことも無い子供たちの体を破碎する以上ものになつてしまつ。斎藤は固く拳を握りしめて思った。

とにかく、時間は限られている。プールが本格的に加速し始めたら、修正は不可能だ。時間がきたら行くぞ……。覚悟しとけ。（死んだのは通信だけだろう？ タ力。お前は生きて、そこから出て来るんだ）

* * *

「タ力さんっ。返事して。なん……なんで出でくれないのよつ」
高柳が入つて言ったのは、コンテナが大挙して^{ひしめ}犇きあつて、ぶつ
かり合つている地獄だ。そこに入つたところまでは通信が生きてい
て、入つて暫くして死んだ。まさかと思いたいが、高柳にはおつち
よこちよいなところがある。バラバラの子供を拾おうとしていたら、
その難易度はおそらく高い。そうでなくとも、下手にテラGアッ
プした直後だ。いつものゼロGの動きが自由にできる保証はない。
あの人は集中したいときには、通信を勝手に切る悪い癖がある。
それだと……それだと信じたいけれど、これだけ繋がつていること
が大切な局面で彼が長時間そうするとは思えない。コンテナに押し
つぶされる高柳。千切れて、すりつぶされていく高柳。悪い方の想
像ばかりが加悦を苛んだ。

「ジョーっ。さつさと突つ込んでやつて。私、これからついで、タ力
さんとのここにいくんだからあつ」

ジョーの周波数に合わせて、加悦は大声で怒鳴つた。

タ力と連絡が取れないのか？

怒鳴つた直後、斎藤一尉の声が割り込んできた。

「高柳二等宙曹は、集中したいとき通信を切る悪い癖があるので
が、今回の局面で長時間それをすることは考えられません。通信機
器の故障だと信じたいですけれど、確認しに行きたく思います。若
鷹二号が目標地点に到着した後で、ビークンを移動するように言わ
れているので、今は動けないのですが」

加悦はゆつくつとしゃべつて。落ち着いている発語に見える

が、内容で十分に彼女が焦つていることが分かる。女性型新人にまで受けれるのか、あの男は。斎藤は苦笑する。本当に、タ力は女にもてる。問題は、あいつが女のことを一番に考えちまつせいで、自分がみたいな極道と一緒になるのは可哀相だと、意識の深層で、無自覚の判断が働いているとしか思えないってことだ。

それに、女にしてみても、彼が自分だけが好きなのではなく、女であればとりあえず好きという無節操さを許容できるだけの度量がないと、やつと付き合い続けるのは困難だろう。岸一佐も今回のタ力を見ていれば、事が収まつたらスキルズに本格的に奴を組み込もうとするだろうし、気の毒に、あいつの独身は暫く不動になつたな。下らないことを考えつとも、斎藤は腕組みをしてしばしモニタ画面を睨み付けた。プールの軌道計算は終了して、今はプールの軌跡が実線で点灯し、予測軌跡が破線で点滅している。その横に大気圏に予測突入時間までの時計が、カウントダウン表示してある。

帰つてくるのが遅いと思つたら……、迷わずぶつける。

あの時、斎藤は答えた。そうさせてもらつと。しかし、それは、そういう事態を想定してそういうのではない。あくまでも高柳に発破をかけるためだ。

（言えるのか？ 僕に、生きてるかもしないタ力のところに、飛竜に突つ込めなんて）

「直接のラインには無いが、私が今回のミッションの管制となつてゐる。よつて高柳三等宙曹より上位と判断するがよろしいか？ キヤツチャーズクルー 加悦」

斎藤の言葉に加悦は即答しなかつた。しかし、斎藤は答えを待たず、指令を飛ばした。

「管制では、ビーコン位置で特定して航行プログラミングをした。

よつて現時点で、そのポイントから、ある程度目視で修正をかけながら微調整してターゲットポイントに至ることは、若鷹一号には可能だと判断する。そちらの発信局は当初の目的地に即刻移動させること。移動後に信号発信。加悦。貴官の任務はそこまでとする。以上。確認を求める」

「あ、ありがとうございます。齊藤一尉。感謝いたします。
(ふん。新人の感謝なんかいるもんか。奴との付き合いは俺の方が長いんだよ……)

「了解と認識した。即刻、行動を開始するよつに……」

齊藤はもう一度深く溜息をついた。タカ……。お前は何をしているんだ？ 無事か？

齊藤はゆつくつと自分の携帯端末に手を伸ばした。指が飛竜を呼んだ。

「どうした？ データマン。

「タカと通信が切れた……」

飛竜が息をのむのが分かつた。

「ミラーズ諸君。さてと。この危機的局面で、残念ながら君たちと私たちの利害が一致しているということがわかるかね」

ミサキちゃんが手を摺り合わせて叫んだ。

「す、ぐ、ー、い。タカさんつ。キシコワード閣下そつくつ！」

任せなさい。ダテに毎週、最低二回はミラーズ見ていません。

「バナナ・パーティーはこれにて中断して、トクササイズ・タイム

に入りたいと思うが、如何かね……」

「賛成です。閣下」

落ち着いて見えて、遊星くんはノリがいい。やつぱり、ピクニッ

クに参加するだけの素地はもつてているということだ。

「エクササイズつて……、ここから、自力で抜けるの？ 誰かが迎

えに来てくれたんじや」

「危機的状況つてわかる？ ミー・レッドくん

「ミーつていうな。そのくらいわかるぞ。えっとね、閣下、危険な

方向に普通でないってことだと思います」

タカシの発言は見事に的を衝いている。うん、高学年の小学生の語彙力の、不均等さは見事だ。さつきの発言は見事に俺の好みだ。「危険な方向に普通でないっての、いい表現だ。以後採用させてもらう。それで、大人たちはめちゃ忙しいんだ。手が空いてたのは暇なおじさんだけでねえ……」

「冴え無い閣下だなあ

俺は釘を刺した。

「閣下の役どころは結局ミラーズの引き立てだから……。ある程度格好悪いのは、しょーがないだろ？」

ある程度の恐怖があつた方が、こいつら絶対踏ん張れる。俺はあ

つさりと情報開示することにした。

「テラGピクニックに来て、ゼロGエクササイズができるんだから、まあ、非日常を楽しむという方向では、まあ、そこまで悪くないと思わないよね。どんなときでも、有効なのは遊び心だ。ここに重力がないっての、どの程度の危険な方向だと思う?」

遊星くんが真っ先に手を挙げる。学校じゃあ無いんだから、拳手はどーでもいいんだけどなあ。

「はい、ミラーズ・ブルーくん」

でも、付き合いもいい俺。

「すごく危険」

倒れそうになるほど見事な直球だ。タカシも手を挙げる。俺は指で指した。

「むちやくちや……もう、めーっちゃくちゃな危険」

ミサキちゃんも負けずに拳手。俺は学校の先生か。俺は重々しく頷いて発言を促す。まつたく、キシュワード閣下に何をさせる。「ゼロGエクササイズって何をするんですか?」

これこれ。質問に質問で答えなにように。

サンガとライダー・プールの接続が、原因はまだ不明だが千切れたこと。サンガはそのままの軌道を維持している。宇宙空間とはいえ、軌道程度に地表が近いと粒子は存在しているから、長期間では減速してしまい、やがて地球に落ちていく事になるという予測。それからサンガは推進装置をもつてているから、多少のブレには強いこと。だからママたちは無事だということ。

そこを説明すると、三人の顔が露骨にホッとしたものになつた。自分たちの行く末ではなく、好きな人の安全を強調して励ます作戦、まずは成功だ。ここからが、問題。吉とでるか。凶と出るか。

「プールは、推進装置をもつてない。千切れたときに軌道からズレた。だから、このままでいくと、プールが地球に落ちちゃうんだ」「もしかして、ボクたち……地球にいけるの?」

「Jの能天気さは、いつぞ見事だ。俺も見習わなければ……。

「最悪の場合ね。みんな、テラJショック起こしたんだる。ちょっと、訓練も、慣らしもなしで行くとこじやないと、俺は思つけどなあ」

「……うん。最低だつたね。あれ」

「大人の人たちは、プールが落ちないよう、軌道修正をかけようと思つて、いま頑張つてるんだ」

「どうやるの？」

遊星くんは凄く好奇心旺盛な子だ。

「単純なことだ。自分で推進装置が無いなら、プールに負けない位の質量のものをぶつけて押し上げようとしてるんだ。中間倉庫、このことだけ、ここにシャトルをぶつけたいなあと思つてるわけ。でもつて、君たちがいちゃあ、邪魔だつたのよ」

「シャトル、ぶつけるの？ すんげーつ」

タカシは単純だ。

「いくつかで突っ込んで、エンジン吹かしちゃうんだね。かつこい

ー

「ちょっとまって。リトル・レッド。今なんて言つた？」

「ちょっと待て。今、なんて言つた？ リトル君

「おじさん。けんか売つてるの？」

「ゴメン。言いやすいもんで。で、なんて言つた？」

「だから、シャトルのエンジン、推進装置にするんでしょ。かつこいいなあ」

ああ、俺は馬鹿だ。なんでそんな簡単なこと、思いつかなかつたんだ。たしかに、シャトル・オービター（起動船）そのものの推進装置は普通は高度維持のためにした使わない微弱なものだから推進力として勘定しない。その悪い習慣が思考をじやましていた。微弱でも、推進装置があるということを思い出すべきだった。少なくとも、落下までの時間を稼ぐ役には立つ。

「そのアイデアいただき」

マス・コンの反重力は、本当に反重力装置を使つてゐるわけじゃない。質量に反するように推進装置を吹かすだけだ。有効な方法つてのは、得てして単純な考え方でできてゐるんじやなかつたのか？これは、いける。俺は金魚鉢を被つた。

「加悦さん、聞こえる？ 歩いたつたなげてくれない？」

タ力さん！ なんで、通信切つてたんですね？ 何考えてるんですかあつ。みんなで死ぬほど心配したんですよ！」

「ゴメン。いいから、歩に繋いで。再計算させや」

「どうこうことです？」

「シャトルを均等にぶつけて……、三方向か、四方向か……。そいつの推進装置を使つて押し上げるぞ。シャトルぶつけまくるより確実だ。問題は、今度はパンピー柏木にしてもらつたよつて、構造部にぶつけなきやならないつてことだ。ターゲットポイントをつくり、その住人をターゲット以外のポイントに移動させるぞ」

「どうやって？ 彼らがみんな船外作業服をもつてゐるといふうんですか？」

「上水道を使うんだ。お好みなら下水でもいいけどね。説明は歩にするから、回線オープンして」

「いうが早いが、歩の声が耳から零れてきた。

聞こえるよ。加悦はちゃんと仕事をしてゐる。タ力、心配させやがつて。お前、後でガチガチにシめてやるからな。覚悟しとけよ。で、なんだつて、もう一度言つてくれ。

「リーダー飛竜も呼べる？ ヤツにも一緒に説明したい

ヤツの携帯端末、直接呼び出すから、待つてろ。

いきなり耳元で、飛竜のがなり声が聞こえた。

生きてたかつ。タ力。お前ん所に突つ込まなきやならねえかと

思つたじやねえか。なんで通信切つてやがったんだ。

飛竜は余程心配してくれたようだ。そういうや、俺つて愛されやすいタイプだつた。俺を愛してくれるみんな、ゴメン。

「悪い。こつちの都合しか考えてなかつたわ」

お前、殺されたいか。

飛竜の声がもう一段階つめたく冷えたような気がする。まあ、こ
こは茶化してなかつたことににしてしまおう。

「あゆみちゃんにならね

あゆむだ。

俺と飛竜の痴話喧嘩（自分でいうか？）に、嫉妬深い歩が割り込
んできた。

で、話を戻そう。何だつて？シャトルぶつけて、ついでに吹か
すつて？確かに軌道に乗せられるとは思うけど……、できるかな
？ それと、その後、どうする気だ？

その後？ 人間助けられりやあ、あとは焼いちまつなり、修繕す
るなり好きにしたらいいだろ？が。俺は切れそうになつた。短気は
よくないのにねえ。

「時間が稼げりや、救助活動に入れるだろ？ 負傷者の数は、か
なりの数になるはずだ。救出活動始める時間が遅くなれば、重傷者
の生存率は落ちるぜ。さつさとやつちまおうぜ。プールだつてそう
だ。国は一度はここを破壊するつもりだつたんだろ？ 約8千の働
き盛りの人的資源を助けられるなら、シャトル一、二機の損失が加
算されるくらいでガタガタ言わないつしょ

タカ。お前のその果てしない楽観主義が羨ましいよ。

歩ちゃん。言つとくけど、こつちは負傷者がたくさんいる町中を、
官服着て通り抜けたんだぜ。一人でその場で助けられるかもしれない

い人間の怨嗟を全部背負つてなあ。プールごと助けられるかも知れない。ちゅう、果てしない楽天主義を押し通さないで、どーするつてのよ。プールが落ちないことだけ保証してやれば、救助に動ける人間が、ちゃんと活動を開始できる。

「よく言われるよ……」

お前はもう。好きに言つてろ。で、マジシャン。マジな話、二、四機のシャトルの推進力でどーにかかるのか？

今度は、飛竜が割り込んできた。全く、俺つて人気者。

「歩。サンガの設計にあたつてみてくれ。多分、プールが完全に引力に絡め取られて加速が始まる前なら、なんとかなると思つ」

俺もそう思つ。……つまり、時間との勝負だな。

おいおい。斎藤一尉どの。災害救助が時間との戦いなのは、常識でしょ。

「やうじうこと。パンピーちゃんと、飛竜と、あと少なくとも一機。そつちでプールの図面引っ張つて、ターゲット決めて。一機は加悦さんがビークン飛ばす。もう一機は、ジョーに直接、誘導させる。加悦さん、聞こえてるでしょ。大変だとは思つけど、ドーナツを右回りに移動開始し始めて。待つてる時間がもつたいたいない。ジョー。暇だつたら加悦さんのサポート！」

了解。

と短く答えるのが加悦さん。

ボスは、どうするんですか？

ジョーが話をふつてくれたので、俺は心置きなく答えることができた。

「俺は、ミラーズ諸君と、バナナ・パーティの続きだな。そつちのカタがついてから、お迎えたのむわ。歩、ママたちに伝言頼む。お尻叩く準備をして待つてくれつてね

「

しばし、歩が絶句したのがわかつた。無重力の固定されてないコントナの倉庫に閉じ込められた子供が、全員無事なのか？って事だろ？。奴も、ミンチを想像してた俺と同じく、コイツらが生きてる可能性はほぼゼロに近いと思つていたクチだらう。

生きて……？ 諸君つて……つまり、全員無事なのか？

俺は見えるわけがないと思いつつ、おもいつきり頷いた。よくぞそこを聞いてくれました。予断でうごこちやあいけないのよ。可能性はゼロでない限り、いつだつてあるのだ。どんなに少なく見えても、確かめる前にあきらめちゃあいけない。

「実はさあ、俺、無謀にもミラーズ諸君と決死の脱出作戦を決行するつもりでいたんよ。この新しい作戦をリトル・レッド君が思いついてくれるまでね。で、生きてるつて分かつた直後に失敗したら、ママたちしばらく立ち直れないだろうし、ミラーズ諸君がママ・ママモード入っちゃうのも、新米教師にはつらこしね。トークショーなんかでママたちの声が入つたら怖いんで、通信切つといたの。それにしても、必要最低限の道具も無いのに、先生になつて、宇宙游泳するのかと思つたら、怖いぜ。ホント、マジで年貢の納め時かと思つたくらいなんだ。本当に柔軟なリトル・レッドくんに感謝しよう」

タカ。お前のアイデアじゃなくて、子供の意見なのか？ それ。

歩の呆れ声。お前さんたちだつたら、ガキのアイデアなんか取り合わない？ でもさ、単純つてのは、結構効果が高い保証もあるのさ。誰が思いついても、使えるものは使う。これだつて大事なことだ。大人のプライドなんかに忖度して、危険をとるなんてのは、断じてお洒落じゃあないね。

「うん。思いつきって点で、子供には敵わないな。俺なんか、シャトルにエンジンあるってこと、つっかり忘れてたし……」

そうだな。俺もうつかり忘れてた。ぶつけの所まで思いついたのになあ。タカ、お互に、惜しかつたな。

じつじつ歩の言の方は俺は好きだ。思いつきだけの俺は、これら何本かミサキちゃんにバナナを食べさせてもらつて楽しむ。データマン斎藤は、最低限の三點確保のための場所選び。そんでもつて、飛竜はシャトルに突っ込んで、吹かして、軌道までプールを動かす。完璧な役割分担だ。

タカ。子供たちは安全なのか？

「一応のところはな。コントナから落ちなきや……大丈夫だろ」「コントナの中に避難してたのか？ すごい事考えるな。そのガキども。

歩の声にも純粋な称賛の響きがある。俺にずっと寄り添つているミサキちゃんが、ちょっとあぐいを噛み殺すのが見えた。

「ただなあ、そろそろ眠くなつてきてるみたいだから、シーツで^ミ虫^{ムシ}にでもして、ヒモで縛つておくか？」

そんなもん、もつてるのか？

いくらマジシャンでも、無理無理。

それがねえ、お一人さん。俺、持つてるのはね。シーツはオムツになつた所為でちつと足りないんだけど。

「持つてるよ。俺つてさあ、なんか凄くない？ 先見の明があるのかなあ」

お前……やっぱ、ただもんじやなさ過ぎ。子供たちの安全確保できるなら、お前はそこ抜けて手伝いに来い。ターゲット区画の人

間を追い出すのには、人手がいるんだよ。一人で寛ぐうつたって、そつはさせるとか。

馬鹿を言つたなという歩の声を期待したが、あつさりとした称賛とそれに続く指令が帰つて来たのには驚いた。うへえ。斎藤一尉どのは人使いが荒いですなあ

* * *

会話が聞こえていたのだろう。子供たちが不安そうな顔になる。

「行つちやうの？」

ミサキちゃんの問いかけに俺は答えた。

「ここから落ちないよつこ、このヒモで確保させてくれ。その、虐待なんて言つなよ」

小学生の少女を縛つた中年男なんて、トークショード纠弾されるのはゴメンだ。

「迎えに……来てくれる？ その、他の大人の人じやなくて、タ力さんが」

「了解。約束するよ……」

「あのね……タ力さん」

「何？」

ミサキちゃんの目が、真剣になつている。

「ママの上手な困らせ方……教えてくれる？」

「なんで？」

「ママね……圭太が生まれてから……私のこと、どーでもいいみたいい」

人生相談に乗るのは後にしたいんだけど、まあ、仕方ない。

「ケイタつてミサキちゃんの弟？」

「ふにゃふにゃで、泣いてばつかでウルサくて、ホントに面倒なんだよ。なのに、ママつてば圭太ばかり……」

「仕方ないね。だつてさ、哺乳動物つてのは手間かかるのよ。特に人間はカンガルーと一緒に生理的早産だからね。生理的早産つて分かる？ 一人で立つて走れる状態でない未成熟で子供が生まれてくるつて事だけ」

ミサキちゃんの寂しさの原因の一つはこれが。なるほどね。

「立つて走れる状態で生まれるのつて変じやない？」

「草食動物なんか殆ど生まれて直ぐ立てないと死んじゃうね。でもさ、人間なんか早く生まれすぎるから、ホントに手間かかるのよ。子育つてホントに大変だからさ、そうでない動物だつてさ、次の子を育てるときには、先に生まれた子を追い出す場合が多いのね。だけど人間つてさ、成長して一人立ちするまでにも、めっちゃ時間がかかるわけ。成熟度が高い方を、突き放しがちになるのは、まあ、しゃーないね」

「しゃーないね……つて……」

ミサキちゃんが俺の説明に絶句する。全く、そんな当たり前のことを、一、三歳児ならもかく、分別のある子供に教えないから、もののじやつかいになるのだ。

「でもさ、手間がかかる方に手をかけるのはしゃーないとして、満遍なく愛してるつて言わなくとも分かつてくれるはずだつて思い込むのは、手抜きだつてのも事実だね。それに気付いてないママにも困りもんだ。そりあ、困らせてやるのは当然だね。だけど、困り果てるほど苛めたくないのね」

子供は絶対にママが好きなものだ。俺がそういうと、ミサキちゃんは思いつきり頭を上下にふつてその通りと同意を示した。

「ミサキちゃんは本当に優しいね……」

俺は親指を突き立てた。グローブ越しだとあんまりかつこよく見

えないが。

「とつておやのがあるよ
「あるの?」

大・小レッテの反応もめっちゃ早かった。ここにひらは、お仕置きされた後のことを、もつ企んでやがるな。自分たちの無謀を棚上げして、いい根性だ。

「お手伝い大作戦。」今度のことでは心配かけて『めんなさい』って気持ちを込めて、田頃していないう手伝いをするって宣言するだろ? それで、ママたちが忙しそうにしてるとき、お手伝いをしてあげちゃうの。特に料理作りとか、洗濯ものたたみとか有効だと思うね

ミサキちゃんが怪訝な顔になる。

「……お手伝いって……役に立つやうんじや……ない?」

俺は指を人指し指に変えて左右に降った。

「田頃してないお手伝いが上手にできるわけないだろ。少なくともママたちがやるより下手だし時間もかかる。だろ? でも、子供がお手伝いをするのは『いいこと』だから、否定も拒否もできない。せいぜいが『今日はママがやるわ』程度のはずね。そこを『やります』と宣言してですね、ホントに手伝いかけつづの……。いこշば、投げたくなつても最後まで頑張つちやうつてのと、くれぐれも毎日つてことを忘れんなよ~。早く支度したいからママはこまるし、一生懸命手伝ってンだから怒れないし。一石二鳥

遊星くんが、ちょっと小首をかしげる。

「上手くなつちやわない? 毎日してたら」

「とつておきの嫌がらせ第一弾。上手くなつて、ママから『お願い』つて言葉を引っ張りだせたり、テスト前だから『今日は無理』つてやるの。』『今日は』つての忘れちゃダメよ。怒られちゃうから……」

狐につままれたみたいな子供たちをシーツでくると、俺はコン

テナののつべきした内壁に苦労して子供たちを固定した。ミサキちゃんが寂しいのはママが十分に自分を見ていてくれるといつ確信が揺らいでいるからだ。だったら悪戯や家出で注目をされるより、迷惑な押しかけお手伝いを続けて、ママと話す時間はふえればいいのだ。手つとり早くは、ミラーケーションの機会を毎日に組み込めばいいのだ。

ミラーケーションの機会が増えても、親子関係が改善されないことも、もちろんあり得る。人間同士、親子だつて、反りの合つ・合わないは、厳然と存在する。だけど、お手伝い大作戦なら、家事能力が上昇するのだから少なくともミサキちゃんの将来の財産になる。俺つてアタマ良い。これが本当の一石二鳥だ。

「なかなか……よさそうね……」

「でしょ？ まあ、ダメもとで一度は試してみな……」

俺はミサキちゃんだけじゃあ、イヤらしい中年男の誹りを免れないとどうから、ちゃんと大・小レッドにもお休みのキスをしてから、金魚鉢に手を伸ばした。子供は十分頑張った。大人はもう一仕事やつつけてこよう。

「キシユワード閣下……」

そう呼んできたのはタカシくんだ。

「何だね、ミラーズ諸君？」

「気をつけて……ね」

「心配は無用である。今のワタシには、バナナ・パワーが満タンなのだ

俺は金魚鉢を両手でもつ。もつ一度、流水の海に挑むべく、体の方向を変えた。バナナ・パワーは本当だし。

「やっぱり、タカさんの閣下、うまいなあ」

今回のアイデア賞リトル・レッドに褒められて、俺はちょっと嬉しかった。

「ミラーズ諸君。また、近い内に会おう

これは、ミラーーズにやり込まれたときの閣下の常套句。それから金魚鉢にアタマを押し込む。子供たちの笑い声に送られて、俺は安全な場所から飛び出した。

次に来るときは、ジョーを連れてきて、コントナを輸送用のスポーツへ押し込ませて、地味に作業をしよう。ウチのミラーーズ狂、五歳の男の子ジョーと、タカシくん、遊星くんあたりは、めっちゃ話しが合いそうだ。あのデカイロボットアームつけたままで、ここに入れるかどうかは、まあ、そんときゅっくり考え方よ。

俺は、慎重にして繊細な動きができるように、自分の体と動き回るコントナに意識を合わせた。逆の手順で戻らなくても、今度は人が移動する用のエレベータを使えば良い。電気系統は生きているのだから、エレベータに辿り着きさえすればドーナツに帰るのは一瞬だ。ほんと、来るときに知つていたかったよ。

22・危険でない方向に普通なプールの押し方

眞面目な俺は、中間倉庫から居住区にのびるエレベータに乗り込んだとたん、キシュワード閣下から、高柳三等苗薙に戻つて、斎藤一尉どの呼び出した。

「歩。ちゃんとシャトルを突っ込ませる地点決めたか？」

「ああ。ただし、エンジン吹かしてバランス崩れないように、位置だけで決めたからな。中に動けない人間が多くても、なんともできないぞ。」

俺は頷いた。

「馬鹿言つてろ。なんとかしようとなけりや、なるもんも、どーにもならんだる。オープンチャットスペースに、シャトル・プランジ・ポイントのデータ流して」

公開するのか？

「つたりまえだ。動ける奴は、被災者でも使う。これ、定石。そうそう、生きてるメンテナンス作業員の情報持つてるだろ？ 加悦さん……」

「なんで知つてるの？」

加悦さんもほほ即答だ。非常時はみんなレスポンスが良くて助かる。なるほど。こんなときに俺が通信切つたら、心配されるの当たり前だな。深く反省しよう。

「メンテナンス用エアロツク操作してただろ。モトネタ仕入れてなきや、できないだろ。普通」

「ボスには参るわ。パーソナル・データの無断使用は、軍籍剥奪の理由になるでしょうか？」

「さあ。その辺は歩にでも『後で』相談しよう。歩、ウチの加悦から、プールの上下水メンテナンス作業員の情報送るんで、その人捕まえて、作業してもらつて」

歩が怪訝そうに聞いてくる。

上下水道つて……何に使うんだ？ 作業つて？

「**突入ポイント**になつた区画から、少なくとも隣に移動するルートに決まつてゐるだろ。頼みたい作業は、上水道の水抜き。みんなが皆、スペジヤケに金魚鉢装備ができるなら良いけど、パンピー諸君には無理だろ？ 水は勿体ないけど、全部捨てちゃつてもらつて道として確保してもらつて」

了解。

「作業員が一人つてこたあ無いだろ？ から、加悦にデータ悪用された気の毒な人を窓口にして、水抜き依頼と、水が抜けたら可及的速やかに、取水口のハッチを開放する作業を頼んでくれ。時間がないときや、人海戦術。これも定石ね」

エレベータが到着する。データが転送されてきたので、メットの中に仮想モニタを表示させてプールの画面を出す。

「なるほど。最低限の投資しかしないのね。歩ちゃんは」

表示された突入ポイントは見事な三角形だ。

「一つは若鷹一号だろ？ もう一機は、飛竜の片鎌十文字号。もう一機は？」

オレンとこの大先輩、みくも春霞号はるがすみ。まったく、霧島のシャトルのネーミングは凄すぎる。俺が呆れているのに頓着せず、飛竜が続ける。

彼なんか、もつとつくに引退していい年なんだけど、しつこくライダーしてるベテランなんだ。地面にいた方のウチの連中、殆ど突つ込むつて騒いでたんだけど、急遽、数が減つただろ？ したら、取り合いさ。俺は御曹司だから我が儘利くだろ？ 柏木は既に突つ込んでるし。で、俺たちのこの世界つてさ、学校の上下関係いつまでも引きずつてる体育会系だからさ、みくも春霞さんが、『俺がやつて言つたら、オシマイなわけよ。誰も逆らえない。でもつて、

なんか夕方に『いつへん、シャトルをなんかにぶつけてみたかったんだ。男の花道サンキュー』って伝言あるんだけど……。

まったく、やっぱりシャトル・ライダースて生き物は謎だ。俺は呆れた。構造物に突っ込むといつ無茶をやりたがる奴がほぼ全員で、しかも伝言が『サンキュー』。

「飛竜。二雲さんって人に伝えて。『見事に散つてください』って『馬鹿言ふ。殺されるわ……』。

「ゴタクはいいから、さつわと出て来い。お前のカーラマが直ぐ出て来れないなら、他の飛ばしてくれ。時間がない」

「いけるさ。先に二雲さんが飛ぶんで、誘導宜しく頼む。

「了解。加悦さん、ビーコン間に合つ?」

まだ、もうちょっとと。

「分かつた。ジョー。そつちはもう加悦さんに任せて、飛んでくれ。霧島運輸の二雲機長の春霞号はるがすみを、ナンバー3の突入ポイントに誘導してくれ。燃料足りてなかつたら、水入れていきな。今日は上水で許す」

「了解。ボス。ところで……吹かすンなら、柏木機長、若鷹二号に戻つてもらつた方が良いですか?」

「何? パンピー柏木はどこにいるんだ? 若鷹二号の操縦席じゃないのか?」

えつと。飛びたいといつので、一緒に……。

「さつさと戻れつ」

俺は叫んだ。時間との戦いだ。

* * *

ジョー。マス・コン……捕まえたか？

高柳にそう聞かれたとき、ジョーと若鷹一号は、巨大なマスドライバー・コンテナを包んだカーボンナノチューブネットにコンテナの固定具を噛ませたとたん、物凄い勢いで移動する巨大質量が持つ慣性に、翻弄されていたところだつた。

「な……なんとか……でき……そう……えつと、忙しいので、
ボスつ、細かい話は後でーーっ」^{あと}

柏木は、物凄く冷静にシャトルを操作して、ジョーがフックをかけたというより、ジョーが持つて広げたネットにフックを滑り込ませることで、マス・コンと合体した。若鷹一号の機体と、マス・コンが何度もぶつかりそうになり、その都度ジョーがネットを引っ張ることで距離をとつたり、柏木が舵を切ることで距離を広げたりしていた。広がりすぎると、グンとひつぱりよせられる。

大きく眼前にプールが広がってきたとき、柏木の突入^{ブランジ}ポイントの特性を思い出したジョーは柏木に言った。

「ビーコン誘導に任せて、出ましょ。俺が拾いますから」
知らない奴が有機廃棄物に突つ込むのはどーでもいいけれど、柏木が突つ込んでは可哀相だと思つくらいの感性はある。

「いいのか？ 多分シャトルは歪む程度だぞ。ちゃんとコントロールした方が……」

ジョーはボソッと白状した。

「居住区の区画に突つ込むんですよ。人間いなーって何でだと思いません？」

分からん。

「完全脱気された、有機廃棄物保管庫だからですよ
　げつ。俺、つまり肥だめに突つ込むの……？ 直前で抜けるつ。ジョー拾ってくれ。

柏木は、ギリギリまで耐えてから、脱出ボタンを操作して、運転席ごと、宇宙へ投げ出された。しばらく座つたままで、瞬かず、さざざまな色をした恒星たちの饗宴にしばし目を奪われる。

簡易宇宙服のヘルメットに装備されたスピーカーからジョーの声がきこえる。

「ちゃんと当たりましたね。柏木機長。座席、捨ててください」「スペース・デプリ（宇宙のゴミ）は、ちゃんとロボットが拾ってくれるだろう。安全ベルトを外して、縛めから自由になつた。

体を伸ばして漂つ。柏木には奇妙な高揚感だけがあつて、不思議なほど恐怖は無かつた。薄っぺらいたつた一枚の簡易宇宙服は、圧力調節がいま一つ甘いのか、体が内側から押し広げられるような感触がある。このまま破裂しても……まあ、悪くない。こんな景色を見ることができるなら。柏木は暫し、つうとりと星たちの光の洪水に見入つていた。柏木のメットの前に、あの綺麗な顔をしたジョーの顔が逆さに映つた。

お疲れ様でした。柏木機長。ちょっと、飛びましょ。気持ちいいですよ。

ジョーはそうこうと、そのまま柏木の背後に回つて、ガツシリと腰の辺りを掴んだ。上下反対に。

「おい。飛ぶつて

私も体験したことが無い、正統派の飛び方ですよ。

ジョーが推進装置を多分起動したのだろう。柏木には分からなかつたが、次の瞬間、飛んでいた。ジョーは相変わらず足方向に進んでいるのだが、反対向きに抱えられた柏木は、見事前進している。「すごい。この装置考えたのって……ジョー、君自身か？」

まさか。こんな妙なおもちゃ、冗談じゃなくて考えて作らうなんて、二、三本何かが飛んでる、タカさんだけですよ。図面を引いて工作してくれるのは、ウチのマム・スカベンジャー。テスト・パ

イロットは私。トライ・アンド・ヒラーで修正点を見つけてくれるのが、加悦さんで……、問題を乗り切るため、更に妙なことを考えつくるもタカさん。

柏木はその爽快さに全てを委ねながら、飛翔を楽しんでいた。
「気持ち……いいなあ。最高。で、タカさんが考えた更に妙な改善点つて何?」

ジョーが即答した。

「幅がありすぎて、足に炭酸ガスレーザー発生装置が装着できないなら、肩に背負えれば良いじゃん。シャトルだつて尻から大気圏に突つ込むし、ノープロブレムつて、こうですよ。どう思います?」

少しの間だけ、柏木は考えた。そして出した結論。

タカさんらしいや……。

明るく、ジョーが笑い声を立てた。

* * *

わざと戻れつて、肥だめですよ……。

柏木の情け無い声が聞こえる。

「ザキさんと、子供と、人間がいないところなりどけでも良いつて豪語したろうが。お前はつ。男なら、一度口にしたことを簡単に覆すな」

俺は乱暴を承知で言った。

そうだそうだ。柏木。ちゃんと突っ込め。

無責任に囁き立てるのは、飛竜の声だ。

危険じゃないし、人も殺さないし、良い話じやあないか。柏木。聞き慣れない声が割り込んでくる。二三雲さんって人かな？ 僕は断言した。

「さつきまで、プールは危険な方向に普通でない状態だった。今は、危険でない方向に普通にプールを押し上げようつてンだ。さつきと、片づけちまうおうぜ。柏木君。プールの軌道さえ安定すれば、落ち着いて救助作業にとつかかれんだ。肥だめがどーした」

言つて我ながら無茶だと思う。あちらこちらから、一斉に笑い声があがる。多分、ヤマは越えたつて皆わかってるのだ。物理的にプールを押し上げる。落ちてるものを押し上げる。変哲もない普通のやり方だ。

さつきと第一段階の仕事を済ませて……、救出活動始めないとな。

耳の奥にこびりついている非難の言葉。

殺すのが……てめえらの商売、……だろ？

そりやあそうだけど、俺にはできない。ゴメン。絶対に嫌だ。

じゃあ……助けて……くれる……のか？

ああ。絶対に助けてやる。ただ、ちょっとだけ待つてくれ。もうちょっととだ。

俺は胸を張った。官服着てたつて、俺は一人じやア無能だ。だけど、俺には仲間がいるんだ。信じてくれ。絶対助けようと頑張るからな……。

ボス……ネット張りすぎ。ちゃんと加減して張つて。

俺は新人の加悦さんに言われて、軽く逆噴射させてキャッチヤーボートの位置を微妙に修正した。大きく広がったネット。三点で張るネットは、いつもの俺たちのスタイル。

タカさん、暇になつてからで良いんですけどさ、改良しましょ。これ。やっぱり、頭の方に飛びたい。柏木さん、アタマ方向に進むのは無茶気持ちいって言つてました。足方向に進むのは気持ち悪すぎるですって。

「おいつ。パンピー柏木は人間だぞ。まさか、あんな防護服貸したんじやなんだろうな」

ちゃんと軍用品の最高級スペジャケも下に着込んでもらいました。

「高級品のスペジャケってウチの備品にあるか?」

ありますよ。タカさんが、軍人臭くて嫌だつて見向きもしなかつただけじゃない。何年前だつた、あれ。

加悦さんはあつさり教えている。

「いい。官服があわないって、若い子に苛められたから」

いつものロスコン拾いのフィールドで、下らないおしゃべりに興じていると、マムから通信が入つた。

高柳三等^{宙曹}。出頭命令です。ご確認ください。

「あれま。来ちゃつたか……。プールの一件じやあ、頑張つたから、武士の情けで無かつたことにしてくれると、思つてたんだけどナア」

俺はちょっとだけがつかりした。呼び出される用件として、ざつと思いつく材料は、一番最初の帰還命令拒否。それから、ED端末のデータ改竊。他人のパーソナル・データの不正使用。

まさか、シャトルをお釈迦にしたつて、そこまで酷い言いがかり

はつけてこないだろ。プールは一応修繕できるみたいだし。いくら軍つてのが極悪な組織だつたとしても。俺は、このスカベンジャー・フィールドで、残り少なくない一生を、ちまちまロスコン拾いで終えるのだ。ああ。神様。俺の獅子舞ダンス……見逃しましたね。

* * *

今日もフィットネス・ジムのスタジオにマッチョな柏木はやつてきていた。ザキさんの声が響くここがやっぱり、物凄く楽しい。

「みんなあつ、今日もナイスファイトでしたつ。お疲れ様～～つ」「うおーーつ

雄叫びを思つ存分あげるのは気持ちいい。拍手する奴もいれば、両手を振り上げている奴もいる。柏木はただザキさんにみとれていた。と、その時。

「柏木さーん」

マイクを通して、ザキさんが柏木を呼んだ。

（へ？ オレ？）

というよつに、柏木が自分を指をして、ザキさんに田で確認する。

一呼吸吸い込んでから……、

「大好きつ

未知香は思いつきりマイクに向かつて、叫んだ。明日が今日の続きなんて幻想だし、いつおわるか分からぬというのが事実なのだ。玉碎するならしてしまえ。好きという思いを抱えたままでいるなん

て、私らしくない。

その場に居合わせた全員が一瞬で凍りつく。皆が大好きな、皆のザキさんが、よりによつてデカイだけの柏木に告白？！ しかも、こんなところで。

柏木も凍りついた。彼の内側では心臓が早鐘を打つたようにビートを刻みまくつていた。隣で汗を拭いていた飛竜が、この野郎とうように、柏木の脇腹を小突いた。

「全く、女から告白されて、お前、情けなさ過ぎ」

「……で、でも。オレ、デカイだけだし。ザキさんみたいに可愛い人は……」

「」の後に及んで、まだマイナス材料を拾うのか。こいつは。飛竜は、思いつきりの力で柏木の背中をどやしつけて、ザキさんの方を押しやるうとする。と、彼女はまたしてもマイクを通してのガンガン鳴り響く声で叫んだ。

「でもお、タカさんも好みなおつ。一股かけていい？」

柏木と飛竜は重なるようにして倒れた。テラG、最低。思いつきり痛いんでやんの。

「イヒーーッイ！ 欲しいものは、ゲットするわよつ」

未知香は雄叫びをあげてから、声を立てて笑つた。その声は、柏木の耳には鈴が振られているように聞こえた。

「イエローツ」

* * *

学校からの帰り道のことだった。遊星が呼ぶと、崇が振り返った。

「おお。グリーンか。今日は何する？」

ちょっと怖かったピクニックから生還し、ママたちにお尻をぶたれたり、泣き落とされたり、長時間の説教を喰らったりと、三者三様の叱り方をママたちから受けた三人だったが、これくらいでめぐるものかとばかりに相変わらずつるんでいる。

「もちろん中央児童館行こ」

遊星の答えには迷いが無い。

「またかよつ。また科学実験教室？」

「うんつ。ボク、タ力さんみたいに、いろんな」とを考えつく人になるんだ」

遊星の突飛な発想にはついていけない。どうして、あの一件だけで、将来をブルーからグリーンに乗り換えることができるんだろう。まあ、オレだつて、バナナ・イエローが一番だつて、ちゃんと言えるようになつたんだからエライだろ？ 崇は一人ごちだ。

向うから、ショートカットになつた美咲が走つてくる。美咲のお手伝い大作戦は、かなり効果を發揮しているようで、美咲ママはいつもウチのママに愚痴つている。

お尻をぶつたのが利きすぎたかしら？
つて、なんだか嬉しそうに。

崇の方は、『貴方が死んだら、生きていけないの』と、人前も憚らず泣き崩れていたママを見て、ちょっと頼りないことは重々承知で、イエロー宣言を出した。一度とママを泣かせないと、いふのがその趣旨らしいが、無鉄砲を思いつくのは相変わらずだ。

「昨日のミクニーズ見た？ ピンク可愛かつた～」

女の子っぽい見掛けを排除して、髪も切つたし、ジーンズばかり履く様になつた美咲は、なんだか前より女っぽくて可愛い。崇と遊

星は、そういう評価で一致していた。

「美咲。もう、カシスさまはやらないの？」

「とんでもない。キシュワード閣下にはカシスさまがついてなきや。でも、昨日のは断然ピンク。ホントに役に立たないことではピカいちだけだ、ピンクが泣いてさ、ブルーが凄く燃えたじやん。馬鹿チカラ5倍くらいだつたかも」

「どうも、あのタ力さんの嫁さんになるつてのが、美咲の目標らしい。これはママたちにはナイショ。俺たちは、美咲が大きくなるころには、おじちゃんはおじいちゃんになつてるから、俺たちのどちらかで我慢させようとコツソリ話し合つてるが、今は燃えてる美咲にそんなことは切り出さないことで合意している。」

「もつとも、待つつてのはイエローの本分だから、崇はこつそり遊星より有利だとおもつていて、逆に遊星は、タ力のような男になれば、美咲がよろめくはずだと信じていて。まあ、可愛いものだ。」
「渋いヒーローは、イエローだぜ。俺、バナナ・イエロー」

「ボクは縁がいいなあ。発明と発見と発想。男はこれでなくちやがしない。」

* * *

出頭した幕僚本部で、何故か正装させられ、高柳三等田曹は広報でしか見たことが無いお偉方がズラリと並ぶ場所に引きずり出されていた。どうにも、尻がもぞもぞする。ろくなことになりそうな気がしない。

高柳の数倍は飄々とした印象がある小男。これが有名なスキルズ・リスト、不動のトップランカー、情報部の万年二佐……岸？ そう

思つと、高柳ははつきり言つて、意外の感に打たれた。わきに控えている長身の青年や、若いくせに恰幅が良いという表現が似合つ、この年齢層の中では十分青年で通じる、堂々とした押し出しの「あゆみちゃん」とくらべても充分に控えめな風貌。

しかし、ここは幕僚本部で、上座に並べられた椅子にどつかりと腰掛けている連中は、佐官より遙かに上の将官位の制服をきて、ちやらんちやらんと音がしそうなくらい、勲章だのバッヂみたいなのがつけている。

正装の俺が、三十面下げて、どこか七五三になつているのとは、エライ違いだ。やっぱり、将官の連中にくらべれば随分しょぼそつな勲章をちゃんとつけた歩が、良く通る声でビシッと言つた。

「高柳二等宙曹。起立せよ」

軍人長くやつてると、友人の口からでた掛け声でも、とつさに体に芯が通るから不思議だ。高柳は直立不動になつてから、心の中でだけ苦笑した。生涯、直接見ることも無いと思っていたお歴々が並んでいるのだ。そりや、ここでボケかませるほどの度胸はない。

ゆつたりとした動作でおもむろに立ちあがつた岸が、軽くお歴々に向かつて姿勢を正してから、高柳に向き直つた。頭が自動的に15度つづむく。實に習慣とはおそれじ。で、一体何が始まるんだ?

「辞令。高柳二等宙曹」
……辞令つて、俺、軍籍剥奪じゃがないのね。
「辞令を代読する。本日を以て、貴官は、特殊能力者リストに記載されることとなつた」

「……俺が、スキルズつて冗談ですよね。」

「技能区分は、微細重力下特殊作業。配備先は、居住地開発プロジェクトが着々と進行しつつある、開拓最前線のいすれかになる。詳しい配属地は、転属先の上官の指示に従うように。所属組織は、事

故発生時・対策統轄本部、DFF (Disaster Fire Fighting) になる。また、現在の貴官の旧配属部署に所属する新人^{（ハーラン）}一名は、貴官がその責務を遂行するために必要な要素であると判断し、引き続き貴官の下に配属を許可する。貴官の能力が必要とされる現場であることを、本官は確信して止まない」

岸の声は、特別大きくなはないのだが、よく通る。にっこりと微笑む岸一佐。俺の耳は今何を聞いたのでしょうか……。開拓最前線つづく……。

フロント……あ……っ？

俺の明るい家族計画は、神様つどうなるんですか？

俺の可愛い未来のお嫁さんは……、神様つ、そんなところに、いるんですか？

俺の獅子舞、ダンス見たくないなら、罰を下す前にそー言つてくださいっ！

あゆみちゃんつ。お前、スカした面しやがつて、絶対、笑つてるだろ。

俺が気が弱い常識人でなければ、この場で歩につかみかかっていだらう。気弱い俺は、ここでそんなことをする度胸はない。体はぼーっと突つ立つたまま、頭の中でだけ、ジタバタしている俺に頓着せず、冷たく、岸一佐の声が告げた。

「以上である。高柳三等宙曹、退室を許可する」

そして……ライダー・プールのお話は、おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2444f/>

ザ・ライダー・プール

2011年1月19日18時54分発行